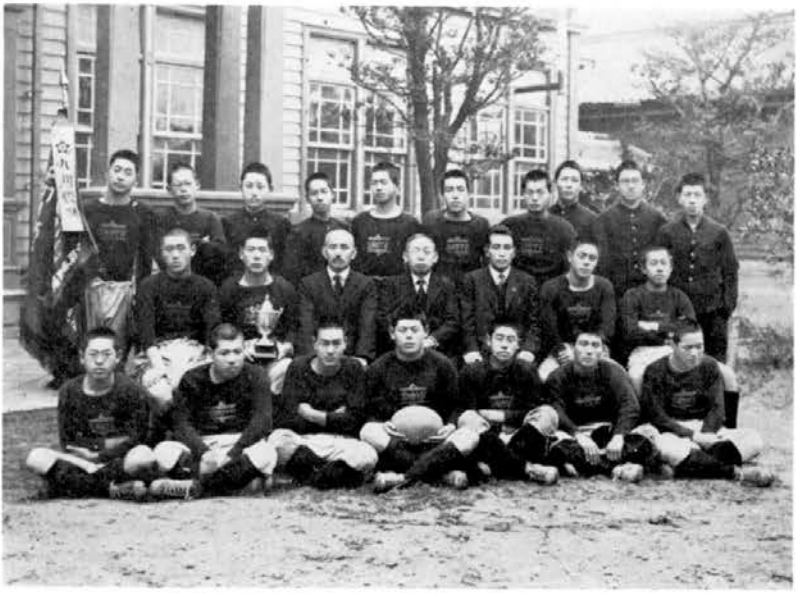
修猷館ラグビー史



九州制覇第１回目を祝して本館前にて（昭和３年12月）
赤のジャージー，襟なし丸首，膝までの長パンツ

昭和11年度部員

修猷クラブ対福中クラブ定期戦，修猷優勝記念（昭和13年2月11日）

昭和13年度部員

昭和21年東西対抗戦（第1回国体）
西軍代表決定戦（於西宮球技場）

51クラブ誕生－昭和14年卒業生（昭和23年）

明治神宮大会関西予選（昭和15年10月22日，於花園ラグビー場）

大毎主催全国大会九州予選優勝（昭和16年11月30日）

第 4 回国民体育大会全国制覇（昭和24年11月 3 日）

昭和25年度部員

第６回国民体育大会福岡県代表となる（昭和26年９月30日，於春日原）

昭和27年度部員

対福岡高校定期戦（昭和29年1月15日，於平和台）

同上，修猷館応援風景

第33回全国大会福岡県代表となる（昭和29年11月３日，於九大グラウンド）

昭和31年度部員

四国遠征（昭和33年4月20日，於松山市営グラウンド）

第39回全国大会出場（昭和35年1月1日，於西宮球技場）

修猷館ラグビー部40周年記念（昭和39年5月3日）

修猷O・B東西対抗戦（昭和40年5月2日，於東伏見早大グラウンド）

序文

昭和39年5月3日、修猷館ラグビー部開設40年の記念式典が、修猷館において、重藤館長先生を始め、諸先生、現役部員参集の下に、地元O・Bはもとより全国各地から馳せ参じたO・B諸氏一堂に会して開催された。来賓多数の御出席もあり、心温まる誠に有意義な催しであった。式後、快晴に恵まれたグラウンドで、現役、O・B、来賓など3試合を行なって記念の式典を心ゆくまで楽しんだ。そのあと那ノ津荘で開かれた修猷館ラグビーO・Bの総会で、諸報告につづき、O・B間の親睦、今後の発展などにつき諸事なごやかに議せられたが、ついで昭和40年1月24日に開かれた総会は試合をまじえて盛会裡に行なわれ、諸議題が満場一致で決められた由である。私は時を同じくして名古屋で開催された日本ラグビー・フットボール協会理事会のため出席できなかったが、その際の決定事項に修猷館ラグビー部史作成の件というのがある。先般、日本ラグビー蹴球協会で『日本ラグビー史』が発刊されたことは周知のことであるが、このような史とか部史とかいうものは、編集者や世話人の熱心さの外に、投稿者の熱意が集成されなければ出せるものではない。この度修猷館ラグビー部史作成が決議せられ、編集者守田基定氏および世話人、幹事諸氏の熱意がひしひしと身辺に感じられ、編集の打合わせも進んでいる由である。

時あたかも、私としては全く思いがけなくも英国グラスゴーのナショナル・エンジニアリング・ラボラトリーから日本から唯一の招待者として呼出しを受け、そのシンポジウムで講演をしなければならず、その準備に忙殺され、それに加え諸事輻輳し寝る時間も惜しい日々である。しかし忙しくてとてもペンをとる暇はありませんなどとの言訳は受けつ

けて貰えないことも明らかなので、あえてペンをとって拙文を草することとなった。修猷館ラグビー開設以来40年の歴史がこの部史に集録せられることは誠に意義浅からぬものがあるが、この機会に母校の発展と修猷館ラグビーO・B諸氏の健康、活躍を祈念したく、またこの間に他界せられた先輩諸氏の冥福を祈る次第である。

昭和40年3月21日

葛西泰二郎

目次

序文……葛西泰二郎…i

I 部史……1

1 ラグビー部誕生（大正14年度）……3
2 PR時代（大正15年度）……3
3 対高校戦をたのしむ（昭和2年度）……10
4 全国大会出場権初獲得（昭和3年度）……13
5 延長の末大魚を逸す（昭和4年度）……24
6 先取点守れず（昭和5年度）……31
7 全国大会決定戦病いに敗る（昭和6年度）……32
8 佐高大会に凱歌挙る（昭和7年度）……35
9 佐高大会3年連続優勝なる（昭和8年度）……38
10 九州の覇者たり得ず（昭和9年度）……43
11 佐中戦85－0が仇（昭和10年度）……44
12 臥薪嘗胆前半のリードも空し（昭和11年度）……46
13 天、我に味方せず（昭和12年度）……47
14 レフェリーはオールマイティ（昭和13年度）……49
15 伏兵福商に泣く（昭和14年度）……51
16 全国大会に涙をのむ（昭和15年度）……54
17 惨敗の中から代表権（昭和16年度）……56
18 神宮大会の代表たり得るも、全国大会代表戦に抽籤で敗ける（昭和17年度）……58
19 公式戦中止（昭和18年度）……62
20 楕円の魅力（昭和19年度）……63
21 部復活第1号（昭和20年度）……63
22 第1回国体に出場（昭和21年度）……63
23 星輝かず（昭和22年度）……65
24 福岡国体に準優勝、全国大会代表の栄冠（昭和23年度）……65

25 第4回国体に全国制覇の偉業達成（昭和24年度）……70
26 球友魚住君逝く（昭和25年度）……75
27 九州の覇者も秋田工の壁破れず（昭和26年度）……78
28 新しい伝統のために（昭和27年度）……81
29 国体で保善高に抽籤敗け（昭和28年度）……84
30 戦後2度目の全国大会に駒を進める（昭和29年度）……89
31 新人戦の優位保てず（昭和30年度）……91
32 あと一歩（昭和31年度）……93
33 静岡国体で優勝を逸す、全国大会の代表にもなる（昭和32年度）……95
34 地盤沈下す（昭和33年度）……97
35 〝伝統〟を死守して（昭和34年度）……98
36 進学の波にのまる（一）（昭和35年度）……103
37 進学の波にのまる（二）（昭和36年度）……105
38 進学の波にのまる（三）（昭和37年度）……107
39 進学の波にのまる（四）（昭和38年度）……109
40 再建の槌音（昭和39年度）……109
41 黎明出ずる（昭和40年度）……110

II 回想……113

修猷館ラグビー部の創設時代を憶う……梅崎忠亮……115
〝昭2〟の思い出のまま……鎌田昌義……116
思い出の断片……溝口　博……118
昔のコーチメモ……溝口　博……120
わが楽日記……植村　修……121
昭5卒業生一同に代りて……山本太郎……123
昭和6年の思い出……長谷川盛一……125
思い出は胸の中に……大神和敏……129
若き日の一コマ……不破修平……130
追　憶……平山新一……130
若き時代の思い出……早田昌武……132
ラグビー部部室……原田恒夫……136
思い出すままに……弓崎輝明……138
昭和13年の人々……古川　博……139
私とラグビー……守田基定……141
51クラブ回顧録……守田基定……146

思い出……松岡正人…151
追想……高松光彦…152
万年補欠の想い出……今井　進…153
思い出すままに……榊　和彦…155
若き日の追憶……久保房雄…157
青春奮闘記……松本安造…160
夏合宿の思い出……中田主基…162
鬼監督の思い出……大山浩司…165
足は太くて短かくて、苦しきことのみ多かりき……秋吉包雄…166
思い出……外尾　猛…168
現役時代を偲ぶ……中野　徹…169
昭和27年という年……大塚博靖…172
苦しさのなかに……森部信二…174
その頃……結城昭康…175
忘れ得ぬ試合、福工戦……相生卓男…177
経験的反省……原田太七郎…178
O・Bとなって……久保　公…179
修猷館ラグビー史発刊に思う……大松勝明…180
顧問雑感……淵本武陽…180
四国遠征記……平山新一…182
東京遠征記……今井　進…183
部創立40周年記念メモ……平山新一・守田基定…185

III 附録……189
年表……191
部歌……200
歷代部長……201
各年度部員……203
各年度部費……211
物故者……213
編集後記……215

扉題字／梅崎忠亮・装幀／桑原徹

I 部史

（この「部史」は雑誌『修猷』の部報から抜萃したものである。）

1　ラグビー部誕生（大正14年度）

質実剛健な校風に最も適したスポーツとして、体育並びに教練の教官である長三熊先生を部長に仰ぎ、ラグビーが、四月の新学期から正式に部として認められた。

4年生、梅崎忠亮、梅津一敏、浜崎越郎、安東久夫、高島弥一郎、藤野種生。3年生、鎌田昌義、橋爪長矩（現、高橋）、田代貯蔵等によって、ルールの解説を受けながら、練習に勉めたが、グラウンドは、野球部、陸上競技部など、既成各部の練習の合間をぬって、走る状態であった。

やがて、ユニホームも薄水色と黒のだんだら模様に決り、だんだんと、部も活発になって来たが、部員数不足で、競技部の川津綱友、柔道部の松井清孝等の応援で、10月頃より対外試合ができるようになる。

部を結成しはじめた九州大学、福岡高校（現、九大教養部）や、福中（現、福岡高校）と試合を行なう。

全国中等ラグビー大会予選には、福中に敗れ、晴れの代表となることができなかった。

これを期に、部の強化をはかるため部員募集をする。溝口博、植村修等の新鋭を加え、練習に精進する。

2　PR時代（大正15年度）

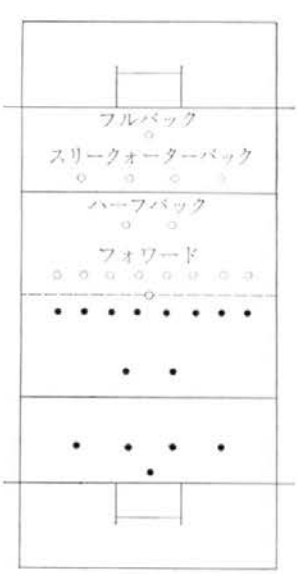
昨年福中に名をなさしめたわが部は、気力において相手を上まわっていたが、何分創部早々で、選手層がうすく、苦杯をなめたので、部員獲得に力をそそぎ、全国大会目標に猛練習をかさね、福中との試合も互角の勝負で、今年こそ昨年の雪辱なりと、はげみにはげみ、必勝を期したが、大正天皇の崩御により、全国大会は中止され、チャンスを逸す。

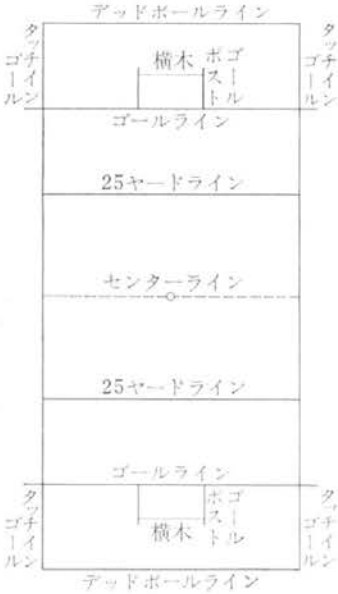
ラグビーフットボール

長　三　熊

わが修猷館には昨年度より蹴球部が新設されました。それでここにすこぶる簡単なラグビーの手引とも称すべきものを書きまして、ラグビーを見られる諸君の御便宜に資したいと存じ、学友会の雑誌に載せることに致しました。

ラグビーフットボールは男性的な運動であります。壮快極まりなき運動であります。しこうして、絶対的に運動家の精神、個人的徳義を尊重し、また協同一致を目する血気盛な青年にふさわし





い運動であります。一度この運動を理解した人は直ちにそのいかに紳士的の運動なるかが解せられるのであります。

これほど面白い運動が、どうして、運動熱の隆々として向上して行く今日のわが国でともすれば他の運動の興隆と歩調を共にしないのでありましょうか。と申しますと、それは一に見ていてもわからない、したがって興味を起こさない、ということがその原因をなしているのでないかと思われます。

ラグビーフットボールの規則は他の運動に比して比較的簡単であります。が、ゲームという実物は簡単に試みることができない。したがって何処でも到る所で見られるというわけにゆかない。わざわざたまにあるゲームを見に出かけても、実物研究をするより外に致しかたがないが、行って見ると何んだかさっ張り分らないからその次からは行く気にならないということになります。

ラグビーゲームの概念

○フィールドの説明

ラグビーフットボールのゲームを知るには、まず競技場（フィールド）についてよく了解しておく必要があります。ゲームはフィールド以外の個所にて行なわれることは絶対にないのであります。フィールドの縮図は上のとおりであります。

○人員と位置

双方15名をもって組織しその配置は上図のとおりであります。

○各々の任務

〈フォワード〉

味方の前線にあって常時戦闘の主力となります。ボールのある

所に必ず追従して行くのがフォワードの理想動作であります。

〈ハーフバック〉

常にフォワードとスリークォーターバックとの連絡に当っており、したがって両者いずれの動作をも兼ね備うることを理想とします。

〈スリークォーターバック〉

攻防の主力でありまして、最も攻防に利便の多い位置に陣容を敷いております。したがって、最もよく走り、よく敵の攻撃を阻止しうる者をもってこれにあてます。

〈フルバック〉

最後の防禦線でありますから、最も確実に敵の攻撃を阻止し、最も確実なキックによって味方の頽勢を挽回しうる者を必要と致します。

ハーフバック、スリークォーターバック、フルバックはフォワードに対してバックメンと呼ばれます。

〈ゲーム前の打合わせ〉

ゲームを開始する前に双方のキャップテンと審判官（レフェリー）とが左の打合わせをします。

イ、競技時間

一般に1時間でこれを二分して30分、30分とする間に5分間以内のハーフタイムをおく。しかしこの試合時間は試合前の協定によって長短できる。

ロ、味方の取るべき位置

前述のフィールドを参照すれば解りますが、つまり自分の守るべきゴールの側（サイド）を定めるのであります。

このサイドはハーフタイムをもって入れ替りになるのであります。

一方がサイドを取れば他方はキックオフを取るのであります。

ゲームの方法及び得点

最初ボールはフィールドの中央（センター）に置かれ、レフェリーの号笛と共に一方の側に属するものがこれを蹴ります。これがキックオフであります。

即ちゲームはキックオフにて始められるのであります。

ゲームの終局目的は、ボールを持つなり蹴るなりして行って、敵のインゴールの地上に手をもって着くるのであります（ゴールラインもインゴールと見做します）。これをトライといって3点の得点となるのであります。

トライがされた時にはその地点から真直ぐに味方の方にタッチラインと平行に下った線上の任意の個所にボールを置いて、これをゴールポスト（図参照）に蹴り込みます。そして、ボールがクロスバー（横木）を超えた時には、これをゴールと申して2点の得点があるので、合計1回のトライと都合よくゴールした場合は

一挙5点を得るのであります。

ゴールキックが行なわれた後には、ゲームはひとまず終った形式で時間のある間は直ちにキッククオフより再開せられるのであります。

イ、ペナルティゴール

競技者が反則した場合に、レフェリーは相手方のフリーキックを許すことがある。その場合に、ドロップキック又はプレースキックによりて、ゴールキックの場合と同様に横木を超えてゴールポストに蹴込んだ場合であります。この得点は3点であります。

〈フリーキック〉

フリーキックはレフェリーによって許される一つの特権であります。敵に反則が起こった場合に味方に与えられ、又味方のプレーヤーがフェヤーキャッチ（マーク）をした場合にそのプレーヤーに与えられる。

〈プレースキック〉

地上に球を置きて蹴るをいう。

ロ、ドロップゴール

ゲーム中ドロップキックによって横木を超えてゴールポストに蹴込んだ場合であります。この時は4点（現在は3点）の得点であります。

この二つのキックは、成功した場合には、ゲームはキックオフより再開せられますが、不成功であった場合は、一切ゲームは進行の状態にあるのであります。

ゲーム中は誰人でもボールを持ち走り、又は味方に投げ与うることが出来るのであります。但しこの動作をなすには左の法則によって制限を受けねばなりません。

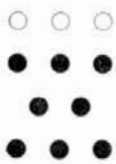
一、これらの動作をなす時には、常に味方のボールより後（即ち味方のゴールの方面）におらねばなりません。ボールより前にあるを、オッフサイドと申し、正当なる位置にあることを、オンサイドと申します。オッフサイドのプレーヤーはオンサイドに帰るまではゲームにあずかることが出来ません。オッフサイドにあるプレイヤーがゲームにあずかった時には、反則なので敵にフリーキックが与えられ味方の不利となります。

二、左の場合にボールを拾い上ぐることは反則であります。

イ、スクラム中にあるボール

スクラムとは、スクラメージともいい、敵味方のフォワードが組んで押合い、ハーフの入れたボールを実力に訴えて取り合うための敵味方の集団である。

一般のスクラムの図



ロ、ダウンボール

ダウンとは自己の持っているボールを地上に下す動作を申します。

ダウンされたボールは直ちに拾い上ぐることは出来ません。ボールを持った人が完全に進行を阻止された場合にはボールをダウンせねばなりません。

ボールがダウンされた場合には、これと同時にダウンした人に手を触れることは反則であります。

ハ、タックルされたボール

タックルとは、ボールを持った敵方の1名又は数名から捕えられてボールの進行を抑止された場合であって、この場合はボールを速かにダウンしなければならぬ。

三、味方にボールを投げ与える場合（これをパスという）に、ボールを自身よりも前方に投げた場合にはこれをスローフォワードと称してスクラムになります。

四、ボールを持って走る自己を阻止せんとする敵に対して、打ったり、蹴ったりすることは反則であります。

ゲーム中は誰人でもボールを持って来る敵を阻止することが出来る。但し、敵を阻止するに足を用いることは反則であります。球を持たぬプレーヤーに対して阻害することは、インターフェアと称して反則であります。故意に乱暴を働いたプレヤーに対しては、レフェリーはこれに退場を命ずることが出来ます。

主なる術語の説明

〈ドロップアウト〉

これはゲームを継続せしむる一方法で、味方の25ヤードラインから、ドロップキックで敵方に蹴るのであります。この場合は味方はキックする人の後に居らねばなりません。

ドロップアウトの行なわれる場合

イ、味方の努力によらずしてボールが自己のインゴールに入った時に、味方がこれを地上につけた時。

ロ、味方の努力によらずしてボールがタッチインゴールに触れた時。

ハ、味方の努力によらずしてボールがデッドボールラインに触れた時。

〈ドリブル〉

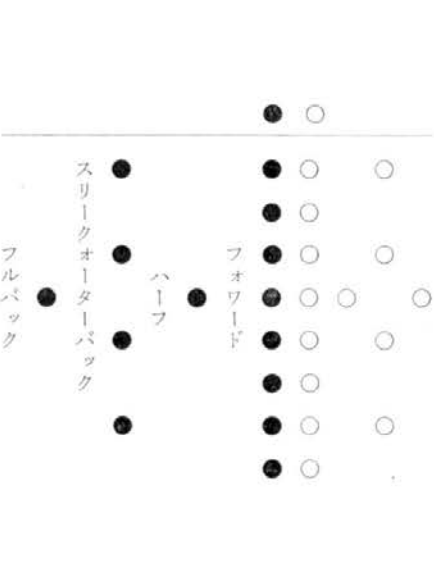
これは攻撃の一法でボールを細く蹴りながら進む方法である。

〈ラインアウト〉

ボールがタッチラインに触れた場合に行なうので、「タッチライン」に直角に敵味方の「フォワード」が整列し、ハーフはそれにボールを直角に投げるのである。

もし曲った場合は「ナットストレート」で、「タッチライン」から10ヤードのところで「スクラム」を組む。

ラインアウトの面



〈ノックオン〉

手又は腕でボールを前に「ノック」した時をいう。

この場合はその地点でスクラムを組む。

〈パス〉

味方が味方にボールを投げ与える動作であります。

パス及びキックはドリブル及び突進と相対して有力な攻撃法であります。

以上、諸君の試合見学又は実地に研究されんことを希望致します。

クラスマッチ観戦記

梅崎忠亮（5年）

2月11日紀元節の日、我が修猷館に於て第一回ラ式フットボールの大会が開かれ、同時にバレーボール競技会も行なわれた。

熱血に燃ゆる青年の血は高鳴り、幾多の選手の日頃鍛えしこの技量を今こそあらわすべき時だとして、生気溌溂たる元気をもってこの大会にのぞまれ、昨日からの気づかわれし天気もカラリと晴れて絶好の大会日よりとなり、4、3年の各組各々火花を散らして相闘い、或いは勝ち或いは敗れ悲喜相混じて悲愴の感に打たるる頃、陽は西山に傾きすでに黄昏となり、盛会裡に終りを告ぐるに至った。

この日、九州ラグビー倶楽部の白田氏も来られて熱心に指導していただいた。しかして3年対4年の試合は時間の都合上見合わせとなり、後日にゆずることとなったのは残念であった。

成績左の如し。

〈4年試合〉

第1回戦　2組対4組

4組のキックオフにて試合は開始された。

2組4組は同じ位の力を有して相方共に苦戦し、2組の川津、梅崎奮闘すれども好く防きて勝敗見えざりしも、2組の運や強かりけん、梅崎に第一にトライ、3点をうばわれさらにトライ、一挙6点を得て2組の意気大いにあがりて4組を圧倒し、川津又ト

ライしついに9対の0にて2組の勝利に帰す。

4年3組は棄権す。

第2回戦　　1組対5組

4年中最も強い組とされた1組対5組の試合となった。

1組には柔道で名を知られた富永あり、又ラグビーの老練者として玉利、安東、藤野あり、又5組には競技部で名ある畑あり、野球のピッチャーとして輝く牧園あり、柔道部として知られた樋口あり、蹴球部のスリークォーターとしてなくてはならぬ浜崎あり、フォワードとして高島あり、それぞれ一流の強者揃いにて今日の番組で一番見ごたえのする試合であり、両者共によく攻めよく防ぎ、火花を散らして闘い、浜崎の奮闘著しきもついに功をなさず、無勝負となり抽選によりて5組次回出場に決す。

決勝戦　　5組対2組

5組は前記した如く大兵肥満の豪者揃い。しかし2組においてはさにあらず、ただ梅崎、川津あるのみにて小柄なものばかり。初めから勝負になりそうになかったが、2組の梅崎、川津の指揮やよかりけん、よく防ぎて一度もそのトライを見せず。されど惜しいことに2組の粗漏によりてついに及ばず、5組の浜崎のためにトライされ、次からは意気銷沈如何にすべくもあらず。又も1回トライされ遂に惨敗のやむなきに至ったのである。

〈3学年の試合〉

第1回戦　　2組対4組

4組のキックオフにて開始さる。

4組のフォワード好く優勢にして、常に2組を圧迫して幾度かゴールラインに迫るも2組のスクラム好く、ついに無勝負となる。

抽選によりて4組の出場に決す。

第2回戦　　1組対3組

1組のキックオフにて開始さる。

3組優勢なりしも1組川島よく奮闘しよく守り、ついに時間がきても勝敗分たず。ついに抽選となり3組の出場に決し1組惜敗す。

第3回戦　　5組対4組

5組のキックオフにて始まり、4組はフォワード強く不破、府内の強者あり。奮闘し常に優勢なるも、前回よりの疲れ未だ良くならざるに5組の新手を迎えてはいかに奮闘するも及ばず、5組の行徳バックス良く奮闘してトライし5組の勝利に帰す。

優勝戦　　5組対3組

3組のキックオフによりて始まる。5組の林、梶原奮戦しゴールに迫まるも、3組良く守護し勝負に決せずして戦う。

嗚呼、前回に奮戦し未だ気疲れいえざるに又戦うこと数回、5組ついに疲れ果てて意気すこぶる挙らず。3組その機に乗じて岡村トライし3組ついに優勝す。

陽すでに西に傾き、将に暮れなんとする時、今日の栄冠を戴き

し4学年の5組3学年の3組の意気は天を突くばかりなりき。

3　対高校戦をたのしむ（昭和2年度）

修猷館にラ式蹴球部が出来てからわずかに三年。しかしながら今日では福岡市はおろか、他県にまで遠征して、常に勝利の栄冠を勝ち得るほどの隆盛を見るに至ったのである。

蹴球部はかつて大先輩広橋謙二氏の御助言により、この技の中に通う精神のまた修猷運動部精神に通うゆえをもって創設せられ、九鉄の種田、白田の両氏の懇篤なる御指導と長先生の熱心なる御研究のもとに漸次発達、ついに今日ある有様となったのである。

ラグビーはウィンタースポーツで、勇壮にして痛快極まりなく、寒風肌を劈く厳冬の頃の運動として実に好適である。

そして絶対的に運動家の精神的徳義を尊重した運動である。

一度この運動を理解したる人は、直ちにこの運動の信仰者となるという実例が沢山ある。

これ程面白い運動であるのに、運動熱の盛んなる今日のわが国において、ともすれば他の運動の隆興と歩調を共にしないのは何故であろうか。

これは一は見ていてもわからない。

従って興味をおこさないということがその理由をなしているのではないかと思うのである。

本館現在のチームは4年が最も多数で、5年、3年が少ないのは遺憾でならないのである。

この度家庭の事情で田代君が本館を去られ、従って部より退かれたのは、わが部の一大損失であり、部にとりて大いに遺憾とするところである。

本学年度試合経過左の如し。

5月8日　　福高　3—0　修猷

工科大学グラウンドで行なう。

修猷軍前半戦において圧迫をうけ、1回のトライを先取さる。後半戦よく修猷軍攻守堅にして、しばしば敵をゴールラインまで圧迫せしがついに惜敗す。

5月18日　　福高　8—9　修猷

福高グラウンドにて行なう。

修猷常に攻撃に出でトライ3回プレス入らず。

福高トライ2回プレスキック入りて8点を得しが、修猷軍の復讐なる。

5月24日　　福高　6—0　修猷

修猷軍にミス多く、敵その裏をついてトライ2回を奪取す。

7月18日　　福中　0—12　修猷

修猷グラウンドにて行なう。
力戦奮闘よく敵軍を混乱させ、敵のミスに突っ込みて敵を撃破す。
前半戦　溝口（修猷）トライ2回。
後半戦　本田、池田（達）（修猷）各1回。
郡司（修猷）ブレスキック入らず。
10月1日　　5年　3—3　3、4年
秋季蹴球部大会として対学年試合をなす。
3、4年常に押しぎみであったが、5年の多年練磨せし腕をもって押し返し、大混戦となりついに分け。
10月30日　　五高　3—8　修猷
修学旅行のついでをもって5年の勇将不破君、マネージャー津村君の引率のもとに遠征す。
10月30日五高東光原蹴球場において挙行す。
熊本においてこのラ式フットボールの試合は初めてである。
ゆえに多数のファンが早くより押し寄せ、すこぶる盛況であった。
新進の五高は驚嘆に価する強チームであった。
わが修猷卒業生が中堅をかため、修猷魂と五高魂とを融合して、五高軍のため万丈の気をはいていた。
午前10時五高軍のキックオフで試合は開始され、修猷軍よく奮戦し、常に五高軍を25ヤードライン辺に圧迫して撃破す。

〈前半戦〉
五高軍圧迫され、15分余にして池田（達）（修猷）ゴールポストより25ヤード位左側にトライす。
郡司（修猷）のブレスキック惜しくも入らず。その後一進一退得点のチャンスなし。
ハーフタイム。
修猷　3—0　五高
〈後半戦〉
五高軍頽勢を盛り返しハーフタイム10分後、ゴール前にフリーキックを得て野田（五高）のドロップキック見事入って3点を得る。
五高軍大いに元気づきその後修猷軍の力闘で大混戦となり、勝敗の予測つかず。
タイムアップ3、4分前、スクラムより出たボールを池田（省）（修猷）がとりて橋爪（修猷）に渡す。
橋爪見事に敵のスリークォーター、フルバックをぬいてゴールポストの下にトライし、郡司のブレスキック見事に入って勝ち越し、我を忘れた先輩の拍手の音に初めて勝てるを知る。
タイムアップ。
修猷　5—3　五高
メンバー左の如し
FW　本田、永富、安部、郡司、植村、青柳、山崎

H・B　山下、池田（省）
T・B　藤川、橋爪、池田（達）、溝口
F・B　斎藤

勝って兜の緒をしめよ。
福中に勝ち新進の五高軍を破る。
しかれども現に福高軍より破られつつあるではないか。
決して油断するなかれ。福中軍のその後の努力が思いやられる。
部員よ。努力せよ、奮闘せよ。そしてわが部の名をあげ、ひいてわが修猷館の名を一層あげられんことを切望してやまぬ。

11月12日　佐高　3—8　修猷

佐高軍度々来福せしも、その都度都合悪しく試合出来ざりしも、宿望ついにかなえられて、今日初めて手合わせを九大工学部グラウンドにて行なう。
絶好の試合日和で両軍大いに力を入れて闘う。
修猷軍よく攻めよく守り、しばしば敵地に侵入し、敵の心胆を寒からしめた。
試合経過左の如し。

〈前半戦〉

3時半修猷軍郡司のキックオフで戦闘開始。
佐高軍よく奮戦し、わがスリークォーター池田（達）と溝口の間を抜かんとしばしば試みしも、ハーフのタックル完全にこれを止む。
最初は押されて25ヤードライン内に侵入さる。
しかしだんだんと押しもどして攻撃にうつり、池田（省）の投げしボールを本田うけ2、3名の敵を抜いて不破にパスする。
不破ボールを握るや阿修羅の如く暴れくるい、敵のタックルをよけつつ進み、完全なるトライをなす。
修猷軍の意気上る。
しかるに敵に、しばしばフリーキックを与えしため形勢を挽回され、ゴールライン前2メートルばかりのところにて又フリーキックを佐高に与う。
佐高軍わが右翼の手薄につけこみゴロを蹴込み、萩原（佐高）走りてこれを拾って我が軍の右翼にトライする。
佐高のプレースキックはいらず。
その後一進一退せしも、不破再び暴れ回り敵のタックルを見事によけつつ、ずんずん進み、25ヤードライン内まで攻め込み見物人の歓声上る。
修猷軍これに力を得て徐々に攻め、密集より出でし球を黄（修猷）取り、ゴールライン目掛けて突進せしも半メートル手前にて倒され、密集となりぐんぐん押し、今少しというところにておしくもハーフタイム。

〈後半戦〉

修猷軍意気衰えず、しばしば敵を窮地に落とし入れしも力足ら

ず一進一退、勝敗容易に定まらず、ハーフタイム後15分にして、山下、敵のハーフ、スリークォーター、フルバックを抜いてポストの下にトライす。

郡司のプレースキック完全に入る。

意気大いに上る。

しかるに不破足を痛めて走られず。また敵を抜かんとせしも自由ならず。残念にもタイムアップ、8対3にて勝つ。

両軍メンバー左の如し。

	（修　猷）	（佐　高）
FW	川島、安部、鎌田、植村、郡司、田村、橋爪	甲斐、佐藤、今橋、山下、吉富、川崎、今村
H・B	山下、黄、池田（省）	斎藤、香山、守永
T・B	溝口、池田（達）、本田、不破	萩原、水町、坂本、山本
F・B	斎藤	内藤

4　全国大会出場権初獲得（昭和3年度）

石の上にも3年。臥薪嘗胆のかいあって、創部3年にしてこの栄冠を得たのである。

修猷対佐賀高戦

9月30日、九大グラウンドにおいて行なわれた。この日天気晴朗にして絶好の試合日和なり。午後2時佐高のキックオフにより開始。敵は去年の復讐の意気凄く両軍たやすく点をなさざりしも、15分余にして修猷軍敵を圧迫して、敵ゴール前5ヤード余りのところにてスクラムとなり、そのままなだれ込んでトライ。郡司プレースキック入らず、その後しばしば好機ありしも点をなさず。ハーフタイムとなる。

後半5分にして、わが軍河野敵パスをインターセプトしてトライ、プレースキック入らず。20分余にして、山崎、池田の好パスを受けて敵を数ヤード抜きてトライ。プレースキック入らず。

その後両軍得点なくタイムアップ。9対0にて佐高に勝つ。

〈メンバー〉

植村	長谷川		溝口
井上			池田（達）
吉岡	山下	池田（省） S・H	青柳
			本田
□□（不詳）			
郡司	広田		山田
F・H河野			

（メンバーでセカンドロー1名不詳は、家に内緒で出場したため、名前を伏せてある。）

修猷対福高戦

10月2日午後2時より福高グラウンドにおいて行なわる。わが軍は連日の練習のため負傷者多く、メンバーそろわず。奮闘力戦せしも、ついに9対0にて勝ちをゆずる。

〈メンバー〉

植村　長谷川　溝口
井上　池田（達）
吉岡　山崎　広田　本田
S・H
藤野　青柳
安部　下川　小野
F・H河野

修猷対福中戦

10月17日午後、わが軍のキックオフにより開始。敵福中は九州の雄。この日わが軍は意気するどく、3年来の恨みをこの一挙にはらさんと試合前すでに敵をのむ。両軍技量伯仲互にトライをゆるさず。まさに竜虎相争うが如くなり。

開始後20分、わが軍のフォワード物凄く敵を圧倒して、敵ゴール前10数ヤードのところにスクラムとなり、10ヤード余りも押し勝ちて楽に球を得、池田（省）スクラムを割り敵ゴール左側にトライ、ブレースに入らずハーフタイムとなる。

後半、わが軍勢い凄じく好機しばしばありしが、福中よく守って点を得ず。12、13分にして敵ゴール前3ヤードのところにてスクラムとなり、そのまま押し切ってトライ。

郡司ブレース入らず。その後両軍得点なくタイムアップとなり、6対0にてわが軍勝つ。

ああ雌伏三年、我等はついに強敵福中をたおしたのだ。

メンバー左の如し。

植村　山下　溝口
井上　池田（達）
吉岡　山崎　池田（省）　本田
安部　青柳
郡司　広田　山田
F・H河野

修猷対九州ラグビー倶楽部戦

10月28日午後3時半より春日原において行なわる。わが軍の5年修学旅行の翌日なれば、皆つかれて思うように働けず。ついに3対3の無勝負となる。

後半の青柳のトライは真に見事なものであった。

〈メンバー〉

植村　長谷川　溝口

井上　池田（達）
吉岡　山下　池田（省）S・H　本田
安部　山崎
郡司　下川　青柳
F・H河野

修猷対福商戦

11月3日午後4時より九大グランドにおいて開催。

当日はわが軍メンバーそろわざれど、コンビネーションよく戦前すでに勝利の感あり。

7分にして下川敵の右側を抜きてトライ。プレース入らず。20分余にして溝口、池田（達）のパスを得て敵の中央を抜きてゴールの真中にトライ。郡司プレース入りて2点を加う。

後半、敵は死物狂いとなりて戦ったが、わが軍余裕綽々として池田（達）、池田（省）の好パスを受けて敵をあざやかに抜いてトライ。プレース入らず、25分余にして山田、青柳のパスを受けて敵ゴール中央にトライ。郡司プレース入りて2点を加え、ついに16対0にて撃退す。

メンバー次の如し。

植村　広田　山田
隈本　青柳

吉岡　山下　池田（省）S・H　本田
下川　池田（達）
郡司　長谷川　溝口
F・H河野

修猷対福中第2回戦

11月11日午後3時春日原にて開催。

敵は前回の恨みをそそがんと物凄い意気で我に向う。しかれどもこの回わが軍のフォワード福中のフォワードを断然とおさえ敵に球を与えず。スリークォーターもよく活躍して、前半河野、青柳のパスを受けてゴール左側へトライ、プレース郡司入らず。後半敵もさるもの元気を出してゴール中央にトライす。

20分余にして池田、池田（達）のパスを受けてゴールの中央にトライ。郡司プレース入りて2点を加え、結局8対3にてわが軍再勝す。

〈メンバー〉

植村　藤野　山田
井上　池田（達）
吉岡　下川　池田（省）S・H　本田
安部　山下

郡司　　広田
F・H河野　　青柳

修猷対九州帝大戦

11月16日春日原において午後2時より雨中に開始。わが軍よく力戦せしも力量の差如何ともしがたく、ついに37対0に大敗す。

本年は非常に優勢にて、来る12月23、24日に開催せらるる大毎主催全国中等学校ラ式蹴球大会北九州予選には必勝を期し、大阪甲子園に遠征の意気込み、目下合宿して猛練習。何卒応援を望む。

福岡高等学校主催近県中等学校ラグビー試合

参加校　修猷館、福岡中学、福岡商業

12月6日　　木曜日　晴

修猷館　9—0　福岡商業

修猷のキックオフで開始。修猷のドリブルよく敵を抜く。10分にして池田（達）ルーズスクラムの球を得てゴールポスト近くトライ。郡司キック入らず、その後我よく敵を圧しゴールライン近く迫れども敵よく防ぐ。前半は終る。

後半修猷よくドリブル、スクラムにおいて敵を圧すれども、スリークォーターのパス不確実のため、しばしば好機を失す。10分にしてゴールライン近くのスクラムより球を得て、下川トライ、ブレス入らず（雨あがりのため球が水をすいよく蹴るあたわず）。後に1トライ。9対0にて福商を破る。

12月8日　土曜日　晴

福岡中学　3—3　福岡商業

12月9日　日曜日

修猷館　11—0　福岡中学

今日は冬とは思えないほどの暖かさ。すこしく汗を感ずる位である。修猷のキックオフで開始。修猷のフォワードのドリブルよく功を奏し1トライ、1ゴール5点を得、後半に到り修猷、福中に圧迫されて、わがゴールライン前1尺のところで両軍死にもの狂い。見ているものは手に汗をにぎる。ついに15分の後、修猷もりかえして、その勢で2トライを得。11対0で福中を破る。

ここにおいて修猷館は1等を勝ち得たり。勝ちて兜の緒をしめて、来るべき大毎の試合に優勝せんと、猛練習を続く。

大阪毎日新聞社主催全国中学校ラグビー試合九州予選

参加校　修猷館、福岡中学、福岡商業

12月22日　土曜日　晴

修猷館　6—0　福岡商業

午後3時、商業のキックオフに始まる。敵はわが軍の敵に非ざれども、決死の勢ものすごくわが軍に迫る。前半は修猷館自重し

すぎて無為。しかし、わが軍は敵に25ヤードライン内に圧されしことなし。応援のものは修猷の勝利と前もって安堵す。しかりわが軍は後半において充分敵を圧し、2トライ、6対0にて勝つ。

商業の応援500に対し修猷館は20～30名の者が、選手を励ますのみであった。

12月23日　日曜日　晴

修猷館　0―0　福岡中学

大阪毎日新聞社主催九州予選の優勝試合はいよいよ今日となった。白雲が東西から南北に走る。福中の応援の300なるに対し、修猷20名に過ぎず。敵は不戦一勝。我は昨日の戦に傷つきし者あり。しかれども前年福中に破れてこの地に流したる涙、臥薪嘗胆(がしんしょうたん)ここに1年、会稽の恥をこの一戦にそそがんと、わが軍は昨日の試合の労も忘れて勇みたつ。

午後3時高地氏のレフェリーのもとに試合開始。福中のキックオフ。

敵の主将杉の満身の力をこめた球は、深くわが右のデンジャラス・ゾーンを襲う。福中のダッシュよくきき、わが軍あやうく見えしもよく守り、ここにおしつおされつ戦を続け、修猷圧迫気味の中にハーフタイム。

後半修猷のキックオフに始まる。郡司のキック深く敵をぬけど、フォワードのダッシュおそきため、ついに敵にとられタッチとなる。修猷あやうく見えしもフォワードのドリブルよく功を奏し、敵のゴールにせまる。密集より出た球、わが軍のウィング主将溝口に渡る。溝口のドリブル敵のフルバックをぬく。そのままドリブルを続ければ当然トライと見えしも、拾わんとあせり失敗に終る。

その後わが軍よく敵を圧し、ゴール前の密集中タイムアップ。

この戦は0対0に終りしため、12月25日再戦を約して別る。

12月25日　火曜日　晴

修猷館　6―3　福岡中学

今日は大正天皇祭の佳日なり。この戦い大事なりと修猷応援をくり出すこと700、福中の応援500、春日原頭に雲集す。

午後3時稗田氏のレフェリーのもとに開始。福中杉のキックオフに対するフォワードのダッシュ見事なるに対して、わが軍の狼狽は敵の乗ずるところとなり、わずか3分にして敵に1トライ3点を取らる。しかれどもわが軍の士気あがらず。圧迫されている間にハーフタイム。

後半わが軍の勢ものすごく、またたく中に2トライを取る。そのまま敵を圧し、ついに6対3にて我が軍の勝利に帰す。わが軍の中から「玄洋の波」の部歌がうたい出された。応援の唱う「彼の群小」はうすれ行く春日原頭に響きわたった。館長の舎図で修猷館ラグビー部の万歳が三唱された。

ああついに我々は勝ったのである。会稽の恥をそそいだのである。

ついに修猷は勝ったのである。後一同は櫛田神社に参詣し戦勝を謝す。（報告責任　松尾）

甲子園遠征戦況報告

S・A生

12月27日、我々は蹴球部創立以来の宿望であった甲子園遠征の争覇戦に勝って、九州代表として大阪の地へ遠征することになりました。1月1日の佳日に博多駅を出発するに際して、館長先生を始め、諸先生や多くの先輩、在校生の見送りを受けて、我々の努力の空しくなかったことをつくづく感じました。そして修猷館蹴球部万歳の声がプラットホームに満ちた時、部員一同は暗涙に咽びました。ために我々は大阪の地で修猷健児らしく潔く戦うことや、来年また必勝すること等を誓わざるを得ませんでした。

かくして、大阪に着けば先輩諸兄の盛んなる歓迎を受けて、早速町見物をし大阪城等へ案内して戴きました。

かくして4日になれば、朝霜凍る甲子園原頭に奏楽と共に入場式及び優勝旗返納式がありました。厳冬の寒気は粉雪をさえ交えて、ラグビー気分をいやが上にも濃厚にし、九時頃、爆音高く大毎の飛行機が雄姿を現わし、大鉄傘すれすれに低降して大会のマッチ・ボールを投下した時、我々は等しくスポーツマン、特にラガーのみが感じ得る一種の快感を覚えました。

かくして、9時半、我々は早実のキックオフで戦いを始めました。

前半の初めは早実に押され勝ちで、5分、中央のルーズスクラムから早実のスタンドオフ左に深くパントをしてゴール前40ヤードに攻められ、早実のライトセンターこれを取って全くバックローにパスをし右にセンターウィングを余して、修猷のフルバックを左に抜いて右7ヤードにトライし、ゴールならず3点を取られ、また10分、修猷のゴール前17ヤードのルーズから早実のスタンドオフ球を得て左にドッチングしてバックローセンターにパスをし、さらにライトセンターパスをうけ、右に廻って中央にトライ。ゴールならず。計6点となる。

〈修猷の好機〉16分修猷井上パントして早実のバックを抜いたが、早実のバックロー巧みにセーブをして18分修猷P・Kを得たが惜しくもドロップアウトとなり、20分元気になった修猷は早実のキャリーバックの後ゴール線上のルーズとなるのを、修猷池田右にトライ。ゴールならず。6対3となる。

27分池田蹴り返えされたる球を拾って突進、井上にショートパス、好機であったが惜しくも右タッチとなる。

ハーフタイム前左25ヤードで植村プレースキックでゴールを狙われたが無為となった。

〈後半〉修猷フォワードの奮闘で25ヤード左に進み、私のパントで5ヤードまで近づいたが、早実ライトウィング走って盛り返えされ、9分、中央でバックローセンターのショートパントはね

返えるのを巧みに取って左にパスをし、センター20ヤード走って中央トライ。ゴールなって11点となる。

〈17分〉左寄り15ヤードスクラムから河野、山田にパスをし、左ブラインドを狙ったが惜しくも止められ、早実T・Bパス右に左に盛り返えし、中央ラインアウトとなる時、早実スタンドオフ球を得て突進しセンターにパスをし、さらに、バックローセンター、球を得て中央にトライ。ゴールとなる。16—3。

かくして、私等は力の限りを尽して戦ったが、フッカーの郡司が家事によって行かれなかったので、スクラムのボール味方に出ること少なく、ためにスリークォーターは、タックルに忙殺され、両ウィングまでボールが渡らなかったことが負けた一大原因であろうと私は思う。また修猷のフォワードのバックアップのたらなかったことや、一般にボールを持ち過ぎたことなども原因をなしているだろうと私は思う。また早実は常にファインプレイを見ていることや、場慣れをしていること等が大いに原因しているだろうと思います。

しかし、ある新聞は我々修猷の元気なことを褒めてあったそうです。

我等は最後まで潔く戦いました。

ゆえに一人でも野心を持った者があれば、そのチームは駄目であり、ラグビーの精神にそむくことになります。ゆえに我々の日日の練習は、少しでも野心を退くことにあるのであります。

なお遠征の時のメンバーは、左の通りでありました。

溝口(5)
植村(5)　広田(4)　池田(達)(5)
井上(4)
吉岡(5)　本田(5)　池田(省)(5)　河野(5)　山下(5)
安部(5)
副田(4)　下川(4)　青柳(4)
山田(4)

甲子園遠征に際し寄附者御芳名

金50円　執行作弥氏
金10円　伊勢田劣氏　岡崎辰助氏
青柳六輔氏　原田　隆氏

甲子園遠征日記

大毎主催九州蹴球大会にて優勝せし本館選手は、全九州の中等学校蹴球部を代表して大阪に赴くこととなりぬ。

昭和4年1月1日曇風雪。自宅にて雑煮を祝い登館。拝賀式に列せし後白坂館長より大阪行を勤めらる。よって式終了後館長宅に年賀に赴きし外には、本年の年賀すべて欠礼せり。辱知各位の御諒察を乞う。

午後3時博多発臨時急行列車にて出発の途につく。館長及び諸

先生、諸先輩、父兄各位、生徒諸氏駅頭に見送りて健闘の励声盛んなり。一行はこの万歳裡に出発す。

監督　小林静夫　伊勢田士岐

選手

5年　溝口博、吉岡真二、西島権一郎、安部是臣、本田弘平、山下賢太郎、植村修、河野克己、池田省吾

4年　井上重臣、山田完二、広田久次郎、下川啓一、副田好美、青柳惣三郎

2年　長谷川盛一

一行宛菓子箱蜜柑籠を送らる。ここにその好意を多謝す。

2日、晴。午前7時20分大阪着。先輩上村真澄、執行作弥、三角五郎、伊勢田劣、内藤用一郎、岩田了（竹村茂孝君病気につき代理）の諸君に歓迎せられ、直ちに阪神電車にて鳴尾の宿につきぬ。

朝食後再び大阪に出で毎日社を訪うて阪神「バス」を受取る。生徒一同は三角、内藤二君に案内されて大阪城や道頓堀を見物したるのち、三角君に歓待せられたり。一方監督2名は伊勢田劣君恵我荘宅に案内せられ、午後4時には西ノ宮上村氏より生徒全部と共に案内せられ、御家族と団欒愉快なる御接待に預る。館歌や今様さてはラクビーの応援歌など歌い、歓を尽して宿に帰る。雪は日当り悪き所々に残りて寒空なりき。

3日、晴。1月は3日間市内の商店、飲食店全く閉鎖して商売せず。聞く正月重詰料理はこれがために作らるるものとか。かくの如き市の状態なるのみならず、在阪先輩は大抵旅行して不在勝ちなるにかかわらず、前記5氏は11時美津濃運動具店食堂に交渉して歓迎会を開かれたり。先輩諸氏「勝敗は天なり男らしく戦え」との熱心なる激励に選手等も非常なる緊張味を呈し勇気勃々たり。午後鳴尾競馬場にて練習す。上村氏は御家族と共に場に臨んで奨励せらる。

監督2名は竹村君を執行氏病院に見舞いたり。執行氏の案内により40マイルの速力にて阪神アスファルトの新道を駆り、甲子園執行氏別邸に温き一夜の洋館生活をなす。

4日、晴。寒気強く雪片時々降り来る。競技の準備はなれり。9時初めて甲子園の大競技場に入る。入場式終って直ちに早稲田実業と戦う。敵としては申し分なし。九州男子の元気を示すはこの時にあり。三角、内藤両君を初め上村、執行両君は家族全部を引連れ、その他伊勢田、黒川、田代、横田、吉田の諸君も入場、特別観覧席より応援につとめられしも、天か時か奮戦利あらず。勝ちを制するを得ざりしこそ遺憾なれ。かくて両軍挨拶して退場するときには、首将溝口を先頭とし、場内を一周して威儀堂々退場せしは、実に九州男子の武容を示すを得たり。これに比して如何に勝利を得しとはいえ、規律もなく散また乱、列をも立てず退場せしは我等の執て不可とし、戒むる所。我が選手の挙動は実に痛快なりき。

退場後直ちに上村氏御夫婦沢山の菓子を贈って慰労せらる。ここに度々の御厚情を謝する所以なり。

午後五時大毎社より選手慰労会を開催せらる。選手一同出席す。

夜三角君より案内あり。正金銀行岡崎辰助氏来会。同氏は先輩岡崎茂助君の令兄なり。この度の来阪について多額の費用を要せしことならんとて金品を寄贈せられ、それが魁をなして原田、伊勢田、執行の諸君よりもまた多額の寄附あり。これ全く、三角、内藤両君の奔走の賜物と聞く。深く感謝の意を表する所以なり。

5日、晴。本日は自由散歩として各自の外出を許し、午後5時の帰宿を命ず。神戸駅より午後9時発にて翌6日午後6時無事博多に帰着す。（監督2名記す）

蹴球部を迎えて

内藤用一郎

一、快　報

暮の30日平山先生、岡沢先生からオール九州を代表して蹴球部が大毎主催の全国中等学校優勝争覇戦に甲子園グランドの大試合に出場するので、何分の応援を依頼するとの御手紙に接した時の悦び。実に意外の場所に母校の溌溂たる選手を迎うるとは。ああ修猷来るか！　母校来るか！

「修猷の気象に迷わぬ奴は」の思い出の応援歌なぞ思い浮べながら包み切れぬ楽しみを押えつつ暮を送る。

二、選手来着

昭和4年1月2日――九州から選手が梅田につく日だ。

黎明の4時寒風にオーバの襟を立てながら今日着く選手のこと、自分の在学時代のいろいろの感じや思い出を懐しみつつ駅に着く。

堂島の執行さんと待合室で会う。選手の来着のことや、年頭の挨拶が一度にすまされる。

7時の列車を迎うべく執行さんのステッキの竿頭に「修猷館歓迎」のビラを高くかかげてプラットホームに出る。

先輩の方々が集まられてお互いの御挨拶が交換せられる。

勇ましの車輪の響と共に列車は着いたが肝心の選手一行の姿が見えぬ。

仕方がないのでプラットホームから出る大毎の選手到着時刻をも見直すやら、電報を拡げてさらに見直すところに臨時列車が着く。もしかと見守っている――やあ選手が来たぞ！

伊勢田先生、小林先生を先頭に輝やかしい優勝旗を朝風になびかせつつ出て来る一行。

歓迎の先輩の口から包み切れぬ悦びの言葉が湧く。ひとまず鳴尾の大毎指定の宿に落ち着いて今後の計画を打ち合わせることにする。

三、大阪見物

2日の午後選手一行は小閑を利用して先輩三角氏のユーモアにとんだ、親切なご案内で大阪見物に出かける。

豊公の盛時を偲ぶ大阪城の天守台跡から大阪を俯瞰する。

東洋のマンチェスターたる大大阪。日本経済中心都市としての大大阪。高楼な建築、櫛比せる人家。見る若きスポーツチャンピオンの胸にある将来の理想抱負のサムシングが画かれたことであろう。

それから中之島公園から大毎本社に行って到着の挨拶をすまして、三角氏の至れり尽せりの御骨折りで道頓堀まで見物する。

今晩5時から上村真澄の個人御招待会の関係で選手一行と午後4時御別れする。

四、歓迎会

正月などでいいレストランがあいていない。三角さんと執行さんの御斡旋で美津濃の六階ホールで心尽しの宴を開く。美津濃は運動具店なので、かえってスポーツマンには相応しいかも知れぬ。市庁、日本銀行、中之島公園一帯の絵のような景色を眺めつつ宴は酣なり。両先生、先輩の頬に微醺の紅がさす。大毎の抽籤に出かけていたキャプテンが帰る。第1日第1回戦で早実と組む。一寸大敵のようだが、しかし修猷に恰好の好敵手だ。江戸児気質、九州男子、いい対立だ。

「頑張れ修猷、九州男子だぞ」先輩の口から親切な、しかし力強い激励の辞が叫ばれる。選手の面上決意の紅が漲る。

明日だ明日だ。選手シッカリ頼むよ。

五、試　合（早実 16—3 修猷）

4日の甲子園の大鉄傘下の大グランドに静かな朝の太陽は昇る。沈黙の裡に対峙する両雄。九州代表修猷館。関東代表早稲田実業。スタンドのファンの瞳は輝く。試合は進む。

時々刻々の変化。勇壮凄絶の白熱戦は演ぜらる。走る。摑む。追う。選手の吐くいき大気の中に白し。終始絶えざる修猷の猛襲、好投にて敵を制せんとする早稲田実業。観衆固唾をのんで手に汗を握る。修猷三度好機を逸してついに敗る。しかれどもその健闘は勇し。九州代表の名を恥かしめず。正々堂々の決戦は敗れたりと雖も悔なし。最後に試合を終りて「フレーフレー早実」を叫んだ一同がキャプテン先頭に疲労をも見せず、一周したるその意気は正に「敗れたる修猷、勝てる早実を追う」の概あり。ああこの意気。この沈着。修猷館蹴球部の興隆、栄冠をかち得るの日、期して近きにあり。選手諸君自重せよ。そして吾等をして再び相見えしめられよ。併せて母校諸先生の御健康と母校各部の健全なる発達を衷心より祈る。

大阪通信（河原田平八郎君宛）

左の玉章は上村真澄君夫人糸子氏から、その実兄河原田平八郎君へ宛てて送られたものであるが、本年1月伊勢田、小林両先生が引率せられ、甲子園に出場せしラクビー選手に対して、如何に

阪神地方の卒業生諸君が優遇せられたかを知ることが出来るから、私信ではあるけれども借用して登載するのである。なお楮余兄妹棣鄂の情の美なるあらわれは、羨望に堪えない。（岡沢生）

新年の御祝い申し上げます。

御一同様目出度御越年の御事と御察し申し上げます。手前共一同も機嫌よく齢を重ねました。

今年は例年にない寒いお正月で御座いました。御承知の通り、昨4日は大毎主催全国中等学校ラグビー大会開催せられました。始めて福岡より修猷館出場を知りました時は、言い知れぬ嬉しさに胸おどりました。勝敗はともかく、甲子園原頭に私等のなつかしい故郷の若人を見るだけでも、どんなに喜びでしたか分りませんでした。かねて平山先生より主人宛に宜敷たのむというお手紙に接しておりましたので、主人も1日から昨日までとうとうそれらにかかり切りで御座いました。4日は早朝から家内総出にて小雪降るなかを、甲子園に出掛け、応援にまいりました。新聞などにて御承知のことで委しくは申し上げませんけれど、早実と戦い惜敗は致しましたものの、よく戦われましたことは、ほんとに嬉しう御座いました。都会のチームはよいコーチもあれば試合を見る機会が多く、割合に洗練されておりますことは、国あたりではどうも致し方のないことでありましょうけれど、どこまでも意気で終始していましたことは頼母しいことで御座います。

2日、大阪着の朝は、ステーションにも迎えにまいりましたし、その夜は私宅に選手一同、伊勢田先生、小林先生と20人あまり招待いたし、お雑煮と五目御飯などで心ばかりの御馳走をいたしました。久し振りに福岡の中学生と一堂に相まみえ、福岡まる出しの言葉に修猷館の校歌や、エールを歌って貰いました時は、主人始め一同感慨深く、なつかしいまた言い知れぬ嬉しい集りで御座いました。

伊勢田先生より兄上様方の噂も聞き、また真澄のこともたのみ、また来ん年もと念じてやみません。伊勢田先生に御会いの折はどうぞいろいろお話しお聞き下さい。

主人がかほどまで心から歓待いたし御世話致しましたことは、私も他事ならず感謝いたしました。平山先生も必ず御喜び下さることと存じます。イの一番不幸にして惜敗は致しましたけれども、それは私共の自分からも、技術の未熟なことは致し方のないことでありました。選手達も大変残念には申しておりましたけれど、どうも致し方のないことで、こんご益々その道に技を練られんことを祈ってやみません。

この度の出場致されましたお蔭にて、修猷館の後輩の御連中とも初対面致し、皆名刺交換など致し懐旧談に花が咲きました。

4日の応援団のなかには執行病院長、三角五郎殿、内藤用一郎殿、伊勢田殿ほかに十数名。

修猷フレーフレー

福岡まる出しの応援振りには、さすがに甲子園原頭も福岡の感が致しました。

4月5日　　糸子

御兄上様

5　延長の末大魚を逸す（昭和4年度）

雪の上に大の字になり、しかも夏の夕立後の涼風のそよそよと吹いて我々の汗を拭い取ってくれるそれよりも、もっともっと涼しく気持が良い。これは冬の真盛だ。活動写真のロケーションならば塩かも知れぬが、ここはそうでない。真正味の摂氏零度の雪の上にだ。今は夏だからこんなことを言ってもただ一服の清涼剤になるかも知れぬ。けれども真冬の1、2月の炬燵の中にでも潜りたく、朝の1分間でも蒲団の中に海老形になりたい時分に、こんなことを聞かされたら諸君はぞっとするだろう。

しかも我々ラガーには余儀なくさせられると言うのではなく、否々雪の上に打っ倒れて雪を頬張りたくなる時が起こるのであって、これは我々が試合をし始めて暫くすると起こって来る現象である。ウィンタースポーツたるラグビーフットボールの試合の如何に壮絶であるかが分るだろう。

ラグビーフットボールを我々は略して単にラグビーと称している。そしてラグビーフットボールは蹴球競技の一の流儀であって、これが生じたのが英国のラグビースクール（ラグビーは地名）なのでかくの如く称し、ラグビーフットボール必ずしも蹴球の全部ではない。他にア式フットボール等がある。

そしてラグビーフットボールなる競技は15人が一団となって敵の一団と即ち30人が一人一人の定った職責を完うしつつ一つのボールを中心としそれを獲て敵陣に突進し、そのボールを敵陣の地点に置いて得点するを目的とする競技である。

9月29日　日曜日　午後4時　於九大グランド

九州ラグビー　18—3　修猷館

井上　下川　湯浅

大神　藤野

石橋　花石　長谷川　山田　深田

松田　池田

副田　広田　磯

10月5日　土曜日　午後3時　於九大グラウンド

九大　19—16　修猷館

井上　石川　藤野

大神　青柳
石橋　花石　長谷川　山田　深田
松田　池田
副田　広田　大坪

10月20日　月曜日　午後2時　於九大グラウンド
佐高　12—16　修猷館
井上　下川　藤野
大神　池田
石橋　花石　青柳　山田　深田
松田　湯浅
副田　広田　大坪

11月11日　金曜日　午後3時　於福高グラウンド
福高　23—0　修猷館
井上　下川　藤野
大神　池田
石橋　花石　長谷川　山田　深田
松田　青柳
副田　広田　佐々倉

雨あがりの後のことで、グラウンドが非常に湿っており、動作が十分に出来なかった。

11月3日　日曜日　午後4時　於九大グラウンド
福商　6—0　修猷館
井上　下川　藤野
大神　湯浅
石橋　花石　長谷川　山田　深田
松田　青柳
副田　広田　佐々倉

この試合は実にものすごいフォワード戦で、オープンに廻りしことほとんどなく、密集、密集で観る者をして手に汗を握らしめた。

前半の終に1トライ、後半の初めゴール前のフリーキックでゴールをねらわれて6—0対で惜しくも敗る。

福高主催大阪毎日後援九州中等学校ラグビー大会

11月30日　午後3時　於高校グラウンド

福商　14—3　修猷館

〈前半〉福商　11—3　修猷館

修猷キックオフ、福商側25ヤードでルーズを繰り返えしたが福商山下F・Kを得、修猷側30ヤードに攻め、ゴール前で戦ううち15分左隅でスクラムから福商有吉もぐり込んでトライ。

福商側30ヤードのルーズを修猷青柳拾ってF・Bパスし佐々倉にパスしゴールならず。

23分福商ウィングインゴール深く廻りてポスト直下にトライ。ゴールなる。

29分左隅に商業トライ。

〈後半〉 福商 3—0 修猷館

福商キックオフ。修猷直ちに返して10ヤードのF・Kは30ヤードにタッチ。修猷盛んに攻めゴール前でルーズを繰り返えしたが、福商ドロップアウトで危機を脱す。修猷惜しくもチャンスを逸す。

23分福商城後ルーズからの球を得てもぐりこんで中央にトライ。

修猷最後の攻撃を開始。ドリブルにてゴール5ヤードまで突進したが、福商山田よくとめてドロップアウト。またチャンスを逸し戦うウちにタイムアップ。

井上（信）　下川　藤野
大神　池田
石橋　花石　広田　山田　深田
井上　青柳
副田　長谷川　佐々倉

翌日の試合は福商 9—8 福中

3日目の試合は福中棄権して修猷2位となる。

今までの試合を顧るに、実に修猷は悪戦苦闘して来た。光輝ある歴史の重荷の下に懸命に戦って来たのである。たとえ、城南の地に恨みをのむも、福商なんぞ恐れん。我に修猷魂あり。来るべき春日原頭の戦いを見よ。石にかじりついても勝ってみせるぞ。

我には熱烈燃ゆるが如き意気をもって、毎日西の空に日の沈むまで猛練習を続けているのである。

大阪毎日主催全国中等学校ラグビー大会九州予選

大阪毎日主催第12回全国中等学校ラグビー大会九州予選は、12月24日午後1時から福岡市外春日原で挙行。この日夜来の雨霽れたりとはいえ、霙まじりの寒風吹きしきり、若きラガーの血をいやが上にも燃えたたせた。

開戦を前に、昨年の優勝校たる本館を先頭に福中、佐中、福商の4チームの入場式を行ない、本館のキャプテン青柳より代表旗を大毎福岡支局長へ返還。直ちに本館対福商の試合は始めらる。

試合経過

修猷対福商

我々は第1回戦において、福岡商業と戦うことになった。実に福岡商業からは春の戦い以来、我々は戦う毎に無惨にも打ち負かされて来たのである。たとえ彼の連勝の夢未だ醒めざるとはいえ、彼の実力は世人の等しく認めるところで有った。

しかしながら、我々には光輝ある歴史が有った。我々の練習の裏には涙ぐましき程の先輩の努力があった。力ぞえが有った。去年の栄冠を落としてはならない。我々は石にかじりついても勝た

ねばならぬ義理がある。かくして、我々は重い責任感と、湧き出ずる復讐の念に燃え、悲壮なる決心のもとに、福商と対陣したのであった。世人はこの戦いに事実上の優勝戦として興味をかけたのである。

時に午後1時10分、戦いは修猷のキックオフに始まる。

主審　稗田　線審　松尾（修）、菊野（商）

〈前半〉

修猷のキックオフ。果然、試合は猛烈なる前衛戦に始まる。技倆伯仲、我進めば彼退き、彼進めば我退き、密集に続くに密集、予想通り事実上の優勝戦としての期待に十分だった。

風下なるわが軍の奮闘は驚歎に価する程である。3分、福商は山崩れの如きドリブルで一気にわが軍25ヤードに攻む。30ヤードの密集から福商スタンドオフ岩隈球を得て山下、城後とパスしたが、わが軍下川よく取りてタッチダウン。修猷まず危機を脱す。密集。密集。密集。両軍の戦いは火花を散らし、観衆は手に汗を握る。12分、福商側25ヤードのルーズから突然修猷左ウィング佐々倉球を得て、ドリブルに攻めたが惜しくも福商F・B山田よく守りてドロップアウトに危機を脱れ、このところ暫時両軍波瀾重畳。18分福商左右にあざやかなるT・Bパスで突進。修猷側50ヤードで密集を繰り返し、じりじりじりと攻め寄れば、修猷ここを先途と死にもの狂いに頑張りこたえ、又もドロップアウトに危機を脱す。福商優勢裡に修猷側25ヤード左で密集を続け、福商スタンドオフ岩隈球を得るや、球はスペルが如くに山下に渡る。山下は商業にその人有りと聞えたる名センター。わが軍の左隅を人なきが如くに走る。疾走。ああトライなる。万人の脳裡にかくあるひらめきがあったその刹那タッチの旗が昇った。わが霜軍の広田の機敏は山下をゴールライン前3尺の所で押し出してタッチ。ついに福商は長蛇を逸し、両軍ノートライでタイム。

〈後半〉

3分、修猷は20ヤードの密集から危機を脱し、タッチを繰り返し、敵ゴール前に攻めたがドロップアウト。修猷の攻撃は福商を圧しここに前衛戦を続く。10分藤野のロングキックもドロップアウト。得点とならず。かくてトライメイクの戦いは続く。5分、10分とタイムは迫るが、両軍はハーフラインを挟み一進一退。両軍のラガーの眼は血走り、手足は傷つき、まさに狂える牡獅子である。30分余り鈴韻を曳いたホイッスルが高鳴った。トライだ。トライだ。修猷側15ヤードのスクラムから出た球を青柳奪いトライゲッター佐々倉に渡せば、彼は球を抱きて阿修羅たり。彼は走る走る。彼コーナーフラッグめがけて一途に走れば、彼を追う者一人福商の猛将山下なり。30ヤード、20ヤード、ゴールは近づけり。あます所まさに10ヤード。山下は猛然と佐々倉においすがった。しかし彼のタックルも空しく、佐々倉は疾走50ヤード、インゴール深く廻りてポスト直下にトライ。続いて青柳の真心こめたキックは見事に決まりて、球は霊あるものの如くポストの真唯中

を中空高く入れり。嗚呼我々はついに5対0で勝ったのである。熱い熱い涙がひとりでにあふれ出て来た。さもありなん。勝ちし者も涙、敗れし者も涙……ああ一年の努力の後……涙……涙……そはスポーツマンのみぞ知る。

FW　福田、石橋、井上、井上、大神、広田、下川、花石
H・B　長谷川、山田
T・B　佐々倉、青柳、池田、藤野
F・B　深田

修猷 5（0—0 / 5—0）0 福南

・・・・
優勝戦

修猷対福中

前日福商軍と大接戦の後5対0で凱歌を挙げた本館と、新進の佐中を軽く20対0で一蹴した福中軍によって、優勝戦の幕は切って落とされた。この日風なく快晴にして、寒気をも忘れる暖かさ。午後2時に試合開始のホイッスルは高鳴った。

主審　高地　線審　松尾（修）、香月（中）

〈前半〉

福中のキックオフ、修猷ドリブルの総攻撃に福中側25ヤード内に潮のようになだれ込みポスト前50ヤードで密集。修猷に球が出たが福中ドロップアウトに危機を脱す。4分、両軍福中側25ヤードを挟みて、一進一退火花を散らす猛烈なる前衛戦。修猷またも左タッチにそなえるあざやかなるドリブルで福中の陣深く攻め、左隅にてスクラムの渦巻を繰り返すこと10分。修猷あせってビックアップ。福中にP・Kをあたえ、またも機会を逸す。修猷よく攻むれども、福中の守り堅くかくするうちに福中軍調子を得て攻撃に出で、H・B本田の好蹴はわが軍の30ヤードにタッチ。密集はじりじりじりと流れ、ゴールに近づく。その間におけるわが軍の奮闘は涙ぐましきものがある。福中好機を迎えたがハーフタイム。

〈後半〉

両軍ノートライで舞台は廻った。後半だ。トライメイクの戦いは1分、2分、3分、4分と熟していった。されど前日からの試合の目に見えざる疲労はこの頃からわが軍のFWの上に表われて来た。ハーフラインを挟みての猛烈なる前衛戦も福中に機会をもたらした。密集は修猷館25ヤードの左側で繰り返された。しかし福中のビックアップ、修猷P・Kで30ヤードを回復した。20分、またも修猷に危機が来る。福中本田修猷側20ヤードのルーズから球を得て、約20ヤード左タッチに沿ってスルスルと走り、あわやトライかと思われたが、修猷藤野の捨身のスマーザータックルは、本田をどうとばかり地面にたたきつけた。

福中またも機会を逸す。最後だ。福中の虚を突いて修猷は懸命の総攻撃に出た。猛烈なるドリブルに一気に福中側25ヤード内に攻む。修猷軍の疲労を堪えて無二無三と攻むる様は壮烈悲壮。誰

か涙なきを得ん。ルーズは左から右に流れる「ノータイム」「ワントライイージー」応援の叫びが潮のようにおしよせて来る。しかしわが軍にピックアップありて、タイムアップ。ついに福中軍との勝負は無勝負に終った。しかして審判員の合議の結果「くじ引をして勝負をきめるか」「十分休んだのち30分の延長戦をするか」のいずれかを選ぶことになった。

しかしながら、たとえ疲労その極に達したりとも、わが若き血に燃ゆるラガーが如何してくじ引で勝負をきめることが出来得ようか。彼等の面には破れるまでも戦わんという悲壮な決心があった。しかしながら、選手の純白のユニフォームは土にまみれ、黒色とまちがうばかりでFWは勿論、F・Bまで負傷しているさまを見ては、この上30分の延長戦をすることは、誰の目から見てもそれは余りにも惨酷であり、その結果は火を見るより明かなことであった。この戦いや悲壮！ 選手の意中や察するにあまりあり。応援団の中には一種の沈黙が続いた。

〈延長戦〉

ホイッスルは鳴った。福中キック。修猷25ヤードのルーズから出た球は福中スタンドオフ本田からウィング小山に移った。小山は左隅をあざやかに快走、修猷F・Bのタックルあざやかにきまれども、小山の強引はゴールラインの上に球を置く。福中の喊声が炸裂した。ああ福中のトライついに成る。福中の喊声我々の耳には悪魔の叫び声のように聞えた。しかれども15分。修猷中央辺のルーズから球を得て、T・Bパスあざやかにウィング佐々倉に渡った。佐々倉は右タッチに沿って、40ヤードをダッシュ、インゴールを深く廻ってトライ。ああ、ついに福中のディフェンスは破れたのだ。貴重なる1トライの前に吾等の応援団は狂喜乱踏して、涙した。しかしゴールをねらった球は、ある不吉なる暗示をあたえるかの如く、すーっと左にそれた。

かくして両軍の奮闘は一進一退。オープンにブラインドに秘術を尽しての奮闘はものすごいものがあった。ついに福中に機会が恵まれたか福中の前衛は修猷の左隅に雪崩れ込んだ。福中軍はタイトにルーズを繰り返しつつじりじりとゴールに迫った。疲労の極に達しながら、汗みどろ、血みどろになって死力を尽し、ゴール1、2尺にくいとどまり防戦する修猷軍のさまは、目をあけて見ることは出来なかった。突然喊声があがった。福中FW渡辺間髪を入れず球を拾ってスクラムサイドから突っ込んでのトライだ。ああ万事ついに休す。主審の笛は、暮れて行く師走の夕空に鳴り響いたのである。

わが軍はついに涙をのんだのである。しかしながら、我々は最後まで不利なコンディションのもとにありながらも、修猷館ラグビー部のために最善を尽して戦ったのである。

FW　副田、石橋、井上、高木、大神、広田、下川、花石

H・B　長谷川、山田

T・B　佐々倉、青柳、池田、藤野

F・B　深田

修猷　3（0—0、0—0、3—6）6　福中

省みれば昨年の優勝から今日まで、夏の真昼、冬の朝、1年間における時わかずの練習もついにその甲斐なく、時に利なく勝つべかりしこの戦いに破れ、春日原頭に尽きぬ恨みをのみ、若きラガーマンのあこがれの的——甲子園。ああそれも過去のはかなき夢となり、中学校時代の懐しい思い出ラグビー——それもかく最後は涙に彩どられて、我々五年生は母校の門を永遠に去らねばならぬのである。

ああ思うまい……女々しいとは思いながら我々がラグビーを思う時にまず思い出すものは、この福中との優勝戦のことなのだ。戦うに矛をうしなえる我々はあまりにみじめである。

乞う。後に残られるラグビー部員の人達よ、若し諸君達が戦当日の夜におけるあの誓を忘れられないなら、我々のこの心中をくんで修猷館ラグビー部のために何卒来るべき戦いに復讐して優勝して下さらんことを。我々はそのためには蔭ながら出来得るかぎりの力を致したいと思うのである。

——M・H・R——

お礼

我々は全力を挙げて戦いました。しかしながら時に利あらず。ついに勝ちを福中軍に譲り涙を春日原頭に呑んだことは、一に我等の致すところの足りなかったところと深くお詫び致します。

しかしながら九州の強豪たる福商を破り、福中軍に対してかくも堂々と戦うことが出来得たのは、我々の練習努力のたまものでありましょうが、それにも増して大松コーチを始め数多ラグビー部先輩各位の熱烈なる御指導並びに御援助に担うところの甚だ大なりしことに対し、我々ラグビー部員一同深く感謝に堪えない次第であります。

ここに一言お礼を申し添えまして、兄等のこの度の御好意の万分の一にでも報いたいと思うのであります。

大松勝明様
ラグビー部先輩　各位

残れる後組の言

思えば去りし一年間　諸兄達と日の西に沈むまでも汗と土に塗れての猛練習。何のためぞ。身体を練る。そんな物ではなかった。ただ先輩の残せし栄冠を今度もまた保ち、汗と涙とで築きし栄誉を疵つけぬ、否、さらに輝かすためであった。ただこれのみ。さあ練習だッ！　と言えば兄等も私達もよし来たッとばかり昨日の練習の汗のため、かちかちに凍えたユニフォームを物ともせ

ず、温かき洋服、シャツと着替え、外は霰交りの雨の中を福中、福商を破るばかりを念頭に、泥塗れになって赤土のびちゃびちゃになった運動場を走り廻りました。

密集のドリブルの時でした。誰も体中は赤土の跳で赤くどろどろしていました。ゴールライン近くで兄等の一人がどっとばかり引っくり返りました。彼は痛いッとは言いませんでした。ただゴーッオーッ！　我等は唸った。そうだ、やるぞ！　そしてさらに突進しました。こんなこともありました。かくしてボールが目に見えるまで眼は血走りただ福中、福商に打ち勝たんばかりに駆り廻ったのだった。しかるに兄等は報いられなかった。

敗れて去られる兄等の心情如何ばかりぞ！　ただ兄達と共々に汗泥に塗れて来た私達のみ分っております。しかしです。何時までも兄等の後姿を見送ってばかりしてもいられません。泣いてばかりいてもどうすることも出来ません。決してあの恨みを忘れはしません。そして突進。さらに突進。そして来る大会には、きっと勝って見せます。

修猷館ラグビー部一同

ラグビー部先輩達へ

6　先取点守れず（昭和5年度）

全国中等学校ラグビー大会九州大会

昭和5年12月25日　於春日原

福中 ─┬─ 3 修猷
　　└─ 9 福中 ─┬─ 3 嘉穂中
　　└─ 30 福　中

準優勝戦　修猷は福中と対戦、接戦の末敗る。

主審　川津

〈前半〉

20分、修猷中央線でフリーキックを得、奥村、すかさず飛び込んで左ゴール下にトライ3点を先取する。

22分、福中は密集のまま修猷ゴール下に押し込み、ゴール直下の混戦から福中雪崩れ込んで、花田これを押し込んでトライ。さらに29分、ルーズより出た球を谷トライして逆転、6点を挙げて前半を終る。

〈後半〉

20分中央ルーズより出た球を福中本田パントで、修猷のバックを抜き右ゴール下にトライし、修猷得点なく、9対3で修猷惜敗

す。

〈両軍メンバー〉

	（修　猷）	（福　中）
FW	井上、平島、大神、榊、樋口、山崎、高木、大坪	宮内、葉田、清水、磯野、日下部、相浦、藤、渡辺
H・B	長谷川、藤野	富永、花田
T・B	内堀、不破、奥村、下郡	谷、松田、本田、石松
F・B	岡松	税田

7　全国大会決定戦病いに敗る（昭和6年度）

我々蹴球部員は、昭和4年度、5年度の敗北を過ぎ、今年こそはと意気込んで、猛練習を続く。

昭和6年度の第1回の試合。本館対福高戦において12―0にて大勝し、続いて第3学期本館対福中戦に19―3。本館対福商戦に29―5にて大勝。本館対西南戦において12―3。本館対福高の2回戦には12―3で惜敗す。

いよいよ新学期第1学期に入りまず九大と試合をなし、24―0にて惜敗す。しかれども本館対福商戦において22―0。本館対福中戦において40―3にて大勝す。そして今夏休み中に長崎高商を11―6にて敗る。かくしていよいよ第2学期に入りラグビーシーズンとなる。

9月6日　日曜日　雨後晴

第1回オフィシャルゲーム　審判　吉野

修猷 32―0 佐高

〈前半〉

佐高軍よくわが精鋭なるFW、駿足のT・Bを封じ、わが軍わずかに6点のみ。

〈後半〉

いよいよわが軍得意の後半に入る。精鋭のFW、駿足のT・Bその本性を発揮し、ブラインドにあるいはオープンに、あるいはFW戦にとついに悠々26点を揚げ、わが軍ついに、32―0にて大勝す。

9月19日　土曜日　於春日原

第2回オフィシャルゲーム　審判　中山

修猷 6―11 西南　午後4時開始

この日にT・B3人、FWに1人負傷者ありて、4人補欠を出して戦い、わがFWはT・Bの欠点をよく補いしが、前半8―0、後半3―6、結局11―6にて惜敗。

9月23日　水曜日　於福高
第3回オフィシャルゲーム　審判　吉野
修猷 49—10 福高　午後4時開始
この日負傷者脚気等にて補欠3名を出す。初めての70分ゲームなるゆえ、前半元気あれども後半少しだれ試合となる。わが軍オ1ブンに、またFW戦に出で、前半26—0。後半23—10。結局49—10にて大勝す。

10月8日　木曜日　於春日原
練習戦　審判　福商先輩
修猷 6—3 福商　午後4時半開始
この日試合前とてわが軍元気なく、前半3—0、後半3—3。結局6—3にて辛勝す。

第1回近県中等学校ラクビー大会
修猷、福中、福商リーグ戦　福高主催。福日後援。
10月17日　土曜日　於福高
審判　小野寺　午後2時5分
修猷 24（11—0 / 13—0）0 福中
〈前半〉
福中のキックオフ。両軍中央線を堅く挾んで混戦を続け、11分福中ゴール直下にトライを挙げんとしてジットラインを踏み越してより好機を逸して元気とみになくなり、15分福中陣5ヤードの密集より修猷長谷川飛び込んで最初のトライ。
25分修猷中央密集よりパスに進み、左ウィング下郡50ヤード独走。快心のトライ。ゴール成り、再び28分同じく修猷下郡左ラインに添うて40ヤード独走右隅にトライ。ゴール成らざるも修猷前半11点を先取す。
〈後半〉
福中苦戦を続け、16分修猷中央の密集より、H・B—T・B田中丸に渡り、田中丸中央を抜いて駿足ゴール直下にトライ。ゴール成る。
22分福中陣ゴール直前の密集より井尾飛び込んでポスト直下にトライ。ゴール成らず。
26分福中陣25ヤードの密集より修猷内堀、田中丸に好パスし、田中丸巧みに抜いてトライ。ゴール成る。
修猷軍益々好調子。ラグビー界の覇者福中軍も意気銷沈。24対0の大差にて勝つ。
10月18日　日曜日　於福高
審判　小野寺　午後2時開始
修猷 17（0—3 / 17—0）3 福商

〈前半〉

修猷キックオフ。向い風のため福商の好闘。17分修猷陣左ゴール10ヤードのルーズの球を右隅にトライ。ゴール成らず。かくして福商にリードされ前半終る。

〈後半〉

11分修猷福商陣10ヤードルーズより球は福商に出て、福商T・B落球し修猷吉武すばやく拾い、ポスト右にトライ。ゴール成り、この時得点5対3。修猷リードして白熱す。

15分福商陣40ヤードのタイトより修猷下郡30ヤード抜いて左隅にトライ。ゴール成らず。

17分福商陣10ヤードのルーズより球は福商得たが、T・Bパス球を落し、修猷吉武拾ってゴール左にトライ。ゴール成らず。

20分福商陣25ヤードのルーズより修猷石井受けてトライ。ゴール成らず。

修猷盛んに球をT・Bに廻して試合はオープンに展開。タイムアップ直前、修猷榊福商陣ゴール直前のルーズより拾ってそのまま強引トライ。ゴール成らず。

17対3にて本館優勝す。

今これまでの試合数15回。しかして11勝4敗なり。かくの如き好成績の収穫を得たのも諸君の熱誠なる応援によるものと深謝す。なお部員の今後自重慢心せず、来る大毎主催の中等学校九州予選を目標とし精進努力団結して、我等は甲子園原頭に馳せ参ずべく期する外はないのである。

〈メンバー〉

FW　榊、井尾、林、柴戸、石井、高木、大神、吉武

H・B　長谷川、内堀

T・B　下郡、不破、田中丸、奥村

F・B　高尾

その他

柴田、安部、今泉、坂井、伊勢田、権藤、小野、藤、河野、笠

全国中等学校ラグビー大会九州予選

大毎主催、全国中等学校ラグビー大会九州予選は、12月25日から3日間春日原において挙行。

12時30分　入場式

13時　修猷館対佐賀中

14時15分　嘉穂中対福岡商

15時30分　門司中対小倉師範

不戦一勝福岡中学

本館は、この九州予選に輝く優勝をなしたが、今年は不況のため、九州と台湾とをブロックとして代表を決定することになり、猛練習を続けたが、不幸負傷者を出し、不覚にも台北一中に8―5のスコアーで敗れ、甲子園の夢破る。

8　佐高大会に凱歌挙る（昭和7年度）

福高主催ラグビー大会

我等は考査直後にこの大会を迎え、館独特の意気上らず。応援団の熱誠なる応援を受けたにもかかわらず、福中に17対0の大差にて敗れた。

対福商戦においては6対3にて勝利を得たが、仇敵福中に敗れたことは我々の努力未熟と深く感じ、次の大会を目標とし、一同は互に励まし大会を待ったのである。

佐高主催ラグビー大会

第1回戦　福中―修猷

我等は第1回戦において仇敵福中と組む。この福中こそ先に福高主催大会において無惨にも破れたのであった。今日こそ雪辱戦であり、福高の大会以来待ちに待った戦いであった。選手一同は館の名誉のため、必死この一語の意気をもってこれにあたったのである。

〈前半〉

19日午後4時20分福中先蹴で試合開始。レフェリー森氏に、この試合こそ実に本大会における優勝戦と見られたもので、最初から物凄い熱戦を互に演じ、敵も物凄くよく健闘し、前半互に中央線を境としての戦いであった。

9分。修猷軍は敵陣にて敵に出た球のゴール前に転々する間、H・B今泉押えてトライ。今泉コンバート。

16分。福中自陣より右へ廻った球を山田一気に独走80ヤード。ポスト直下にトライ。磯野コンバート。

20分。修猷敵陣におけるスクラムの球を内堀、不破、今朝石と廻し、今朝石コーナーにトライ。

ハーフタイム直前。福中自陣中央のスクラムより球を右に廻し、ウィング山田快速を伸ばしポスト直下にトライ。両軍とも、各1ゴール1トライの同点となってハーフタイム。

〈後半〉

わが軍断然福中を圧し、7分、修猷中央線辺よりのキックを福中F・Bの辺に転々するを、不破拾ってポスト直下にトライ。ゴール成らず。

15分。修猷敵ゴール前の罰球を内堀入れて、3点。

18分。敵陣左のラインアウトよりの球のパス悪きを、内堀拾って巧みにパントにて抜きトライしてさらに3点を加え、圧したるまま後半9点を挙げ、強豪をしてついに恨みを呑ましむ。

第2回戦　福商―修猷

福商は福高大会において、我々に肉薄せる敵。スコアーも6対

3にてわが軍は辛勝したのであった。敵も今度こそは復讐せんものと意気物凄く我等に肉迫してきた。しかし我等は昨日の余勢をかり、意気また敵を圧し、実力の差如何ともし難く14対3の大差にて強豪福商をも破る。

優・勝・戦　嘉穂―修猷

我等は昨日優勝候補たる福中とまた今朝福商の強豪と連続に戦ったに反し、昨日は不戦一勝の良きスタートを切り、かつ今朝佐中と組み20対0にて佐中を葬り、その余勢を駆りて来る嘉穂中学と組む。

嘉穂中チームの各プレーヤーの体格と我等の各員と比較して見るに、修猷は総てが小兵。しかし修猷健児これなるそとばかり意気物凄く、しかし体格小なる我等は何度となくトライせんとしても、身体を持ち上げられてなすあたわず。スコアーの上においては少差なるも、前後半を通じ断然圧迫を続けたのであった。

〈前半〉

20分。敵陣20ヤードのスクラムのボールを修猷取り、これよりFWパス成って吉武右端にトライ。その後終始敵を圧迫し続けたるも体力の差にはばまれ、トライ成らず。ついに前半終る。

〈後半〉

まずわが軍のキックオフにて戦いは開始さる。良く球を生かし敵陣中央の罰蹴にて内堀ゴールをねらい、ゴール成る。

20分。敵陣中央のルーズの球を、FW橋口得、強引に敵陣を割りトライ。ゴールならず。このままノーサイドのホイッスル高らかに鳴り、我等の努力ついに今日の凱歌を挙げしめた。

次に来るものは中学ラグビー界の最高目標ともすべき大毎主催全国中等学校ラグビー蹴球大会予選！　館の名誉のため、戦う以上勝利を得んものと努力してゆく。

どうか館の諸君、心からなる応援を願う。また本年のベストメンバー次の如し。

FW　橋口(5)、平山(4)、蒲生(5)、阿部(4)、石井(5)、伊勢田(4)、小野(5)、吉武(5)

H・B　今泉(4)、内堀(5)

T・B　今朝石(5)、不破(5)、坂井(4)、古森(4)

F・B　権藤(4)

全国大会九州予選

12月25日　於春日原

1・回・戦　修猷　3（0―3　3―9）12　福岡中

今シーズン1勝1負の戦績を残し、大会優勝候補と目された修猷と福中は、第1回戦に顔を合せ、両校応援団の熱狂裡に、午後1時20分より塩崎主審のもとに福中の先蹴で開始された。

試合は事実上の優勝戦にふさわしく、終始緊張した白熱戦を演じた。

前半、福中キックオフ後互に中央線を挾んで10分までチャンスなし。14分福中トライ。修猷18分罰蹴に福中陣25ヤードに入ったが、福中T・Bのキックに返され、修猷陣右隅深く入ったが、修猷FWドリブルで一気に中央に返して前半を終る。

後半、修猷元気に劈頭より押して、2分福中陣ゴール寸前でスクラムを繰り返えしたが、惜しくもドロップアウトに好機を逸した。

修猷FWよくドリブルに割って出て、福中陣に迫ったが、福中FWの好守に会い、20分ドロップアウト、修猷再度チャンスを逸す。

修猷24分、福中陣25ヤードで罰蹴を得、今泉のプレースキック見事に成り、12—3で福中に勝をゆずる。

〈メンバー〉

	(修猷)	(福中)
FW	樋口、平山、蒲生、阿部、石井、伊勢田、小野(弘)、吉武	新島、白井、徳永、原田、村田、広田、藤、田中
H・B	今泉、内堀	磯野、谷
T・B	今朝石、不破、坂井、小野(正)	斉藤、石松、富永、山田
F・B	権藤	池田

ラグビーについての所感

わが修猷ラグビー部玄南の地に生まれてここに幾星霜、我等が先輩はすでに甲子園に陣を進め、修猷健児の意気を示している。後を継いだ現修猷館ラグビー部、さらに異常の進歩をなしつつあり。

ラグビーたるやスポーツ中の華とも言うべき実に男性的な、勇壮激烈なる競技で、見るものをして感激躍然たらしむるものがある。

ラグビーは日本人として最も適したスポーツではなかろうか。我等は坐る習慣があるがゆえか腰が強いのである。ラグビー選手の要素は、体格の偉大なるばかりでなく腰の強いことにある。

昨年のオールカナダ対日本のゲームを見よ。カナダ軍の偉大なる体格に反し日本軍の矮小なるに、スクラムにおいてまたルーズにおいて日本軍はほとんどボールを得て、カナダ軍を破ったのである。

これも大和魂の発露と、日本人の腰が強きがゆえならん。かかるがゆえに、日本人にして世界に名を成さんとするスポーツは、ラグビーこそ適当のものであろう。よって願わくば館よりも、偉大なるラグビー選手を出したいものと切に我等は願うのである。

9　佐高大会3年連続優勝なる（昭和8年度）

修猷—福中オフィシャルゲーム

9月30日　於春日原

〈前半〉　3—0

福中キックを利して攻め入ったが、修猷直ちに挽回、福中陣に攻め入ったが、混戦のまま得点に成らず、20分福中陣5ヤード右寄りルーズの球を修猷小野うまく受けて右中間にトライ。

〈後半〉　9—8

5分修猷、福中ゴール前にP・Kを得、今泉コンバート。

7分修猷小野、福中陣25ヤードから快走して右中間にトライ。

12分福中、修猷陣左隅に攻め、スクラムを押し切って左中間にトライ。

20分福中、修猷陣30ヤード左側ラインアウトより平岡パスを受け、フォローした斎藤に渡し、斎藤インゴールを大きく廻ってポスト直下にトライ。平岡コンバート。

27分、中央ルーズより大石—小野とT・Bパス、小野巧みにスワープで右中間トライ。

12—8で修猷の勝。

9月17日の対福商戦において、8—8の引分となり、試合後反省会を行ない、次に来る福中戦は絶対に勝つと誓ったかいあってか、接戦ではあったが、勝利を握る。

佐高主催全九州中等学校ラグビー大会（11月5日）

「修猷ラグビーをして名あらしめよ」。この夏以来かく叫びつつ念じつつ創痍の五体を引きずって苦痛を忘れて来たはずの我等。闘わんかな時機至る。宿望佐高大会3年連覇を目指して意気も高らかに遠征す。

参加校　修猷、福中、佐賀中、鹿島中

第1回戦

福中　69（29—0　40—0）0　鹿中

修猷　16（13—0　3—8）8　佐中

対佐中戦跡

〈前半〉

修猷FWキックオフより意外の佐中FWの強肩のために押され気味でかなり苦戦をつづく。

10分。佐中陣25ヤード、ラインアウトよりの球を今泉、安河内にパスし、安河内よくカットインしてそのまま抜き右中間トライ。

16分。中央線のルーズより、今泉—大石—小野とパスし、小野タッチラインに沿って巧みにスワーブして抜き、ポスト直下にトライ。今泉コンバート。

24分佐中陣20ヤードルーズより小野球を得、そのままインゴールし伊勢田に渡し、伊勢田ポスト直下にトライ。今泉コンバート。

〈後半〉

10分。佐中陣左中間ゴール前のルーズにFWパスにて平山飛び込んでトライ。

20分。中央線より修猷T・Bパスにて進み、W・T・B古森キックせんとしてハンブルしたる球を佐中T・B・Cそのまま奪い、独走して右中間にトライ。

23分。修猷陣25ヤードタイトより佐中ブラインドW・T・B光武に渡し、光武右へオープン大きく廻り、T・Bパスにて修猷T・B線を突破した。中間にトライ。ゴールなる。

優・勝・戦

修猷 14（8—5 6—5）10 福中

修猷ラグビー創立以来の宿敵福中、好敵手と決勝に相対し我等の不屈の意気に一抹の殺気さえも加えた感あり。

対佐中戦の接戦に佐高先輩及び小林先生の激励をうけ、我々フィフティーンは悲壮な面持ちに張り切った気持ちで倒せ宿敵。屠れ福中を。

雨か風か乾坤一擲身も心も我等は擲ちてこの一戦に備う。天も地も照覧あれ。我等ベストを尽して戦わんとするなり。

対福中戦跡

修猷FWタイトに重力に押され気味なるも、ルーズにタッチによく球を得て順調に戦いを続け、後半に入るや両軍の熱戦ついに雨を呼び、小雨煙るグランドに1個のボールに母校の名誉をかけ、栄冠を目指しプレイする若人——実に火花を散らし、技倆を超越した意気の争覇戦ではあった。

この一戦におけるバックロー伊勢田、田村の活躍と修猷最初のトライ小野の独走。今泉のコンバートとは特記すべきであろう。

〈前半〉

5分。修猷FW押されスクラムトライかと見えたが、福中ドロップアウトで危機を脱す。

10分。ルーズのボール福中斎藤に渡り、斎藤修猷T・Bを突破してゴール直下トライ。ゴール成る。

12分福中陣30ヤードT・Bパス今泉。安河内、坂井、大石、小野とわたり、小野右中間トライ。ゴール成る。

17分。福中ゴール前ルーズよりFW郡左中間トライ。

〈後半〉

6分。福中修猷陣に転々するを押え、トライ。

9分。福中陣25ヤードタイトよりT・Bパスで、古森左中間に

トライ。
23分。福中25ヤードルーズよりのボールを今泉、大石、小野、と渡りトライ。その後断然敵を圧し、感激のタイムアップのホイッスルはなった。

ああ、我等はついに勝ちたり。3年連勝して再び優勝旗を百道原頭に飜すを得たり。
歓喜の涙に酔える我等。敗退し悲涙に咽ぶ彼等。わが義士！胆に銘せよ。
玄洋の浪天打つ威力……わが矢叫びの心の響如何なる敵も戦い降る。これぞこれわが修猷。
栄えあるエールを3度佐高原頭に唱えし日を。昭和8年11月5日を。
なお大会における佐高先輩の甚大なる後援と鑒応に深く感謝の意を表します。

福高主催ラグビー大会（11月25、26日）
参加校　福中、福商、門中、修猷
第1回戦　福中（勝）—福商（負）
修猷—門中（棄権）
わが修猷健児の意気を示さんものをと選手達は試合の前日から必勝の意気物凄く、皆勝利を誓い合った。そして25日福高へと乗り込んだのである。が、しかしそこに我々が見出ししものは果敢なく棄権し去った門中のいない寂しいグラウンドだった。
第1回戦において我々が不戦勝したことは我々ラガーにとっては非常に残念なことであったが、だが我々来るべき明日の優勝戦を目指して。
優勝戦（26日）　修猷—福中
この日朝から降り出した雨は午後になって晴れず、しとしと降りつづけて福高のグラウンドはほとんど水びたりになっていた。
しかしながら選手達の物凄い意気と熱との前には、それらの雨も泥濘も物の数ではなかった。
午後1時試合開始のホイッスルは時雨になやむグラウンド全体に高らかに響き渡った。
〈前半〉
修猷のキックオフを利用して福中陣に攻め入ったが福中直ちに挽回。
10分。福中修猷陣ゴール前5ヤードに攻めたがドロップアウトに好機を逸す。その後一進一退両軍雨中の戦法ドリブルに攻むるも得点とならず。
25分修猷ドリブルで福中陣に迫るも、ドロップアウト。
32分。修猷福中陣に攻め入るもまた、ドロップアウト。
〈後半〉
5分。福中自陣25ヤードより白井大きくドリブルに引っかけ、

修猷ゴール前に迫ったがドロップアウト。

8分。中央線ルーズの球を、修猷今泉拾ってハイパントし、福中25ヤード線まで迫ったが、福中FWドリブルに盛りかえし、その後、中央線を挟んで一進一退、戦況進展せず。

21分。福中修猷陣になだれこんだが修猷T・B権藤大きくキックして盛り返す。

27分。中央線から修猷古森ドリブルに引っかけ一気に福中陣左隅に攻め込んだが、ドロップアウトとなる。

32分。中央線右寄り、今泉スクラムサイドを抜き、坂井にパスしたが落球して惜しくも絶好のチャンスを逸す。

両軍ともゴール前まで迫りながら得点ならず。ノートライのまま延長戦に入る。

38分。福中修猷陣10ヤードに攻め入ったが、平山見事なドリブルに引っかけ一気に中央線まで挽回し、フォローした坂井またもドリブルにてゴール左隅に攻め込み球はインゴールに転々とするを、坂井そのまま押えて唯一最初のトライをあぐ。

福岡高校主催大会優勝戦（11月25、26日）

福高主催第3回中学ラグビー大会の王座を決定する福中対修猷の試合は福高グラウンドにおいて26日定刻午後1時より、河津氏のホイッスルで修猷キックオフにて開始された。

この日、早朝より降りしきる雨のため、グラウンドは泥濘と化し、コンディションはすこぶる悪かった。

福中は今秋すでに2回連敗しているので、この一戦こそ、雪辱すべき好機であり、修猷また一気に粉砕せんと、連勝か雪辱なるか、竜虎相搏つ時、風は雲を呼び、雲は雨を降らす。凄惨の気天地を覆って、壮絶、人を圧する概、これぞ福中、修猷魂を賭けての一戦であった。

試合開始後、両軍は中央線附近で2回タイトを繰り返した。しかしグラウンドは最悪であり、球はひどく濡れているし、足場は悪いので、タイトから球が出でもH・Bがハンブルして、T・Bに渡らず。渡ってもT・Bは日頃の脚力を見せることは出来ず、開戦5分足らずして、両軍は雨中の戦法たる、ドリブルの応酬を展開した。

ノートライのまま、双方苦戦を続けて後半に入り、依然としてドリブルを繰り返すも双方得点し得ず。

後半延長38分、平山のキックに好機を掴み、坂井の劇的トライに凱歌は修猷に揚った。

福中惜敗したとはいえ、熱戦70分、精根の限りを尽しての応戦は敗れて悔なき一戦といえよう。

〈両軍メンバー〉

	（修猷）	（福中）
FW	古賀、平山、郡、山本、山内、伊勢田、森原、田村	酒井、北御門、徳永、村田、馬場、白井、金丸、田中

H・B　今泉、安河内　　藤、梅津
T・B　古森、坂井、大石、小野　　斎藤、平岡、森、大島
F・B　権藤　　長

全国中学ラグビー大会九州大会（於春日原）

・準優勝戦・　12月25日　於春日原

修猷館対福岡中学の準優勝戦は2時から、両校応援団、先輩の熱狂裡に、中山（主）、大神、水山（線）3氏審判で、福中キックオフによって開始、事実上の優勝戦として迎えた。修猷、福中戦も、修猷の落調というより、福中の善戦で20―0のワンサイドゲームとなり、期待を全く裏切られた。

福中は5分、8分、1トライ、1ゴールを重ね、機先を制し、さらに後半、開始に修猷の出鼻を挫いた。

スタートを誤まった修猷は前半、8―0とリードされたため精神的動揺は、ゲームの上に焦躁と不安となって現われ、ボールが手につかず、好機をムザムザ逸していた。

福中の勝因は、ハーフ団の目ざましい活躍によるもので、FW7分3分の割で得た球を適宜に処理して、バックに廻して球を生かすと共に、修猷側にヒールアウトされると、バックローと共によく潰して、ウィングに渡る余裕をあたえなかった。今シーズン3戦3敗して、その前途を危ぶまれながら、満々たる闘志をもって、奮戦大いにつとめたことは、大いに賞讃すべきである。

〈両軍メンバー〉

	（修猷）	（福中）
FW	古賀、平山、郡、山本、山内、伊勢田、森原、田村	坂井、北御門、徳永、村田、馬場、白井、次賀、田中
H・B	今泉、古森	藤、西
T・B	井上、安河内、大石、小野	斉藤、平岡、森、大島
F・B	坂井	梅津

（注『福岡日日新聞』より抜萃）

昭和8年度ベストメンバー

FW　古賀(4)、平山(5)、郡(3)、山本(4)、山内(4)、伊勢田(5)、森原(5)、田村(4)

H・B　今泉(5)、安河内(4)

T・B　古森(5)、坂井(5)、大石(5)、小野(5)

F・B　権藤(5)

マネージャー松井

今シーズン、オフィシャルゲームスコアー

9月2日	修猷	3	8	西南
9月10日	修猷	37	5	福高
9月17日	修猷	8	8	福商
9月30日	修猷	12	8	福中
10月8日	修猷	8	19	九医
10月29日	修猷	0	19	FRC
11月12日	修猷	32	3	九薬

10　九州の覇者たり得ず（昭和9年度）

わが修猷ラグビー部は今年もついに名をなさなかった。宿敵福中をして七度九州の覇者たらしめたことに対して、私達は、何と言って諸君にお詫びしたらよいだろうか。

私達は福中よりも遙かに優れた実力を有していた。それだのに何故敗れたのだろうか。それはただ私達の練習不足にあったのだ。否、チームの統一が取れなかったのに原因しているのではなかろうか？

何時もの通りの定り文句だと諸君は笑うであろうが、しかしかし、私達は敢えて言う。「来年こそは」と。来年こそ宿敵福中を粉々に打ち砕いてやるのだ。

4年生以下の諸君よ!!

諸君達の中にして若し修猷ラグビーをして名をなさしめんと欲する者あらば、願わくばわがラグビー部に入部しては呉れまいか。

また4年生以下の現在ラグビー部にいる諸君よ!!

君達は前者の轍を踏むことなく、ひたすら練習に専念して、修猷ラグビーをして九州の覇者たらしめて呉れ。これが修猷館のラグビーを去るに臨む5年生一同の切なるお願いだ。

今年度のオフィシャルゲーム戦跡

西南	29	5	修猷	九医 20—16 修猷
福倶	43	0	修猷	明専 31—5 修猷
九帆	14	17	修猷	東邦 13—3 修猷
福中	16	11	修猷	福商 8—24 修猷
門鉄小倉	43	0	修猷	

今年度メンバー

FW　山本(5)、古森(4)、江守(5)、古賀(5)、西川(4)、菅原(5)、横山(5)、松永(5)

H・B　松井(5)、田村(5)
T・B　坂田(5)、安河内(5)、郡(4)、鈴木(5)
F・B　宮崎(3)

最後にいろいろと御指導を賜わりました先輩諸氏へ厚く御礼申すと共に、私達の力の足りなかったことをお許し下さい。（松井清記）

11　佐中戦85—0が仇（昭和10年度）

わが修猷ラグビー部、玄南百道原頭の地に生まれて、はや幾星霜。我等が先輩はすでに甲子園原頭に駒を進め、修猷健児の意気を示し、後を継いだ現ラグビー部さらに数段の進歩をなしつつあり。今年こそ見事多年の宿敵福中を破り、九州の覇者とならんと、郡主将以下3月の学期休みを利用して大いに奮発猛練習をやった。

わずかに前年の選手は、郡、宮崎、古森、西川の4人。後は全部新人ばかり。それでも熱心に練習をやり、夏休みには先輩のコーチもあり、今年は精神的によくそろっているとのことであった。

いよいよ9月のシーズンを迎えて練習に拍車をかけ、雨の日も泥にまみれて一路希望へ、九州制覇へを目標として努力した。

1日は九軌と、工学部グラウンドで対戦す。試合は不覚にも15対12で敗る。

24日は、大暴雨の中に前年度高専の覇者九医と対戦。両者とも悪コンディションに苦しみながらも奮戦。この日FWの出来悪く、ドリブルすれば敵の正面をついてチャンスを与えついに17対3で敗る。

ただ残るは10月17日の福中戦のみ。太陽が西に没するまで身体の倒れるまで練習に練習。ただ福中の一戦に勝つために。しかし突如部員に身体の故障のため退部する者が出来、そのためにメンバーに変更を来して、3年生を出場させねばならぬようになった。呉々も思ったことには、ラグビーのような団体競技には精神的団結が必要だと。

10月の6日には、はるばる久留米に遠征、佐中と対陣す。先輩が佐中は強い。福中との試合は五分五分だったとの話を聞き、恐れていたが、試合が開始されるや、わが軍独特のT・B戦に移り、次々にトライを重ね、前半42対0。

後半に入るや、FW断然佐中を圧し得点のチャンスを作り、43対0の大差をもって勝つ。

この試合において郡主将を中心とするT・B陣の活躍、見るべきものがある、との評が9日紙上に出ていた。

やがて来るものは、17日の福中戦。館独特の猛練習をやり、やがて来る福中戦に備えた。

17日。朝早く光雲神社に参拝、必勝を期して出陣す。

試験中にもかかわらず多数健児が応援にこられ、戦前すでに敵をのんだ感があった。思うに我等15人は今まで何を目標に彼の猛練習をやったか。今日の試合に勝つためではなかったか。臥薪嘗胆の言葉も我等のために作られたのでないかとさえ思われた。

最初から熱戦また熱戦。伝統の力にはげまされながら力戦。前半14対0で福中リードのまま後半に入る。

この日H・B不調で、T・Bに球が渡らず得点の機運を作ることが出来なかった。やがて後半に入り、死力を尽して戦ったがついに、14対0。計28対0という前代未聞の大差で敗れた。

ああ、我等はついに今年も敗れたのだ。超中学級のT・Bを持ちながら、実力を有しながら、練習不足のため敗れたのだ。

「敗軍の将多く語らず」。来年こそは一致協力、倦まずたゆまず練習して母校の栄誉をあげられんことを希望して止まない次第であります。

本年度のメンバー左の如し。

FW　熊谷(5)、古森(5)、上田(5)、西川(5)、守田(5)、井上(4)、島田(3)、大神(4)

H・B　山部(4)、坂井(4)

T・B　郡(4)、宮崎(4)、吉田(5)、安部(5)

F・B　早田(4)

ラグビー部を去るに臨んで

栄枯盛衰は、世の習いとかや。衰微の風に見舞われ、哀れな残骸を止めたる、それは我等の姿なのだ。受難時代の我等の眼に映ずるもの、耳に聞ゆるもの、我々の苦しい刺激となった。

「今に見ろ。黄金時代を出現させるぞ……」昨年も破れ今年も又破れようとは。ああ連日無休の練習は何のためだ。ただ優勝して先輩の恨みをはらし、母校の名を上げんためではなかったか。練習の前にはすべてを犠牲にし、緩まんとする心に鞭打って団結し、一路目標に突進した。

嬉々として早く帰る友達を羨しく思ったことは何度か。……ああ、思うだに涙の出る。残念だ。わが部福中と対戦すること幾度。ついに勝たず。我等は先輩、諸先生の信頼を裏切ったではないか。部員よ。再び我等の轍を踏むことなかれ。来年こそは仇敵福中を破ってくれ。

今は亡き先輩早川少将が母校に講演に来られたその時の話の中に、自分の身を殺して勝利のために努力する帝国軍人は、たとえばラグビーの試合における選手諸君のようだといわれたことがある。

あの男性的な日本人に最適な激烈なる競技で、見る者をして感

激躍然たらしむものは、ラグビーのみである。

欧州大戦においてよく奮闘せし国民は英国である。ある人がその原因を研究して見ると、終果は国技としてラグビーの如き団結心を重んずる競技をやるからだということが分った。これにおいても分るが如く、ラグビーは勝利のために自身を犠牲にするという点が重んぜられるのだ。

この点は、わが修猷館の気風にかなっていると信ずる。

「死して後止む」これこそ選手の何時も忘れることの出来ぬことだ。

諸君よ。一千の健児よ。願わくばラグビー部をより一層、より強くなされんことを切に願うのであります。（熊谷記）

12　臥薪嘗胆前半のリードも空し（昭和11年度）

甲子園へ!!　甲子園、そは我々の否わが修猷ラグビーチームの数年来の望みなり。

今年こそは!!　わが先輩は涙ぐましき努力を続けながらも、毎年惜しいところで宿敵福中に名をなさしむ。

しかして我々も九州制覇の大任を先輩より受けつぎたり。九州制覇。おおその前に横たわるもの、それこそ打倒福中。宿敵福中を打破することなり。そしてその前哨戦とも言うべき7人制は、初夏の色漸く濃き5月、九大にて開かれたり。

集まるもの十数校、しかもああ運命の神のいたずらはまたもや第1回戦に、修猷対福中の対面をなせり。主将宮崎を初め皆よく戦えども6対3のスコアにて雄図空し。しかれどもこれを去年の成績にくらぶれば決して見劣りはせず。ここにおいて奮起勇躍したる我々は「福中何ものぞ」の感をいよいよ深くして来るべき秋の日の準備をなせり。

夏休み!!　海に山に最も楽しき夏休みも、我々は炎暑を嫌わず。豪雨をものともせず。ひたすら練習に励めり。この時にあたり、我等宮崎主将は病床に臥す。我等の打撃。我等の哀しみ如何ばかりぞ。かくてはならじと奮発、なお一層の練習をはげめば、ああ今度は脚気にかかるもの多数出で、オフィシャルゲームにも補欠を出すに至れり。

修猷倶 56—10 修猷　西南 35—0 修猷
福商高 78—0 修猷　福中 55—3 修猷
簡保局 11—22 修猷

の、スコアの開きも、選手の恢復と共に漸次調子を取り戻し、県主催では、嘉穂を敗り、優勝戦では、

福中 20—0 修猷

零敗したとは言え、相手福中には、20点を許すのみ。そして、

福商 12—21 修猷

で、福商を破り、甲子園大会に出場の資格を得たり。

我々の目指して来た甲子園予選。我々の如何にしても負けてはならぬ甲子園予選。そしてその日はついに来た。

第1日　長崎商　0—32　修猷

第2日　門司中　5—11　修猷

の得点にて1次、2次の試合を無事通過し、決勝戦に残る。一方相手は福中、鹿中を軽く退け、嘉中と苦戦したりと雖も運よくてか、彼もまた決勝戦に残れり。

11月29日正午を期し、光雲神社に参拝、一路春日原に向う。途中で会う者皆、修猷館の生徒。試合開始前より北側スタンドは、星章で埋まれり。この絶大なる応援の人々に対し、我々は死んでも勝たねばと、お互に励まし合うのだった。

やがて高鳴る笛の音、修猷よく押して前半8対3、修猷リードしたまま後半戦に入る。しかし後半スクラムの球はよく取れどもT・Bの連絡悪く好機会を幾度も逃す。それに反し、福中はP・Gより元気づき、ドリブルに攻めたてて後半20分頃1ゴールを取る。

修猷今挽回せねばとお互を励まし、元気づけ、声を掛けても焦れば焦せる程結果は悪くなるのだった。そして後半ついに挽回の機会なくノーサイドの笛は鳴る。

ああ!!　またも敗れぬ。あの福中に。今年こそは、今年こそ!!の決心も空しく宿敵福中に今年も名を成さしむ。

「敗軍の将多く語らず」とか。ただ四年以下の部員諸君に、来年こそあの大旗を本館に持って来られんことを切に希望して筆を擱く次第である。

本年度のメンバー左の如し。

FW　松隅(4)、河原(4)、高倉(5)、富永(5)、北(4)、井上(5)、古川(3)、山本(5)、中村(3)補

H・B　山部(5)、弓崎(3)補、宮崎(5)主将

T・B　鶴身(5)、早田(5)副将、大原(3)、阿部(4)

F・B　原田(4)

終りに望んで諸先生、先輩諸氏の深甚なる後援指導並びに生徒諸君の心からなる応援を、お礼申し上げます。

13　天、我に味方せず（昭和12年度）

甲子園へ!!　ああ幾年来のわが部の叫びだ。見よ、諸先輩の九州代表の覇権獲得に血の出るような努力も空しく、宝満颪しの吹きすさぶ春日原頭の草の上に悲憤の涙は冷たく光ったのだ。

今年こそと福中の牙城へと幾多先輩の指導と、河原主将のもと

に団結して30名の部員は一丸となって新学年から新たな覇気と希望に燃えて、今年こそと若草の萠え始めたグラウンドに、スパイクの跡も鮮かに覇権獲得への進撃を開始したのだ。

栴檀の紫の花の香う時、秋の前哨戦たる7人制に、優勝戦にて福中と激戦また激戦。しかし天は我々に味方せず。ついに惜敗の涙をのんだ。

赤茶色の運動場に、ぎらぎらする太陽の反射に、汗と埃にまみれ、友人達の楽しく泳ぐ時、毎日毎日楕円球を追って苦闘した。かくして苦闘に次ぐ苦闘で綴られた休暇は済んだ。そこで我等のシーズンに入った。

1日まず福高に大勝し、「幸先よいぞ」と喜んだが、福高商、九医、西南に無惨にも破れ、一抹の暗影を投げた。

対福中戦は実に、福中連勝の勢と、伝統50年修猷魂の衝突だ。奮戦力闘ついに空しく惜敗した。実に惜しい戦いだった。意気において敵を呑むの概があった。矢折れ力尽き、最善を尽して敗れたのだ。しかしこれは延びんとする麦の踏まれなのだ。挫折ではない。

対明善戦に必死の明善に快勝し、筑後河畔に凱歌を奏し、10月3日の福商と対戦した。意外。我等は強い当りの福商に苦戦がしばしばあり。焦慮より来る失策に自らを窮地に迫い込んだ。時間は無心に経過する。商業捨身の戦法の下に総ゆる手段と努力をもって報いた。しかるに何事ぞ。最後の総攻撃も功を奏せず。ついに無念の笛は鳴り響いた。悲しい笛だ。夢のように春以来の苦闘が頭の中にまざまざと浮ぶ。

部の歴史は我等の手で一大汚点を印したのだ。9対6、何故敗れたか。意気だ。意気が足りなかったんだ。技も実力も、意気の前には取るに足らぬものだ。旺盛なる戦闘意識、これだ。これが勝負を左右する。実に我等にはこれが欠けていたのだ。部員諸子よ。意気を持て。我等は敗れた。しかし盛者必衰の理あり。おごれる者久しからず、猛き者ついには滅ぶこのたとえ。部員諸子よ。再起せよ。意気を養い勝利を獲得せよ。この一大恥辱を飛躍への踏段とせよ。そして館友諸君の熱烈な期待と応援に報いよ。

（原田記）

7人制メンバー

FW　大神、古川、北

H・B　弓崎

T・B　丹部、河原

F・B　原田

今年度ベストメンバー

FW　谷川(5)、中村(4)、門司(4)、白井(3)、松岡(3)、北(5)、古川(4)、大神(5)

H・B　弓崎(4)、吉田(4)

T・B　伊勢(4)、河原(5)、丹部(5)、松尾(5)
F・B　原田(5)

14　レフェリーはオールマイティ

（昭和13年度）

県主催中等学校ラグビー大会（10月29日　於春日原）

今年こそはの念に燃えつつ、待ちに待った県主催大会はついに来た。必勝の意気で臨んだが天我に味方せず。福商に不覚の惨敗を喫した。

去る7月末に軽く一蹴した敵に破れようとは夢にだに考えなかった。ああ何たる悲運ぞ！

FW　守田(5)、中村(5)、門司(5)、山内(3)、高橋(5)、松岡(4)、白井(4)
H・B　古川(5)、伊藤(4)、吉田(5)
T・B　牧(3)、弓崎(5)、西(5)、三隅(3)
F・B　薄(3)

大毎主催全国大会九州福岡地区予選（12月20日　於春日原）

1回戦において宿敵福中と顔をあわせた。この日、春日原原頭朝からの快晴で、絶好のラグビー日和。全員必勝の信念で試合に臨む。

午後2時試合開始のホイッスルは高らかに鳴り響いた。力戦奮闘。果して試合は文字通り火花の散るが如き大熱戦となった。されど結果は我等に利あらず。破れたのだ。試合には勝ちつつも、スコアーの上では負けたのだ。何たる不運ぞ！　あきらめようとしても、あきらめようがない。

春日原原頭黄昏迫る頃、宝満颪に吹かれつつ我等は男泣きに泣いた。汗と血にまみれて、百道原頭夕闇せまる頃、ただ月の明りを頼りに猛練習に励みしこと幾旬ぞ。その甲斐もなく我等は又も宿敵福中に名をなさしめた。

修猷　6（3—6　3—3）9　福中

FW　守田、中村、門司、高橋、山内、松岡、古川、白井
H・B　伊藤、吉田
T・B　牧、弓崎、西、三隅
F・B　薄

今年度成績

・オフィシャルゲーム

修猷　6—9　福商　　修猷　25—3　佐中
修猷　6—16　福中　　修猷　56—5　明善
修猷　0—56　福高商　　修猷　18—18　簡保

・練習試合

修猷 63—0 東筑　修猷 46—0 福高
修猷 28—0 福商

・7人制ラグビー大会（於春日原）

5月1日　修猷 3—6 福中

FW　白井、門司、古川
H・B　伊藤
T・B　弓崎、牧
F・B　薄

・館内7人制ラグビー大会（11月28—30日）

1回戦

5の5 14—0 13の4　4の4 16—0 3の2
5の3 6—0 5の2　5の1 15—0 3の5
4の5 3—0 4の1　3の1 9—0 3の3
4の3 19—0 4の2　5の4 不戦勝

2回戦

5の5 13—0 5の3　4の4 22—0 5の1
4の3 3—0 4の5　5の4 3—0 3の1

準優勝戦

4の3 3—3 5の5（4の3抽籤勝）
5の4 3—0 4の4

優勝戦

5の4 21（8—0 13—0）0 4の3

〈両軍メンバー〉

（5の4）

FW　古賀、花石、川原
H・B　安松
T・B　武藤、伊藤
F・B　藤林

（4の3）

檜崎、北島、堀江
志村
守田、江浜
吉田

部を去るに臨んで

顧みれば臥薪嘗胆数ヵ年の苦闘。それも空し栄冠は福中の手に。あの夕闇迫る春日原原頭で悲憤の涙にくれつつ「来年こそは勝ってくれ」と言った先輩の言葉。今なお我々の耳に残っている。「やるぞ」我々は固く誓った。そしてやった。力の限り、矢折れ力尽きるまでやった。そして不運福中に又も破れた。

我々は福中より優れた実力と意気とを持っていると自負する。我々の誇りは我が部の偉大なる団結力と猛練習だ。我々は猛練習をやったのだ。雨の日も風の日も。そして炎熱焼けつくが如き夏休みも。一日としてユニフォーム姿をグラウンドに現さない日とてはなかったのだ。互に激まし合い、九州制覇を心に誓いつつ。ある時は膝の傷をくらべて、恰も昔の武士が戦場の刀傷を自慢するが如く自分の武功を、奮闘の跡を語ったものだった。

放課後嬉々として帰途に急ぐ館友を見て、いく度羨ましがったことだろう。しかし我々に重大な義務のあることを自覚すればこそ、暗くなり町に燈のつく頃まで猛練習をやった。

練習に疲れた重い足を引きずりながらも、九州を制覇し甲子園に駒を進めること等語り合いつつ帰ったことも幾度かある。勝たんがために練習して来た。ラグビー部再生の狼煙をあげんものと過去1年、一心不乱の努力をした。しかし今、我々は惨めな敗残者として去って行かねばならぬのだ。

嗚呼、自ら涙がわき出る。おお、後輩諸君よ。我々の恨みをはらしてくれ。我々の涙を拭ってくれ。

15　伏兵福商に泣く（昭和14年度）

わが修猷ラグビー部玄南の地百道原頭に生まれて早幾星霜。今年こそは見事多年の宿願を達し、九州の覇者となり「甲子園へ！」わが修猷ラグビー部の年来の叫びだ。

緑草の萠え始めるグラウンドに、主将以下全員一致団結し、新たなる覇気と希望に燃えて、覇権獲得への果敢なる進撃を開始したのだ。

幾多先輩の血と涙で綴られた部の歴史を顧みる時、我々の責任の重且つ大なるを切に感じるのだ。

6月初旬、7人制ラグビー大会において宿敵福中と対戦す。我軍、「福中何ものぞ」の気概に燃え、烈々たる闘志をもって8年振りに福中を敗る。快なる哉。

しかるに何ぞ福商に敗れようとは。ここにおいて我々は新たに「打倒福商」の意気に燃え、砂をもとかす炎熱の下に苦闘に次ぐ苦闘。太陽の西に没するまで、身体の倒れるまで練習に練習。ただ、商業との一戦に勝つために。苦しい夏休みだった。

毎日汗と埃にまみれ血の出るような思いで練習に精進す。又今は、合宿までさせて貰って技や気力を養い、諸先輩その他の指導により技もめきめきと上達して秋のシーズンを迎えた。

しかるに又も大毎大会全国予選において福商に敗れる。何たる悲運ぞ。技も意気も敵を支配していたのに。体力、そしてまだまだ気力が足りなかったのだ。顧わくば後輩諸君よ。意気を持て。そして体力を養え。再起せよ。勝利を獲得せよ。「勝たずんば有るべからず」の意気に燃え、小敵なりとも侮らず、大敵なりとも恐れず勝利に向い猛進せよ。幾多先輩の名誉のためにそして館友諸君の熱烈な期待と応援に報いよ。

7人制ラグビー大会

5月7日

部員一同必勝の意気で臨む。

・1回戦・不戦勝

・2回戦・修猷 16（8—0、8—3）3 福中

両軍メンバー

（修猷）

FW 松岡、三苫、山内

H・B 伊藤

T・B 白井、牧

F・B 三隅

（福中）

篠原、村上、森山

田中

加勢田、白水

田代

・優勝戦・修猷 3（0—5、3—6）11 福商

両軍メンバー

（修猷）

FW 松岡、三苫、山内

H・B 伊藤

T・B 白井、牧

F・B 三隅

（福商）

松村、青柳、松下

木村

岸川、豊田

天本

福岡高校主催ラグビー大会

6月11日 於福高

・1回戦・不戦勝

・2回戦・修猷 32（21—0、11—3）3 嘉中

・優勝戦・修猷 8（3—8、5—5）13 福商

〈わが軍メンバー〉

FW 稗田、三苫、井川、山内、吉安、進村、松岡

H・B 岩城、大庭、伊藤

T・B 牧、白井、三隅、江口

F・B 薄

今年度戦績

・オフィシャルゲーム

8月31日 修猷 11—14 九医（春日原）

9月3日 修猷 17—19 保険局（九大）

9月24日 修猷 22—3 九軌（明専）

10月1日 修猷 64—8 佐中（九医）

10月1日 修猷 47—0 明善（明恵）

10月8日 修猷 3—0 福中（九大）

10月17日 修猷 3—6 福商（九大）

・練習試合

4月27日 修猷 9—3 保険局（修猷）7人制

4月29日 修猷 19—11 福高（福高）

7月19日　修猷 29—58 修猷O・B（春日原）
9月8日　修猷 8—6 福高（福高）
9月16日　修猷 9—15 九大（九大）
10月11日　修猷 37—0 保険局（福高）
10月29日　修猷 10—0 保険局（福高）

大毎主催全国大会九州福岡地区予選

11月12日　於春日原

今日ぞ昨年恨みを呑んで敗退した対福中戦。「勝て修猷健児」と幾多館友諸君に守られてグラウンドに臨む。意気と伝統に輝く両軍は死力をつくして戦う。力と力。熱と熱。両虎相搏つ肉弾戦。

時は刻一刻と進む。両軍8対8の同点のままノータイムとなる。規則に従って抽籤となり、両軍主将の手によってグラウンド中央において抽籤を行なう。天運我に幸しついに抽籤勝となる。

時正に5時半過ぎ。夕闇迫るグラウンドに、勝ったわが軍も敗れし好敵手福中軍も共に男泣きに泣いた。幾多先輩の血と涙を吸うこのグラウンドよ。わが喜びの涙を吸え。

修猷 8（3—5 / 5—3）8 福中

〈両軍メンバー〉

（修猷）	（福中）
FW　園田、三苫、井川、山内、吉安、進村、松岡	野田、金山、篠原、大森、大久保、山崎、森山
H・B　平山、大庭、岩城	田中、中村、斎藤
T・B　白井、三隅、牧、伊藤	高橋、加勢田、白水、田代
F・B　薄	松田

福岡地区決勝

11月19日　於春日原

明くれば10月19日、部員一同水鏡天満宮に詣で必勝を誓いて春日原に向う。

「打倒福商」。夏休み以来我々の緩まんとする心を鞭打って来た言葉ではないか。彼の連日無休の練習はこの一戦に備うるためではなかったか。

試合開始。必死の攻撃に防禦に両軍火花を散らして戦う。タックルの猛襲。突進又突進！　前半3対3の大接戦となり後半に移ったが、両軍の意気はことに熾烈を極め、熱戦又熱戦。しかるに敵の強力をほこるホワードに対するわが軍は、修猷魂に満つると雖も小兵なり。体力の差、如何ともしがたくついに8対3にて敗る。

顧みれば臥薪嘗胆の数ヵ年。今年もまた九州に覇たるあたわず。嗚呼、思う度に涙が出る。我等5年ここにラグビー部を去る

に臨み、部員よ、再び我等の轍を踏むことなかれ。来年こそは必ず商業を破り、我等の恨みをはらしてくれ。

両軍メンバー

	(修猷)	(福商)
FW	園田、三苫、井川、山内、吉安、進村、松岡	山口、中牟田、青柳、魚住、松村、国友、杉下
H・B	平山、大庭、岩城	森山、多良、木村
T・B	白井、三隅、牧、伊藤	豊田、岸川、天本、丸林
F・B	薄	仲瀬

	(修猷)		(福商)
3	3—3	8	
0	5—0	0	
1	トライ	0	
0		0	
0	ゴール	0	
1		0	
0	ペナルティゴール	0	
1		0	

16　全国大会に涙をのむ（昭和15年度）

7人制ラグビー大会

5月6日　於春日原

待ちに待った7人制大会。全員旅行帰りのハンディキャップも何のその。勇躍春日原に乗り込む。

1回戦　不戦勝

2回戦　修猷　6（6—0　0—0）0　福中

優勝戦　修猷　13（8—3　5—5）8　嘉中

おお勝った、勝った。我々は見事に勝ったのだ。夢にまで見たあの優勝旗を今はわが手にしっかりと抱きしめているのだ！

顧みれば臥薪嘗胆幾年。ついに優勝の神は我等の上に莞爾と微笑んだのだ。

福岡高校主催ラグビー大会

6月9日　於福高

7人制優勝の余勢をかって堂々と乗り込む。1回戦は嘉穂中と対す。鋭鋒我に向えども軽く一蹴す。

待ちに待ったる優勝戦。去年福商に恨みをのみしこの一戦。何で敗れられよう。全員決死の勢にて対す。フォワード、バック共に縦横に活躍して福商に快勝す。

修猷　19—3　嘉穂

修猷　14—0　福商

修猷メンバー

FW　山内、島田、伊勢田、吉安、石橋、園田、稗田
H・B　平山、大庭、岩城
T・B　柳、三隅、牧、堀
F・B　河原

8月4日　修猷　17（6－6、11－0）6　修猷ク（春日原）
9月1日　修猷　34（15－5、19－0）5　簡保険（九大）
9月9日　修猷　20（5－8、15－8）16　九州医（春日原）
9月14日　修猷　6（0－30、6－14）44　西南高（春日原）
9月15日　修猷　13（5－6、8－3）9　福岡ク（春日原）
9月22日　修猷　33（0－0、33－0）0　九軌（明専）
9月29日　修猷　27（6－0、21－0）0　福商（九大）
10月13日　修猷　0（0－0、0－0）0　福中（九大）

明治神宮関西予選

10月20日　於花園ラグビー場

大阪へ！　甲子園へ！

嗚呼！　幾年来のわが部の叫びであったか。しかも見よ。

我々は九州の覇者として、その夢を現実化して大阪へ来ることが出来たのだ。対するは全日本にその雄名を称えられし北野中学。場所は日本一の花園ラグビー場。相手に取って不足はなし。全員烈々たる闘志を、鉄の体にみなぎらせ、一団となってぶっつかる。

嗚呼！　快なる哉。我等の勝利。臥薪嘗胆幾年ぞ。わが九州中学ラグビー界も中央の一歩上に抜きん出たのだ。

かくて我々は22日の決勝に京城師範と相見えることとなった。しかるに何事ぞ。前半3対3と優勢に試合を運びながら、如何なる魔物に見入られしか、ついに13点を彼にゆるし、あえなくも破れてしまったのだ。

1回戦　修猷　8（8－3、0－0）3　北野中

決勝戦　修猷　3（3－3、0－13）16　京城師

〈メンバー〉
FW　園田、福沢、山内、稗田、吉安、粟盛、島田
H・B　平山、大庭、岩城
T・B　伊勢田、三隅、牧、堀
F・B　河原

大毎主催全国ラグビー大会九州予選

11月23—24日　於春日原

雨の日も風の日も、そして炎熱焼くが如き夏休みも、1日として練習を休んだことはなかったのも実にこれ有るがためでは無かったか。

この大会こそ我等が生命を賭してのものではなかったろうか、否それ以上のものだったのだ。

嗚呼！　然るに何ぞ。又もや宿敵福中に敗れんとは。誰が予想し、誰が考えたろうか。血の汗が、血の涙が淋しくわが頬に流れる。春日原よ、わが涙を吸え、わが悲しみの胸を思え！

1回戦　修猷　40（16—0、24—0）0　熊工

2回戦　修猷　29—0　佐中

優勝戦　修猷　9（9—0、0—11）11　福中

〈メンバー〉

FW　園田、福沢、山内、稗田、吉安、粟盛、島田

H・B　平山、大庭、岩城

T・B　伊勢田、三隅、牧、堀

F・B　河原

終りに下級生諸君に望む。勝利者たらんと思うには一にも練習せよ、二にも練習せよ。そして鉄の精神を鍛えるのだ。

17　惨敗の中から代表権（昭和16年度）

大毎主催九州地方大会予選（於春日原）

五月雨降りしきる頃も、夏季鍛練朝間は言うまでもなく、炎熱のために百道の松も赤茶ける程の日にも、1日として休む日とてなく、血と汗と涙と砂にまみれて孜々として撓まず練習に練習を重ねしは何のためぞ。言わずもがな。好敵福中と雌雄を決せんがためなり。

第1回戦　修猷　20—0　明善

第2回戦　修猷　6—0　嘉中

明くれば11月30日、いよいよ福中と戦いを交えるのだ、しかも優勝戦において。

ここにおいてわがラグビー選手一同水鏡神社に戦勝を祈願し、試合場に臨む。勝つも負けるも後1時間できまるのだ。思えば胸の血潮は躍る。

試合開始のホイッスルは高らかに鳴り響く。時正に3時。観衆の目はボールを追う。敵は意外にも頑強だ。持ち前の体に物を言わせついに1トライを許す。しかれどもわが士気はこのためにか

えって奮い起ち、全軍魂の火の玉となっての攻撃に敵は我にペナルティゴールを取られて士気頓に衰え、トライされるに至った。さらに押して押して押しまくり6対6のままで前半終る。

後半に入るやわが軍は敵陣にてよく戦い、2トライを挙げて気勢を吐けば、敵もさるもの。最後の5分間で全力をあげ、がむしゃらに攻めてきてわが軍の一寸した油断につけこんでトライしてゴール成る。しかるにわが軍なおもひるまず、攻撃に出でんとしたとき、福中はボールを急パスしてウィングに廻し危く独走にうつらんとした時、タッチ。ホイッスル。スクラム。このとき嗚呼最後のホイッスルは鳴る。

我等は勝ったのだ。我々は10年来幾多の先輩の「敗者」の涙でぬれたこの春日原原頭で嬉し泣きに泣いた。

喜びにふるえるわが応援団の歌う「彼の群小を凌駕して血の大盃を勝ち得たり……」の歌詞がかすかに聞える。

〈スコアー〉

修猷 12（6—6 / 6—5）11 福中

トライ	1	2
	2	0
ゴール	0	0
	0	1
ペナルティゴール	1	0
	0	0

〈両軍メンバー〉

	（修猷）	（福中）
FW	杉本、大塩、藤島、赤司、伊勢田、島田、福沢	村、南川、畑井、畑野、青原、伊奈、浜田
H・B	石橋、本城、堀	瀬戸、岩戸、泉
T・B	内山田、国松、上野、橋本	吉原、久羽、鶴丸、高橋
F・B	今井	船越

勝利への回顧

・7人制ラグビー大会（5月4日　於春日原）

1回戦　修猷 14—0 嘉中

2回戦　修猷 3—0 明善

優勝戦　修猷 3—20 福中

・福高主催ラグビー大会（6月8日　於福高）

修猷 3—19 福中

・大毎主催西日本大会

修猷 5—6 鞍山中

・オフィシャルゲーム

修猷 3—30 O・B　　修猷 3—9 福中

修猷 0—47 福ク　　修猷 29—3 保険

修猷 11—16 福商　修猷 6—14 東邦

憶えば惨敗に惨敗を重ね、しかも好敵福中には、20対3と言うような近年にない、また修猷ラグビー部創設以来一度も無かったと言うみじめな有様を我々は受けたのだ。

幾多の館友が海に山に遊び楽しむを見、あるいは又放課後家に直ちに帰るのを、後よりじっと見送っては羨ましく思って、幾度か退部のことを考えたものだった。しかし打倒福中の業が我々の在学年間に成らずんば已まずの意気に燃える我々一同は、百道松原に霧立ちこめる黄昏頃まで猛練習に猛練習を重ね、重い疲れた足を引きずって帰ったものだった。この烈しい練習の結果を天は見逃さなかった。

ここに雌伏1年、不撓不屈のラグビー精神をもってこつこつとやって来たその甲斐あってか、ついに最後の勝利の大旗は燦としてわが頭上にひらめいた。

毎年毎年「あの春日原原頭に勝って呉れ、勝って呉れ」と後輩に泣きながら頼んで去った先輩へ、「必ず勝って見せます」といいし誓は今ぞはたされたのだ。数多くの先輩の恨みの涙はここに立派に拭い去られたのだ。

顧わくば下級生諸君よ。我等去りて後は、今一層の団結と努力につとめ、再び優勝へ邁進し、長蛇を逸せし西部ラグビー大会には必ず勝って呉れ、そうして我々の恨みをそそいで呉れ。

18　神宮大会の代表たり得るも、全国大会代表戦に抽籤で敗ける（昭和17年度）

7人制大会（5月3日）

一昨年度の優勝を昨年福中より持ち去られしわが部は、再度真紅の優勝旗を奪還せんと、水鏡神社に必勝を祈念して決戦の地、春日原に乗り込む。第1回戦において福中と対戦、よく力闘せしも日頃の調子出でず。不運の敗退をなす。

修猷 0（0—3 / 0—0）3 福中

〈メンバー〉

前衛　杉本、赤司、島田

中衛　上野

後衛　内山田、国松

殿衛　堀

神宮大会予選

先の7人制における恥辱を今こそそそぐ時なり。「殺敵者怒也」と孫子は言った。我等もその「怒」換言すれば必勝の信念に燃え

て、入場式に臨み、第1回戦福商と組むも、緊張し過ぎしためか、得点し得ず。抽籤勝ち。

本館　3（3－3　0－0）3　福商（9月27日）

ついで優勝戦において又も福中と対戦。ああ、勝った勝った。ついに我等の頭上に栄冠は輝いた。かくてわが部は神宮大会中等ラグビー部九州代表に決定し、それと共に、全国制覇を固く誓ったのであった。

修猷　16（3－3　13－3）6　福中（10月4日）

〈メンバー〉

前衛　後藤、大塩、藤島、杉本、赤司、島田、柴田
中衛　本村、本城、内山田
後衛　久保、堀、国松、石橋
殿衛　今井

神宮大会（於東伏見早大錬成道場）

第1回戦　修猷　24（8－0　16－5）5　保善（10月30日）

第1回戦は関東代表保善商業と対戦、旅の疲れも試合するという喜びで吹き飛ばし、元気溢れる勢で軽く一蹴す。

第2回戦　修猷　10（0－5　10－16）21　天王寺中（10月31日）

事実上の優勝戦と見られた如く、正に竜虎相搏つ熱戦を展開するも、ついに刀折れ矢尽きぬ。

〈メンバー〉

前衛　中津、大塩、藤島、杉本、赤司、島田、柴田
中衛　榊、本城、内山田
後衛　久保、堀、国松、石橋
殿衛　今井

甲子園大会九州予選

1回戦　本館　28（15－0　13－0）0　嘉穂中（11月22日）

優勝戦　本館　3（0－3　3－0）3　福中（11月29日）

再度大阪において天王寺中と相見え、全国制覇を争わんがための大会予選なるゆえ、慎重を期して戦を挑む。しかししばしばの得点を逸して同点で終り、延長するもなお雌雄決せず。抽籤の結果勝利我にあらず。ああここにおいて今年の全国制覇もついに空し。我等は又、ユニフォームに、悲憤の涙を拭うの不覚をとりぬ。

「願わくば後輩諸子よ。大先輩より我等に至るまでの血涙を織りこみしユニフォームに、勝利の栄光をもたらすべく精進努力せよ。」

〈メンバー〉
前衛　杉本、大塩、藤島、今井、赤司、島田、柴田
中衛　本村、本城、内山田
後衛　久保、堀、国松、石橋
殿衛　上野

第13回明治神宮国民錬成大会参加記

島田正三

10月4日、明治神宮国民錬成大会中学ラグビー蹴球部九州代表に決定して以来、猛練習を重ね、同月27日征途につくこととなった。試験が終った直後、先生並びに館友諸君の館歌や「彼の群小の歌」に送られ益々責任の重大なるを銘記して16時11分発列車の客となる。いろいろ激励の言葉をうける内、列車は静かに滑り出す。「ワーッ頑張れ」と絶唱する館友の紅潮した顔。顔。顔。何かしら目頭の熱くなるを覚える。

薄暗くなった門司に着くと、結団式場たる錦町国民学校へ歩を運ぶ。すでにここは大会気分が横溢して照明燈に照らされた顔は皆運動人の溌剌さを備えて緊張している。やがて式も無事終了して、門司高女鼓笛隊を先頭に、市中行進に移り再び雑踏する門司駅に至り、人込みを押し分けて乗船する。22時40分発車のベルが鳴り響くや、下関を後にして一路我等の新戦場東京へ。

28日、広島の先の方でガタンと揺れる汽車の音に眼が醒めた。未だ夜は明けきっていない。選手ばかりの汽車だったが、興奮のためか殆んど皆もう眼醒めている。その中にも大阪、京都、名古屋と大都市を過ぎて刻一刻東京へ近づきながら秋の田舎路に入る。茶畑が異様に眼に映じてさらに富士の崇高な姿が旅の窮屈な感じを癒す。

大船近くから再び夜となり、光の巷へ汽車は突入する。かくて19時35分無事東京駅着。正に寄せては返えし、返えしては寄せる人の波である。その中に先輩の嬉しそうな多数の顔が見受けられる。プラットフォームを出ると福岡県選手団は一旦集合して宿所別に解散。我々は小石川の日進館へ行く。

二間に21人詰め込まれて、10時半就寝、入京第一夜の夢を結ぶ。

29日。起きろ起きろとの声に未だうっとりしていると、今度は雨戸をガラガラ、殊更らしくあける音に眼が醒めた。うるさい戸だ。「うーん」東京の朝の空気とはどんなものか、大きく吸って洗面所へ行く。朝食後安着を知らせる便りを書いて投函しにゆく。道行く国民学校生に郵便局を尋ねる。「郵便局ァ何処か知らんな」思わず出た博多弁。「フン何言ってやがァんでい」と、見事肘鉄砲、癪だったからコツンと一つ殴ってやった。

入場式参加のため原宿へ集合し、福岡県部隊を編成し、代々木練兵場に向う。あの広い所も、本大会参加の日本、満洲、蒙疆の選手団でうずめ尽す。昼飯を食って参拝の順序を待つ中、「福岡

県気ヲ付ケ」の号令で整列し歩を起こす。参道の玉砂利を踏んで無言の裡に粛々と進む。この聖地に鎮座ましまして皇国を鎮護し給う、明治大帝の神霊に我等は今謹んで日頃錬成せし体力、技倆を奉納し奉らんことを祈るのである。

感激の参拝終り、開会式場たる外苑競技場へ向う。スタンドはすでに人で一杯である。陸軍戸山学校の音楽隊吹奏により分列行進、正面スタンドのあちこちで拍手が響く。正面の総裁宮の御前を通る時、宮様の御右手が颯と上る。我々に畏くも挙手の御答礼遊ばすのだ。式は国民儀礼より始まり、令旨を賜う。

音吐朗々と御読み遊ばす三笠宮。ああ我等は御顔をこの眼で拝し、御声をこの耳で聞いたのだ。感激措く所を知らず。次いで小泉厚相の開会の辞、東条首相、有馬明治神宮宮司の祝辞等あって開会式終り、拍手に送られて退場。29日は感激の内に閉ず。

30日。まず第1回戦。保善商業と対戦。見敵必殺の旺盛なる闘志をもって粉砕せんことを西方に向きて心に誓い、7時頃宿を出る。電車に身を託して街から村へ走ること1時間余り、東伏見に着く。保善の巨漢連、我々の小柄なるを見て、組し易しと思ってか嘲笑の態度さえ取っている。儚き運命かな彼等。1、2時間後には敗者の運命に泣くであろう。やがて100米位進むと、「明治神宮国民錬成大会ラグビー蹴球場」と大書された試合場に着く。

早速更衣室に入ってユニフォームに着替え、第2グラウンドで練習する。旅の疲れも忘れ果てて身も心も軽い。こうして8時半、先輩より注意ありて試合場に臨む。秋の蒼穹は紺碧の色を湛えて深く澄み、真白いラインがくっきりと浮び出る。待つこと暫し。南郷主審のホイッスルによって9時試合開始。

劈頭より攻めて攻めて攻め続け、前半8対0とリードして敵の出足を封ず。

後半に入って着々得点を重ね、敵をして顔色なからしむ。1時間の猛攻の後、関東の雄保善商業も24対0の圧倒的強味をもって撃破し、幸先のよいスタートを切る。そして戦果を語らいつつ戦勝の一風呂浴びて、意気揚々と明日も又かくして帰らんと、西武線に乗る。

31日。第2回戦は午後1時からなので、午前中は宿で過すも手持無沙汰で仕様がない。だが心は打倒天王寺中で火と燃える。やや早目に昼飯を済ませて東伏見に向う。今日は事実上の優勝戦なので皆張り切って戦い前の練習をする。誰の顔にも打倒せずんばやまずの深い決意が漲っている。いでや今日こそ、火の一丸となって天中を倒し、もって先輩が常に叫び来し全国制覇の野望を実現しよう。

思い出しても嫌な程真赤なユニフォームを着たレフェリーが出て来る。試合始まるや、両軍必死に交戦し、共に得点がなかったが、彼に5点を先取されて前半を終る。

悲愴な決意をもって後半猛然奮起せし我等は、元気の出し所悪くして、ペナルティを取られ、かくして試合を進むる内、敵に21

点を許してしまった。かくなった以上は修猷健児の名にかけて、最後の5分間ででも、21点位返えすべしという信念に燃えて死闘す。そして敵たじろぐ隙に2ゴール確保。その差11点に縮む。ああしかしその時、タイムアップのホイッスルが死を宣告する如く強く鳴り響く。ああ無念！　もう少し早くこの調子が出ていれば大阪勢如きに破れはしなかったものを。溢るるものはただ涙のみである。神はついに我等に勝利を与え給わず。畢竟それは我等に努力が足らざりしゆえなるか。

かくて昨日の勝者たる我等は今日一敗を喫せし落人として足どり重く帰途につく。

2日。外苑競技場に、聖上陛下の親臨を仰ぐというので外苑に行く。絵画館横で何度も分列式の練習をなして万全を期し、3時各県毎に集合隊形に入る。すでに陛下は御臨場になっているので、往来は遮断され、選手団の分列式を待つのみとなった。あれ程雑踏した競技場附近も寂として静まりかえっている。スタンドには観衆が美しい位綺麗に並んでいる。やがて、先頭より行進に移り、いよいよわが福岡県の時が来た。一瞬筋肉がビクッと打ち顫える。堂々と大地を踏みしめてゆく若人の一群。涙を伴うような衝動に、我を忘れようとした時「頭右ッ」の号令。機械的に頭を右にむける。おおその時、正面スタンドの高所に陛下が畏くも我等の分列式を臨わす御雄姿が、ありありと我等の眼底にうつった。その御前で分列行進を行なうとは、誠にこれ一門の光栄ならで何んであろう。無我夢中で大前を過ぎて退場し、場外に居並ぶ観衆の中を通って一定の場所へ行き、陛下の還幸を御見送り申し上げて解散す。

3日には、赤坂の黒田邸を訪問して種々の美術品を見せて戴き、又四日には国会議事堂を詳細にわたって見学することが出来た。そして同日の20時20分、幾多の思い出を残して東京を離れたのである。

19　公式戦中止（昭和18年度）

18年に入るや、戦いはわが国に利あらず、ラグビーの公式戦も、5月春日原ラグビー場で挙行された近県中等学校7人制ラグビー大会をもって幕をとじた。

本館は、準決勝で福中と対戦す。

修猷　3（3－0　0－6）6　福中

この試合に優勝を逸したわが部は、飯田昌男部長、山部治邦監督、今井進コーチ、大塩勇主将のスタッフで、神宮大会、全国大会を夢みて練習に励んだが、日ごとに戦果は不利となり、純情なる若人の血はこの国家重大時に燃えさかり、陸海軍の飛行兵とし

て志願するに至った。わが部においても本城瑞穂を先頭に、10月、12月と多数の部員を送り出した。その結果部員数の不足に悩まされたが、「伝統の火は一日も消せず」と、残留部員達は将来をたのしみに、練習だけは続けた。

20　楕円の魅力（昭和19年度）

学校生活は軍需工場に移ってしまい、練習らしい練習は出来なかったが、工場における作業に部員は、ラグビー精神を発揮し、余暇を多くつくり出すことに務め、少人数ながら、丸くふくらんだボールを相手につぎだらけのユニフォームをつけ、基本動作の練習によろこびを見出していた。

21　部復活第1号（昭和20年度）

第二次大戦は、8月15日わが国の無条件降伏により終結をみた。戦時中軍需工場に動員された館友や、陸海軍に志願した憂国の志士達はそれぞれ無事な顔をそろえた。

9月中旬頃から、学校生活も正常にもどると同時に、ラグビー部の復活が、他の部を抜いて一番に行なわれた。

11月、戦後の第1回の試合が、福中OBの申入れにより、福中と九大工学部グラウンドで対戦する。

修猷 23—0 福中

〈メンバー〉

FW　西島、田中、久保、土井良、伊藤、野崎、大塚

H・B　渡辺、榊、宮原

T・B　吉田、森山、村本、西野

F・B　玉井

22　第1回国体に出場（昭和21年度）

野崎庫利、西島文利、田中豊FW勢の卒業生を送り出したが、入部者が相次ぎ33名の部員を擁していた。

5月19日、九大で挙行された7人制ラグビー大会には、福中に8—0で完敗したが、6月15、16の両日九大主催の大会では、見事セブンの雪辱をとげ優勝することが出来た。戦績は次の通りである。

1回戦　修猷　32（17—0、15—0）0　福岡商
2回戦　修猷　41（21—0、20—0）0　筑紫中
決勝戦　修猷　9（3—3、6—0）3　福岡中

〈メンバー〉

（修猷）

FW　平塚、久保、城島、土井良、伊藤、大塚、徳田
H・B　渡辺、榊、宮原
T・B　村本、森山、吉田、西野
F・B　松本

（福中）

藤、森、須藤、高橋、大鳥、土屋、池田、宮下
麻里、吉田
井川、宗、志波、加藤
石井

フクニチのスポーツ記者は、この戦いを次のように評している。

雨中戦に加えて両軍ノースパイクのため、各選手とも動きに大きな制約をうけ、しかも戦前に比して非常な技術の低下のため、往年のような華々しさは見られなかったが、流石に伝統を誇るだけあって準決勝に比して、気魄的に充実したものであった。修猷が7人のFWで、福中の8人に互角に戦ったことが勝因の一つに数えられた。福中陣にあってF・B石井の活躍は目覚しいものがあった。

東西対抗戦（第1回国体）

9月29日、九大グラウンドで福中と対戦し、延長の末12—0で勝利を得て九州代表となる。次に中国地区の覇者山口中学と10月に対戦（九大グラウンド）し、これに楽勝。西軍代表決定戦に、関西代表神戸二中と西宮で対戦する。

前半押しに押していたが、相手のパント攻撃にあい、6—0とリードされる。

後半、反撃にうつり、1トライし、タイムアップ寸前に中央にトライしたが、チャージされてゴールならず、かえって相手からすぐおしかえされて、しかもゴール成功し、6—5となり合計6—11にて敗れた。

修猷　6（0—6、6—5）11　神戸二中

〈メンバー〉

FW　平塚、久保、井上、土井良、伊藤、松本、徳田
H・B　渡辺、榊、宮原
T・B　三木、森山、村本、西野
F・B　玉井

牧瀬、岡崎、大塚、中田、武藤、杉
部長　江崎忠先生　監督　三隅哲夫先輩

全国大会予選

1回戦に福中と対戦したが、神戸二中戦の敗退にファイトなく、あっけなく敗れた。

23 星輝かず（昭和22年度）

第1回九州中等ラグビー大会（於九大工学部）

1回戦　不戦勝

2回戦　修猷 3（0—0 / 3—0）0　龍谷　9月14日

準決勝　修猷 31（6—0 / 25—0）0　東筑　9月20日　K・O 1時

決勝　修猷 0（0—19 / 0—16）35　福中　9月24日　K・O 1時

全国大会県予選

1回戦　修猷 9（3—15 / 6—8）23　明善

24 福岡国体に準優勝、全国大会代表の栄冠（昭和23年度）

顧みるに昭和23年度は、ラグビー部にとっては是が非でも奮起しなければならない年であった。一昨年の国民大会には、九州代表として大阪の地に出陣し、惜しくも神戸二中のために敗れ、その年多数の卒業生を送り出し、去年はやや不振の気味にあった。しかも九州ラグビー界の王座を南九州の熊工に持ち去られ、今年度こそは修猷館のためにも、否北九州のためにも、この地にその王座を奪いかえさんと、部内が俄然活気を呈し、幾多の大先輩の後援を受けて、伝統ある部に立ち返えった。

今や我々の目的は漫然たる勝利のみならず、新時代のスポーツマンとして恥ずかしからぬ態度と、全国制覇の宿望を遂げんことである。部員30名、春風駘蕩の春より、かの熱射の極夏に至る間、血を汗に変えての涙ぐましい猛練習を積み、9月のラグビーシーズンに突入した。

9月に入るや、第3回国体予選が始まり、極夏の練習を充分に発揮する時が来た。

1・回・戦　不戦勝

2回戦　対福岡高校（旧福中）（9月12日　於春日原）

修猷　12（9－0、3－0）0　福高

伝統ある両校の対戦は、東京の早慶戦にも劣らぬ因縁的な大試合だ。前日来の雨にて、グラウンドコンディション悪く、オープンゲームを得意とするわが部にとって、一時の憂いが持ち上ったが、戦いに入るや選手一同悪コンディションにかかわらず、猛然たる覇気を示して、試合を有利に進め、前半9対0、後半3対0、計12対0と楽勝した。

過去2年間、彼等に制せられたのであったが、今やその野望も遂げた。

3回戦　修猷　28－3　福商（9月19日　於春日原）

準決勝　修猷　13（3－9、10－3）12　明善（9月23日　於春日原）

新鋭明善との対戦も、福高との対戦時と同様グラウンド悪く、しかも前半9対3とリードされ、試合は不利となった。

しかるに、後半に入るや反撃は激烈化し、実力を発揮、熱戦の末ついに明善を破った。

県代表決定戦　対常盤高校（県北部代表）

修猷　18（10－3、8－0）3　常盤（9月26日　於春日原）

かくて我々は、県代表として、北九州地区及び九州地区代表決定戦へ駒を進めることになった。

〈部内状況〉

部長　佐久間先生　副部長　江崎先生

監督　平山先輩

正幹事　2の6　佐々倉　副幹事　2の4　中田

FW　高武(2)、藤村(2)、岡崎(2)、長(1)、川浪(2)、末次(2)、佐々倉(2)、松本(3)、麻田(1)

H・B　榊(3)、渡辺(3)

T・B　石橋(3)、淵本(2)、中田(2)、西野(3)、秋吉(1)、佐藤(2)

F・B　中上(1)

九州制覇の業は、我々の在学年間に成さずんば已まずの意気に燃える我々一同は、百道松原に霧立ちこめる黄昏頃まで、猛練習に猛練習を重ね、重い疲れた足を引きずって帰ったものだった。

ここに雌伏1年。不撓不屈のラグビー精神をもって、こつこつとやって来たその甲斐あってか、ついに最後の勝利の大旆は、燦としてわが頭上にひらめいた。

毎年毎年「あの春日原原頭に勝って呉れ、勝って呉れ」と後輩に泣きながら頼んで去った先輩へ、「必ず勝って見せます」といった誓いは、今ぞはたされたのだ。数多くの先輩の恨みの涙はここに拭い去られたのだ。

願わくば下級生諸君よ、我等去りて後は、今一層の団結と努力につとめ、再び優勝の道へ邁進し、長蛇を逸せし全国ラグビー大

会において、輝く月桂冠を勝ち得てくれ。

ラグビー部国体参加

・北九州代表決定戦

修猷館（福岡）23—22 佐賀高（佐賀・長崎）

この日、選手一同遠征の疲れに加えて、時間の繰り合わせの不徹底から思わぬ苦戦に陥ったが、接戦の末23対22で勝利を得た。

・九州代表決定戦（10月10日　於熊本）

修猷館（北九州）3（3—0 / 0—0）0 鹿児島四部（南九州）

九州代表決定戦とあって、士気益々旺盛。両軍押しつ押されつで、接戦を展開し、修猷やや優勢の中に試合を進め、鹿児島四部も良く修猷のバックの攻撃を防き、大熱戦をくりひろげたが、修猷ついに前半1トライを挙げ、これがこの試合を通じて唯一の得点となり、ついにわが修猷館は、来る10月29日から、地元の福岡において行われる第三回国民体育大会に、晴れの九州代表として参加することになった。

国体

〝若い力〟踏みしめる新粧のスタジアム。爽やかな風を巻いて起こる大行進の美しさ。歓喜溢れるとりどりのユニフォームに堂々の大行進を押し包んだ。ただ沸き起こる拍手の嵐。その名も新生日本のスポーツ殿堂にふさわしい平和台が、胸ふくらます壮美と感激に揺れて、全国から集う若人1万5千。平和台の空は若人の意気と熱にうずまる。スタンドを埋める大観衆6万——第3回国民体育大会の花、秋季大会は開かれた。

この歴史的なスポーツの祭典に、わが修猷ラグビー部は母校と郷土の栄誉を担って堂々と参加した。

・1回戦（10月30日　於平和台ラグビー場）

修猷館（九州）3（3—0 / 0—0）0 高崎高（関東）

	修猷	高崎
T	1	0
G	0	0
P・G	0	0
前半	3	0
後半	0	0
計	3	0
反則	7	6

前日の雨でグラウンドは悪く、最悪のコンディションであったが、選手一同元気一杯。劈頭修猷ピンチに追い込まれた。その後立ち直り、始終高崎の攻撃を退け、修猷得意のドリブル戦法で高崎を圧し、ついに前半23分高崎のゴール直下で、バックロー末次ドリブルにひっかけ、渡辺押えて1トライを挙げた。

両校のFW互角で、その後得点とならず。後半戦に入るや両軍俄然活気づき、大白熱戦を展開したが、両校とも得点チャンスなく、一進一退であったが、27分修猷のセンター淵本から中田にパス。これをキックしたが敵のゴール前で押えられ、ドロップアウトとされついに後半における修猷の唯一の得点となり得べきチャ

ンスも逸し、そのまま押し切ってついに3対0で関東代表の高崎高校を破り、明後日の秋田工高との決勝戦に駒を進めた。

決勝戦（11月1日、於平和台ラグビー場）

秋田工高（東北）35（9—0 / 26—0）0 修猷館（九州）

秋田	T	2	P・G	1	9
		1		1	
	G	0			26
		4			35
修猷	T	0	P・G	0	0
		0		0	0
	G	0			0
		0			0
				前半	後半	計

この日快晴であるが、依然としてグラウンドコンディションは悪く、オープンゲームを得意とする修猷にとっては、相手が去年全国制覇をしたところの秋田工高だけあって、難色が濃厚であったが、選手一同の士気益々旺盛。若い力の肉迫戦が、しばしば観衆の手に汗を握らせた。

即ち、1時、秋田の先蹴で試合は開始され、両校息づまる熱意は観衆の血を沸き返えらせたが、技術で行く修猷も秋田の強力な体力には勝ち難く、秋田のFWの馬力に押され気味であった。その上、頼みとするタックルがきまらず。しばしば抜かれて、大量得点を許したが、修猷たとえ敗れたりといえども力戦奮闘、前後半を通じて、幾度か敵陣に迫り込んだが、H・BとT・Bとの連絡の不調でついに得点を挙げ得なかった。

しかし全国制覇の野望が遂げられなかったにせよ〝修猷ラグビー今なお強し〟の名を全国津々浦々にまで轟かせたことは、真に意義深く且つまた、我々一同の喜びとするところである。

〈メンバー〉

	（修猷）	（秋田工高）
FW	高武、藤村、岡崎、長、川浪、末次、松本、佐々倉	保坂、高橋、大山、伊藤、高島、加賀谷、鈴木、原田
H・B	榊、渡辺	海浮、加賀谷
T・B	石橋、淵本、中田、西野	栗田、鈴木、天野、伊藤
F・B	中上	熊谷

毎日主催新制高校ラグビー大会

第3回国民体育大会で、全国制覇の野望を、秋田工高に持ち去られたラグビー部は、今度こそはと、選手一同一塊の玉となって、臥薪嘗胆、猛練習に猛練習を重ね、自重と実力を養成。来る24年の1月1日から行われる、毎日新聞社主催の第1回新制高校ラグビー大会に、又もやその実力を発揮し、晴れの九州代表として堂々参加する栄誉を勝ち得た。

1回戦　修猷 26（12—0 / 14—0）0 東筑高（於春日原）

2回戦　修猷 23（17—0 / 6—0）0 筑紫高（於春日原）

3回戦　修猷 27（18—0 / 9—0）0 西南高（於春日原）

・準決勝　修猷　6（3—0、3—0）0　明善高（於春日原）

全国2位の栄誉を得た修猷は、自信満々、明善の反撃を軽くおさえて、前半3点、後半3点と、着実に得点を重ね、計6対0で明善をシャットアウトした。

・決勝戦　修猷　9（6—0、3—3）3　嘉穂高（於春日原）

11月23日。優勝街道を進む修猷は、この日の決勝戦も、対明善戦の時と同様、嘉穂高の攻撃を許さず、前半6点、後半3点と着実に得点を重ね、計9点を挙げた。

これに対して嘉穂は、始終修猷から押され気味で、後半ラスト1分の時、辛くも1トライを挙げて零敗をまぬがれた。

ここにラグビー部は、福岡県代表として九州大会に臨むこととなった。

・九州代表決定戦

1回戦（11月27日　於平和台）

修猷館（福岡）8（8—5、0—0）5　佐賀高（佐賀・長崎）

・決定戦（11月28日　於平和台）

修猷館（福岡）6（3—0、3—3）3　熊本高（熊本・宮崎）

この日、熊工の先蹴で開始され、折からの小雨まじりの北風が吹く中を、両軍必死の大接戦を展開、再優勝の念に燃ゆる修猷は前後半、それぞれ3点を挙げ試合を有利に進めたが、熊工も後半ペナルティゴールを得て、その差3点と追って来たが、そのまま押し切って、再度九州代表として、全国大会に出場することとなった。

〈メンバー〉

	（修猷）	（熊工）
FW	高武、藤村、岡崎、長、川浪、松本、麻田、佐々倉	西田、辻村、道脇、木田、森広、堀、野口、吉村
H・B	榊、中田	鎌田、村上
T・B	石橋、淵本、渡辺、西野	末武、島本、大沢、堀井
F・B	中上	本宮

・全国大会（1月1日　於東京ラグビー場）

1回戦　秋田工（東北）12（6—3、6—0）3　修猷館（九州）

再度の九州代表として、全国大会に出場する栄誉を勝ち得たラグビー部は、1日として休むことなく、血と汗と涙と砂にまみれて、孜々として、撓まず猛練習を重ね、今度こそは全国制覇を実現しようと決心し、大会までの約1ヵ月を、百道原頭で送った。

奇しくも第1回戦において、第3回国体で、優勝を争った秋田工高と対戦することになり、選手も相手にとって不足なしと、闘志満々、小雪ちらつく元旦、東京ラグビー場において行われた。

前半修猷国体の恨みをはらさんと、押して押して押しまくり、トライ寸前までつめ寄ること数度。だがその度に、ドロップアウトとされ得点に至らず。秋田が前半20分、1トライを挙げれば、修猷これ又、反撃ものすごく、23分に1トライを挙げ、3対3の大白熱戦を展開。その後両校得点を挙げ得ず。あわやこのまま後半戦に入るかに見えたが、秋田は前半終了の寸前、1トライを挙げた。

後半に入るや、修猷又もやトライ寸前までつめ寄ること数度。だが得点にはならず。これに反して秋田は、チャンスを生かし、2トライ挙げる。実力伯仲。修猷やや優勢に見えたが、不運なる日か。数度のチャンスも生かし得ず、ついに秋田工に敗れた。

25　第4回国体に全国制覇の偉業達成

（昭和24年度）

国体九州大会

・準決勝（10月8日　於平和台）

修猷 13（0－0 / 13－0）0 甲南（鹿児島代表）

・決勝（10月9日　於平和台）

修猷 17（5－0 / 12－0）0 佐賀（佐賀県代表）

国体東京大会出場権獲得す。

〝勝利の記録〟

前マネージャー　大中啓司

今春よりここに10有余ヵ月。

汗にまみれ、黙々として練習に精進した甲斐あって、明日いよいよ晴れの鹿島立ちをなす。全国各地より強豪集える秋の武蔵野において心行くまで戦わんかな！

宿敵秋田工を始め、名門、古豪、新鋭相揃いてわが行手を遮るとも、ただ勝つのみ！

――昭和24年10月26日夜――

第4回国民体育大会高校ラグビー

（10月31日～11月3日　於東京ラグビー場）

・第1戦（準々決勝）　対川島高校（四国代表徳島県）（10月30日）

修猷 33（14－3 / 19－0）3 川島高（レフェリー　伊藤）

さすがに、強豪名門の脇町高を撃破して出場しただけあって、若いチームだがまとまりがよかった。しかし何条、必勝の意気燃ゆるわが修猷の前に敵し得ようか、まず幸先の良いスタートを切

る。

・第2戦・（準決勝）　対秋田工高（東北代表秋田県）（11月1日）

修猷　25（11－3、14－3）6　秋田工（レフェリー　庄野）

修猷	TGP	0 1 2	前半	11	
秋田	TGP	1 0 0		3	
修猷	TGP	3 1 0	後半	14	
秋田	TGP	1 0 0		3	
修猷			計	25	反 5
秋田				6	反 7

今日の相手秋田は、いうまでもなく斯界の名門であり、我々の待ちに待った夢寐だに忘れ得ぬ宿敵であった。

二連敗の汚名を返上せんものと、涼風吹き、秋晴れの武蔵野に凄烈な復讐戦を展開す。技術よりも、体力よりも、ただファイトのみで戦ったが、小粒ながら、わが修猷の言語に絶した闘志と、強固なるチームワークとは、この強敵を見事粉砕し、幾多先輩の恨みをそそぎ、郷土の館友諸父兄各位の応援に対し、心からの贈物としたのである。

優・勝・戦　対村野工業（近畿代表兵庫県）（11月3日）

修猷　9（3－6、6－0）6　村野工（レフェリー　大西）

修猷	TGP	1 0 0	前半	3	
村野	TGP	1 0 1		6	
修猷	TGP	1 0 1	後半	6	
村野	TGP	0 0 0		0	
修猷			計	9	反 9
村野				6	反 6

昭和24年11月3日、あたかも文化の佳き日、午後3時5分、ついにノーサイドのホイッスルは、郷土九州より遙か彼方、ここ武蔵野の一角青山グラウンドで熱戦を繰り広げる両校フィフティーンの頭上に鳴り響いたのである。

ああついに全国制覇成就！　感無量――。

全員奮闘の跡を物語るユニフォームで整列するうちに、栄えのペナントは今、キャプテン佐々倉に渡される。感激の一瞬！　続いて起こる万雷の拍手！

見よ。幾多先輩が夢果し得なかった宿望今や成る……。わが修猷ラグビー史上を飾るべき歴史的瞬間は、我々昭和24年部員の生涯最大の印象となるべき一瞬は、そしてこれから将来のわが部員に、つねに希望を与え励まして行くであろう一刻は、刻々と過ぎ去って行く。

ああ快なる哉！　勝利！

〈メンバー〉

FW　高武(3)、藤村(3)、麻田(2)、長(2)、田中(3)、末次(3)、石橋(1)

H・B　佐々倉(3)、中上(2)、中田(3)

T・B　佐藤(3)、淵本(3)、秋吉(2)、山崎(3)

F・B　藤井(1)

補　藤田(2)、水野(1)、藤島(1)

部顧問　古沢慶造　監督　今井先輩

主将　佐々倉　マネージャー　大中

愛する母校を去るに当りて

——好敵手対秋田工高戦の教えるもの——

佐々倉千秋

〝打倒福中〟この合言葉のもとに過去幾星霜。辛酸をなめて百道原頭に、血の滲むような精進を続けて来たわが修猷ラグビー部は、終戦以来いち早く部を再興し上級生諸君の熱意と努力により、宿望の全国制覇を狙って中原に駒を進める強チームとなったのである。しかしながら一昨年の、第3回国体においての最初のチャンスは、秋田工高のために空しく秋風の平和台に吹き消され、〝修猷惨敗す〟との酷評を受け、さらに引き続き昨年元旦の第2回高校大会に全九州代表として出場。これが第二のチャンスであったが、その第1回戦に奇しくも秋田工と対戦。復讐を誓った雨中の熱戦もついに、武運拙く惜敗。夢に見た栄冠は遠く東北の地に持ち去られ、寒風肌を刺す冬の武蔵野に再度涙をのんだのである。

この2大会に我々は当時2年生として出場したのであったが、この2連敗以来、わが修猷ラグビー部の目標たる全国制覇完遂のために、秋田工の存在は、一大難関となったのである。されば昨年春、自分が新主将として就任した当時から、〝秋田をやってくれ〟と後事を託して巣立って行った上級生諸君との誓いを果すべく、又〝秋田撃破なくして勝利なし〟という全員の自覚とは期せずして、〝打倒秋田〟という言葉を部員の新しい合言葉として生んだのである。この秋田工とはいうまでもなく、古い中等ラグビー時代からの名門であって、つねに北の強豪としての存在を全国に誇っていたのであるが、戦後は殊に充実したメンバーを擁し、高橋、高島、佐藤、原田、加賀谷、伊藤、鈴木、栗田を配したバックスの走力と攻撃力とは、超高校級のものであった。

さて、この宿敵を凌駕するために自分はまず、全部員の強固なるチームワークが必要だということを再認識したのである。即ち彼と我との体力の差は、如何ともし難いのであるから、この体力に勝り、技術にすぐれ、よくまとまった、しかも充分なファイトをもつ相手に対しては、猛練習による技術の上達も大切であるが、技術の習得をなすに必要な条件が敵のファイトの上を行く物凄いファイトであり、これなくしては彼に勝つことは望めないと考え、そのファイト発揮の根元が全員の一致協力した寸分の隙もない団結以外の何物でもないと痛感したからである。かくして23年度シーズンが終るや、もっぱらこの線に沿った練習を開始したのである。以来連日、身の切れるような寒風の日も、人心花に浮かれたる陽春の日も、はたまた炎熱焼くが如き酷暑の日も、毎日毎日暮色の迫るまでただひたすらに練習を重ね、練習の前にはすべてを犠牲として当り、ある時は早く帰宅する友人達を羨ましく見送ったことも幾度か！　ともすると緩まんとする心に鞭打って団結！　と一路目標に突進したのである。特に盛夏の合宿におけ

る下級生部員のがんばりは全く凄いものがあった。この数ヵ月こそ言語に尽せぬ努力の連続であった。このように不撓不屈のラグビースピリットをもって、こつこつやって来た甲斐あって、シーズンに入ると地元の宿敵福高との伝統の一戦に勝ちを占めたのを始め、ラグビー王国九州の諸強豪を退けて、昨秋10月30日より東京において開催された第4回国民体育大会に、2年連続九州代表として参加する栄誉を勝ち得たのである。

かくして待ちに待った彼の秋田と決戦を交えるべき、第4回国体ラグビーは10月30日新装なった東京ラグビー場にて、秋田工対保善高（東京関東代表）との一戦によって華々しく開幕されたのである。第1戦に秋田は昨年より5名程、メンバーに移動があったようではあったが、矢張り優勝候補の貫禄充分に、保善を一蹴し去った。続いてわが修猷も緒戦に、四国の川島高校を得意のバックスを縦横に馳せて、33対3と一方的に快勝し、幸先よいスタートを切ったのであるが、問題の一戦を2日後に控えてのことと て、勝利の昂奮に酔いしれることなく、直ちに宿舎にかえり、試合道具の点検や、負傷の手当に時を過し、さらに外出をも制限し、食物にも気をつけ、ひたすら鋭気を養うのに努める一方、部屋の一隅では古沢部長、今井監督を中心に、3年の幹部が集って慎重なる作戦会議が開かれたのである。

そして、いよいよ試合前夜は全員早くから寝についたのであるが、さすがに昂奮してなかなか寝られなかった。明くれば11月1日。早朝に起床。例の如く部屋を整頓し、掃除をすませ、各自それぞれのコンディションを考慮して朝食を摂り、早目に宿舎を出た。神田駿河台から都電で、青山に着くまで車中では、思いなしか私語する者も少なく、どの顔をみても心おきなく今日の一戦を戦い抜く積りか、澄み切った表情であったので大いに安心した。

球場に第一番に到着した我々は早速ユニフォームに着かえて、グラウンドに降り立った。ブルーアンドホワイトのこの修猷伝統のユニフォームをつけた皆の顔を一つ一つ見る度に、眉宇に必勝の意気がまざまざと読まれる。幾多の先輩の顔が浮かんでは消え、消えては浮かんで来る。

嵐の前の静けさというのか。心静かに秋田の出場を待つ。待つこと十有余分位であったろうか。青山時計台サイドの入場口から整然とグランドに出て来た一団。正しく「秋田」である。夢にさえ見た顔が2つ3つ、濃紺と白のダンダラのユニフォームは歴戦の跡を物語って薄汚れてはいるが、さすがに名門。一分の隙もなく堂々たる態度である。

ついに決戦の時は来た。雌伏1年。先輩の恨みをそそぐべきチャンスはついに来たのである！　グラウンドの一隅で古沢部長、今井監督、マネージャーを交えて全員18人最後のサークルを組む。何もいうことはない。ただファイトのみ。かくして正13時、レフェリー庄野氏のホイッスルは秋空に鳴り響き、宿命の一戦の開始を告げたのである。……

かくして再びノーサイドを告げる勝利ホイッスルが響くまでの熱戦1時間の跡を、レコーダーとして親しく観戦した、マネージャー大中の「国体記録」の中より、抜すいしてみよう。

「今日の相手秋田は云うまでもなく斯界の名門であり、我々の待って待ち望んでおった夢寐だに忘れ得ぬ宿敵であった。2度連敗の汚名を返上せんものと、涼風吹き、秋晴の武蔵野に凄烈な復讐戦を展開す。技術よりも、体力よりもただファイトのみで戦う。

相手の実力はすでに知り過ぎる位承知の上、3回目の対戦でもあるので全員就中、3年生のファイトは全く物凄いものあり。彼等は自分達の在学中に必ずこの宿敵を降さんものと、全力をこの一戦に傾注したり。試合開始前、精神的面ではすでに相手を圧していたのであるが、一般の予想は問題なしに秋田工の優勢を告げ、せいぜい15対0位が精一杯のところであろうという、具体的予想を下したものもあり。

キックオフされるや、第一発目のスクラムでFWは勝てるという自信を抱いたらしく、小粒ではあってが、わが修猷の闘志は秋田を圧し、前半二つの幸運なペナルティゴールの成功も彼の焦りを誘ったものの、味方は決して気をゆるめず。このペナルティゴールの成功以来、FWは秋田のウェイトある強力なFWに対し五分五分に試合を進め、これに応えたわがバックスの好走と、ファイトの権化と化した如き果敢なるタックルは、敵に乗ずる隙を与えず、1トライを許したのみで、前半11対3とリードす。

後半に入るや、ますます元気一杯に戦いを続け、FWは六分四分で修猷節勝てりと見た向もあり。バックスもいよいよ張り切り、左右のW・T・B佐藤、山崎共それぞれ眼と足に負傷をおっていたもののよくトライを重ね、S・H中上とS・O中田のコンビ非常によく、後半球をバックに展開し、得意の〃ゆさぶり戦法〃で着々得点を重ね、後半14対3、計25対6というスコアーでこの宿怨にからむ北の強豪を下せり。」(原文のまま)

かく我々はこの一戦を心おきなく実力を十二分に発揮して戦い抜いたのである。思えば晴れの鹿島立ちの時、館長先生より、勝負に拘泥せず泣かざる試合を。という意味の激励の辞を戴いておったが、さすがにこみあげて来る嬉し涙を如何ともし難く、しばしばグラウンドの一端において勝利の感激に浸ったのである。ああ我ついに勝ちたり。

かくしてこの日の感激は、翌々3日の全国制覇の瞬間のそれと共に、我々の一生涯忘却し得ぬ思い出となったのである。さらに今一つの印象、即ち「破れたりとはいえ、秋田工の態度は矢張り好敵手と呼ぶにふさわしく、スポーツマンらしいそれであった」と共に……。

今、愛するラグビー部を去り、懐しい〃修猷生活〃との訣別を1ヵ月の後に控えた我々3年部員10名は、この度の勝利が一に、先輩並びに館友諸君の御厚情の賜物であることを深謝すると共に、あの時のあの感激を思い出多き修猷生活の、最良の思い出と

して母校を巣立って行くのであるが、同時に、勝利を生んだ原因について思いを至す時、「男子志を立てて断じて実行すれば難事なし」という大きな自信が湧き、これから先の人生への大きな希望となるものである。

最後に下級生諸君、君達はあの烈しい猛練習中、黙々として我我のためによく献身してくれた。ここに有難く感謝する。全国制覇という偉業の中で、君達の隠れたる努力の占める部分は大きい。我々が上級生として、君達に残して行く最後の言葉は、ただチームワークと、それより生ずるファイトのみ。この2点が共に密接な関係にあることは、すでにこの1年間に自ら体験して熟知したところであろうが、我々を送り出し、新しく君達が今後の修猷ラグビーをになうこの時に当って、改めてこの関係の再確認を要請する。「修猷ラグビーにファイトなくして勝利なし」である。一度決心して、始めたラグビーならば、必ずやり通せ。途中で挫折するならやらぬ方がましだ。またラグビーは偉大なる綜合芸術である。

ラグビー部は他の運動部と同様、スポーツを通して人格の養成向上を計る機関である。伝統ある名門修猷ラグビーに育まれつつある幸福を思え。そして今後とも若い情熱を、ラグビーを通して母校の発展のために捧げ、かつ今度の栄誉を、再び愛する母校の上に燦然ともたらしてくれることを期待して筆を擱く。

全国大会予選

準決勝（11月27日　於春日原）

修猷　6（3－3、3－6）9　東筑高

26　球友魚住君逝く（昭和25年度）

前年度、全国制覇の偉業を成しとげた諸先輩の後を引き受けた我々にとって、もう半年時間を許されていたならばと口惜しく思った。

国体県予選

1 田尾
2 田田
3 田部
4 藤原
5 外
6 麻
7 藤田
8 小長
9 宮
10 野
11 水
12 中
13 藤
14 藤
15 秋原
吉田

福岡地区予選では各高校チームを軽く撃破、県予選に出場、準決勝で小倉高校と当った。

かねてよりこの年の小倉は強敵であると聞いてはいたが、修猷男児の気概から実感がともなわず、試合経過をたどって始めてその強さを見せつけられた。修猷のFWは最初のスクラムで一発突

き上げてやろうと申し合わせ、ガンと当った。ところが結果はこちらが浮き上ってしまった。バックスは小倉の早いパスワークと九州一の俊足ウィング星加に走られ、引っ張り回される。修猷、福高の他にこんなチームがいたとは想像もしていなかった。

結果は、

修猷館 6—12 小倉高

と大敗を喫し無念の涙をのんだ。

小倉高校は事実上の決勝戦たる修猷を破り、国体に出場権を獲得した。

昨年優勝の修猷に向って小倉は必死に当って来たこの気力の差が勝因を作った。

全国大会県予選

長 尾
田 田
部 部
原 原
川 川
橋 橋
野 野
田 上
中 中
島 島
吉 吉
原 井
外 麻 藤 小 宮 中 石 水 吉 野 藤 秋 藤
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

地区予選を勝ち抜き嘉穂高校と当った。

折りからの雨の中で平和台特有の泥ねい戦を展開、ボールは粘土のような泥にまみれ、石のように大きく重く、FWの早いヒーラウトとバックスの軽快な動きをさまたげられた修猷にとっては最悪のコンディションだった。

修猷館 3（3—3 / 0—3）6 嘉穂高

「1トライずつあげて後半に入った。両軍はFW戦を展開。嘉穂は後半ルーズを破って左隅にトライを挙げ試合を決した。修猷は後半嘉穂のゴールに再三再四迫りながら、バックスのハンドリング悪く自滅す。」（『西日本新聞』概評）

朝日招待ラグビー前座試合

長 尾
田 田
部 部
原 原
川 川
橋 橋
野 野
上 上
中 中
島 島
吉 吉
原 井
外 麻 藤 小 宮 中 石 水 中 野 藤 秋 藤
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

対福高戦においては今でも我々の方が強かったと確信しております。FWはルーズで5分以上、タイトでは味方ボールは勿論敵ボールも半分は取った。敵スクラムは修猷フロントローに圧倒されてガタガタであった。何故負けたのか？　勝っていれば徹底的に圧倒するチームの団結力が不足していたのか。

11—9とリードしていたが、ノーサイド直前敵将松重にタッチのこぼれ球を引っかけられ、ドリブルで右隅にそのままトライ、逆転された。レフェリーは試合後わざわざ我々のところへ来られ、試合時間の5分超過を認められ、すまんやったとことわりを言われたが……。

ボールがタッチに出て我々の耳に観衆のざわめきとノーサイドの声が聞こえ、それを意識した時、我々は負けたのである。

修猷館 11（8－6 / 3－6）12 福岡高

凄烈な夏期合宿での魚住君の不幸、レギュラーの故障または立ちはだかる強敵にたたかれ、血と汗と砂にまみれながら過ごして来たこの年月。やっとこれが自分等のラグビーだと自覚し自信を持った時は早や学園を去らねばならなかった。我々卒業生6人は無量の思いを残しグラウンドを去ったが、我々の記録は後を引き継いだ後輩によって立派に返上されていると思う。

ラガー魚住君逝く

昨年の夏、修猷スポーツ史上に、そして我々の胸に深くやきつけられたところの事件が起こった。即ち、魚住功君のラグビー試合中の不慮の死である。

故魚住功君

彼は夏期合宿も終りに近い8月9日、西南学院との試合中、晴れの桧舞台を夢見ながら、そして修猷ラグビーに力強い勇気を与えながら、ボールを抱いたまま青空の花と散ったのである。

古い伝統と誇りを有するラグビー部は、去年も、一昨年に続いて2年全国征覇の偉業を為さんがため、炎熱下のもと、ネバリとファイトを養成する合宿を行なった。

彼はこの日に備えて、1学期の終り頃になると、貯金箱を作って10円、20円と、合宿費をつみ立てて来た。そして勿論彼も、合宿にある大きな希望を抱いて望んだことであろう。

この時の合宿の暑さが特に激しかったためか、全員非常に不調であった。彼も、4日目頃より発熱のため悪コンディションとなったが、合宿の最後を飾りたいという気持ちから、自然この試合に気持ちが集中した。

この日の彼は、非常に元気で、昼飯の時も冗談をいって皆を笑わせ、ドンブリの飯をうまそうにかき込んだそうである。そして先輩の激励に勇気百倍、左のウィングとして出場した。

この日の試合の模様を、魚住君のペアーとして活躍した藤井君は、次のように語っている。

「前半を終り後半の中途、浜側に向けて攻撃する修猷は、敵の25ヤードラインに喰い込み、左から右へボールを回しルーズを組み、敵に出てラインを右から左へ渡るボールを追って一斉にデフェンスに出た。ボールは西南の右ウィングに渡り、ピンチを切り抜けようと、パントを試みた時だったと思う。普通なら、右から左に追い、タックルするところを彼は、真正面から頭をあててタ

ックルをした。」

彼は逆タックルを行なったのである。彼は起き上ってポイントに帰ったが、その後西南ウィングがノーマークとなってトライされた時、始めて彼が倒れているのに気がついた。部員がすぐにかけつけたが、彼は「ウーン」とうなっただけで胸を猛烈にかきむしっていた。先程のタックルで頭を強打したためである。ユニフォームを脱がせ、水で頭を冷したが、意識は全く回復しなかった。直ぐに西新病院にかつぎこまれて、彼の頭が枕についた時「ウーン」と一言口をきいた。これが彼の最後の言葉であった。部員、先輩の人工呼吸も甲斐なく倒れてから6時間、昭和25年8月9日12時23分。彼の最後の脈は打ち終った。茫然と彼の寝台の周りに立ちすくんだ皆の目には、病室の灯に冷く光るものがあった。

思えば彼は、不言実行、腹の中の人の一言につきる。彼の性格は真のスポーツマンとして、未完成であったが惜しむべき人物であった。いつでも「誠」の心を持って自分の行動をとった。技術を通しての精神の修養。これが如何なる運動であろうとも、スポーツマンの最高の目的である。

——生命と技術と性格——魚住君が無言にして我々に与えてくれたものは偉大なものがある。今じっと思いをはせると、彼の新しいユニフォームを着たなきがらと、青空殉球善士という戒名がはっきりと頭によみがえってくる。

静かに横たわったロー人形のような彼は、一段と立派なラガーであった。部員、先輩、先生、すべて頬に涙を伝えながら、動かざるラガーの前に手を合わせ目を伏せ、昨日までの教え子、そして今日までの友に別れを惜しんだのである。

うるんだ重々しい声で奏でられる館歌に送られて、彼を乗せた自動車は、西新病院から自宅へ、暗闇の中を静かに消えて行った。

我々は、魚住君の死を決して無意味なものとせぬよう、勉強に、運動に励んで行かねばならない。これが昇天した魚住君の魂を慰める唯一の手段である。

魚住君よ、いつまでもいつまでも、楕円のボールと共に安らかに眠れ。（筆記）

27　九州の覇者も秋田工の壁破れず

（昭和26年度）

国体戦

第6回国体のラグビー福岡県予選並びに九州予選は、6月2日より、毎土、日曜に行なわれたが、修猷は県予選に宿敵福岡高を14—0と破って九州大会に出場。全試合を通じ、竜谷高に3点を奪われただけで相手校を、いずれも0敗で大きく離して勝ち抜き、九州代表として来たる広島の国体に出場決定。

県予選

1回戦　修猷　57（35—0　22—0）0　筑紫丘

2回戦　修猷　67（26—0　41—0）0　糸島高

3回戦　修猷　28（14—0　14—0）0　明善高

準決勝　修猷　21（11—0　10—0）0　香椎高（於久医大）

決勝戦　修猷　14（6—0　8—0）0　福岡高（於春日原）

福岡県大会決勝戦は9月30日快晴の春日原ラグビー場において福高と対戦する。

午後2時修猷のキックオフで試合は開始された。初め両軍ともキックの応戦だったが、前半3分敵陣25ヤードまで押した修猷は、S・O吉田が福高FWを抜いてトライ、先制点をあげる。13分、押した修猷再び5ヤード附近スクラムからボールをバックスにまわして吉田トライ、ゴールなって、8—0。

後半10分、修猷FW中川がトライ。修猷は福高の反撃を、要所要所をしめて、キックでかえし、15分T・B原中央にまわりこんでトライ、そのまま押し切る。6—0。計、14—0で修猷の勝利に終る。

福高FWの速い出足につぶされて、ボールがバックへまわらなかったことが苦戦を招いたが、修猷の勝因は、チャンスをものにしたことと、チーム・ワークである。吉田、三苫は体の悪コンディションをおして出場、その健闘は大いに賞されよう。また、石橋主将、藤井の好リードはチームの勝利を一層確実にした。

溝口博先輩並びに、古沢慶造顧問教諭は、次のように戦評を語られ、我々に注意して下さる。

溝口先輩談——今日の試合は技術的には修猷の勝だが、修猷は圧倒されている。修猷には貫き抜く力、圧倒する力が欠けている。東北の秋田工や大阪の天王寺高などと対等に試合するには、もう一息の練習が必要だ。

古沢先生談——今後の努力で、全国制覇も出来る。中央大会ではこんな試合は出来ない。全員一致で、がんばろう。

〈メンバー〉

FW　藤田、内藤、大野、三苫、田村、宮原、中川、石橋

H・B　水野、吉田

T・B　梅津、藤島、原、野中

F・B　藤井

国体九州予選

1回戦（10月6日　於春日原）

修猷　19（3—0　16—3）3　竜谷高（佐賀代表）

決勝戦（10月7日　於春日原）

修猷 15（5－0、10－0）0 出水高（鹿児島代表）

〈メンバー〉

FW　藤田、内藤、大野、三苫、橋詰、宮原、中川、石橋

H・B　水野、吉田

T・B　梅津、藤島、原、野中

F・B　藤井

全国大会県大会（於春日原）

1回戦　修猷 15（6－0、9－0）0 嘉穂（11月24日）

2回戦　修猷 8（5－0、3－5）5 福高（11月25日）

伝統の修猷対福高の一戦は、福高が全校生徒の応援をくり出して、もの凄い闘志で戦ったが、前半修猷は、バックスの活躍から1ゴールをあげて試合をリード、後半福高はFWのドリブルで1ゴールをかえして、同点とし、試合はいよいよ白熱化したが、修猷後半なかば、ゴール前であげたハイ・パントをおさえて決勝のトライをあげた。その後、福高は再三チャンスを迎えたが、修猷F・B下藤井の好技に阻まれて恨みをのんだ。

決勝戦　修猷 17（11－0、6－3）3 小倉（12月2日）

〈メンバー〉

（修猷）	（小倉）
FW　藤田、内藤、光安、三苫、橋詰、宮原、中川、石橋	新藤、川村、松口、河野、末広、松岡、延吉、和田
H・B　水野、吉田	鎧谷、西村
T・B　梅津、藤島、原、野中	滝山、千原、都甲、渡辺
F・B　藤井	大石

これで全国大会県代表として、出場が決定した。

九州大会（於鹿児島）

準決勝　修猷 13（8－0、5－0）0 熊工（12月8日）

修猷は試合なれしたバックスの鋭いパスと走力で前半9分、右ウィング野中が中央にトライ、ゴール成る。13分には、F・B藤井がT・Bラインに入って左隅にトライするなど、優勢裡に試合を進めた。特に修猷F・B藤井の、カンのよい巧技が光っていた。

決勝戦　修猷 30（5－3、25－0）3 甲南（12月9日）

前半、甲南FWががっちり低く組んで、修猷バックラインの乱れに乗じて、互格に戦いを進めたが、修猷バックロー石橋の早い出足につぶされ、球があまりまわりきれなかった。20分甲南ゴール前、修猷得意のゆさぶりののち、H・B水野がルーズの球を拾

って先取点をあげたが、23分甲南喰い下って、修猷T・Bのあげたパントを、右ウィング川上が拾い、かろうじてトライを返した。

後半は、修猷の一方的な試合に終った。

〈メンバー〉

	(修猷)	(甲南)
FW	藤田、内藤、光安、三苫、橋詰、宮原、中川、石橋	柿内、福永、木上、島雄、丸山、入船、下山、児島
H・B	水野、吉田	浜上、氷吉
T・B	梅津、原、藤井、野中	川上、坂口、土橋、長江
F・B	藤島	是松

大毎主催全国大会（昭和27年1月）

1回戦　修猷館 42—5 天理高（東近畿代表）

2回戦　修猷館 18—3 高松高（青函代表）

3回戦　修猷館 0—12 秋田工（東北代表）

対秋田工高戦（準決勝）

広島の国体で秋田工に1ペナルティゴール（3—0）で惜敗し、全国大会こそはと、宿敵秋工を破り、雪辱しようと猛練習したにもかかわらず、試合開始8分、わが軍反則し、敵将吉川のゴールなり、3—0とリードされ、前半は押しつ押されつのゲームで終り、後半FW戦によるラインアウトよりのFWパスで、次々と2トライを許し、12—0と敗れ去った。

〈メンバー〉

	(修猷)	(秋田)
FW	藤田、内藤、大野、三苫、橋詰、宮原、中川、石橋	小玉（勉）、荒川、小林、吉川、松崎、橋本、斎藤、長坂
H・B	水野、吉田	福田、小玉（七）
T・B	梅津、藤島、原、野中	佐藤（欽）、伊藤（与）、早福、出雲
F・B	藤井	佐藤

28　新しい伝統のために（昭和27年度）

前年度、国体準優勝、全国大会第3位という戦績に輝いたわが部も、主力12名は卒業し、総勢15名に満たず、前途甚だ暗澹たるままに新しい年度を迎えることとなった。それは、中学修猷館から修猷館高等学校に完全に変身するひとつの象徴的事象であったのかも知れない。即ち、この年から、わが部員は総て新制中学卒業生によって構成されるのである。しかしながら、極めて悲観視されたこの状態は、必然的に新しい時代への雄々しい息吹きを包

蔵するものであった。

我々は、殆ど纏った練習をすることなく、3月の新人戦に臨まねばならなかった。人員不足のため、他の運動部員を借り、退部者の協力を求めて、何とか頭数だけ揃えて出場した。果せるかな、福岡工業、香椎高校に敗れ、漸く第三戦にして筑紫丘高校を降し、西南高校の棄権によって、辛うじて五分の成績に漕ぎつける有様であった。

4月に入ると同時に、我々は部員の獲得に奔走した。そして、事態はやや好転の兆を見せ始めるのである。すでに中学時代にラグビーを修得していた附属中学を始め、多数の新入生が入部し、さらに、休学中の大野の復学もあって、試合や、連日の練習に、人的不便を感ずることだけはなくなった。

しかし、その実力は前年度に比すべくもなく、就中、レギュラー中5人の1年生の存在は、攻撃にも防禦にも断点となったが、我々の希望するところは、飽くまで、先人の偉業を継承し、修猷ラグビーの年輪に輝かしい一輪を附加せむとするにあった。尠くとも、福岡県を制覇し、仇敵秋田に一矢を報いるべく、佐々倉、中田両先輩の叱咤のもと、苦しい練習に励んだのである。夏の初めには、佐賀商を30—0で破ることが出来たが、この試合とても、10トライを挙げながら、1本のゴールも決まらず、未だ多くの問題を示唆するものであった。

いよいよ、名にし負う夏合宿。弱体チームを案じてか、先輩の顔も例年より多く、さらに、早大監督大西氏の率いる多数の早大学生の指導を受けた。酷熱の10日間、鍛えに鍛え抜かれて、我々もかなりの自信が芽生えるのを覚えたのであった。

迎えて国体予選。だが、我々の練磨も希望も自信も、誠に儚ないものであった。1回戦に糸島高を破ったが、2回戦に福岡商業と相対し、2トライを許し、6—0で思いがけない敗退を余儀なくされた。

修猷 0（0—0 / 0—6）6 福商

詰下苫江内部野藤田島塚田島津富
多
橋山三波堀森大内柴平大岩来梅福
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

この時から、さらに、茨の道が始まる。

「合宿のやり直しだ！」。先輩の叱責のもと、夏合宿を上回る練習が展開された。3時半に始める練習は、他の部の練習が終る頃に熾烈の度を増しつつ最高潮に達し、夜空に瞬く星を仰いで見えぬボールを追うは、ただ、全神経の集中である勘の作用に外ならなかった。10時過ぎ、わが家の食卓に坐るまでに、重いバッグを降して憩う場所が毎晩定っていた。

この期間に、我々は飛躍的に成長することが出来た。連日の如く練習試合をして貰った西南大学にも、時折は勝てるようになった。

小粒ながら懸命のプレイをする山下。彼を両端からしっかりと支えて、タイト・ルーズの突っ込みに敵を圧する三苫、橋詰のフロントロー。ロックは、我武者羅な斎藤か、軽量だが巧味のある波多江を左に、右の堀内は、ラインアウトをオープンへの展開に活躍した。バックローは、真中が型破りの暴れん坊大野。左がドリブルに巧味を持つ森部。右が強引なプレイの主将内藤。

ハーフ柴田の動きも軽妙になり、これに配する平島の球捌きは益々冴えて来た。

岩田、来島の突進型センターにも磨きがかかり、加えて、来島は梅津と良くコンビが取れて来た。右ウィング梅津は、鋭敏な走法を見せて切札であり、左の大塚は、着実な動きで、殊にディフェンスは磐石の堅さがあった。

フルバック福富の堅実な守備も、チーム躍進に地味に貢献するものであった。

かくて、ついに、最後の秋は来た。全国大会福岡県予選は、わがチームが捲土重来を期すべき、残された唯一つの機会であった。糸島高、福岡工業と大勝を重ねて、士気はいやが上にも高まって行く。福岡商業戦も、前半の劣勢を覆し、終了間際11－9と逆転し、いよいよ準決勝。事実上の決勝戦と目された福高との戦いを迎えたのである。

11月16日。春日原の空は鮮やかに澄み渡っていた。両校応援団の声援は、丈高き秋草を打ち震わせ、緊々と迫る重責を覚えつつ、期待と興奮とを四肢に漲らせて、我々は開戦の笛を待った。戦前の下馬評は、七分三分以上福岡有利という。なるほど国体優勝を遂げた敵は、バックロー、ハーフ団に前年度そのままの陣容を誇る上に、殆どを上級生が占め、加うるに、わが軍には、入社試験のため試合直前に駆けつけた三苫、さらに、負傷の福富に代えて、初出場の久保を置くという不運があった。しかし、わが軍には、予想を見返えして、修猷ラグビーの真価を世に問わむとする、不屈の闘志があった。百年兵を鍛えしは、正にこの一戦のためである。

「今シーズンの総決算」。これが、合言葉であった。

見よ、わが軍は、開始と同時に、果敢に敵陣に突っ込んだ。ポスト正面に反則を誘って、まず3点をリードした。1トライを返えされた同点後、再び、FWラッシュから森部が跳び込んだ。1PGを許したものの、世評に反し、8対6の優勢のうちに前半を終えた。

後半に入るや、福高の健闘目覚しく、わが軍は、殆どゴール前に釘づけされ、キャリーバックの繰返しとなった。その間、20分の経過時間を知る由もなかった我々にとって、それは、物凄く長かったようでもあり、ほんの短い時間のようでもあった。25ヤードまで押し返えしてホッとした瞬間、敵バックロー長谷川の巧みなドリブルに9対8と逆転された。直ちに反撃に移ったわが軍は、大きなパントを受けた梅津が、50ヤードを快走して再び逆転

した。終了2分前。勝った！　応援団も喜色満面、我々もまた雀躍した。嗚呼、だが、天の試練は意外に苛烈であった。否、我々の精神力は今一つ欠如していたのか。ルーズの球を見事に回されて、スタントオフ福丸に名を成さしめたのである。最後の一瞬に福富欠場が敵に利したとは、余りに皮肉であった。

修猷 11（8－6、3－8）14 福高

〈メンバー〉

FW　橋詰、山下、三苫、斎藤、堀内、森部、大野、内藤

H・B　柴田、平島

T・B　久保、岩田、来島、梅津

F・B　大塚

我々の一年を賭けた一戦に、14対11で敗退した。しかしながら、この一年培って来た力は、決して徒労ではなかった。この年、全国大会第3位となった福高と、定期戦で引き分けたのを皮切りに、翌年の国体出場、さらにその翌年の活躍への大きな礎石となり得たと信ずる。

また、後年、最も弱体化した時代の監督を堀内が引き受け、何とか今日に引き継げたのも、非難と蔑視の渦中にこそ、躍進上昇の芽生えがあることを確信したからに外ならない。

いずれにせよ、我々の一年間の労苦も夢も、総ては、最後の福高戦に結集され、凝固されていたといっても過言ではない。

平山新一先輩は、この試合の観戦記を、『修猷新聞』に寄せて下さった。結びに、「感激の涙を流す（新しい伝統のために）」と題するその文章を拝借したい。

「新人リーグにはメンバーが揃わず、臨時に加勢を頼むといった望み少ない修猷ラグビー部だった。12名の優秀選手を送り出したことは大きな痛手だったのだ。しかし、彼等はチームワークと旺盛な精神力を固めて、ついに対福高戦の盛銘深い試合を見せたのである。

（中略）

福高側の歓声を聞きながら選手は泣いた。負けたからではなく、劣勢を噂された修猷が旺盛な精神力によって堂々のゲームをなし得た喜びと、来るシーズンはもっと頑張るぞと心に期した感激だったのだ。

ラグビー修猷の名はついに辱められなかったのである。」

29　国体で保善高に抽籤敗け（昭和28年度）

中部地区新人リーグ

7名の選手を送り出した28年度のラグビー部は、全国制覇の意欲に燃えていた。

2月8日から3月にかけて毎日曜毎に行なわれた中部地区高校

ラグビー新人リーグ戦は、平和台に熱戦を繰りひろげたが、本館チームは4試合を軽く勝ち抜き栄えの県大会に出場することになった。

対宗像高戦（2月1日）

修猷 24（9—0 15—0）0 宗像

新人選手にとっては最初の試合であったので、試合開始当初は上り気味でFWの突込みが鈍く決定力を欠いたが、徐々に落着きを見せ、後半バックスの好走よく得点を重ね楽勝した。

対香椎高戦（2月8日）

修猷 14（8—0 6—0）3 香椎

前半6分、敵陣25ヤード上のタイトスクラムからボールを右に回し、右センター岩田のトライで先取点をあげ、同20分にも木村のトライ成って香椎を圧倒、後半香椎の反撃を振り切って快勝。

対福岡商高戦（2月22日）

修猷 9（3—0 6—3）3 福商

前半8分、来島の45ヤードの独走でリードを奪い、楽勝するかに見えたが、福商FWの奮闘に苦戦し、後半7分スクラムトライを奪われて同点にこぎつけられたが、バックスの当りの強い攻撃で後半15分、21分とトライをあげ辛くも勝利を得た。

対筑紫野戦（2月28日）

修猷 20（11—0 9—0）0 筑紫野

試合開始劈頭からきれいにバックスに回し、相手の防衛陣を寄せつけず一方的に大勝す。

【総評】 4試合を通じてFWの動きが鈍かったようだった。これはFWの大半が卒業したためやむを得ぬことであったろうが、バックスがいいだけに目立っていたようだった。FWの力があって初めてバックスの攻撃に移るのであるから、FWの一層の奮闘が望まれるのである。宗像、香椎の一戦で見せたバックロー橋詰の好フォロー、ドリブル等見るべきものがあったが、他にバックローに人を持たず、ロックに人を得れば、斎藤をおろしてバックローにし強力にした方がよさそうだ。対福商戦にタックルを強引に振り切って45ヤードの独走をした来島の突進力、スクラムサイドを巧みに縫った平島のよさは相当の力を持っており、今後の大活躍が約束されるが、両ウィングの一段の進歩を望みたい。現在の力では4月に行われる県大会で相当の苦戦は免れないだろうが、自信をもって戦えば必ずや栄冠を勝ち得るだろう。

福岡県高校新人ラグビー県大会

地区大会より残った4校が参加して、4月5日、12日の両日、桜咲きにおう春日原ラグビー場で行なわれた。本館は1回戦南部地区代表嘉穂高、決勝に宿敵福高と対戦、優勝候補の呼び名に相

応しく、終始余裕ある戦をつづけ、1回戦11—0、決勝14—6のスコアをもって予想通り優勝を遂げた。なお戦に先だちラグビー界に多大の貢献をされた故秩父宮様の霊にしばし黙禱を捧げた。

第1回戦（4月5日）

修猷 11（11—0、0—0）0 嘉穂

決勝戦（4月12日）

修猷 14（6—3、8—3）6 福高

【評】 伝統の一戦とあって、この日も両校合わせて800名の応援団がつめかけ、いやが上にも選手の間に対抗意識が漲ぎり、ゲームは一層熱の入ったものとなった。午後2時福高のキックオフで試合は開始され、そのまま修猷陣深く攻め込まれ、立上り危しとみえたが、逆に福高を圧倒、前半7分ゴール前のタッチより福高バックローの出んとするはなをタックルでかきまわし、球を落すところをすかさずT・B岩田が拾い、左中間に飛び込んで先取点をあげ、余勢をかって同21分にも福高陣10ヤードのタイトスクラムから見事なT・Bパスをみせ、来島—松尾と渡って左隅にトライをあげて優勢に試合を進め、前半終了真近にF・Bの悪判断で快走村田に60ヤードの独走を許したものの、堂々リードを保ち、前半を終了。後半に入るやFWを誇る福高の前に修猷FWが圧倒され、タイト、ルーズとも容易に球を奪えず、再度村田に独走を許し、試合は振出しに戻った。しかし、その後わずかに立ち直ったFWと得意のバックス一体となった攻撃で攻勢に出、後半11分FWのドリブルで均衡を破り、同17分にも敵陣25ヤード上のタイトスクラムからS・H柴田スクラムサイドを抜けC・T・B来島にパス、独得の猛烈なダッシュで敵の防衛陣を軽く突破し、決定的なトライをあげ平島のゴールなって大きく8点をリード、福高の必死の追撃をふりきった。福高のフォワード対修猷のバックスといった対照的な試合で、ハーフの差がそのまま得点の差となって現われたといった感じだった。タイトで7分、ルーズで6分の球を福高FWは奪いながらウィングまで完全にまわったのは1、2回で、確実な修猷バックスのつぶしの前になすすべがなく、また福高S・Hがしばしばスクラムサイドを抜けていたが、全然フォローを欠き、かえって修猷のチャンスの芽を作っていた。修猷バックスは過去1年間経験をつんでいるだけあって、相当の鋭さを持ち、ラグビーにもっとも大切な瞬間的なカンが身についていたが、FWはまだ充分練習する余地があるようだ。再度にわたってみせた福高ウィング村田の快足はもっとも印象的で、彼のような走力の持ち主が修猷バックスに欲しいものである。

以上の如き成績で優勝。好調なスタートを切った。しかし昨年来の不運は、今年もまた修猷ラグビーの上に襲ってきた。以後の成績は23戦20勝3敗であったが、3敗のすべてがそれを如実に物

語っている。

昨年は定期の国体、全国大会の他に、秋田工招待試合の出場権を得た修猷は、前日1試合のハンディを負って雨中の福高グランドに南九州の雄熊工と、九州代表権を争った。修猷FWは、闘将橋詰、斎藤の欠場を補って熊工の強力FWと対抗したが、雨に味方バックスの活躍を阻まれ、ついに後半左隅になだれ込みを許して涙をのんで、捲土重来を期した。

国体県大会

高校ラグビー国体予選は9月13日より毎日曜に春日原ラグビー場を中心に県下12校が参加して行なわれているが、本館チームは宗像、常盤、嘉穂東を一方的にくだし、修猷、福工、香椎、福商の間で10月4、11日春日原で雌雄を決する。

1回戦　修猷 15（9—0 / 6—0）0 宗像

2回戦　修猷 29（12—3 / 17—0）3 常盤

3回戦　修猷 9（0—0 / 9—0）0 嘉穂東

グラウンドコンディション悪く、両軍FWがもたつき、ボールが手につかず、前半中途まで一進一退の動きを見せたが、前半の終りごろから、FWが落着きを取りもどしタイト、ルーズとも圧倒的にうばって有利に試合を進めたが決定力を欠き、0—0のまま後半が開始された。後半5分、嘉穂東陣20ヤード上のタイトから左に回り、来島がトライ。先取点をあげた。以後FWの健闘よく、11分来島の2度目のトライ。20分、S・H柴田好プレーがあって駄目を押し快勝す。

修猷のFWが完全に嘉穂のFWを圧した一戦で、ボールをうばった率からいって、得点差が開かなかったのは、コンディションのせいだけではなかろう。

かくて、好敵手福岡を1回戦に敗った香椎高を決勝戦に屠って栄えの県代表となり、一行は聖炎輝く松山へ別府経由で出発した。

1回戦で顔を合わせた保善高は、東京代表には珍らしく荒けずりのFWのチームで、秋田の大会では、準優勝を遂げていたが、FWの強いのは昨年の全国的傾向であったが、わが修猷はこれと反対に、バックスの断然強いチームで、柴田、平島のハーフ団、来島、岩田両センターを有し、その横のゆさぶりは全く高校ばなれしたものであった。唯一の難点はFWのやや非力なことであった。

一進一退を続けて共に無得点のままノーサイド、両軍の主将が本部に呼ばれた。両軍選手の緊張の内にトスに勝った橋詰主将が籤を引いた。歓声は保善高の選手の中に起こった。

修猷 0（0—0 0—0）0 保善高　反則　修8、保17

〈両軍メンバー〉

修猷館（福岡代表）監督　今井進

博平繁一康雄二作之治一助司夫登久道一弘倫
康　昌昭公大俊博耕孝大昌幸正　至秀　一
詰江村原城下富地野田坂川島田島保田石谷原
橋波木篠結山福菊中西井堀来柴平久岩立金三

保善高（東京代表）監督　新井隆吉

雄正夫雄雄郎一順夫進徳一久保勇吉雄夫顕
英　孝澄隆喜宏　照　重勇晴　佐唯靖
田田田藤呂矢　田田岡部落藤野藤水嵐藤田
山前山斎茂大林山永北安水遠坂佐清五佐太

全国大会福岡県大会

第6回全国高校ラグビー大会福岡県予選は連日好天気に恵まれ、11月21日、23日、29日の3日間平和台競技場で各地区より勝ち残った8チームが参加して行なわれた。

第1回戦　修猷 37（14—0 23—3）3 八女

準決勝戦　修猷 29（15—0 14—5）5 明善

決勝戦　修猷 0（0—3 0—0）3 福高

【経過】

前半8分、あっけなくこぼれ球を右隅にトライされた。以降は完全に主導権を握り、バックスを右に左に走らせたが、今一歩のところで極手がなく0—3で敗退した。

対福高定期戦

過去1勝1敗1引分と、まったく互格の対戦成績の修猷、福高ラグビー定期戦は1月15日午後1時30分より、関東の覇者早稲田大学対全九州の一戦に先だって平和台競技場で行なわれた。この日心配された雨も上り、グラウンドコンディションは不良であったが、微風絶好のラグビー日和、国旗掲揚台下スタンドに仲よく陣どった両校応援団数百名の応援歌応酬に、ゲームは一層熱の入ったものとなり、前半修猷リードされたが、後半よくFWが健闘し、全国優勝の福高に一矢を酬いた。

修猷 8（3—6 5—0）6 福高

1時30分修猷キックオフで試合開始、福高FWのドリブルラッシュに修猷FWが押されたが、よく盛り返し、12分福高25ヤードからS・O平島、P・Gに成功して先取点をあげた。

しかし、重量にまさる福高FWの鋭い突っこみに、2トライを

うばわれ、前半は6—3とリードされた。

後半に入るや、修猷FWはみちがえる程元気になり、橋詰、結城、山下、木村あたりを中心にルーズの球を8分通り得て、バックスを右に左に走らせたが、惜しいところでミスが多く、得点には到らなかったが、23分福高ゴール前で得意の「ゆさぶり」を2、3回くり返し、右ウィング久保がスクラムサイドを巧みに抜いてトライ。コンバーとなって8—6で、修猷は全国優勝の福高を降した。

30　戦後2度目の全国大会に駒を進める

（昭和29年度）

福岡県中部地区新人戦（1月17日～2月7日）

1回戦	修猷	48	(23—0 / 25—0)	0 筑紫野
2回戦	修猷	61	(31—0 / 30—0)	0 筑紫丘
3回戦	修猷	47	(16—0 / 31—0)	0 香椎高
優勝戦	修猷	5	(0—8 / 5—0)	8 福岡高

〈メンバー〉

FW　井坂、堀川、木村、清水、結城、立石、中野、山下

H・B　下司、平島

T・B　久保、金谷、岩田、川本

F・B　大庭

対熊工高戦（於修猷グラウンド）

修猷 5（5—8 / 0—3）11 熊工

修猷は昨年熊本工と九州大会決勝で対戦し、3—0で敗れているので、雪辱を期して戦ったが、斎藤、下司、立石の3選手が負傷で出場出来ず再び敗れた。

試合は2時熊工のキックオフで開始されたが、キックオフと同時に熊工FWがなだれこみ、あわやと思われたが、良く立ち直り、その後がFWルーズの球をよくとり、前半10分、熊工ゴール前スクラムのボールをとってS・O平島が右ポスト下にトライ、ゴールなって5点リードした。しかし16分、熊工左ウィングに快走をゆるし、ゴールをうばわれ、また24分、修猷陣10ヤードの混戦から左隅にトライ。8—5で前半を終った。

後半、修猷チームは、よくがんばったが、ハーフの下司、ウィングの立石を、体力的に劣った松汐、荒巻ではカバーするに至らず、再び1トライを加えられ、11—5で敗れた。

全国ラグビー大会福岡県予選決勝

11月3日午後1時より九大工学部グラウンドで、修猷と福岡工の間で争われ、17—3で修猷が輝く優勝をとげた。

修猷	3	0	0
福工	1	0	0

3	TGP	前	9
0	TGP	後	8
0	0	0	
3		計	17

〈メンバー〉

FW　木村、堀川、結城、斎藤、大場、川本、森久、山下

H・B　下司、金谷

T・B　久保、平島、岩田、立石

F・B　福富

勝利は握ったが、準決勝でみせた闘志に欠け、思わぬ苦戦を招き、この予選を通じ、はじめて相手に1トライを献じた。これで戦後2度目の全国大会出場権を得たわけだが、11月に行なわれる九州大会には、福岡県から1校の出場なので、本館は全国大会推薦出場の福高とその出場権を争って、11月7日に対戦することになっている。本年度両チームは、2回対戦し、いずれも少差で本館がやぶれている。

九州大会予選

1回戦　修猷 26（13—0、13—0）0 常盤（10月24日　於九大）

準決勝　修猷 34（14—0、20—0）0 山田（10月31日　於鞍ヶ谷）

山田のファイトものすごく、捨身の体当りで修猷に立ち向ったが、修猷よくかわして、後半2分、平島のトライをきっかけに矢継早に得点、順当の勝利をおさめた。

山田はキックで修猷を攻めんとしたが、修猷その裏をかいて、山田のスタンドオフを完全にマークし、徹底的にバックスを使って圧勝した。

〈メンバー〉

	（修猷）	（山田）
FW	木村、堀川、結城、斎藤、井坂、川本、森久、大庭	熊倉、山本、緒方、平田、梶原、林、大塚、荒牧
H・B	下司、金谷	笹尾、松岡
T・B	久保、平島、岩田、立石	爪生、中村、芥田、木下
F・B	福富	長谷部

決勝　修猷 6（3—0、3—0）0 福高（11月7日　於福高）

伝統の一戦だけに両軍固くなる。前半開始10分で反則8を教える有様で、中央線をはさんで一進一退を続けたが、タイムアップ寸前修猷は、福高陣30ヤード中央のルーズからS・H下司左に抜け、好ダッシュでフォローしたW・T・B久保に回り左隅にトライ。

後半11分、S・O金谷のクロスキックをC・T・B平島が押え込んでダメを押した。

修猷の勝利は、バックスの一発で決めたタックルの好守と、洗練されたチームプレイの良さにあり、福高はわずかにFWの突進で修猷陣に迫ったに過ぎなかった。

九州高校ラグビー大会（11月21日　於水前寺）

1・回・戦　修猷 23（9－3／14－0）3 上野丘（大分）

〈メンバー〉

	（修猷）	（上野丘）
FW	木村、堀川、結城、斎藤、井坂、川本、森久、山下	麻生、安部、林、山田、後藤、園田、松尾、秋吉
H・B	下司、金谷	阿部、衛藤
T・B	久保、平島、岩田、立石	矢津田、田坂、井尻、田島
F・B	福富	高田

修猷は、上野丘を軽く考えたか前半いらざる苦戦をしたが、後半はバックスを縦横に走らせて上野丘を圧した。特に左サイドが強く、左W・T・B久保が快足を飛ばした。

優・勝・戦　修猷 3（0－3／3－3）6 熊工

〈メンバー〉

	（修猷）	（熊工）
FW	木村、堀川、結城、斎藤、井坂、川本、森久、山下	境野、坂本、高森、尾崎、志賀、稲田、山下、倉原
H・B	下司、金谷	中口、鎌田
T・B	久保、平島、岩田、立石	森富、坂西、寺本、坂口
F・B	福富	真砂

3年連覇を目ざす熊工と、雪辱の意気に燃える修猷の激突は、初戦から、FWの果敢な突進、激しいタックルなど白熱した好ゲームを展開、最後まで勝敗は予断を許さず、特に後半試合がエキサイト、猛タックルの応酬で、岩田（修猷）、坂西（熊工）の両選手が同時に昏倒するなど、緊迫したが、チャンスをものにした熊工が辛勝した。経過は次の通りである。

修猷は、終始押しつづけながら決め手なく、後半6分熊工陣25ヤード附近のルーズから立石が飛び込んでトライ。しかし、前半11分坂口に、後半13森富に独走を許し惜敗。

31　新人戦の優位保てず（昭和30年度）

中部地区新人戦（Aパート）

修猷 50（28—0、22—0）0 筑紫丘（2月13日 於平和台）

修猷 0（0—0、0—0）0 福商高（2月20日 於福岡高）

修猷 69（28—0、41—0）0 筑紫野（3月6日 於修猷）

修猷 15（6—3、9—0）3 福岡高（3月13日 於修猷）

〈メンバー〉

FW 井坂、堀川、新谷、伊崎、林、斎藤、禅院、森久

H・B 柴田、金谷

T・B 相浦、荒巻、西牟田、伊藤

F・B 松汐

県大会（新人戦）

準決勝（4月2日）

修猷 22（6—11、16—3）14 常盤高

決勝（4月3日）

修猷 22（9—3、13—0）3 福岡工

〈メンバー〉

FW 伊坂、堀川、新谷、禅院、伊崎、斎藤、西牟田、森久

H・B 柴田、金谷

T・B 相浦、荒巻、林、伊藤

F・B 松汐

当然といえばそれまでだが、昨年から残った3選手の、攻守にわたる活躍が、優勝に大きく貢献した。他の10名はこれに引っぱられてプレイしたに過ぎず、わずかにFW新谷（2年）、ウィング伊藤（3年）、相浦（2年）が恵まれた体格や走力で目立っていた。

対戦当初の試合では、バックスに不安があったが、その後両ウィングの活躍で、これを補うことが出来るようになった。しかし、地区大会ではともかく、県大会の対常盤高戦などのように、相手のディフェンスが固いときには、得点力がガタ落ちしたように、強いチームには、走力だけで対するのは無理であり、技術的な向上が望まれる。その他、斎藤のバックライン参加によるシザースパスや、金谷のドロップゴールもある程度成功していたが、まだまだ練習の余地がある。

国体ラグビー県予選

1回戦 修猷 49（14—0、35—0）0 筑紫野（9月10日 於修猷）

2回戦 修猷 38（14—0、24—0）0 東筑高（9月24日 於修猷）

準々決勝 修猷 31（14—0、17—0）0 小倉高（9月25日 於修猷）

準決勝　修猷 0（0—0 / 0—11）11 福岡高（10月2日　於福高）

〈メンバー〉

FW　井坂、米倉、新谷、藤井、禅院、堀川、森久、西牟田

H・B　柴田、金谷

T・B　伊藤、荒巻、相浦、林

F・B　高山

伝統の一戦であるだけに立ちあがり両軍固くなり、バントの応酬でフォワード戦を展開し、FWの健闘良く修猷やや優勢の中に前半を終った。

後半風上に陣を布いた福高は、10分修猷オフサイドからペナルティの球を、福高植木つかんで修猷バックスのド真中を抜き、50ヤード独走し右ポスト直下に、この試合の決定的トライ（ゴール）をあげた。さらに20分修猷ゴール直前のルーズから、福高おさえてだめおしの得点を与える。

全国九州高校ラグビー大会福岡県予選

準々決勝　修猷 43（21—0 / 22—0）0 八女工（11月12日）

準決勝　修猷 3（0—6 / 3—0）6 福岡高（11月13日）

〈メンバー〉

FW　井坂、米倉、新谷、禅院、藤井、堀川、西牟田、森久

H・B　柴田、金谷

T・B　伊藤、相浦、林、高山

F・B　荒巻

修猷は国体予選の雪辱を期せんと、すばらしい闘志で立ちあがり、かつ再三相手ゴールをおびやかしたが、10分を経過する頃から、修猷の頼みとするハーフ団が、出足の速い福高バックブローに悩まされ、このため逆に福高が有利な態勢となった。前半10分福高は山下のP・Gが決まり、さらに20分には行徳が左サイドを抜く50ヤードの独走で6—0と絶対優勢となった。その後修猷は左T・Bパスから伊藤がトライを返えしたにすぎなかった。

32　あと一歩（昭和31年度）

新人戦

ラグビー新人戦県大会は、地区大会を勝ち進んで来た強豪4チームが参加、3月31日、4月1日の両日久留米大学医学部グラウンドで行なわれ、本館は八女工、嘉穂東を準決勝、決勝でそれぞれ破り、昨年に引き続き2連勝を遂げた。

準決勝（3月31日　於久留米）

修猷 22（8—0、14—0）0 八女工

決勝（4月1日 於久留米）

修猷 11（5—6、6—0）6 嘉穂東

〈メンバー〉

FW 真田、米倉、青木、藤井、豊福、吉田、高山、禅院

H・B 柴田、古賀

T・B 岡部、相浦、林、明石

F・B 相生

2連覇をねらった修猷は、最初から猛烈なファイトで敵に当り、前半5分修猷は敵ゴール前数ヤードから林がインゴールパントをあげ、それにつづいた相浦がおさえ先取点をあげた。嘉穂東もよく健闘し5—6で前半を終る。

後半10分、相手ゴール前を再三、再四ゆさぶり、ついに待望の勝越点を挙げた。その後はほとんど敵陣内でゲームを進め、さらにおしまくり、20分T・Bパスからトライなり、そのままおしきった。

山口遠征（4月15日 於大嶺高校）

本館ラグビー部は、山口県美弥市ラグビー協会の招きにより、4月15日美弥市へ遠征し、地元山口県の大嶺、山口水産の両校と対戦した。戦績は次の通り。

第一試合

修猷 16（3—0、13—3）3 山口水産

第二試合

修猷 21（8—0、13—3）3 大嶺高

国体予選

県大会で小倉工業と対戦し、6—6にて抽籤負けを喫す。

（小倉工業日体出場）

全国大会予選

高校ラグビー全国大会予選は、11月28日各地で幕をきったが、本館は地区予選で福農、香椎、宗像を連破、県予選へ出場した。県大会では1回戦に嘉穂東を下し準決勝へ進出した。なお今年より全国大会出場校は福岡県から2校となったのであと1勝すれば全国大会出場権を握るわけだ。成績は次の通り。

中部地区大会

1回戦 修猷 棄 権 福岡農

2回戦 修猷 29（17—0、12—0）0 香椎（11月4日 於福岡高）

3回戦 修猷 15（9—0、6—0）0 宗像（11月11日 於福岡高）

県大会

1回戦　修猷 12（6－3、3－0）3 嘉穂東（11月18日　於福岡高）*

決勝戦　修猷 3－5 福岡工（福工　岩　逆転ゴール　トライ）

コンバートの差で敗退す。

〈メンバー〉

FW　真田、米倉、佐々倉、豊福、高山、吉田、藤井、禅院

H・B　柴田、古賀

T・B　青木、相浦、林、明石

F・B　相生

監督　平山新一先輩

33　静岡国体で優勝を逸す、全国大会の代表にもなる（昭和32年度）

前年度のメンバーが大半を占め、昨年より一段と、スケールが大きくなる。

（I）32年度福岡県新人戦優勝す

2月10日　対糸島高　不戦勝

2月17日　対西南高　20－0

3月10日　対筑紫丘高　61－0

3月16日　対水産高　13－9

〈県大会〉

3月23日　対明善高　66（40－0、26－0）0

3月24日　対常盤高　5（0－0、5－0）0

にて優勝す。

「常盤は、終始押し気味に試合を進めながら、いま一歩の力不足で惜敗した。修猷はタイト、ルーズとも、7分以上のタマを取られるという苦戦ぶりだったが、さすがに試合巧者。前半15分、常盤陣25ヤードのルーズから、右オープンに回し、W・T・B西島が飛び出して、中央にトライ、ゴール成功して、そのまま逃げ込んだ。唯一の得点機をものにした修猷の巧い試合もさることながら、強剛修猷をこれまで追い込んだ、常盤の善戦も立派だった。」

（県大会新人戦優勝の『フクニチスポーツ』紙評）

4月21日　長崎西高における秩父宮追悼招待ラグビー大会

1回戦　修猷 29（11－0、18－0）0 海星

2回戦　修猷 28（12－0、16－0）0 長崎西

（Ⅱ） 国体出場、決勝で優勝を逸す

〈国体県予選〉（於九大グラウンド）

9月1日　64—0　筑紫丘（同日、福工5—3福高）

9月8日　25—0　八幡中央高

9月15日　13—3　小倉工高

9月22日　50—0　西南高

9月23日　19（9—0、10—0）0　福岡工高

〈九州大会〉（於宮崎大グラウンド）

9月27日　37—0　海星高

9月29日　9—0　鳥栖工高（北九州代表）

国体出場権獲得す。

〈国体第12回大会〉（於静岡）

10月26日　17—6　山口水産高（蒲原中グラウンド）

10月28日　14—0　沼津商高（〃）

10月30日　優勝戦　3（0—3、3—6）9　城北高（草薙グラウンド）

優勝を逸す。

「城北はFWが着実に攻め、前半20分、まずドリブルで左隅にトライした。後半に入るや、修猷は攻め、再三敵ゴール前に迫り、10分、タッチからの得意のドリブルラッシュで攻め、吉田がトライ！　その直後、2トライを許し、8年振りの全国制覇を目前にして、涙をのんだ。FWの突進力に欠けるという都会チーム特有の欠陥を狙い、FWで真向から勝負したが、城北FWは本館より一回り大きい身体と突進力を持ち、FWで一歩譲ったのが直接の敗因だろう。」（『修猷新聞』評）

（Ⅲ） 第37回全国大会に出場す

〈福岡県予選〉　準決勝より本館出場す

11月22日　22—3　小倉工高

11月23日　決勝戦　修猷　9（6—0、3—6）6　常盤高

「前半、風上に陣した修猷がT・Bパスで2トライ先行、後半、常盤がこれを追い、6分ルーズからT・Bパスで左隅トライ、15分にP・Gをきめて、6—6の同点に追い上げたものだった。ここで修猷が浮足たたなかったのはさすがで、国体出場、さらに殆んど3年生で固めた歴戦の勇士ぞろいの賜でもあった。逆に常盤があせりを見せ、修猷ゴール前に迫っては再三オフサイドをとられ、ケリ返された挙句、自陣25ヤード附近で、運命のオフサイドを修猷の好キッカー高山に決められてしまった。修猷がここまで苦しんだのは、この日FW第二例の豊福の欠で、前日の小倉工戦でヒザを痛め欠場、FWリーダー藤井主将もビッコをひきひき陣頭指揮をとるという、FWの戦力低下にもあったが、バックスに

案外精彩がなかったからである。FWは非常に健闘した。前半、常盤ゴール前のルーズで、再三、好ヒールアウトをみせたが、極め手のバックスは、S・O古賀、C・T・B青木あたりが持過ぎで、2トライに終ったためである。修猷は前半で勝負を決めてしまおうという意気込みがあったのだろう。FWが素晴しい動きを見せ、ルーズでは常盤の先手をとっていたが、バックスがこれにむくえなかった。わずかに、S・O古賀—C・T・B青木—古賀—貝島と鮮かなシザースパスによるトライを上げ、片リンを見せたが、後半は、完全にマークされてしまった。常盤は、風上に立った後半、FWも元気を取り戻し、C・T・B吉永、S・H篠原が鋭いダッシュで再三修猷ディフェンスを抜いたものの、自からの反則で後退する有様、ついに逆転出来ず、結局、修猷、常盤の試合経験の差が勝敗の分れ目となったが、常盤の善戦は大いに賞されてよい。」(11月24日『フクニチ新聞』評)

(Ⅳ) **全国大会出場**(於西宮)

33年1月1日　修猷 0 (0—3 / 0—12) 15 保善(保善初優勝す)

「FWの差が有りすぎた。修猷はタイト、ルーズとも、完全に負け、巧技を誇るバックスは宝の持ちぐされに終った。前半は闘志で非力をカバー、13分スクラムトライを許しただけで持ちこたえたが、後半、保善FWに完敗、4分、11分、21分と追点され、完敗した。」(1月2日『西日本新聞』評)

33年1月15日　朝日招待ラグビー

修猷 3—14 福高

〈32年度メンバー〉

FW　真田(3)、米倉(3)、佐々倉(2)、保木(2)、豊福(3)、吉田(3)、高山(3)、藤井(3)

H・B　高松(3)、古賀(3)

T・B　明石(3)、青木(3)、相生(3)、貝島(3)

F・B　田中(3)

監督　牧仰先輩

34　地盤沈下す(昭和33年度)

昨年の華々しい活躍に比し、実にさみしい結果に終った一年だった。

保木正和を主将に、総勢17名の部員で、せい一ぱい努力はしたのだが……。

戦績は左の通りである。

高校新人戦（2月9日　於平和台）

修猷　3—18　福岡工

前半からタイト、ルーズともに押され、バックスもパスがまずく、わずか1トライのみにとどまった。

国体予選（7月）

1回戦　修猷　49—0　糸島

2回戦　修猷　17—21　若松

全国大会福岡県中部地区予選

Aパート第2位で県大会に出場。

全国大会福岡県大会（11月22、23日　於平和台）

1回戦　修猷　16（0—8、16—3）11　嘉穂

2回戦　修猷　0（0—8、0—11）19　常盤

35　〝伝統〟を死守して（昭和34年度）

年を追うにつれて激しくなる受験地獄のため、予備校化して昔日の修猷の質実剛健の気風が消えさろうとしている現在の修猷にあって、わずかの部員ながらも輝かしい伝統を守ろうとするのはわがラグビー部のみであった。前年来の部員不足にも熱心な勧誘により少しずつ解消し、前年の不振を挽回すべく、伝統を守り抜くべく、3年生を中心に二十余名、新学期早々より百道原頭に激しい練習を開始した。

佐高定期戦（5月17日　於佐高グラウンド）

修猷　12（9—0、3—0）0　佐高

新人部員が多く経験不足のせいか、シーズン早々のせいか、ややまとまりに欠け、佐高の善戦に苦しむが順当に勝つ。

文化祭招待試合（6月1日　於修猷グラウンド）

修猷　8（3—3、5—3）6　福岡工

5月30日の創立記念日を中心として行なわれる文化祭に、福岡高と共に宿敵の福岡工を招待し、熱戦よくこれを破り春の公式戦を終える。

7月19日より10日間、修猷グラウンドにて夏季合宿に入る。連日多数のO・Bの方々の叱咤激励の中で、酷暑と闘いながら全員無事合宿をあげ、待望のシーズンに臨むこととなった。

国体予選、福岡県中部地区大会

1回戦（8月23日　於修猷グラウンド）

修猷 45（24－0、21－0）0 水産高

2回戦（8月26日　於修猷グラウンド）

修猷 57（32－0、25－3）3 宗像高

以上の如く他校を全く寄せつけず圧勝し、各地区代表8校と共に県大会に進んだ。

〈福岡県予選〉

1回戦（9月6日　於久留米高グラウンド）

修猷 20（6－0、14－0）0 三池高

準決勝（9月13日　於鞍ヶ谷グラウンド）

修猷 11（3－11、8－6）17 福岡工

		TGP		TGP	
修猷	1	0	0	1	1
福工	2	1	0	2	0
	11		3	6	8
				17合計	11
				5反則	2

〈メンバー〉

（修猷）

FW 内 桐山、堤、安西、栗原、谷井、吉村、柴戸、堺

H・B 樋口、原田

T・B 高木、矢吹、川崎、神山、山脇、徳永

F・B 小野

（福工）

遠藤（靖）、大塚、波止、重、遠藤（成）、小串、太田、高橋

坂田、堤、花田、河村

権府

試合開始前から降り出した雨の中で、前半オープンプレーを得意とする修猷は、バックスに球が廻らず惜しいチャンスを逸す。後半に入るやフォワード健闘し、修猷ペースで試合を進めたが、前半の失点が痛く、今一歩で決勝を前に涙をのんだ（福工国体出場）。

部員一同これを苦い経験とし、残る全国大会に全力をつくすべくより一層の激しい練習にはげんだ。

いよいよ全国大会の予選が始まり、技術に気力をプラスしたフィフティーンは意気揚々と出場した。

福岡県中部地区予選は圧倒的に勝利を納め県大会へと進んだ。

全国大会福岡県大会

Aパート　1回戦（11月15日　於平和台ラグビー場）

修猷 65（31－8、34－0）8 八女工

前半より相手を寄せつけず着実に加点。修猷ペースで快勝。

準決勝（11月22日　於平和台競技場）

修猷 19（8－5、11－3）8 九州工

連日の猛練習の疲れが目立ち、修猷らしいスピードに欠け、さらに中途より負傷者が出たが、後半立ち直りねばる九州工を振り切る。

決勝戦（11月23日　於平和台競技場）

修猷 5（0－3、5－0）3 福岡工

（福工）	1	0	0				
	TGP		前	3			
（修猷）	0	0	0				
	0			0			
	0	1	0				
	TGP		後	0			
	5						
	5		計	3			
	9		反	7			

〈メンバー〉

FW　桐山(1)、堤(3)、安西(3)、栗原(3)、谷井(3)、堺(3)、柴戸(3)、吉村(3)

H・B　神山(3)、原田(2)

T・B　小野(3)、矢吹(3)、川崎(3)、石川(1)

F・B　高木(3)

国体予選で敗れた福岡工と再度顔を合わせることとなった。国体出場で意気上がる福工と、前月の試合で頭部打撲のため出場不可能となったH・B樋口(2)を欠き、W・T・Bの神山(3)をH・Bに、新人石川(1)をW・T・Bに起用せざるを得ない状態の修猷では、戦力的にはかなりの差があり、一般の下馬評でも六分四分で福工有利と言われていた。

しかしながら、部員一同前回の苦い思い出をかみしめ、今日こそは雪辱を、合わせて全国大会に出場をと、その意気は、闘志は、かつて経験したことのないほどのものであった。

午後1時、新島レフェリーのホイッスルは、時すでに遅しと待ちうけるフィフティーンの胸の中に、青く澄みわたった秋空の中に鳴りひびいた。

ここに至ってはもう何も語るべきものはない。ただひたすら激しい練習にはげんできたその一つ一つを、相手を上回る闘志で、気力で、出しつくしてしまうのみである。

FW優勢の福工は、しばしば修猷陣にせめ入るも、単調なプレーの連続で、修猷T・B陣の果敢なタックルの恰好の餌食となった。前半中頃よりは互に一進一退を続け、両校共にP・Gに失敗、チャンスらしいものもないまま前半を終えようとする時、福工、修猷陣深く攻め入り、左隅の小さなペナルティキックを右に廻し、右隅にトライし前半を終る。

ファイトに燃える修猷は、後半に入るや、FWの健闘によりじりじりと追いあげ、後半7分福工陣25ヤードの混戦より6番吉村ドリブルでひっかけ、左隅に押さえる。難しい角度からの柴戸のコンバート見事にバーを越え5－3と逆転、修猷ファンを熱狂さす。

逆転された福工も執拗にねばり、P・Gを含め再三修猷ゴールに迫ったが修猷よくこれを振り切り、ここにノーサイドの笛は熱戦健闘の両校フィフティーンの中に割って入った。

優勝、この言葉のために、陽春の、酷暑の、厳冬の修猷グラウンドでの激しい苦しい1年間があったのだ。

劣勢と言われながらも、ラグビーで最も重要な闘志で、念願の優勝、全国大会への出場権を獲得することができた。

先輩の恩に報いることが出来、伝統を守り抜いたという安心感と、全国大会での優勝という、さらに一歩前の目標のための闘志で、寝つかれない一夜をすごした。

この日の修猷の奮戦振りは、日本ラグビーフットボール協会発行の『RUGBY FOOT BALL』1960, Vol. 9 の4月号17ページに取り上げられた。それを引用してみると、

「……福工、修猷館は戦前6〜4或いは7〜3と福岡工の勝利が予想されていたが、修猷館がゴール差で勝利を握る。FWはタイト、ルーズとも福工が優勢で、大半の球を支配下に置き、T・Bはオープンに展開していたが、修猷のFW、T・B一体となっての鋭い防禦により、福工は縦への突進を忘れ、横流れの単調なヒールアウト、無用のキックとなり、修猷の作戦にうまうまとひっかかった状態。総ての点で劣っていた修猷館の勝因は、

1　基本のタックル、セービングを忠実に且つ果敢に実行したこと。

2　全員の透徹せる敢闘精神。

兎角忘却され勝ちの高校ラグビーに大切な基本技を徹底的に敢行した修猷館チームに絶讃をおくると共に、他校ラガーの良薬となることを望みます。」

と以上のように取り上げられ、部員一同感激し、来るべき全国大会での優勝目指し休む間もなく厳冬の修猷グラウンドで猛練習を開始した。

12月28日、先輩、在校生、先生、父兄等の見送りを受け、博多発急行「筑紫」で宿舎の宝塚市へ出発する。

明けて35年1月1日、第39回全国高校ラグビーフットボール大会は、曇天の西宮球技場に全国各地区より勝ち進んだ32校が参加して挙行された。

第39回全国大会

1回戦　第2試合(昭和35年元旦　於西宮球場第3グラウンド)

慶応高(神奈川) 26 (8−0, 18−0) 0 修猷

慶応		修猷
1	TGP	0
1		0
0	前	0
1	TGP	0
3		0
0	後	0
18	計	0
26	反	5
7		

〈メンバー〉

FW　桐山(1)、堤(3)、安西(3)、栗原(3)、谷井(3)、堺(3)、柴戸(3)、吉村(3)

H・B　樋口(2)、原田(2)

T・B　小野(3)、矢吹(3)、川崎(3)、神山(3)

F・B　高木(3)

夢にまでみた全国大会。西宮球技場。ついに我々は、前夜来の雪でしめった、まだ芽を出さない芝の上に堂々と歩を進めた。

開会式を終り定刻午後12時15分。2試合目で泥んこの悪いグラウンドコンディションの第3グラウンドにホイッスルは鳴った。

母校の名誉と部の伝統を守らんがため、修猷フィフティーンは全員一丸となって熱戦を展開した。

悪いコンディション、さらに大会経験者わずかに1名という状態のため、全員緊張し、修猷本来の闘志と鋭い動きが生かせぬまま前半を終了す。

後半に入って、しばしば相手陣に攻め入ってもついに得点に結びつかずノーサイド。

今年も又全国制覇の夢はついえた。しかし、修猷フィフティーンの堂々たる戦いぶりは決して忘れられることのないものであろう。

全国制覇は出来なかったけれども、名門修猷ここにありと、福岡地区で優勝し、伝統を一応守れたことと、部員一同苦しかつた1年間を振り返りながら意義あるシーズンの幕を閉じた。

最後に、我々をここまで御指導下さった諸先輩、O・Bの方々、それに主将柴戸君に深く感謝し、部員一同の行末安からんことを願うと共に、いつまでもいつまでも修猷館ラグビーの名声と伝統を守ってくれるよう後輩に託して、修猷ラグビー生活を終える。

（神山隆記）

ラグビー部奮戦記

3年　堤　和雄

国体予選で八幡に遠征し、福工に無念の敗北をした翌日から直ちに全国大会に備えて、部員一同再び堅い決意を胸に抱きながら猛練習を開始した。いまだ遠征の疲労はとれていなかったが、誰もがそれを精神力で克服し、歯をくいしばってグラウンドを走りまくった。時に10月であった。少ない部員数であるゆえ、他校の如き愉快な練習ではなく、ただファイトをもってのみの毎日であった。フォワードはスクラムとルーズ、バックスはタックルにと、ボールが完全に見えなくなる6時過ぎまで、全員互に励まし合いながら、それぞれのプレー研究に没頭した。僕等の練習が終る頃に、すでに本館やグラウンドの周囲の家々には灯火が見られ、晩秋の夜風に送られながらグラウンドを去り、相手の顔も分らぬままに冷たい水でノドをうるおすのが常であった。

激しい練習ゆえ、負傷者もまた絶えず。しかもグラウンドが硬いために足を痛める者続出した。それでも、誰もがそれを口にも出さず、苦しい毎日に打ち勝った。スクラムは100回は組んだであろう。時に九電の先輩と組む時は、フォワード全員肩の皮はすりむけて真赤になり、足は棒のように硬直して、腰、背も痛んだが、ただ精神力でプッシュした。

バックスも同様で、タックル練習の度に耳が切れ、負傷者続出であった。それでも「母校修猷」を頭に刻んで練習にぶちあたっていった。

このような激しい試錬を経て、僕等は全国大会予選に出場した。どの高校とも対戦する度に、苦しかった練習を呼び起こして、これらを次々と破った。県大会へ進み、決勝で再び福工と相争うことになった。前半後半50分を通して、全員がグラウンドに倒れるくらい必死に戦った。そしてついに勝利を収めたのである。僕等は全員泣いた。先輩が握手を求めて奮闘をたたえてくれた。本当に嬉しかった。日頃の努力が報いられたのだ。この決勝戦は僕等にとって、生涯忘れることの出来ない思い出になるだろう。

部員一同30度を越す真夏の太陽のもとで汗と埃にまみれ、あるいは寒風吹きすさぶ身を切るような冷たさの中に、1日も休まず練習を続けた努力は、優勝という輝かしい成績となって母校に立派な誉れをもたらした。諸先輩、修猷生諸君が、この記を読んでいられる頃、僕等は栄えある西宮（全国大会場）の土を踏みながら、再び「修猷」を胸に抱いて、「悔いなき試合」を残すべく、全国の代表と戦っているに違いない。

36　進学の波にのまる（一）（昭和35年度）

一、夏休み以前

1月15日、3年生を送り出し、新チームの編成に取りかかった。監督は前年同様石橋先生にお願いし、主将・原田、副主将・三宅（英）、マネージャー・永松を決定した。しかし、前年度の全国大会出場のレギュラーがごっそり卒業し、残ったのは、樋口、原田のハーフ団と、フロントの桐山の3名だけであり、そのうち、樋口は体の故障のため当分練習できないとあって、メンバーを揃えるのにまず一苦労といった状態であった。FWは、滝田がフッカーに、三宅がバックロー・センターで締めることにしたが、フロントローの両側が固定せずに、スクラムが仲々安定しなかったし、バックスでは、攻守の要であるS・O原田、俊足C・T・B堀内が思い切り動くために、何よりも、樋口の後を埋めるハーフを養成せねばならなかった。多数の新入部員があることを期待しながら、春休みは基礎体力作りのトレーニングに励んだのである。4月になったが、受験本位の学校の方針のせいか、入部者は意外に少く、さらに、練習については行けなかったり、その他の事情から退部する者も何名か出て来、マネージャーまで試合

にかり出すことになったのである。また、ハーフとして一年生を鍛えたのであるが、樋口の域に達するのは望む方が無理であったろう。そんなことで、楽観できる状態ではなかったが、ともかく国体、全国大会出場を目標に、連日、練習を積んだのである。

福岡地区新人リーグ戦成績は次の通りである。

修猷 39（16—0 23—0）0 糸島農（2月11日　於修猷）

修猷 8（0—3 8—0）3 筑紫丘（3月6日　〃）

修猷 9（6—3 3—9）12 西南高（3月13日　〃）

修猷 28（6—0 22—0）0 東福岡（3月15日　〃）

3勝1負の成績で決勝トーナメントに出場出来なかった。

5月13日、対佐高定期戦を行なった。この試合、修猷は充分実力を発揮できなかったものの、地力において優り、6—3で勝利を納めた。その他には公式戦はなく、だんだん強くなる日ざしのもとで、練習を繰り返しつつ夏休みを迎えたのである。

二、夏休み（合宿）

例年通り、7月20日過ぎから合宿に入った。特にコーチをお願いした高山先輩はじめ数多くの諸先輩方が熱心にグラウンドに出て来られ、指導していただいた。炎天下、汗と泥にまみれて、オールメン・ダッシュ10本という日もあったり、ずい分鍛えられた。しかし、この合宿中も、負傷者や、練習から脱落しかかる者も出たりして、不動のメンバーを決定することができず、ここでも、部員不足の悲哀を味わねばならなかったのである。

合宿最後の夜は、百道の浜で、高山先輩の音頭で〝修猷ラグビー部万歳！〟を三唱した。いささか照れくさかったが、楽しい思い出である。

三、国体中部地区予選

いよいよ国体予選が始まった。9月4日、所は平和台ラグビー場。対戦相手は電波高校である。この日は雨が降りしきり、全くのドロンコ試合となった。どちらかと言えば、バックスに得点力のある修猷は、雨のため思いきった攻撃をかけることができず、キック戦法をとった。電波にずるずると押され、ついに、新興勢力電波高に、思いがけない敗戦を喫したのであった。

電波 11（5—0 6—0）0 修猷

〈メンバー〉

FW　奥沢、滝田、榎本、三宅（俊）、高良、桐山、三宅（英）、豊福

H・B　越智、原田

T・B　判田、石川、堀内、泰松

F・B　永松

四、全国大会予選

1　地区予選

ハーフに樋口がカムバックし、練習試合において5連勝を飾るなど、好調のうちに地区予選を迎えた。

11月3日（於平和台ラグビー場）

修猷　6（6－0、0－6）6　西南（抽選勝ち）

11月6日（於平和台ラグビー場）

修猷　11（8－3、3－5）8　電波

これで、国体予選でのかたきをとったわけだ。

試合終了近く、S・O原田と、C・T・Bのアウトサイドシザースから、C・T・B堀内が独走、ゴールに迫るも、西南必死のタックルについに引き分けとなる。幸運にも抽籤勝ちし、県大会に出場することとなった。

2　県予選

11月19日（於平和台ラグビー場）

修猷　5（0－11、5－3）14　若松

修猷はどことなくまとまりが悪く、十二分に実力を発揮することなく、後半樋口の1トライ（ゴール）を返えしたのみで敗北した。（水松記）

〈メンバー〉

FW　越智、滝田、榎本、三宅（俊）、高良、桐山、三宅（英）、豊福

H・B　樋口、原田

T・B　判田、石川、堀内、泰松

F・B　永松

37　進学の波にのまる（二）（昭和36年度）

新人戦

2回戦　修猷　25（9－3、16－10）13　香椎（3月19日）

3回戦　修猷　0（0－16、0－28）44　福工（3月21日）

国体地区予選

1回戦　修猷　（不戦勝）　東福岡（4月30日）

2回戦　修猷　6（6－3、0－13）16　電波（5月14日）

全国大会予選

1回戦　修猷　3（0－6、3－10）16　福高（11月5日）

ラグビー二題

豊福信之

或る日の練習

台風のシーズンもどうやら過ぎた。予報が大袈裟だったと非難されたそうだが、第2室戸台風などと厳めしい名のついたのがあったところを見ると、相当の被害は出ているようだ。台風で思い出すのは一昨年秋9月某日のことである。その日私は枕許の窓ガラスが激しく割れる音で睡眠を破られた。時計を見ると2時ちょっと過ぎである。吹きとんで来る雨と風を机で不器用に防いでいる内にすっかり目がさめて、不気味な音を聞きながら朝を待った。授業は2時間目で打ち切られる。廊下中にひびきわたる歓声を聞きながら部室に向った。廊下がつきて土間に降りるところで、早速女子の生徒が傘をバラバラにされて当惑している。部室に入ると皆わあわあはしゃいでいる。部長一人ガタガタなっている窓から視界のきかない外をながめている。やがて部長は意を決して服を着替えはじめた。みんなが呆気にとられている内にボールを持って外に出てしまった。私達も半分は仕方なく、半分は好奇心でジャージを着て外に出た。足をあげると吹き飛ばされそうである。これで出来るかなあと思いながら妙な恰好で歩いてグラウンドに集合した。部長が何か注意をしているようだが、口から出る声はたちまち風に運びさらわれて耳に入らない。「後日のための経験云々」、というのがちょっと耳をかすめた。雨が痛いものだと感じたのは初めてだったし、雨が真横に降る？　のを見たのも初めての経験だった。激しい風で気圧が下がって鼓膜が拷問をかけられているみたいに痛かった。向い風では体を極端に前に傾け、さらに不断の何倍もの労力を費やして走った。そのかわり追い風では常識で考えられないようなスピードが出て気分がよかった。西南大学の松の大木のうなりは印象深かった。結局目をつぶってやったその日の練習は技術的には何ら得るところなく終った。そして部長の「経験云々」もほとんど後に役立つところはなかった。部室に戻った時は体の芯から冷えてしまって歯の根が合わなかった。それでもかわいたタオルで拭くとボカボカとしたぬくもりが体中から湧き出て気分がさわやかになった。いろいろと苦労して山頂を征服した時の感激に近いものを感じた。後になってその時のことを話すと大抵の人が〝無茶な〟とか、〝不合理だ〟といって一蹴する。また私は私で彼等に〝俺はお前と友達になれない〟などと真剣に言ったものである。今はもうその時の単純な感動は消えうせて、残っているのは、井戸のまわりに吹きよせられていた木の葉の強い香りだけである。それにしても我々の生活には、理窟では割り切ることの出来ない感動が極めて多いものである。

私とラグビー

先日本校にドクタークラブというラグビーチームがやって来た。そして福岡クラブと華々しい一戦を交えた。といいたいとこ

ろだが、実際は目もあてられぬ程痛々しかった。ドクタークラブというのは、その名の通りお医者さんの集って出来たクラブである。従って年配の人が多い。闘志は燃ゆるばかりだが、体がいうことをきかない。足はもつれる。息は切れるで、全く気の毒だった。それでも心からラグビーを愛しゲームに徹する姿に感動して心から声援を送った。一方私達高校ラグビーは非常に勝敗に拘束されていて、とてもこれを愛することは出来ない。どんなに勝っている時でも息をついてはいけない。疲れて目の焦点の合わない相手も容赦なくハンドオフしなければならない。足をひきずって走る者でも敵ならばタックルしなければならない。勿論される方が私の場合だってある。そこに生きるためには、どうしても戦わなければならない人生の姿を見い出して激しい緊張を感じるのである。それは厳しさの他には一切の介入を許さないのである。私はラグビーを始めた当時このことで随分苦しんだ。次から次に出来る切り傷、靴ずれ、つめ割れ、捻挫、私は選ぶべき道を誤ったかもしれないと考えた。練習、練習、試合、試合、の連続。その内に生活のゆとりをなくし、さらに大切な精神的な何かがすり減って行くような気がしてならなかった。しかしだんだん体がラグビーに順応し、プレーがスムーズに出来始める頃から、その大袈裟な気持ちが、実は単に肉体の疲労が精神の負担となることから生まれた単純なものだったと気づいたのである。それから私はラグビーを通して人生の意義という大きな課題を学ぶゆとりが少し出来るようになった。かといってそれが行動の上に、生活の上に活かされ実践されるようになったかといえば、全く自信はない。但し、それはあくまでも私個人の問題であって、ラグビーそのものには無関係である。

ラグビーの本質は、あくまでもこれを通して、正しいたくましい人格を作り、社会においてそれを役立てるということである。恋愛は人の心に奮発という結構な意識をうんでくれる。また同時に嫉妬という苦悩を忘れずに作ってくれる。平和という素晴らしい言葉は、背中にいつも倦怠というつまらない荷物を背負っている。ラグビーもまた忍耐という贈り物と一緒に粗雑という附録をつけてくれる。それでも人は恋愛を好み、平和を求める。私はただそれと同じ比重でラグビーを愛したというだけである。人は過去の人達が歩いて来た道を、それぞれに応じて、それぞれに選び、そしてたどって行く。しかし後に出来る道はどれ一つとして同じ道はない。私が選んだラグビーは、その長い行程の一部に過ぎないけれども、決して除くことのない小さなしかし大切な道である。

38　進学の波にのまる（三）（昭和37年度）

（顧問）　石橋哲郎教諭

（部長）三宅俊樹　工藤泰伸
（部員）11名
（活動）
佐高戦勝利

福岡県中部地区ラグビー新人戦
Aパート
修猷 11（8—0 / 3—5）5 西南（3月18日　於平和台）
修猷 6（3—8 / 3—8）16 筑紫丘（3月25日　於平和台）

国体予選
修猷 3—28 筑紫丘（8月22日　於平和台）

全国大会予選
西南に苦杯

たゆまず努力しつづけて

三宅俊樹

ラグビーを一度見てから、そのあくまでルールに忠実で、レフェリーのホイッスルには絶対服従し、フェアプレーに徹底し、猛烈なファイトを発揮するのをみて、その試合状況を深く脳裏に描き、いつの日にか自分も楕円のボールを持ってグラウンドを力一杯走り廻ってみたいという夢を抱くようになった。

まのあたりに練習風景をみてなお一層その感を深め、ラグビー部へ入った。はじめてジャージを着たとき何んとなく身のひきしまった感じがした。入部したものの、何も知らない僕はただ無我夢中。最初のうちはただ苦しかった。ただ苦しいだけだった。ランパス、セービング、タックル、いろいろなものを覚えてきた。

練習後暗くなったグラウンドでセービング、タックル、おかげで傷のたえるひまがなかった。そのためかやめる者もでてきた。そして入部して10日目頃、県教育チームとの対戦で、初めてチームの一員に加えられ出場した。右も左もわからない僕にとっては苦しい試合だった。泥まみれの防戦一方、タックルに終始し、敵に与える得点を如何に縮めるかに苦しんだだけである。

この試合は53—0で敗北したものの、試合後に上級生からよくやったとほめられた時は実にうれしかった。その後ルールなど教えられ、わからないことがいっぱいできて何がなんだかわからなくなってきたが、それでも少しずつラグビーというものを理解していった。

夏休み、私にとってはじめての合宿が行なわれた。はじめのうちは、はじめての合宿で胸もはずんだが、実際練習がはじまってびっくりした。朝は早くから起床して、夕方遅くまで練習した。太陽がカンカンと照り、途中でのびてしまうものも出てきた。練

習方法もふだんとはまるでちがって強固であった。汗とほこりにまみれてまっ黒だった。練習の終ったあとの気持ちのいいこと。今までの緊張がほぐれてさっぱりした気持ちになる。しかし合宿の夜はたのしかった。皆馬鹿なことを言い合って寝るのも、合宿ならでは味わえないものであった。合宿の最後の日にやったすきやきの味は今でも忘れられない。このようなつらい、あるいはたのしい思い出と共に、部はすべての面で多難な道を歩いている。

しかし百道の海風をこんなにうまく食えるのは俺達しかないということ、このスポーツがたのしいだけで我々は十分である。楕円形のボールを見ると、身体のあっちこっちがたまらなくなり、この時、自分はラグビーの良さを切実に感じ、ただそれだけが部員一同の考えである。これから大いに部の発展することを信じている。

39　進学の波にのまる（四）（昭和38年度）

ここ数年間、どん底の状態を続けていたが、顧問に本館OB淵本武陽先生をお迎えし、工藤泰伸部長のもと、18勇士は深く誓ったのである。

「輝かしい伝統を、なにがなんでも守りぬかねばならぬ」と。……しかし現実は非情であった。戦績左の通りである。

第1回九州7人制ラグビー大会

1回戦　修猷　0—24　福岡工（4月28日於平和台ラグビー場）

国体予選兼九州大会予選

1回戦　修猷　38（21—0　17—0）0　香椎工（9月1日）

2回戦　修猷　0（0—17　0—31）48　福岡高（9月8日）

全国大会予選

修猷　11（3—3　8—13）16　筑紫工（10月6日）

40　再建の槌音（昭和39年度）

工藤、平島、福井、池と柱ともたのむ3年生を送り出しはしたが、前年の部員不足からやっと本年は新部員を迎え入れて20名となる。納田主将、渋田副主将を中心に、がっちりと固まり、新メンバーに切りかわるのを契機に、淵本顧問教諭の提案で、1月

18日から1週間、精神修養とチームワークを目標に、朝6時30分からの寒稽古を始める。寒風吹きすさぶ中を、歯をくいしばって頑張るも、皆勤者わずか数人にしかすぎず、根性のなさを痛感せしめらる。夏季合宿は、本校執行部会議室を宿舎として、盆明けを待ちて突入す。10日間、炎天下によく頑張り、今年こその意気大いに上るも、部員個々の心中の甘さがぬぐいきれず、大いなる成果挙らず。

されど、昨年までの試合ぶりから考える時、チームとしての、トライの味、勝利の味を部員一同知るを得、攻撃にあたりての全員一体となっての動きを知りたるは可とすべきことなり。

なお、本年は部発足40周年の良き年であり、校内各部に先がけて40周年記念式典が行われた。O・B各位の御厚情により、ボール、タックルマシーン、ジャージ等々の寄贈は、部員をどれ程力づけ、やる気を持ち出したか、はかり知れぬものがある。

戦績

3月29日　修猷　3—24　福岡高（全早明戦前座）
4月12日　修猷　9—8　香椎高（国体予選）
4月19日　修猷　0—38　福工高（国体予選）
5月13日　修猷　15—0　佐賀高（親善試合）
9月6日　修猷　18—12　筑紫丘高（九州大会予選）
9月13日　修猷　0—48　福工高（九州大会予選）
10月11日　修猷　30—3　宗像高（全国大会予選）
10月18日　修猷　8—20　筑紫工高（全国大会予選）

部員一覧

顧問　淵本武陽教諭、石橋哲郎教諭
主将　納田純一(3)　副将　渋田民生(3)
マネージャー　村上雄二(3)
3年　久保公、小嶺栄
2年　溝口知行、浅田次郎、横田康夫、柴戸敬生、船木志郎、安部直行、佐座政弘、里見隆彦、田中良一、柴田進、吉田義弘
1年　星野順二、田中新一、岡田修一、片山隆

41　黎明出ずる（昭和40年度）

淵本教諭を顧問に仰いで3年、3ヵ年計画最後の年となる。主将里見、副主将柴戸と、T・B、FW、共に良き人材を得て、3年生部員12名を主体とする強力チームが出来上りつつある。

特に今年は部員一同やる気十分で、昨年からはじめた寒稽古も、皆勤者13名、他も風邪の者2名を除き、2日と休む者はな

く、始業式に館長より全校生徒の前で表彰され、面目をほどこすと共に、意気大いに上る。

今年の練習目標は、ゲームによる実戦練習を主体に置いて行なわれつつあり、人対人、人対ボールに対する動きと、試合かけひきのマスターに、懸命の努力がはらわれている。

九州在住O・B対在京O・B戦で、東京出発の今日、現役も九州大会予選を明日にひかえ、最後の仕上げにみがきをかけている。

今年頭初、『修猷新聞』に掲載されし文面をかかげて、今日までの状況とする。

〝圧倒的強み　ラグビー部〟

去る3月27日、本館において練習試合があった。結果は、

修猷 56—0 筑紫工高

修猷 48—0 修猷O・B

なお、現部員数26名、特に正月4日に行なわれた現役対若手O・B戦は、まことに面白いものであり、互いにしのぎをけずっての戦いも、現役の圧勝となる。

部員一覧

顧問　淵本武陽教諭、山本哲也教諭

主将　里見隆彦(3)　副主将　柴戸敬生(3)

マネージャー　船木志郎(3)

ベストメンバー

FW　溝口知行(3)、吉田義弘(3)、星野順二(2)、安部弘之(3)、田中新一(2)、浅田次郎(3)、柴戸敬生(3)、横田康夫(3)

H・B　船木志郎(3)、安部直行(3)

T・B　佐座政弘(3)、里見隆彦(3)、田中良一(3)、柴田進(3)

F・B　野上正孝(2)

補欠部員

2年　岡田修一、片山隆、会津一志

1年　守田雅利、下村信剛、高畠太郎、久我秀明、林田克信、井上憲介、竹迫陽二郎、原田保孝——以上26名——

Ⅱ

回想

修猷館ラグビー部の創設時代を憶う

梅崎忠亮（昭和2年卒）

大正14年小生等が4年生の時、体操と教練の教官だった長三熊先生から、ラグビーフットボールをやらないかと持ちかけられた。

そのころは福岡中学（現福高）が前シーズンから始めた由である。先生もラグビー競技について講習を受けられたばかりらしく、ルールブックを渡された。フットボールといえば、ア式といって皮製のまるいボールであるのが常識であったが、これはまた楕円型のボールで、蹴るとどこへころがるかわからない始末である。しかも持って走ってもよいということであった。同級生では、梅津一敏、浜崎越郎、安東久夫、高島弥一郎、藤野種生君等が参加したことをおぼえている。3年生からは鎌田昌義、橋爪長矩、田代某君が加って、ルールの解説を受けながら練習を始めた。ただコーチもなくお互いにルールブックをたよりにしてである。

そのうち、薄水色と黒のだんだら縞のユニフォームが出来て、姿だけは一人前のラガーのようになった。運動場は殆んど野球部、陸上競技が使っているので、他部の練習の合間をみてするような有様であったが、ボールだけは運動場の中央に建ててもらった。メンバーがたりないので、陸上競技部の川津綱友君、柔道松井清孝君の応援を頼んでやっと揃える程度である。どうにか練習のまとまりができたのは10月半ば過ぎだったと思う。そこで練習試合をということになり、当時の福中に申し込んで、福中の運動場で行なったが蘭が立たず惨敗をきっした。このころから九州大学、福岡高等学校（今の九大教養学部）が部を結成して始めた。大学や高等学校からの要請で練習試合を行なったが、これは修猷チームの連戦連勝で気分をよくしたものである。12月になり、ラグビーの全国大会が大阪の甲子園で開催されることになったが、残念ながら福中が福岡代表として出場することになり、小生等は選ばれなかった。これを期にチームの強化をはかるために、部員の募集にとりかかり、溝口博君、植村修君等の新鋭を加えることが出来た。翌大正15年はどうしても甲子園大会には出場するんだと、新学期早々に練習を強化することとした。春は運動場の西側で、夏は百道松原に、部員一同集まって、フォワードの連けい動作に、スクラムに、タックルに猛練習を続ける。部長の長先生も激励されて、福中、九大、高等学校と幾度か練習試合を重ねた。練習にあきると、西南にある二本木の下が憩いの場である。このころはただがむしゃらに、若い情熱をもやして、誰に強いられることもなくお互いに励まし合って、全国大会に打ちこんだ。どうやら宿敵福中とも互格の試合が出来るまでに自信をつけた。秋もすぎ12月の全国大会の日の来るのを待ったが、このころ大正天皇

の病状が日日悪化し、ついに崩御され、ついに望みをたくして演練これつとめた全国大会は中止となり、一同涙をのんだ。

初期のラグビーチームは、かくして、お互いの力でどうやら培った程度に止ったが、今にして思えば、近代的ラグビーの進歩から見ると、実に今昔の感にたえないものをおぼえる。以後の部を背負ったのは、御承知の溝口博君、植村修君、等の力が大いに発揮されたからで、このころに培われた基礎が修猷ラグビーの興隆の基ともなったといえよう。

以来40年、修猷ラグビーが、九州大会に、全国大会に、国民体育大会に、幾度か制覇してうちたてた金字塔は、伝統の力とはいえ、グラウンドに滲む汗と若い力の賜であろう。昭和37年に発行された『修猷館物語』にのった溝口博君の筆になる「ラグビー三十年史」は、溝口君自身はもとより、これを読む者をして追憶の感を深からしめるものであると同時に、次代の若人を奮起せずにはおかないであろうことを確信する。

"昭2"の思い出のまま

鎌田昌義（昭和3年卒）

昭2の思い出をなにか書いてみては、と高橋兄（旧姓橋爪）よりいわれて筆を取ってみたものの、昭2のラグビー部の世話は高橋兄と不破兄がほとんどやられて、私は長先生のいわれるまま臨時主将を務めたまでで、昭2の思い出は両兄の方が深いものがあると思うが、遠い懐しい修猷時代を思い起こしてみたい。

大正14年に修猷蹴球部が創立され、長先生の熱心な指導で部員も相当数いたようであるが、昭2の5年生はどういうわけか部員が非常に少なく、かくいう私も中途より高橋兄の友情で部に入ったようなわけである。4年の時体操の時間にブレスキックをやらされ、バーを越さした者がクラスで3人だったと記憶する。早速、長先生から部にはいるよう勧誘されたが、ラグビーのラの字もわからず、どうしても入部の決心がつかなかった。長先生のあきらめのない勧誘と高橋兄のすすめで、1回、2回と練習するうちにランキョ球のとりこになり、5年生の時から本腰をいれて部に入れてもらった。

全く不思議なみりょくを持つ球で、とりこになったお陰で川津先輩を頼って慶応義塾に入学したり、家庭の事情で慶応への進学を中止し山口高商へ鞍替えしても、やっぱりランキョ球のみりょくは山口高商にラグビー部を作らすようにしたり、私の学校時代の思い出をラグビー一本にしてしまった。

高専時代となっても修猷のラガー出身者と九大グラウンドで敵味方となり、共にランキョ球一つに全精力を打ちこんだ1時間があり、試合が終った後お互いの肩をたたき、健在を祝しあい、好プレーをほめあったり、全く不思議なランキョ球であった。

曲りなりにも学窓に別れをつげて、社会人としてシンガポールに赴任すれば、そこは英領で、赤道直下の強い光線のもとでハゲ頭の老人達までがランキョ球を緑の芝生で追っかけているし、英人の年齢を忘れ、炎熱を忘れたスポーツ愛好に頭が下がったり、ラグビーのみりょくを考えなおした思い出が浮かんでくる。

修猷5年生の時は原書まで引っぱり出してルールの研究をした橋爪、不破兄のうち、不破兄が何かの理由でグラウンドに姿を見せることが少くなり、橋爪兄はボート部の選手としてシーズンオフまでボートに行くし、川島兄は剣道部の選手として福日の大会まで剣をとるし、藤田兄の姿も5年の時から消えたし、ラグビー部の5年生としては私と田村兄位だったような気がする。

しかしラグビー部員の数は相当なもので、4年、3年生でほとんどしめられていた。

ラグビーの経験も一番少なく、ただ5年生というだけのことで主将をやり、なんだかおかしな気がする。ラグビー部としての部の仕事は高橋不破両兄がやってくれるし、一体私は何をやったのか記憶にないくらいで、ただ5年生だということで威張っただけのことらしい。

最近溝口兄からあんたのあだ名を知っているかと尋ねられ、記憶にないと答えると、「オッコリ」というんだといわれて、まさに想像通り威張ってばかりいたわけである。奇妙なギャップがあったものではある。

昭和2年正月の全国大会の九州代表は福中が推せんされたのではなかったかな。昭和3年の全国大会の九州代表決定戦は昭2の晩秋春日原で修猷と福中で行なったが、福中に僅少の差で敗れた。菁莪堂で合宿をやり、高橋兄も川島兄も復帰。田村兄と私で5年生は4人だったと思う。

負けおしみではないけれども、時の福中は強敵ではなかったような気がする。惜しい試合を逃がした気がしてならない。修猷のその時の主力は溝口兄（昭3のキャプテン）達の4年生だった。

ただ福中の中で今でも記憶にあるのはスリークォーターの内田兄である。柔道の主将で、しかも脚がはやく、首が猪首だったようで、タックルにいっていつもはずされ、くやしかったが、見事なチャンスメーカーだった。

それとその試合のパンツ、それが野球選手のそれと同じの膝のかくれる長いパンツだったことである。膝小僧をすりむかないようにというわけであっただろうが、まさに珍妙なものであっただろう。それ程グラウンドも悪かった証拠になるかも知れない。

福中との試合終了後、長先生達に案内されて東中洲の「青柳」ですき焼の御馳走になった。「青柳」は青柳兄（当時3年生）の親爺さんの家だったと思う。すき焼のおいしかったこと。タックルで口中に裂傷をうけた溝口兄はさぞしみたことだったろう。安部兄もひたいに裂傷をうけていたようである。まさに激闘のラグビーではあったが、それなりに戦い了った時のサッパリした気持

ちも忘れ難い。

ランキ＝球のもつみりょくは、あのきまぐれものを追ったことのある人のみが知りうるみりょくではあるまいか。

思い出の断片

溝口　博（昭和4年卒）

修猷館といっても、福岡県立中学修猷館と呼ばれた40年も近い前のことで、憶い出も断片的になってしまった。そのままに書きつらねてみよう。

楽しかったこと

○何もかも楽しかったように今は思える。辛かったことや苦しかったことまでも、今は楽しかったように錯覚しそうです。

○ラグビーを初めて間もない頃、大会前の合宿で、初めて正選手として出場を申しわたされた夜、明日の試合のことを考えて寝つかれなかった。そして試合では、T・Bウィングで独走（相当長かったように思うが、実際はわからない）してトライした時、大声でトライと叫んで、ボールを撫で廻した。こんなことを一番に思い出します。

○稗田さん（KOのO・B）からカブ・スミス著のラグビーの原書を貰い、夏休みに飜訳しかかった。悪童連の学力ではなかなか読みこなせなかったが、難しいところは皆で大方こんなことじゃろうで済ませた。フェアプレイやキャプテンシー等が長々しく書いてあって、面倒くさいと思ったが、今にして思えばやはり大切なことだ。走り方も歩幅から爪先の方向まで詳しく説明してあって、大変役に立った。家では、原書で英語を勉強したと賞められる景品までついた。ラグビーの本もなく、先輩もいなかった時代のことである。

タックルは皆自信があった。毎日タックルの練習をした御蔭と思う。練習の最後は必ずタックルをやっていた。二本木のあたりの砂地の所で、靴を脱いで、30メートル位の距離で球を持って走る方とタックルする方とに分れて走り合う。フルスピードでも砂地のことだから大したことはなく、転んでも怪我はないわけだ。だんだんとタックルされる方になるのをいやがっていた。タックルに自信が出来ると試合が楽しくなるものだ。

○地区決勝戦で、S・Cの吉岡君と相手福中のS・C杉君は共に柔道部の大将である。とうとう杉君をグロッキーにしてしまい、試合よりこの方を喜んでいた。この頃、1年間ユニフォームを真赤一色にした年がある。吉岡君のひそやかな、心の中での彼女の顔が赤かったとかの他愛ないことからであった。さすがに1年で止めてしまった。

○地区決勝戦は、福中と0対0の無得点で、日を改めて再試合になった。その翌日、学校の行事で全生徒が講堂に集まった時、教

頭が再試合の激励をして、全生徒にも応援をすすめた。そこで、試合当日は無慮200名位の応援団が集まった。それまでは10名位が例であったので、我々も大いにハッスルした。ところが前半1トライを先行され、後半に2トライを返して逆転勝ちを占めた。修猷館歌を合唱する応援団の前に並んだが、何しろ初めてのことで、大いに感激した。この辺からラグビーに取りつかれたらしい。

つらかったこと

○全国大会（今の甲子園野球場だった）で、フッカーの郡司君が突然出場不能になった。陸軍士官学校の受験手続きのためだった。補欠は入部間もない3年生である。案の定、スクラムはがたがたとなり、10本に1本位しか取れない。試合が済んでも敗けたような気がせず、心残りがした。その上、彼の受験も駄目だったのである。

○T・Bの練習では、ランニングパスはゴール間15往復を目標にした。グラウンドは赤土の硬い所なので、足の裏が灼けつくようにぴりぴりするまでになった。この頃、山崎君が肋膜炎に罹り、ついに再起出来ず、誠に気の毒であった。

○4年生の頃、ゴロ拾いで中指をつき曲げ、頭まで疼くようにこたえて、半年ばかりは絆創膏を捲いていた。今でも曲ったままになっている。また、その頃、腰がだる痛いことがあった。これは九医時代に神経症状を起こし、腰椎分離症とわかり、今は辷り症にまでなったが、幸いに、半くずれのまま、どうにか持ちこたえている。

おかしかったこと

春日原での試合中であった。タッチから混戦となる中に、突然、河野君が球を持って、味方のゴールの方へ走り始めた。味方も敵も一時試合をやめて眺めるほかなく、大分永くひやかされた。

○菁莪堂の合宿の時、床の間にふとんを積み重ねて、タンブリングをやり始めた。ところ吉岡君が踵で床の間正面の壁を凹ましてしまった。已むなく、忠と孝との掛軸をずらして隠したが、今もあるだろうか。その年以来、菁莪堂は合宿に借りられなくなった。

○ルーズスクラムで、その頃は人間だんごが出来ると、一番下で球を持ってた方がスクラムの権利があった。植村君はそのルーズを目がけて、助走をつけて頭から突っ込み、余勢余って足で半月を画き、敵側に倒れ込むのが得意（？）だった。また、敵にボールが出かかると、ルーズの上を飛び越えてつぶすということも練習していた。

○全国大会の帰途、神戸駅で発車ぎりぎりまで皆ホームをぶらついて、ベルが鳴り終ると共に一同列車に飛び乗って、とうとう引率の某先生を置去りにして帰った。別にその先生をうらんでいたわけでもなかった。

○田代君はプレスキックの名手だった。福高（今の九大教養学

部）のグラウンドは正規より大分狭かったので、練習中一度センターラインからゴールさせたことがあったとか。試合でも成功すると力んでいたが、駄目だった。

そのほか

○14歳でラグビーを始めて、何時しか40年になる。数年前は、引退するなら花道が欲しいと思っていた。ところが、昨今そんな気がまるでしない。心境の変化とは妙なものだが、これがいよいよ最後だろうか。

○振り返ると、今次の太平洋戦争で、合宿で同じ釜の飯を食った連中が大分戦死している。今は、家も遺族の消息もわからない。同級の一人一人を記して、冥福を祈る。

池田達郎君（沖縄）　池田省吾君（サイパン）
安部是臣君（中支）　山下健太郎君（上海）
河野克巳君　山崎久助君

昔のコーチメモ

溝口　博（昭和4年卒）

先日、修猷ラグビー史の編集係に催促されて、資料を求めてあちこちと捜すうちに、紙袋の底に小さくたたんだ紙束がある。もう茶色に変色して、折目は破れかかっている。拡げて読むと、なんと、私が修猷館5年生だった時のことだから、昭和3年にコーチをお願いした大松さんのメモである。大松勝明さんは大正末期の早大興隆期にT・Bで活躍し、その頃は福岡クラブの主将であった。

今、読み返しても立派な内容で、要所には図入りで説明してある。また、その字が見事な達筆なのである。私にとっては、昔も今も変らぬラグビーの道だと感心している次第だが、今の若い人達にはどう受け取られるだろうか。

そのままを写して御参考に供する。

○全般的の注意事項

1　キャプテンの絶対権が破れ勝ちのチームは弱い。
1　ゲームが如何なる方向に展開すべきかを直ちに判断し、各自の行動を起こすこと。
1　デェンジャラスゾーンに対する観念。
1　苦しい時には敵も同じ状態なるを想い、ここで一歩先を制する勇気を出した方が勝つものである。
1　補助運動として、200、400メートルの練習をすること。

FW　先制の利、攻撃は最大の防禦

H・B　沈着機敏なるボールの処理と、FWとT・Bとのコンディションに注意して使い分けること。

T・B　「如何にしてうまくパスするか」と言うことを主旨と

し、決して最初からトライゲッターたることを念頭に置いてはならぬ。

F・B　山気は禁物、確実なるキャッチ、正確なるタッチとタックルをもって、14人を安心して活動させること。

この外、各ポジションについて細かいことが書いてあるが、抜き出してみよう。

○ホィールはオープンにやる場合とブラインドへやる場合とを適当に使い分けること。

○敵方のFWの力量が優っている場合には、球を得たら、直ぐにホィーリングの型に移って、敵の力を横に削ぎ、H・Bの球を出してやるのが有利。

○S・Oは主にC・T・Bの内側にフォローするのが有利。

○T・Bの三角攻撃。

○T・Bがワンマンパスした場合、パスを受けなかったT・Bは直ぐに距離をごく短かくフォローすること。

○マークを外す際に、緩急適時の走法を採ること。

○フルスピードをもって強引にマークを外すと同時にパスすること。

これは35年前、大松さんが修猷館へコーチに来始めてから、1週間ばかりたって、私達の実際をみてメモにして与えられたものである。35年前とはルールも変わり、ゲームのやり方も進んでいる。言葉も大分時代がかっているが、底に流れているものは、昔も今も変わらぬものが共通しているということを申し上げたいのである。

わが楽（ラグビー）日記

植村　修（昭和4年卒）

今でこそラグビーと言うが、当時我々はラクビーと呼んだものである。大正年間の話で、稗田氏、高知氏、広橋氏等の大先輩が講演に来られて、修猷館にもラグビー部が出来た。

退役陸軍准尉、本館体育風紀係の長三熊先生が部長になられて、随分努力された。

各学年のクラス対抗を行なったり、体操の時間に前列と後列に分けて、1クラス大体50人位だったから、25人対25人の試合になる。15人配置するのに25人いる。

とても攻撃されたものではない。しかも不思議とスリークォーターは正規の4人だった。だからフォワードは20人である。球の行方がわからなくなって、スクラムが同時に3ヵ所で行なわなければならないような場面になることが多かった。

当時部員には高島弥一郎、安東久夫、浜崎越郎、藤野茂雄氏等がいたのを記憶している。とにもかくにも闘志のある男がいい、柔道とっている奴がいい、一層のことワルソーがいい等と結局柔道部から連れてきたり、陸上競技部の選手に誘いをかけたりして、恰好はつけたがだんだん日数がたつにつれて、二股選手はいずれか一方に片づいて、レギュラーらしい数名が残った。その中に田代という男がいた。スクラムセンターで、なかなかキックがうまく、時の福岡高等学校のグラウンドで、もっとも幾分狭かったが、キックオフのボールをゴールにねらったことがあった。惜しいところでそれたが、万一はいっていたら点になるのだろうか。

福岡にチームといっても、中学校では福中と修猷館だけで、外に九大と福高、西南高等部と商業は一寸おくれて出来た。

その福中に内田という柔道も強く、何でも学校の成績もよかったらしいが、手強いスリークォーターがいて、これをタックル出来なかった。ガニ股みたいにして走ってくるが、近寄るとハンドオフされて、おまけに相手は足も早い。

丁度この頃修猷館に不破がいた。弟は今の佐賀銀行にいる修平君で、親父は佐賀県知事、家柄だった。現在本人は年の暮によく見かける××易断所本部編纂昭和〇〇年運勢暦の編輯をやっているとか、風の伝に聞いたが、この男がわずかに内田を倒した。不破はたしかに変わった男で、腰のバネが物凄くきいて、右でも左でも直ぐ立ち直ることが出来た。色の一寸青白い男で、重心低く構えてフルバックにおると、なかなか頼もしかった。

修猷館はどうしても福中に勝てない。そこで闘志が足りない、闘志が足りないと呶鳴られた。そうなるともう闘志でかたまってしまった。ルーズなんか人間のダゴみたいに、ボールに十重二十重に重なっているのに、さらに2、3歩、後から走りこんで、矢のようにその人間のかたまりの中に突き刺った。球を出すということは、第2の問題である。

応援団も「タタンでしまえー」と絶叫する。

顔にケガをする、足の骨を折る。

そうすると何か責任が果たされた、ベストを尽したような気がした。

しかし、だんだんゲームを重ねると、ルーズの球をとって、それをスリークォーターに廻すことが、勝ったことの原因だと気づいた。

球をいくらかスリークォーターに廻せるようになると、今度はT・Bが横走りをする。応援団が突っこめと叫ぶ。

考えると今のリターンパスとか、ユサブルとかのテクニックは、当時の我々には夢だった。とにかくウィングに廻して、そのウィングが無理矢理に走ってくれることを願った。

その願いの切なるものがあったか、溝口君が肩を折って長いこと休んだ。

学校も大分部に力を入れてくれて、今まで野球部のグラウンドで練習していたが、有名なあの二本木附近の雑草を刈って、現在の防墨前に出る、西側一帯を整備し、トラックとラグビー場を作ってくれた。これで今までの硬いグラウンドから解放された。

いくらか強くなった。福中にも練習試合ではあるが何度かは勝つ。九大からも福高からも、時には互格以上の勝負をし出した。

今度こそ宿敵福岡中学校を、全国中等学校ラグビー甲子園大会予選において、倒すことである。

そう考えると、身うちがたぎってくるのがはっきりわかった。

かくて昭和4年に待望の甲子園に出場したが、当時のチームメイトも、今や有名な外科病院長になり、50有余の齢を重ねて、迷惑だ迷惑だとグラウンドを走り、後進を育て、日本のラグビー王国の基を南の端に作る。

誰か人ありていうだろう、ラグビーは決してただ単なるスポーツでなくこれぞ正しく魂のスポーツであると。そして又他事にまぎれて音信も不通な、あの時のメンバーが何かにつけて思い出した時、きっとどこかに傷している、その傷をみて、私を思い出してくれるに違いなく、今や昔戦場に消えた池田君や、物故された河野君、青柳君、山下君、山田君等の冥福を祈ると共に、消息も不明な吉岡君をなつかしみ、かつてのラグビー選手たりしことを心に誇り、とにもかくにもたった一度でよいから、25ヤードばかり独走して、この手でトライがしてみたかったと青春の日を回顧するのみである。

昭5卒業生一同に代りて

山本太郎（昭和5年卒）

私達のように大正末期から昭和の始め頃の学生生活をしていた者から、現在の修猷館の生徒の言行を理解することは甚だむつかしいことのようであり、逆に現在の生徒達から丁度自分の父親に等しい年齢の学生生活を理解することは全く困難なことであろう。従って昔の思い出話など並べても老人のクリゴト位にしかならないことと思うが、求めに応じて同級生一同に代って悪文をかえりみず偶感の一端を述べ責任を果たす次第である。

私達の中学時代にラグビーをしていた学校は福中、福商とわずかに3校であり。その3校で春夏に練習試合をしてお互に技を競ったものである。そして秋も深まった11月末頃に全国大会の予選が行なわれるのが常であり、これが最高の目的でもあったのである。私達が最も皮肉に思ったことは、幾度か重ねた練習試合で、福中には一度も負けたことがなく、一度も勝ったことのない福商にそれぞれ決勝で反対の結果を生み、福商には勝ったが、福中に負けてしまったことである。その間の悲喜交々の思い出もいろいろあるが、それはさて置き、当時の福中、福商の選手諸君と30数

年過ぎた今日でお互に深い友情を持ち続けながら温かい交際をしていることの喜びである。こんな深い友情の絆となったのが私達の中学時代のラグビーであったことを何んといって感謝してよいであろうか。ラグビー精神云々といろいろのことがいわれているが、私はこの友情こそ真のラグビー精神の現われの一つと思う。

私達の中学五年時代の選手は4年生2、3名、3年生1名で、大半が同級生でしたが、ただ今生存している数名の同級生のことはさて置き、数名の他界者を紹介させて戴き、私のこの文の責を果たしたいと思う。

故青柳惣三郎君

東中洲料亭「青柳」の次男坊であった。田舎者の私はよく遊びに行き、仲居さんの掃除姿など見てびっくりしたことであった。

センタースリーとして腕も立派であったが、主将としての貫禄もあり、さらになかなかの美男子でもあった。

西南学院主将をつとめ、八幡製鉄に入社。多くの女性に愛されながら昭和14年頃大東亜戦に応召。昭和18年ガダルカナルにおいて戦死されたと聞く。

我々は惣チャンの愛称で呼んでいた。

故副田好美君

樋井川の出身。

ラグビー部だけに専念した名フッカーであった。余り口数はなく、黙々として自分の責任を果たすという、真の犠牲的精神に徹した人であり、平常はおとなしい人柄であったが、いざという時には猛牛の如く敵中に突進する勇猛さがあり、別名「水牛」という愛称によって皆から親しまれていた。

母校修猷館の軍教の教官として奉職中、昭和15年応召されたが、酒井部隊の小隊長として、「ノモンハン」事変に参戦され、壮烈極まる戦死をされたという。「水牛」の如き彼の最後だったことだろう。

故山田完二君

姪の浜から通学していたが、なかなか快男子で私と一緒に陸上競技をやっていたが、何時の間にかラグビーの名選手になってしまっていた。スタンドオフの重責を果たしていたが敵中盲目メッポウ突き込んで行った彼の姿が、今だに昨日のことの如く思い出される。

彼は又やや不良露出症の点があり、時々部長先生に煙草一本くれといって堂々と喫っていたのに驚いたことがある。

遺族の方が福岡に住んでいると聞いているが、今だに逢う機会がないのは残念である。

通称「山完」で通っていた。

故井上重臣君

福岡市水源地である曲淵の出身で、黙々とフォワードのロックをやっていた。真のラグビーマンだったが、中学卒業後間もなく、病を得て亡くなったと聞くのみである。当時我々も学生であ

り、自分のことのみに追われ、田舎に病を得ている友人のことも知らず、甚だ申し訳なく思っている。

故松尾弘房君

君は修猷館水泳部の創立者の一人吉田先輩の弟であり、水よし陸よし、畳の上よしのスポーツマンであった。万能選手の君は、雇われてラグビー部に入り、ウィングとして優秀な選手であったが、美人薄命とか。美男子の君は何故か我々の仲間から離れ、他界されてしまった。

浅黒い美男子の面影のみ忘れず。

昭和6年の思い出

長谷川盛一（昭和7年卒）

部史を編纂されるにあたり、私共の時代のことを書くように言われた。しかしいろいろ調べたけれどもはっきりした資料もなく、また30数年前のこととて記憶もさだかでない。よって当時の副将大神君の記憶も参考にし、私なりの記憶をたどって印象に残っていることを綴ってみたいと思う。従って抽象的に過ぎることや、多少誤った記憶もあったかもわからない、何卒お許しを乞う。不運の昭和5年度も終り、私共の時代となったが、卒業生も少なかったので、私共のメンバーは古強者揃いで、5年生が10名いて今年こそはと当初より意気軒昂たるものがあった。そのレギュラーメンバーとしては、

林　吉武　奥村
石井　田中丸
井尾　大神　長谷川　内堀　高尾
柴戸　不破
榊　高木　下郡

であり、その他に柴田、安部、今泉、坂井、伊勢田、権藤、小野、藤、河野、笠の諸君がいた。

まず、榊は村のモダン・ボーイ。林は質朴剛健にして榊と一寸反対。しかしラグビーに関してはどちらも大柄にして頑丈、機関車の前面にピタリふさわしい男。井尾はフッカー。小粒ながらも闘志満々として両側の大男の肩にぶら下がるようにしてスクラムを組み、ただ一途にボール掻き専門である。柴戸、石井は猛牛の如くフロントローを押しまくる馬力の持主でありながら、気は至って優しい桃太郎のような男。バックロー高木は口八丁手八丁、時にユーモアも飛ばし試合巧者。チームになくてはならない存在。吉武は痩身鶴の如く、よくもあの身体であれだけの働きが出来るものだと感心させるし、又時には皆を笑わせるような男。大神はフォワードの重鎮。フォワードを率いかつフォワードから信頼もされている兄貴株。ハーフバックは小生でこれはまたハーフバックらしからぬ存在である。部生活が一番長かったので年功で

主将である。2年生の時に入部し、3年生の時に池田先輩のあとを継いでハーフとなり、そのまま5年生まで同じ位置である。その間に縦横共に生長し、大男の部類に属するようになった。しかも動作も鈍く、よくもまあハーフが勤まった者だと、自分ながら思った。内堀は中肉中背、おとなしい存在。でも試合となるとなかなかやる男。バックスは不破を除いては速成の感なきにしもあらず。素朴ながら脚力と馬力と熱意の持主、田中丸は部内一の長身。皆小細工が出来るようなキメの細い動作はなかった。両ウィングとも陸上競技出身で、奥村通称カメチャンは脚も速く一寸横に曲ったりすることも知っていて、一度ボールを手にするとなかなかつかまらず、かつなかなか倒れない小うるさい男。下郡は小粒ながらずんぐりしていて、一度走り出すとロケット弾の如く一直線に曲ることも止ることも知らない。従って攻撃よりも防禦に威力を発揮し、バックアップの名人で、敵に一度バックラインを抜かれるや、反対側のサイドからでも獲物を追う猛犬の如く一直線に敵に向って突進し、肉弾をぶっつけて敵を倒すのである。掴まえることでなく衝突によって倒すのである。神風特攻隊もかくの如くだったかもわからない。高尾はマネジャーも兼ねた温厚？なる少年。これらすべて豪の者揃いで、しかも和気あいあいたるチームであった。私共同級生10人の中、今生きているのは4人である。病死したもの、戦死したもの、いずれも惜しい人達ばかりであった。

チーム力としては予想通り断然強いチームで春から群を抜いていた。私は修猷チームの黄金時代というような気持ちさえしていたし、これを一層磨くために練習も重ねた。他校の練習情報を入手し、仮想敵チームがランニングパスを10回やっていると知れば、私共は20回やるというふうで、練習後も月を仰いで400メートルのトラックを10周したものであった。

私はただがむしゃらな強さでなく、垢抜けのした強さにしたいと思った。これまでの火の玉の如き闘志の権化のような赤い色のユニフォームを、もっとスマートなものにしたいと考え、独断でブルーと白の縞に変えてしまったのである。おとなしいユニフォームにしてしまったのである。一見しておとなしいチームであるが、試合してみると強いというところが私の望みであった。そのことは実現したのであるが、後で先輩に目の玉が飛び出る程に叱られた。無断でかえたのがいけなかったのであった。私は先輩の気持ちもよくわかり先輩には済まないことをしたとは思ったけれど、私の考えも悪いとは思わなかった。先輩も私共が当時強かったのでそれに免じて許してくれたこととは思うが、いずれにしても叱られた時はもう出来ていたので後の祭であった。

私共が好調であることを校内にPRしなければいけないということで、宿敵福岡中学と練習試合をしようということになった。勿論勝つことはわかっていたが、何点差をつけるかが問題であった。しかも意地悪く試合場を修猷グラウンドと決めてしまったの

である。つまり私共の強さを母校の諸君に見せてやろうというのが魂胆であるから、福岡中学の選手諸君には誠にもって迷惑千万の話で気の毒であったけれども、売られた何とやらで断るわけにも行かず、当日私共のグラウンドに乗り込んで来た。結果は40点位の差をつけたように思っている。中学校では勿論敵する者はなく、私の記憶の範囲内では、高校級では西南学院に8－6位の僅少差で敗れた位だったと思う。もっとも西南学院のラグビーチームにはほとんど我々の先輩で、修猷O・Bチームと言っても過言ではなかった。

ある夜、私の家に熊本の五高のマネージャーの来訪を受けた。何事ならんと不審に思い来意をただすと、翌日の対五高戦を中止して欲しいということであった。すでにチームの皆に連絡する術もなかったけれど、致し方ないことで承知した。理由はよく聞かなかったけれど、後から聞いた話では、私共は前に福高と対戦し49－10位で大勝していた。その福高に五高が敗れたそうで、「お前達、修猷とやってもコテンコテンにやられるだけだ、やめとけ」と忠告した者があったとか。まあその真偽の程はよくわからないがそれほどに強かったということである。その試合場は九大グラウンドであった。これは福岡市の東の涯であり、修猷館は西の涯であったから、チームの者も糸島、早良と西の方の者が多かった。試合の中止は翌日グラウンドで皆に告げた。だが榊が未だ来ていなかったが、ある者が「榊が来たらヒャッ20銭損したと言うバイ」と言った。やがて彼がグラウンドに現れたので試合中止の旨伝えたところ、本当に開口一番「ヒャッ!! 20銭損した」と言ったので皆で大笑いだった。当時の電車賃が往復で20銭だったのである。

その年の中学校の大会は福高主催、佐高主催、大毎（現在の毎日）主催の全国大会九州予選であった。福高、佐高主催はいずれも優勝し、福高では楯、佐高では優勝旗を貰った。

佐賀からは終列車で帰って来た。夜遅く博多駅につくや、よせばよいのに例の榊が又優勝旗を取り出しかついで帰ると言い出した。止めても聞かないので、仕方なく彼にかつがせて深夜の町を瓦町から川端町へと歩いた。そして川端町附近のうどん屋でうどんで祝杯をあげ、かつ空になっている胃の腑を満たして解散し、それぞれの家に帰ったことを覚えている。

このように順調に進み、最後の全国大会参加の夢を見て練習に練習を重ねた。12月には最後の合宿に入り、疲労回復と称して東中洲のむし風呂に行ったりした。

そしていよいよ大会の日がやって来た。しかし主将たる私は何が当ったか猛烈な下痢をしたのである。主将として十分摂生していたのに何たる不運か。人々は「お前、合宿でやりっぱなしに食うて、食いすぎたとじゃろう」と私を責めた。私は決して食い過ぎた覚えはなかった。とんだ濡衣である。もっとも食い過ぎかどうかは個人差もあることだし、一概にどうと言うことは言えな

い。まあ理由はとにかく、「お前は先のある身体だから第1回位は出なくてもよかろう」と不名誉なことながら休場させられた。第1戦は佐賀中学だったようである。甘く見て甜めてかかったわけでもあるまいが辛勝した。天気も悪かったせいもあろうが。あとで副将の大神が「お前が出ないで負けたら申訳ないと思うと気が気でなかった」と述懐していたのを覚えている。第2回戦は嘉穂中学、優勝戦は福岡中学と対戦した。優勝戦には多少無理ではあったが出場した。当然の結果として予想通り勝って優勝することが出来た。けれどもあまり点差は開かなかった。

ここまで追い上げて来たラグビーの名門としての福岡中学の伝統の根強さというものを、つくづく感ぜしめられたのであった。

それにしても4年間の苦労が実って、主将として今この手にしっかりと渡された優勝旗の重味を感じた時、何とも言えない万感が胸にこみ上げて来るのであった。授与式が終って諸先輩から労をねぎらわれた時、始めて優勝の実感が湧き、これまでこらえていた感激が一挙に涙となって眼から溢れ出るのであった。

しかしながらこれで九州を代表して甲子園へ駒を進めるというわけにはいかなかったのである。それは今年から台湾代表が1枚加えられたからである。私共はほとんど熱帯に近い台湾のものがウィンタースポーツであるところのラグビーを行なえるはずがないと思った。その日は12月30日であったと思う。いざ試合が始まってみると意外に手ごわい相手であった。勝てそうでなかなか点にならなかった。まさか高砂族が新高山から馳せ参じたとは思わないけれども、体格がよくてスタミナがあって、それが技をカヴァーしていてどうにもならなかった。それは負けてもともと、勝てば儲けものというものと、勝ってもともと、負ければ損というものとの立場のちがいで、その精神的負担は大きい。そのことがこの場合にあてはまったのではあるまいか。ラグビー競技というものは、勝っている場合、そのまま逃げ込もうとすれば時間稼ぎをして逃げることがある程度可能である。この試合がそうであったとは思いたくないけれども、押し切られ、時間が迫り、私共はあせりを感じた。しかしあせればあせる程すべては裏目裏目と出てついに物にならず、タイム・アップのホイッスルは鳴り響いてしまった。嗚呼、何たる醜態であろうか。先輩に合わせる顔もなく涙も出なかった。矢張り何所か心の隅に油断があったのであろうか。誰を責めようもない。身から出た錆である。もし油断をしたのであったとすれば、これはラグビー精神に反した恥ずべきことであったと思う。

かくして、中学時代最後のラグビー生活も不覚の一戦をもって終りを告げたのであった。

しかしながら、決して空しい一年間ではなかった。内容もあり、愉快な1年であり、苦しかったことも今は楽しい思い出となっているし、又いろいろの教訓も与えてくれた。卒業後はそれぞれの道を得て進んで行った。その方向は各々異った方向であった

ろうけれど、すべてラグビー精神をもってフェヤプレイで進んで行ったことと思う。最後にすでにこの世を去った多くの球友の冥福を祈って筆を擱きたい。

思い出は胸の中に

大神和敏（昭和7年卒）

「罪の意識」なしにその頃を語ることは出来ない。といったら気障すぎるでしょうか。

つまり人生で言えば、早春の純情で熱血に沸った時代が、かけ替えのない輝かしさでそこにあり、また仮にその頃を思い出し、その頃を語り合うとしても、ありきたりの思い出話としては一寸カスッタ音がひびくのは、私達の早春に引き続く青春の時代が余りに過酷なものであり、余りに多くの生命が犠牲として失われているからです。

どうせ威張るのは先輩の役目。ギャ鳴りはそのままで、参考までに、私達が5年生の時（昭和6―7年）の戦力の一端を御紹介致しましょう。2年続けて福中に優勝をさらわれた後、割に人材が揃いました。

バックスは論外ですが、フォワードの脚力にしても、100米13秒以内が6人でした。これは当時の早稲田ラグビー部の入部資格基準と同じだったと思います。重量も60キログラム以上がほとんど。当時の中学クラスとしては、朝鮮の京城師範、秋田工業に次ぐものではなかったでしょうか。

割合順調な滑り出しで、福岡附近のオフィシャル戦その他に勝って行きました。

福岡クラブ、九大のオッサン達はともかくとして、苦手は西南学院高等部の兄チャン達（これは、修猷ラグビー先輩の二浪、一浪秀サイ連で固めたから）だけ。九州、山口の高、専連中には一度も負けませんでした。ウソに非ず。中学は問題にしませんでした。ホントですよ。今で言えば文字通りの超高校クラス。

それはそれとして当時の5年生10人の中、6人が三十路を待たずにあの世行き、……語れば罪なのですよ。

言わして貰えば、一人々々がミンナいい奴だったということだけです。林の顔が、榊の顔が、奥村のカメチャンや、丸さん（田中丸清吾）、鉄城君（下郡）や、美少年高木の顔が迫って来ます。書いてくれとは言わないのです。じっとお前の胸の中にしまっておいてくれというのです。

本当にかけがえのない時代だったのです、私達のその頃は。2、3年前でしたか、井尾君が雑談の後、ポツンと言いました。

「どうして俺達は台湾坊主に負けたのかなあ……今でも分らん」

師走も押し迫ったあの頃、春日原の枯草が眼に浮かびます。九州ではテモなく（それ程でもなかったか）優勝して、その年に限

って、キンシュク政策とやらで、台湾―九州は春日原で第1戦、甲子園（花園だったか）には勝者のみとかで一両日おいた試合に、わけのわからぬ負け方をした。……これが未だもって井尾には分らぬというのです。私にも分りません。主将の長谷川君でも柴戸君でも分らんでしょう。分っているのは神様だけかな。いや神様も知らんでしょう。度々喰わされた合宿のアラメ君ですよ、知っているのは。アイマイ、モコの彼方にあの頃の輝きが見えます。ではこの辺で。

若き日の一コマ

不破修平（昭和8年卒）

ラグビー選手時代の思い出をという御註文を受け、苦しい練習、楽しい遠征、勝ってよろこび負けて泣き、あれこれと走馬燈のように思い出がうかんできます。その中でも私の心に深く刻みこまれたゲームといえば、やはり九州代表にえらばれ全国制覇を夢みた4年生の全盛時代、くやしくも台湾代表に8対5の僅少差で破れたくやしい記憶です。このゲームには母も応援に来ていました。その勝負の敗因は私にありと自分自身申訳なく思い、当時の選手諸先輩にこの紙上をかりておわびかたがた弁解させていただきます。私のポジションはセンター、スリークォーター。ウィングには弾丸ウィングの雄名をはせていたポイントゲッターの下郡先輩でした。いよいよゲーム開始のホイッスルが鳴り猛然と試合がはじまりました。フォワードは大神先輩をはじめファイトまんまん。相手を押しぎみに試合を進めましたが、いかんせん、ポイントゲッターのウィングを動かさねばならないセンターの私が不調でとうとう得点できずに敗れてしまいました。その不調の原因というのは、九州代表をえらぶ福岡中学との決勝戦のときですが、敵ゴールの直前、マークの石松氏が悲壮な顔をして猛烈な頭突きタックルを私に行ないました。不覚にもそれを胸に受け、胸部打撲と右足くびに軽いねんざをしましたが、こっそり溝口大先輩の病院で治療を受け、医師と母の反対を押し切って何喰わぬ顔で台湾代表との戦いにのぞみ、その結果不調のていたらく、諸先輩にくやしい思い出を残させましたが、当時を思い起こし深くおわびします。当時の若気のいたりを御寛容下されば幸甚です。

追憶

平山新一（昭和9年卒）

30年もたつと憶い出すことの余りにも少ないことに驚く。でもすぐに憶い出すのは諸先輩のことで、なかでも山崎久助、田中丸清吾の両先輩です。

不幸にもお二人共胸を患われて短い命でしたが、修猷ラグビー部のためは勿論、個人的な事柄にも、なにくれとなく面倒を見て頂いたものです。お二人がお元気だったらと、今でも残念でなりません。

夏合宿には、慶応現役の山本太郎先輩と、前記山崎久助先輩に、こてんこてんに鍛われ、早く東京に帰ってくれればよいのにと、随分憾んだものです。

その他、吉岡真二、高木正敏、田中丸清吾、林隆吉、納屋政年、榊義憲の諸先輩がお世話下さいました。

また西南学院が強い頃で、中山、郡司、池田(省)、池田(達)、大里、森原、青柳の諸先輩がおられ、スクラムを組んだり、練習試合をしたりで、だんだん強くなって行きました。

山本先輩には御承知の通り現在でもお世話して頂いていますが……、吉岡、中山、大里、郡司、森原の皆様は如何されておられますか。それ以外の方々はみんな故人となってしまわれ、淋しいことです。

当時は部員が少なく、身体の大きいのや顔付のすごいのを引っ張り込んでは練習をしたもので、このうちに慶応に入って名を挙げた郡君がいました。入部した頃は、すぐにのびてしまい、たよりなかったのですが、強くなったものです。

後に主将になった宮崎君もニキビヅラで、ゴツイ顔でしたから引っ張り込みましたが、途中で退部されてしまいました。

シーズン途中から井上君も入れました。陸上部で足も早かったので、同級生では、阿部君を役に立たんといって止めさせたのですが、福岡高商に入ってからは大活躍だったようです。最後は悲愴な戦死を遂げてしまいました。

F・Bの権藤君が陸士受験のため、シーズン途中で退部したことは非常な損失でした。

こんな状況でなかなか都合よく行かず、最後に野球部から大石、小野の両君と、水泳部の森原君の助勢を得てようやくシーズンに突入しました。

公式戦で福中と接戦でしたが勝を握り、幸先よいスタートを切り、次に福岡高等学校大会には、福中と雨中戦で一大接戦となり、時間延長の末ようやく優勝。佐賀高等学校大会も、三たび宿敵福中と戦い、ついに凱歌は我等の手に。ノーサイドの笛と同時に、4年生の山内君が、「これが泣かずにおらりょうか」と号泣したものです。

待望の全国大会九州予選では、準決勝で福中と最後の対戦となりました。衆目の一致するところ修猷の勝利を信じられていたのですが、執念の福中に予想以上の大敗を喫してしまいました。

キャプテンシーの確立が出来ていなかったことから、チームワークの欠如となり、チーム内がシックリ行かず、ついに一番大切な試合を失なう結果となりました。

今でも、キャプテンシーとチームワークが、いかに大切である

かを痛感しています。

若き時代の思い出

早田昌武（昭和12年卒）

修猷館ラグビー部創立40周年に当り、部史の編算が企画されることになった。良い機会に恵まれたものと、大きな喜びにひたりつつ、私なりにラグビー生活を回顧して見ようと拙い筆を取る。

昭和8年の秋、私が始めてラグビーに魅せられて強い感動を覚え、これだ!! スポーツをやるならこれ以外にはない、これこそ男のスポーツだ、と感激した日。ザァザァと1日中雨の降る日だった。

学校の掲示板に、「告!! 明日は福高主催ラグビー大会決勝戦につき全員応援に来たれ」との掲示があり、友と語らい、雨の中を六本松にあった旧制福岡高等学校へと急いだ。

その日の対戦相手は宿敵福中。詳細は前掲のためはぶくが、零対零のまま勝負がつかず試合時間延長。暮れ易い秋の日は雨のため一層早く、はや夕暮れは迫っていた。延長間もなく、中央線辺りの混戦から突如としてボールが滑り出し、平山さんが抜け出した。ドリブルだ。水溜りの中のドリブルの球は正に滑るが如く流れてゴール内に入ったところを、坂井さんだったと思う、押え込んで唯一のトライ、優勝、高らかに響き渡るノーサイドの笛と共に、若人の熱気に燃え上った応援歌。

彼の群小を凌駕して
舞えば寄せ来る夕暮れの
流れは早し袖ケ浦
砕けてかつ鳴る潮の曲

正に絵に書いたような熱戦。困苦に堪え、ネバリにネバッて優勝、この感激の日は、永遠の思い出となる1日だった。

その後何とかしてラグビー部に入り度いと機会を待っていたが、家庭の事情で許されず、翌早秋、やっとのことで入部の運びとなった。

当時、同級生の部員には宮崎茂美、山部治邦、坂井将博、大神祐彦君等がいた。もう30年以上前のことで、ハッキリ覚えていることはあまりないが、入部した日、醤油で煮しめたような汗くさいボロボロのユニフォームを貰い、そこらあたりの廃捨て場でひろってきたようなボロ靴を貰って、これで一人前のラガーになったという実感が心の底からひしひしと湧き上り、非常に嬉しかった。それからのことは修猷ラガーなら誰しも経験した如く、雨の日も風の日も日曜以外は毎日、日の暮れるまで鍛われ、帰りに食べる甘党屋のうどん、ぜんざい、あるいはチャンポンのうまかったこと。ただただ、懐しい思い出である。

その頃上級生には、4年生に西川一三、古森四郎、郡敏孝、5

年生に、田村、安河内、鈴木、松井、古賀、山本、松永、菅原等の諸氏がおられ、殊に5年生は修猷前期の最後の黒服組として意気盛んであった（戦前昭和5年入学の生徒達は、制服として冬期は黒、夏期は白と定められ、昭和6年以降は、通称菜葉服と言っていたが、薄緑の木綿の詰襟が制服と定められていた）。

入部当時は鍛われっぱなしで無我夢中だった。5年生の送別会をどこでやったかも覚えていない。ただ、松永先輩から名バックローになるべく、大神と2人でへたばって動けないようになるまで鍛われたことのみ記憶にある。

翌昭和10年夏、合宿は郡先輩の家でやった。練習は福岡高等学校のグラウンドでしていたが、ある日、今は故人となった上田徳さんがみずからスクラム100本を提唱し、やるぞ頑張れ、もう1本、もう1本と、100本目にあと数本という時、ついに人事不省に落ち入って、驚いて皆で介抱したことも思い出の一つである。

当時、5年生には、西川、古森、郡、堤のベテランに吉田、守田先輩を加え、さらにボート部解散により（あまりいたずらが過ぎて）入部された上田、安部、熊谷等の生きの良い諸先輩がおられた。しかし、西川、古森、郡、堤の諸氏を除き、皆大東亜戦争により、故人となってしまわれた。今健在であったら、ひとかどの士となって活躍しておられるであろうが惜しいことである。

西川さんについては、昭和25年の『朝日』か、『毎日新聞』紙上に、終戦後ビルマより僧侶姿に身をやつし、ヒマラヤ山脈を越えて印度に入った唯一の日本人として紹介されたことを覚えている。当時川崎市在住とあったが、その後の消息はわからない。

私が東京在住当時のある日、仕事の関係で、東京電気通信局の建築課を訪ねたことがある。係の人と話していたところ、その課の課長から突然声が掛かった。「おい、久し振りだなぁ、忘れたか」、驚いて顔を見たが思い出せない、記憶にないので頭を捻って、「何方でしょうか」、「馬鹿野郎、合宿で、一つ釜の飯を食った仲じゃねえか」。思い出した。「やあ堤さん、久し振りですね」、てな具合で旧交を暖めた。これが約10年前、その後電々公社の設計課長になっておられたが、現在どうしておられるか？　郡さんと、古森さんは健在で、東京在住と聞く。

昭和11年2月六本松のすき焼屋で5年生の送別会を開き、大いに若さを発散させたが、それ以来逢ったのは、堤さんと郡さんのみとは。六本松に送別会場を選んだのは理由がある。現在でこそ六本松は繁華街であるが、当時の六本松は、市のはずれで、山と陸軍の練兵場に囲まれた小さな町であった。中学生専門の不良行為取締り団体に、教護連盟なんてものがあったので、中学生の身では、大いに飲み、大いに食うためには六本松は恰好の場所だったのである。

さていよいよ私も5年生に進み、部員と同級生に高倉、富永、井上、山本、山部、宮崎、鶴身、大原、波多江、大神、私と10名を越え、4年に河原、古川、北、松隈、工崎、原田、丹部、吉

田、また、3年には後年、慶応の名センターとして名をなした山崎達次郎君等が入って、部は隆盛を誇り、ただひたすら打倒福中を目標に、練習を重ねた。

当時のラグビー部長は、京城師範をして、3年連続全国制覇をさせたといわれる名コーチ、園部暢先生を迎え、大いにハッスルしたのも思い出である。しかし結果は前掲の通り、やんぬるかな。

現役時代思い出に残る試合が二つある。一つは、当時学生ラグビー界のナンバー・ワン早稲田大学が、満洲遠征の帰途福岡に立ち寄り、修猷、福中の連合軍と対戦した時のことである。この試合は私の現役時代に最も大敗した試合で、対戦成績は108対0、試合中、敵F・B井川（日本一の折紙つき）が独走50ヤード、後15ヤードぐらいでトライというとき、連合軍のF・B私の同窓鶴身が横から走って来て、無駄とは知りながら、1間ばかりのフライイングタックル、敵は逃げたと思われた瞬間、鶴身の手先が井川の足首に掛かったのであろうか、井川は、大地目がけて水平にダイビング、あんな見事なタックルは、後にも先にも見たことがない。

他の一つは、現役時代最高得点で勝った試合で、対戦相手は佐賀の強豪佐中、場所は、九医グラウンド、対戦成績は85対0である。今度は俺のトライだ、次は俺にやらせろ、という調子。全国大会の代表権はわが手にと、日暮れの街を、「彼の群小」を、高唱しながら、九医から西鉄久留米駅へと歩いた時の、あの友、この友の顔、今何処。

私の同級生で故人となったのは4名だが、高倉、富永、山本の3君は、早くより、ラグビーをはなれ、山部、大原の両氏は遠隔地にあり、ラグビーを語る同期生なきは、淋しき限りである。

最後に昔の写真を引っ張り出していたところ、春日原で写した懐しい写真があった。優勝カップを前に溝口先輩を中心として20数名写っている。川津先輩あり、山崎先輩あり、思い出は遠く昭和13年2月11日にさかのぼる。

幸いにして松永先輩が当時の『福岡日日新聞』のスクラップを保存しておられたので、それを拝借することにした。以下新聞記事を写す。

〃修猷闘志の勝利、福中倶の後衛陣予想外の不振〃

修猷倶、福中倶ラグビー定期戦。

◇絶好の天候に恵まれ、勇躍中央線を挟んで対峙した両軍の顔ぶれを見ると、修猷倶はFWの巨砲川津、福中倶はT・Bの強剛内田が、その予想メンバーから除かれているのみで、大体変更はなかった。予想された修猷倶の燃ゆるような闘志は、劈頭からグングンと福中倶を圧して、6分早くも松永のトライによって得点を先取した。

◇顔ぶれにおいて、百戦老巧という点において若干の長のあった

福中倶は、前半リードされたまま後半に入ったが、相変らずFWより射出される球は修猷倶に多く、これにつづく長谷川（九大）特異のスローモーは好調の田村（高商）のそれとよく呼応して、福中倶の呆然たるうちに、着々として敵陣に迫って、凱歌を奏し、ついに福中倶は富永、梅津、池田と後陣の俊鋭が傷つき、益々修猷倶の鋭鋒に物を言わせることになった。

◇修猷倶の面々が自己を信じて、グングンと一本調子に進んだに比して、福中倶は自己よりも他を信じた形で、当然自分で抜き得べき場合でも、次に渡さんとして果さず、敵に利するチャンスを度々重ねたのは目立っていた。何といっても、あれだけのT・B陣を持ちながら、球を少しも得なかったのが福中倶の敗因の最たるものであった。

◇この定期戦創立以来5回目に始めて復仇した修猷倶の得意もさることながら、元来の主眼である後進鞭撻に対してこの一戦が、修猷倶が後進現役に光明を与え、また福中倶が同様現役に先輩の雪辱という一念を注ぎ込んでの一戦は、蓋し待望のものであり、ここに本来の使命が果される訳で、福中倶がこの日全部O・Bをもって陣容を編成したのに対して、修猷倶が、河原、古川の両現役を起用していたことは、ひとりこの意味深からしめた5年振りの復仇、修猷倶の得意や思うべしの一戦であった。

試合経過　福中倶対修猷倶のラグビー戦は、11日午後3時から春日原競技場で、大里(主)、松井、弓崎(線)3氏審判、修猷倶の先蹴で開始23―14で修猷倶初の凱歌を奏す。

◇前半、6分福中倶陣ゴール前の混戦より松永ドリブルに進み、左中間にトライ。△9分敵陣25ヤード右ルーズの球、福中に出てFWパスを受けてトライ。△20分福中、敵のゴール前で混戦より球を得て富永、西と渡り左中間にトライ。△22分修猷、敵ゴール前、松永球を得て飛び込んでトライ。△26分修猷、自陣25ヤード内でルーズから青柳パントをあげ、伊勢田これを得てFWパスとなり、山本独走ポスト直下にトライ（伊勢田ゴール）。△タイム直前修猷陣25ヤードルーズより福中球を得て、T・Bパスとなり池田強引にトライ。

◇後半、6分中央タイトの球を長谷川、溝口と渡り溝口のハイパント、安部受けて中央に廻り込んでトライ。10分福中ゴール前のルーズから田村突込んでトライ（伊勢田ゴール）。△16分中央タイトの球、修猷に出て長谷川抜いて松永に渡り、松永右中間にトライ。△19分中央ルーズより修猷球を得て長谷川、青柳、溝口と渡り右中間にトライ。△24分中央タイトの球修猷に出て左T・Bパスとなり、安部よく廻り込んでトライ。△タイム直前修猷陣25ヤードルーズより西巧みに抜いてゴール前に惜しくも潰れ、そのルーズの球を高田左中間にトライ（池田ゴール）。

スコアー及びメンバー左の通り。

〔福中倶〕		〔修猷倶〕
28	11—9 17—5	14
2 4	トライ	3 0
1 1	ゴール	0 1
0 0	ペナルティゴール	0 0
1	反則	6

（修猷倶）

FW　上田（製鉄）、河原（現役）、古森（製鉄）、山本（福高）、古賀（西南）、伊勢田（九医）、松永（高商）

H・B　古川（現役）、田村（高商）、長谷川（九大）

T・B　安部（高商）、青柳（製鉄）、溝口（福倶）、菊地（高商）

F・B　早田（O・B）

（福中倶）

小石（製鉄）、徳永（西南）、石蔵（福倶）、村田（九医）、吉野（福倶）、田中（九医）、高田（門鉄）

磯野（門鉄）、富永（門鉄）、西（高商）

池田（門鉄）、松隈（門鉄）、梅津（門鉄）、野田（九医）

内田（高商）

ラグビー部部室

原田恒雄（昭和13年卒）

身も心も伸び伸びとした解放感に浸りながら、放課後の姪の浜石の渡り廊下を裸足でピタピタと渡って校舎の一番北側の旧寄宿舎を利用した部室へ着替えに行く日日を過したのは、ついこの間のことのようでもある。

階段を登り左に曲って3番目の入口（といって扉はない）を入ると10畳程の板張りの部屋である。側に一杯に取ってある窓、いやかっては窓として使用された空間が開け、戸はない、従って寒暖共に充分に新鮮な外気に接することが出来、健康的である。床はスパイクに打った釘の疵あとが無数についている。また窓の敷居も同様、恐らくスパイクの着脱に際しその紐を締め、あるいは緩めるために使用するからであると思われる。部屋の中はガランとして何もない。

周囲の壁に5寸釘が無造作に打ちつけてあり、汗と膏でフェルト状になって、色目も縞目も判然としない、ユニフォームが引っ懸けてあり、異臭を放っている。しかしその襟たるや埃りと垢で黒々と底光りを放っていて、この部屋への来訪者は必ずといってよい程それに暫く眼を止め、そして襟もとの感触に頸を縮め無意識のうちに頸筋を撫でるであろう。

さらにそれぞれの上にはヘッドカバーが、また薄汚れたサッポーターが引っ懸っているのが普通であるが、上下一体と仲良く同居しているのもある。外気の交流を良くしたのも宜べなるかなである。

部屋の隅には、軍隊でいうところの6尺机が据えてあり、その上に扉のない戸棚がでんと乗っかっている。机の上もスパイクの

疵で一杯である。戸棚は桝に仕切られ、それぞれにボール、ボンブ、紐通しなどが雑然と入っている。

戸棚は天井に届く高さで、その左上の角の天井板が破れて一人が悠々と通れる程にポッカリと口を開けている。そこから天井裏の頑丈な合掌組の一部がうかがえる。南側の窓の正面に部屋の高さと同じ位の高さの痩せ細った柿の木が立っている。

この旧寄宿舎を利用した各運動部の部室は、各々1室宛学校当局からあてがわれ、全部で10室もあったようだ。そして各室を覗くと各部の性格を強くにじませているのがわかる。

だが天井の破れているのはラグビー部の部屋だけである。低学年の時はこれが、何のため、何の理由であるのかわからなかったし、考えようともしなかった。

高学年になって、おのずとその存在理由と利用価値を知ることが出来た。

修猷館の生活の大半（時間的にも、努力量から言っても）を過した部生活の3ヵ年間についに天井裏を見ないで終った。といって私は出来の良い生徒とはどうみても言えないし、また当然天井裏の利用者と見做されていたと考えるのではあるが。

この天井穴の下で育った数少い同期数名の間にも戦いの傷は深い。

物故者

河原武彦　主将　センター

彼は少年の時は名フッカーであった。彼のフッキング練習に、球が見えなくなるまでスクラムの相手をしたものだ。

彼は伊崎浦から通学していた。当仁校出身で卒業後同志社に学んだ。

昭和19年福岡24連隊機関銃中隊から硫黄島へ転属し、玉砕した。彼が三男坊だったからだと、戦後聞いた。

北　定三郎　セカンドロー

彼は地行西町の美しい兄妹の住む広荘な家から通っていた。富裕の子弟であったが、練習のため耳朶が腫れ上って変型してしまったので、大層気にしていたものだ。

彼は明大に進み、北支で戦病死をしたと聞いたのはずっと後のことであった。

丹部栄治　センター

彼は箱崎から通学していた駿足であったが、病死した。

今は、寄宿舎あとの部室も取り毀されて跡かたもないが、亡き人々と共に若い日、力の限界を試した日日の出来事は部室の思い出と共に懐かしい。

思い出すままに

弓崎輝明（昭和14年卒）

この度守田君よりラグビー部史編纂に当り、51期生として何か書くようにとのお便りがあった。かかるものを余り書いたことのない小生には、いささか重荷とは思ったが、やはり書くべきは書かねばラグビー精神に反することであり、光輝ある修猷ラグビー部史の頁を飾らせて頂く身の光栄に感謝しつつペンを採らせて頂くこととなりました。

さて、思案の末古川君に連絡したところ、古川君が51クラブ、小生が現役当時についてと相談は纏りました。

その前にこの輝かしき修猷ラグビー部史を飾られたO・Bに対し、心からなる感謝を捧げると同時に、思う存分ラグビー精神を発揮し、祖国永遠の大義に生きられたO・B諸霊に対し心からなる御冥福をお祈りするものである。

× × × ×

50期よりバトンを受けつぎ、早速チーム編成にかかり、我々最上級生一同まず九州の覇者たらんことを深く期したものである。

我々51期が敢えて最も幸福だったと言い得ることは、団結強固なりしことである。これはなお幸福であり、かつ誇りとして許さるべきことではないかと思っている。

かくして新チームの練習は開始され、春の7人制、酷熱の春日原にひたすらなる練習は続けられ、漸くシーズン突入と、例年の如くであった。

さて、忘れることの出来ない二つの想い出がある。

まず第一は春の7人制大会に敗れ、部員一同剃髪致したことである。試合翌日部員は、カミソリの跡も一際青く、帽子の下からのぞかせて登校である。今川橋からテクテク学校へと……。ところが小生は授業中、早速先生に見つかり黒板ふきで頭を叩かれ、無残にも頭上は一面白墨の粉!!　サァ大変。若き日の正義感はそれを許さない。先生にくってかかる。怒りは止らない。授業後職員室に呼ばれてお説教頂戴となるが、悪い理由がないので何故謝るのかと断じて謝らない。光る頭は余程目だつのか、時々のぞき見に来られる先生もある。そのうちにチラホラ部員が叱られているというニュースをキャッチする。最上級生として、主将としての責任は重大である。トコトンまで頑張ろう。修猷魂が泣くではないかと!

今でこそ微笑ましくこのように書けるが、その当時は全く、真剣そのものであった。かくしてこの事件の終結は如何なりしか、残念ながら記憶がない。

第二は、部員一同の血判誓約書を作ったことである。このことは、当時問題になることを恐れ、部外には絶対に秘密保持を約束

した。内容は如何に激しい練習にも堪え抜き、最後の栄冠を獲得しようとの、鉄の団結の誓約を血判によってなしたものである。

5年生一同小生の下宿に集り、まず5年生一同の血判捺印、誓約。いよいよ4年生白井君入室、5年生一同のとりまく中に正坐。誓約書を読む。終ると、充分御了承なれば血判をと、安全かみそりの刃とヨードチンキを手渡す。全く有無を言わさずである。いざとなれば血は出にくい。臆病とかいうようなものではない。かくして滞りなく終了した。最下級生の時にはさすが辛かったことを思い出す。時代の差こそあれ、このことは決して無駄になったとは思われない。

いよいよ星を仰ぎみての最後のコンビネーションは連日続き、苦しきうちにも最後の勝利の夢をシッカと抱きつづけて頑張った。

ついに来たるべき日は来た。対福中戦！

西公園の黒田公の社に一同は水盃！　盃はついにわられた。一路春日原へ。すでに一二〇〇の修猷健児は母校のために、我々のために、応援旗は高く、陣太鼓の響は力強く、勢揃いしている。

世紀の一戦のホイッスルはついに吹かれた。

開始後、まもなく修猷、ゴールポスト直下にトライ。しめた！行先善しと思ったのであるが、戦局はついに我に利あらず。敗れた！

理由はラガーたる者語るべからず。勝つべくして勝てなかった。フィフティーンはグランドにばたばたと倒れ、男泣きに泣いた。応援団も共に泣いた。勝利の歌、「彼の群小」はついに高らかに歌うことが出来なかった。

「下級生諸君はよくぞついてきてくれた。有難うの言葉あるのみ。来年は必ず勝ってくれ」と、我々は52期に後事を託し、思い出尽きざる百道の学舎を巣だったのである。

修猷館に学び、そしてラグビーをしたことに感謝しつつ！

若き日に若き者よ幸なり。

現役諸兄よ、よく学びよく遊べ。

自重御自愛を祈ってやみません。

最後に古川君、守田君の日頃の御尽力に対し、同期生を代表し心からなる御礼を申し上げるものである。

昭和13年の人々

古川　博（昭和14年卒）

昭和11年秋、我々は優勝戦で福中と激しく雌雄を決したが、ついに利あらず惜敗し頭をうなだれて応援団の前に整列した。

本日の惜敗を慰め、明年への期待をかけて応援団の歌う〝与望は重し〟の声が、春日原原頭を埋め尽した。選手一同はただうつむいて無念の涙にくれている。応援歌がやっと終った。絶叫の後

のわずかな一瞬である。

突然一人の男が選手団の中より飛び出した。背は低く、ずんぐりとし、顔は春日原の真黒な土と涙でどす黒くなり、鼻だけが大きく真中にあぐらをかいている。正に異様な出立である。

〃なんか、こん畜生、来年は俺が勝っちゃるぞ〃一言そう叫んだ。まだ静寂が続いていたが、一度拍手によってその静けさが破られると、瞬くまに万歳の拍手となり天地も揺がすばかりである。〃河原頼むぞ〃、〃河原頼んだぞ〃の声があちらこちらから起こった。

かくて翌日入部以来未だ一年たらずだったが、その熱血を買われて河原武彦君が先輩現役満場一致で次期のキャプテンに選ばれたのである。昭和13年のチームはこのようにして河原武彦君（センタースリー）を主将に北定三郎君を副将として誕生したのである。

5年生は外に大神祐彦、原田恒雄、富永雄三、丹部栄治の4氏である。シーズン途中、柔道部より谷川、陸上より松尾君が応援に来た。

河原君が主将になった動機も振るっていたが、その後の練習も振るっていた。雨が降ろうと矢が来ようと自分がやると思えばどこまでもやる。真暗になるまでタックルをやらされた。ところが自分の気が進まなければ、晴天絶好の練習日和でも何度か練習取りやめを宣したことがある。正にワンマンである。下級生連中勝手に練習でも休もうものなら。今頃のしごき位の沙汰ではない。だからその当時、たとえ学校はさぼってもラグビーの練習だけはオール皆勤という連中が幾人でもいた。

我々は彼が馬力マンでワンマンだったのでナポレオンとかホルタンとか言っていたが、彼は自称ジャンギャバンといっていた。ペペルモコと呼んでやると御機嫌がよかった。

その河原君も硫黄島で戦死し今は故人である。彼の軍隊中武勇伝は数々あるが、最後硫黄島で単身抜刀して敵陣に乗り込み、数人を切り倒し、二階級特進としてラジオやニュースで報道されたのは余りにも有名である。惜しい人だったが、彼らしい最後だったと冥福を祈っている。

副将の北君は蒲鉾板のような胸をしていたので、ポジションはロックフォワードリーダーだった。

彼は無口で色男だった。ロックをやられたばかりに耳たぶがはれあがりひん曲ってしまったと鏡を見ては歎いていた。彼もまた北支の華と散った。

丹部君（ウィング）は病死、富永君（セカンドロー）も戦死、現存しているのは大神祐彦と原田恒雄両君だけのようである。

大神裕彦君は、戦後修猷館が全国制覇した時のコーチである。村野工業との一戦では、思わず選手と一緒になってグラウンドの外を走り廻ったと話していた。当時監督の原山先輩、部長の佐久間先生、コーチの大神君のことを現役連中は修猷ラグビー部の三

悪とか三鬼とか呼んで鬼山、悪間、おおかみとか言っていたそうだ。

原田恒雄君はスタンドオフ、体は小さかったが凄いファイトマンだった。彼のタックルは実に見事、見ていて胸がすく思いだ。ボールを貰っても、進退極まると突撃一番体を丸めてボールと共にスクラムサイドに突入してゆく彼の姿は、恰も特攻機のそのように印象に残っている。

今は税務署勤務とか聞くが、あの勢でやられたら納税者はたまるまい。愚言。

その他忘れ得ない人々として、当時我々を指導して下さった山崎久助先輩、田中丸先輩。

山崎先輩。眼鏡の下から冷たく光る目、我々はしびれあがって練習にはげんだ。夜は自宅に呼んで御馳走をして下さった。刻みの深い皺が顔を縦断している田中丸先輩、なんだか物をねだりたくなるような親しみがあった。二人共今は故人である。

夏休みによく来た先輩、慶応の郡さん、練習の後の漫談が楽しかった。早稲田の上田徳さん、真黒な顔に白い歯をむき出して真面目に指導して下さった。沖縄特攻隊とか、惜しまれる。九大（当時福高商）の阿部さん、大松監督だって顔負けだろう、ぼりぼり鍛われた。

福高商の松永さん、マメタンと言っていたがドリブルは抜群で、バックロー連中は随分世話になったはずだ。目下『西日本新聞』勤務とか、いつの間にやら紳士になられたそうな。

1年先輩の早田さん、元気でいつもランパスについてくる。彼が来るともう一つもう一つで15回位は平気である。だからランパスは早田先輩が現われる前にすることにしていた。

以上昭和13年の人々とその周辺の人を思い出すままに書いてみた。

昭和13年は最初河原君が春日原原頭で予言した通りの戦績はあげられなかったが、河原主将を中心にチームがまとまっていたのは確かだ。また校門の各部間でもイニシャチブを握っていた。先述の柔道の谷川、陸上の松尾両君が気持ちよくラグビーに応援に来てくれたのも他の部から愛されていたからだろう。

今は残り少ない人員だが、とにもかくにも修猷ラグビー部の一頁を繋いだ13年だから誇りを持って今後益々頑張ろう。

私とラグビー

守田基定（昭和14年卒）

私の親爺は、健康管理がいたってやかましい人だった。だから私は、小学生時代から、視力が2・0だったが、疋田文五君（51クラブ）のお父さんの指示に従って、メガネをかけさせられたし、水泳も禁止させられた。

修猷館の1年生のとき、ドイツから帰って来られた、九大の中村助教授の診察で、心臓が弱いからはげしい運動はやってはいけない。とくにマラソンはもってのほかだと、注意されたことをおぼえている。

父は、一方で用心すると同時に、一方では私の体を鍛えることを考えていたようで、弓道部に入ることを進めた。私は当時、弓道は勿論、ピンポン、バレー、バスケットの類は、女こどものスポーツだと思い込んでいたので、大変いやだった。仕方なしに入部したものの、いつのまにかやめてしまった。

私が生まれ育った鳥飼4丁目（旧町名）には、ラグビー愛好者が相当いた。私の家のすじ向いには、西南高等部の中山厳さんがおられた。近所には、先輩の陸士に行かれた椎藤さん、宮崎茂美さん、上田徳さん。門司成弘、妹尾親尚両君のお兄さん達も一時やっておられたようだ。一軒隣りには従兄弟の守田三義がいた。また裏には剣道一家の井上さんの庭から毎朝竹刀の響がきこえてくる。いつの間にか、私は勇ましいことが好きで、やって見たいと思う心がうつうつとしていたようだ。

小学校からの無二の親友門司成弘君とは、左右のフッカーで1年間送った仲だった。福工のラグビー部生みの親である彼は、今は故人となった。彼の冥福を心より祈ると共に、彼と一緒に今でもプレーがやれたらと、残念でしかたがない。彼の分までやらなければいけないと思っている。

だから私が入部したのは他からの強制ではなく、自己の意志によってであった。だから、入部と同時に長い間の私の心のわだかまりが解消してしまった。これが私のラグビー生活を今日まで続けさせたことと思う。それでも、グラウンドに出て、先輩、同級生、後輩連がくりひろげる豪快なプレーにみとれる日が2、3日続いた。この私の気持ちを見て入部に踏み切らせたのは、古川博君、弓崎輝明君、今は故人である自称満洲浪人吉田孝生諸君の友情であった。ここに修猷館ラグビー部員としての私が誕生したのだった。たしか4年生で新人として生まれたと思う。後輩には、白井俊次、松岡正人、伊藤裕成、牧仰、三隅哲夫、薄平八郎君等、優秀選手が多数いるなかで、フレッシュマンとしての道は、なかなかに厳しいものがあった。体は小さく、力も弱く、足もおそい。そしてお前は虚弱児と言われていたのだから……。

本当に大変だった。自分だけは、人が出来ることだったら自分にも出来るはずだ。人が1回でマスター出来ることがたとえ出来ないなら、2回、3回と出来るまで何回でも練習すれば出来ないことはない。何の取得のない自分だから、昔の人が言った「読書百遍」式にやることだと心に誓ったものである。

家の者には内証だったので、汗によごれたユニフォームは、夜おそく洗濯した。時にはしぼるだけにして新聞紙にくるみ、床下にそっと入れたこともある。こんなことは自分さえ我慢すればことがすむ。また練習で帰りがおそくなったときのいいわけも、勉

強だとかで切りぬけることが出来た、しかし一番困ったことは、激しい練習で腹がぺこぺこになり、友人と三々五々帰路につくとき、この欲望を満たすため、すず焼とかキンツバを食べに行き、皆と1日の練習を反省したりすることがしばしばで、このために小遣いがいるわけだ。職業軍人の家庭に育った私は、学用品で入用の金は子供達が言うだけくれるが、小遣いは1銭もくれない。何とかごまかさなければ軍資金の出様がないことだった。いつも人の尻について行くわけにも行かない。時々嘘を言って金をもらうつらさは、今だにわすれられない。しかし母は、部に入っていたことも、だまして金をもらっていたことも知っていたらしい。

こんな調子でおそまきに入部した私はただ人一倍の練習のくりかえし以外になかった。一人の力が劣ればチーム全体の力が低下するので、生活のすべてを練習にプラスになるように組み入れた。授業中机の下で指の運動をして、握力やスナップのことを考え、余り夢中になって、先生の質問にとんちんかんな答をして級友の爆笑をあびたこともあれば、枕を相手にセーヴィングにはげみ、母にしかられたこともある。出来るだけチームの連中に迷惑がかからないように心掛けたが、なかなか上達しない。何のテクニックも無い私は、タックルとセーヴィングだけでも絶対はずすまいと心に決めた。無我夢中で教えられたことを素直に行動しただけだが、不安だったりこわいと思ったことはなかった。これが今日まで馬鹿の一つおぼえで習慣になっているようで、生傷がたえないわけだ。ラインアウトのジャンプにも精を出し、身長のギャップも余り感じないようになり、相手がチビと思って油断して私にとられ、くやしがっていたのも思い出の一つだ。

修猷館当時の部室は、たしか古い寮のあとだったと思う。窓枠の全然ない2階にあった。今の部室にくらべると大変きたなかったが、部屋はずっと広かったようだ。シャワーの設備などもちろん無かった。何かにつけ社会学を教えこまれたなつかしい部室だった。

部生活で一番の思い出は何と言っても、次のことだ。

春の7人制大会に、一敗地にまみれた。

「くそ、やるぞ。やるからには勝つぞ。甲子園だ」「よし、今日から新規蒔直しだ」

毎日の練習にも次第に熱が入り、前々から指導に来ておられた山崎久助先輩（山崎辰次郎君の兄）と田中丸清吾先輩の声も一段と力がこもって来た。我々5年部員は宿敵福中との対戦に言語に絶するファイトを燃やしていた。一同は期せずしてこの気持ちをはっきり示し、記したい。後輩にも知らせ、この重大使命に突進せん。いや突進しなければならぬ。突進すべきだ、と、衆議一決。西秀夫君（バスケット部で、この大切な試合に、T・Bとして参加）の家が幸い学校のすぐ前にあったので、部員一同西君宅2階に集まった。まず第一に誓いの言葉を巻紙に認め、熟読した後署名血判をおすことにした。弓崎輝明主将を第一に、古川博

君、吉田孝生君、門司成弘君、中村政彦君、私、高橋保君、西秀夫君、以上5年の面々が終り、弓崎主将が誓詞のおいてある机の後に正坐し、古川副将、吉田君と左右に陣取り、階段入口より4年以下の部員が、緊張して待っている階下の部屋に向って、4年生白井俊次君より1人ずつ呼び出された。静かに上ってくる足音だけが強く皆の頭に響くようだ。主将の前に坐らせられて我々の血判を見ると、顔が一瞬引き締る。決意して上げる顔、それを眺める我々5年生の顔、お互に眼だけが爛々とかがやいていた。武者振るいがやむと、静かに文を読み終り、筆に墨をつけて署名するわけだが、体に似合わず字がいやに細くなったり、力みすぎてはじめの一字が大きすぎたりで、なかなか習字のときのようにゆかない。ほっとひといき入れるが、次に血判を押さなければならぬ。深呼吸一つし小指を出す。それを介添役の我々がアルコールで消毒してやると、指先をじっとみつめ、剃刀で傷を入れる。力余って深すぎる者あり、用心して何度もくりかえす者あり、見守る者も本人達も終始真剣な面だちであった。ひと仕事終った安堵感は、傷あとのヨーチン処理で再び引き締った顔になり、一礼して静かに階段をおりて行く。昇る者と顔見合せる一瞬の心はまったく清純そのものである。次々と後輩連中が、一生けんめいに署名する姿を見る度に、よしやるぞ、必ず福中を打倒するぞ、先輩のためにも、そしてこれら後輩の純な姿、心意気に対しても、何が何んでも勝たねばならぬ、と深く心に必勝を刻み込んだのだった。

かくて、約6ヵ月間の猛練習に対する総決算のときは、やって来た。12月20日春日原にて雌雄を決したが、これから先を書く勇気はない。とにかく負けてしまい、私達のせい一ぱいの努力も開花しなかった。私は本当に、私達と苦楽を共にしてくれた後輩連中に心から詫び、涙が頬をとめどもなく流れた。しかし私はそれでも、今日かぎりラグビーをやめようとは少しも思わなかった。むしろ何が何んでもやれるまで続けるぞと思ったが、レフェリーだけは逆に、絶対にやらぬぞと誓った。こんなくやしい、かなしいことは我々だけで沢山だ。少くとも自分の手で、こんなことを他人にさせたくないと思ったからだ。

この血判事件には後日談がある。我々は誓約通り負けて試合の翌日には、頭を剃って学校に行った。皆、人の頭を見ては余りの変わりように吹き出してしまったが、その笑いも顔がゆがみがちだった。

私達のクラスには、中村君、吉田君、弓崎君、西君、高橋君、私の6名の部員がいて、キンカン頭がひどく人目についた。その日、組主任久木田真一先生の試験があって、先生自身が監督だった。始まって10分程すると、私の前の中村君が黒板ふきで、頭を一発やられた。私と中村君は、コンビよろしくカンニング最中だったので、てっきり彼があげられたと思い、しまったと思ったがどうしようもない。次に私もやられるし、あちこちで音がする。

あわてながら音を数えると六つ、部員数に一致する。ついおかしくなったが、久木田先生がおもむろに口を開き、「負けて頭剃るやつは馬鹿だ。剃って勝つわけでなし、剃るぐらいならそれだけ努力して相手を負かしてこい」と、おごそかに言われて、しゅんとなった。悪いことは出来ないもので、これでカンニングがばれたら試合には負けるし、踏んだりけったりだと、終って中村君とぼやいたことを思い出した。冷汗びっしょりだった。

私にとっては、短かい部生活ではあったが、根性を初め、いろいろなことを教えてくれた本当に充実した学生生活が送れたと思う。卒業まぎわに肋膜炎をやり、これでラグビーともお別れかと思ったが、1年遊んで翌春東京農大を受験した。この時も体のことを考えて入部の意志はなかったが、試験が終って簡単な身体検査があった。懸垂が行なわれ、この鉄棒のぐるりに各部の連中が机を並べて終った受験生の入部勧誘をしていた。ほとんどの受験生は逃げて行く。これを見ていて、何かむくむくと頭をもたげるものがある。卑怯な振舞をしているようで、よしっと思い懸垂をし終ると一直線にラクビー部の机に行き入部をお願いした。一せいに喊声が上った。続いて出身中学を聞かれ、「中学修猷館」だと答えると、再度喊声が上り、今更ながら、諸先輩方々の築かれた部の伝統を有難く思った。

私は学徒で西部46部隊に入隊したが、今の平和台で河原武彦先輩の営庭一ぱい響き渡る号令を聞く度に、元気づけられたことも思い出の一つだが、あのお元気な姿は今は見ることも出来ない。聖戦の華と散られたそうで、心より先輩の冥福を祈りたいと思う。

終戦後ビルマから復員した私は、修猷、福中O・B戦の復活第1回目に出場した。なつかしの春日原だったが、青二才の私が一番年かさで福中O・B新島清さんとトスしたこともある。この試合は、残念ながら負けた。

私はそれからしばらくして学校の教員になったが、一番おどろいたのは、球友の連中だった。私は生徒と毎日ラクビーがやれるばかりにいまも教師にしがみついている。昭和26年から3ヵ年間、生徒と一緒の合宿がたたって胸部疾患でたおれたが、復職してまた、ラグビーを始めた。主治医の先生は大反対で、再発しても後はしらないと強く注意されたが、転職した三潴高校でも、私が来ると、先輩も部員も当然一緒に練習を見てくれるものと思って待っているし、登山家が「そこに山があるから登るのだ」の心境とまったく同じことで、楕円形の球があり、グラウンドを走り廻っている部員がいれば、つい球をもって走りたくなる。都合のいい言葉がすぐ頭にひらめいた。「病いは気から」と。私は「俺の体は、完全に健康である」と確信した。そして用心もした。その後今日まで続けているが、再発はしない。

日曜度にケガしてくるわが子に母がいった。「お前が修猷館で部に入った時、何度かやめなさいと言いたかったが、よく今日ま

で続けたね。本当によかった。私も、やめろと言わなくてよかったよ」と。私以上に気をくばり、かげから私をはげましてくれたことを心より感謝している。

私の宗教であり哲学は「ラグビー」である。

私が今日までラグビーが続けられたのも、修猷館における練習だと思う。それを育くんでくれたのは、修猷ラグビー部の伝統であり、諸先輩の指導の賜である。また母の愛であった。私は幸福だ。まだまだラグビーがやれるのだから。私は一人でも多くの人に、この幸福をわけてやりたいと思う。

今年私の一人息子が、母校修猷館に入学した。さっそくラグビー部に入部させた。部に対する御恩返しと、私の主旨であり、本人のためである。

三人三様の世の中に、フィフティーンが一つになって展開するこの素晴しいゲーム。チームワークが唯一の勝因を作る心情豊かなスポーツ。そのラグビーを教えてくれた修猷ラグビー部の発展を祈りつつ筆を置く。

51クラブ回顧録

守田基定

時は1948年（昭和23年）、暑い夏も終りをつげ、秋風がさわやかに肌身に感じる頃、いつとはなく話がラグビーに向けられるようになった。そして、51クラブは呱呱の声をあげたのだった。

51クラブとは、修猷館51回（昭和14年卒）の卒業生によって作られたチームである。その内で中学時代ラグビーをやった者は、古川博、川島啓二、伊勢幸人、中村政彦、守田基定くらいなもので、三浦一郎、万徳哲男はマネージャーだった。進学してからはじめた者に、八木隆輔、近松巌、安河内義男等がいる。他の連中は、西秀夫のバスケット、日吉太郎、西島勲は剣道で、王丸磯樹は野球だった。黒木寛、田川宏、疋田文五郎、伊藤剛平、花石弥彦、野瀬弘行等は同好者で、クラスマッチで活躍はしたが、ずぶの素人である。この顔ぶれで全国に名を馳せた51クラブの、神代時代からふりかえって見たい。

昭和20年われわれは今だかつて予想もしなかった敗戦を異国の丘で迎え、やがて故国に三々五々と引きあげて来た。

一応平和が訪れたとはいえ占領下にわれわれが育った環境は一つ一つ徹底的に破壊されて行った。とまどうわれわれをしりめに戦勝国の専門家ならぬ専門家によって諸制度は改められた。こんな中で戦中派のわれわれは、右にも左にも走れず、ただ生活に追われて右往左往するばかりだった。この憤懣やるかたない気持ちは手軽な方法として酒に向けられた。お誂え向に、古川君（やまき主人）が今の新天町南通りから、スポーツセンターのあたりに

あった「縄のれん」に店を開いていた。そこが一番気軽に行けるので、何時の間にかわれわれのたまり場となった。

古川君は結婚1、2年の頃で、愛妻と生まれて間もない柾子ちゃんと3人暮らし、なれぬ商売に悪戦苦闘中だったが、われわれ梁山泊は、柾子ちゃんをあやしたり、へたな手つきでおむつをとりかえたり、ネギをきざんだり、カンをつけてつけすぎたり、本当に手伝いかスィートホームの邪魔かわからない始末だった。勝手な時に来、気の向くままに行動するのだからたまったものではない。奥さんの心中を察するに余りあるものがあった。

われわれはダンスに熱あげるのも馬鹿くさく、なじめなかった。街には急造バラックのダンスホールが次々と出来ていったが、一向に振り向く者もなかった。われわれは若さのはけ口を求めては、いたのだが……。

ある日例によって酒を飲みかわしていたが、だれ言うとなく、「一ちょうラグビーでも始めるか」「うん、一ちょうやって見るか」と、心にもとめないやりとりではあったが、何かに刺激を求めていた欲求が、楕円のボールを追って、力一ぱい走り、自分の肉体を相手にぶっつけ、思う存分暴れて見たいと思う心が一致し、はじめてみようということになった。

横で聞いていた奥さんは、古川君の身を案じてか、ハラハラしてただわれわれを見つめられるだけだった。酒の勢もあってか窓を開けて、「奥さん、明日はよか天気ですばい。星の出とる。張り切らじゃあー」「古川。出てこなぜ。バッグばあずかって帰ろうか」「店ば休みにしときやい」「夫唱婦随が日本の美徳じゃ」、各人勝手な熱をあげた。

早速ユニフォームや、シューズの話が出る。心はすでにグラウンドにあった。何分終戦後のこととて、日常の衣服ですら不自由をしていた時代だ。しかし3人集まれば文珠の智恵とか……冬の古下着を染めることにした。ストッキングは姉妹の靴下を利用することでごまかした。シューズはとりあえず、地下タビやズックで間に合せる以外になかった。しかしだれとはなしに、古道具屋でスパイクを見つけ出して来だすと、猛烈にほしくなった。とうとう靴屋をくどきおとして、強引に作らせた。牛皮なんて思いもよらぬことで豚皮だった。雨に合うとふやけたようになって大変具合が悪かったが我儘はいっておれない。出来たのが上出来なのである。それでもみんな運動靴はよごれていてもスパイクの手入れにはいろいろと工夫をし、大切にしたものだ。

ユニフォームは、川島君の家が古くからの伝統ある川島裁縫女学校なので、生徒さん達に、「材料のなかろうけん、実習にちょうどよかばい。はよさせなせ」、勝手なことをいったものだ。

やらされた生徒さん達は、さぞめんどうな仕事だったろうと思う。洗濯もせずにその場でぬぐ豪の者もいた。「石ケンのなかけんそれも実習たい。どうでもよかが、黒う染めりゃーわからんけんあんまり気いしゃんな」、いい気なものである。

皆が持ちよったメリヤスシャツや毛のシャツを黒一色に染めてもらったが、セコハンであれば穴のあいたのや、つぎがあたっていたりしていたが、襟がつき、胸に白布で星を、五一を黒布でマークを作ってつけてもらうと、ぐんと引き立ってなかなか立派なユニフォームが出来上った。

何が出来、何がそろったといっては祝盃をあげていた。いよいよ練習時間を退社時間に合わせて、5時30分から九電グラウンド（薬院の現研究所）や平和台などに行った。例のユニフォームを小わきにかかえて皆良く集まったものだ。練習が終れば、古川君のところか、川島君の学校の宿直室で酒を飲みかわし、練習の反省会をやったものだった。日がたつにつれて練習だけではものたりず手あたり次第試合を申し込んだ。

当時は、学校以外は一部の同好者がどこかにもぐり込んで、試合を楽しむ状態だったので、われわれの第1戦は、修猷館の現役とやった。20―15で第1戦を飾っている。当時の写真を見ると、随分若々しい顔が並んでいる。今でこそ何人かハゲた連中もいるが、皆紅顔の美青年（？）で髪もふさふさしている。ユニフォームも福岡クラブなどのものを借用したし、クラブ入会金も2、3年免除していただいたし、随分ラグビー協会の方々から、精神的に経済面に大変お世話になった。こんなことが、一地方の同期生だけでチームを作り得た大きな力となったと思い、感謝にたえなかった。

やがて福岡で行なわれた国体で華が咲いた。それは平和台ラグビー場で、ラグビー協会のお歴々の混成チームと、エキジビジョンとして戦ったことだ。日本ラグビー協会の方々をはじめ、ラガー精神に満々たる多くの人々から心からの激励と讃辞を受けた。

ついに51クラブは、黒田52万石の城下町から、全国に名を知られるにいたった。これに刺激されてか、宿敵福中（現福岡高校）も、1、2年後に初代部長先生を記念し、淳クラブが生まれた。それからクラブも次第にふえていった。それは30クラブとなり、今日のダックスやドンタクが出来るオルガナイザー的役割をはたしたし、各会社のクラブ創立に発展したのである。

母校内部でも、各期を刺激し創立記念日に各期対抗の試合が行なわれた。ひときわ群を抜いていた51が後輩の混成チームを破り堂々の優勝をなしとげた。昔、われわれが猛練習に汗を流し、涙をこらえて精進した百道原頭で、潮風に吹かれながらビールの乾杯に頬をそめている写真も、アルバムをかざっている。

創立以来4、5年たつと、社会の中堅であるわれわれの身にも、転勤者があいつぎ、一人二人とメンバーから一時姿をけすものが現われた。九電組の伊勢幸人、三浦一郎の両君は宮崎に、日吉太郎君は熊本の農林省九州試験場に、守田は病気にたおれた。こんなことで、51はなくせない。先輩も後輩も51に集まってくれた。こんなうれしいことはなかった。「51をなくすな」の合言葉に、不足したポジションは、それらの人々によって満たされてい

った。その人たちは試合場にいっても、51期生を優先出場させた後の穴のあいたポジションにしか出れないので、確実に試合に出れるとはかぎらない。それでも不服もいわずに、出れる出ないはぬきにしてメンバー不足で試合がながれることを、おそれかなしむラガーメンが集まって来た。

平山新一先輩(昭和9年卒)、大神祐彦先輩(昭和13年卒)、そして後輩には、川島君の弟川島三生(昭和17年卒、鶴ケ丘高校事務長)、今井進(昭和18年卒、酒房いまい主人)、後田信一君等が常連だった。この外18年卒堀博俊(三井化学)、榊和彦(昭和20年卒、福岡県庁)、久保房雄(昭和20年卒、扶桑チップ鹿島工場長)などが、あぶれてもこりずにやって来ていた。

やがて、古着で作ったユニフォームを新しく作ることになった。黒木寛君は今でこそ黒木工務店の社長さんだが、当時はまだ部屋住みのころであった。ここに西島勲君がいる。職業がら色彩のことはわかるだろうと、衆議一決は早かったが、51の連中はうるさいのが揃っている。電話かけたり、ひま人は店にあらわれて、万事二人にまかせたはずなのに、その二人をそっちのけでああでもない、こうでもないと議論し合った。そして生まれたものが白地に、スクールカラーのブルーの二本線だ。のちに黒地に赤の二本線と変わった。このユニフォームは、後輩の発展を期待しつつ現役に寄附した。

51クラブは、数多くのクラブが生まれ、現在、A・B・C三つのリーグ戦が行なわれるまでに成長した福岡ラグビー界を祝福しつつ、わが使命成れりと、ほほえみながら静かに発展的幕をとじたのである。

最後に、連戦連勝の原動力「わったわった」を思い出すままに記して見たい。

試合の前後には必ず、やれ結団式だ、戦勝祝だ、で酒をくみかわし、作戦会議や、反省会と、もっともらしい会をひらきながらワイワイガヤガヤパーティになった。古川君のところは商売にならず、川島君のところはガラスは破れる、床板はふみはずすで、大変な被害だったようだ。

なにしろほとんどが素人なので、今更テクニックがどうだとかサインはこうだとか決めてもはじまらない。

「修猷健児は質実剛健たい。意気で行こう」

「相手をのんでかかれ」といっては一ぱいのむ。

「宮本武蔵の心境じゃ」といってはまた一ぱい。いつのまにか作戦会議はそっちのけで飲みあかした。

試合になると、何が何んでもドリブルで、「わったわった」で直進する。ボールであろうと、人であろうと、自分の前に来るものは総べておしのけ、ただゴールめざして「わったわった」の大行進である。なかには、剛の者がいて、一旦自分がボールを手にすると絶対に人々にわたさない。敵と取りあいになると、「何んと何んと、そうはさせんぞ、どっこいどっこい」とさけんでボール

をだきかかえている。他の連中は、それを中心に体ごみ「わったわった」と声をそろえて、一おし二おし三おしで行くのだから、相手はたまったものでない。博多の夏祭「山笠」と正月の「たませせり」を一緒にしたようなさわぎだった。

ゴール前になると、古川君、西君あたりがうまく球をさばいてトライしたものだ。相手はこの気合に骨抜きにされて、あれよあれよというまに負けてしまうのである。

何んといっても、ただ1期生だけでつくりあげた心意気と、これをあたたかい友情でつつんでくれた協会の方々を初め、先輩後輩、そして同好の人々とが渾然一体となってくりひろげた絵巻は、今でもわれわれ51クラブの連中の脳裏に焼きついている。思い出す度に、武者振るいが出るのである。

よきかな修猷

よきかな51クラブ

よきかなラグビー

われわれは母校ラグビーの発展を心より願うものである。

× × × ×

51クラブメンバー次の如し

FW

伊勢幸人（ラグビー部。九州電力）

中村政彦（ラグビー部。養雞業）

花石弥彦（日本炭鉱）

日吉太郎（剣道部。農林省九州試験場技官）

三浦一郎（ラグビー部マネージャー。住友建設）

守田基定（ラグビー部。県立香椎高校）

八木隆輔（精糖業。奄美大島）

安河内義男（福岡通産局）

H・B

川島啓二（ラグビー部。九州大学教養部）

野瀬弘行（陸上自衛隊二佐）

古川博（ラグビー部。料亭仕出し〝やまき〟主人）

万徳哲男（ラグビー部マネージャー。九州電力）

T・B

伊藤剛平（不詳）

玉丸磯樹（野球部。九州東芝月販総務部長）

田川　宏（外科医院院長）

近松　厳（三共製薬）

西　秀夫（バスケット部。山田ゴムKK）

西島　勲（剣道部。黒木工務店）

疋田文五郎（眼科医院院長）

藤田四郎（黒木工務店）

F・B

黒木　寛（黒木工務店社長）

追記

右記回顧録は、昭和40年4月15日、福岡市建設会館内「やまき」において、かつての51クラブ天狗連が集まった際、放談したものを、まとめたものである。

参加者左の如し。

日吉太郎　守田基定　古川博　川島啓二

思い出

松岡正人（昭和15年卒）

昨年ラグビー部創立40周年記念式典に参加のため、久し振りに母校修猷館を訪れ、先輩諸兄後輩諸子とお会いして、永い間会えなかった兄弟にめぐり逢えたようなある種の感動を覚え、来てよかったとつくづく心から思いました。このような式典を催して頂いたことに感謝の意を表したいと存じます。思い出を語れということですが、修猷5ヵ年の中にラグビー生活を除いては全く零に等しいようなものです。毎日の練習、試合、それについての喜びや悲しみなどのうち記憶のあるものを一つ書いてみたいと思います。たしか私たちが4年生（昭和13年）の時であったと思います。猛練習の甲斐なく7人制の試合に破れて、全員ガックリ、時に剛毅濶達な51期生が上級の5年生で、古川さん、弓崎さん、守田さん等々の猛者の睥睨で4年生以下ビリビリしていました。ところが翌日5年生から西さんの家（プール横）に全部員一人一人呼び出され何事ならんとおそるおそる2階の部屋に這入って行くと、5年生は今後の試合には絶対に勝たねばならぬと我々下級生たちに熱気を帯びて叱咤激励。お前はどう思うか、頑張る気があるかどうか、我々に賛成をすればその決意を示せということになり、血判状を作り自分の名を書き血判を全員押すようになったのです。自分の番になり、生まれて始めての血判でどうしていいのかわからず、小指を1本切り落すのかと観念。ところがカミソリでチョット切れば良いと教わりほっと一安心。自分の名を書き辛うじて血判を押して退出した。そしてまた我々を応援してくれた館友にも、反省とその決意を示そうと頭をカミソリで剃ることを申し合わせ、部員一同即日早速実行に移した。翌日登校。頭はまっ青。顔は連日の練習で日焼けした裏表のわからないような真黒な顔。見るからに異様な青坊主頭が修猷館中を濶歩したものです。K先生の授業時間に「どうして頭を剃ったのか」と質問。かくかくしかじか、試合に負けたのでと答えると持っていたソロバンで青頭に一発。「試合に負けていちいち頭を剃っていたら、修猷館のもんはみんな青坊主にならなならん」と叱りとばされた一幕。忘れ難し。その頭髪が伸びる間もなくドイツのヒットラーユーゲントが来日し修猷館に来校。ハンドボールの国際試合が計画されて、時の体操教官園部先生の指導でラグビー部員とバスケッ

ト部員の混合チームを作り、わずか3日間の練習で対戦。ピックアップされたラグビー部員は、青坊主頭で少々恰好が悪いので、体操帽を被って出場し、大観衆を前に熱戦？　見事11対1で負けたという余談です。今の人から考えると、試合に負けて血判を押し、頭を剃って意志を統一するということは、かなり討議を要する問題だろうと思います。当時の我々はなんのためらいも抵抗もなく共鳴して、純粋にその気持ちのなかにはいれ、耳が切れたとか皮がむけた位は怪我のうちにはいらず、毎日練習を続けたものです。最近根性云々とマスコミで言っていますが、ラガーから見ると、根性即ち精神力のないラグビーなんて存在しない。何年生の時か忘れましたが、在学中に川津大先輩から全部員に精神力について次のような講義をうけたことを記憶しています。戦闘力＝(体力＋技術)×精神力という数式を示されて、戦闘力の中に精神力の比重の大きさについて教わりました。外のスポーツ批判はあまり良くないが、試合中にものいいがついたり、審判にくってかかる様子などをみると、スポーツマンとしてあまり良い気持ちはしません。そういう点から考えても、ラグビーに対して今更ながら限りなき愛情を感じる次第です。卒業二十有余年の星霜が経っているので、この思い出も記憶違いの点があるかもしれませんが御容赦下さい。

みなさんの御健闘をお祈りします。

追　想

高松光彦（昭和16年卒）

私の頃の修猷館は、当時大活躍の文武両道の大先輩広田弘毅や中野正剛の影響で、学問が出来るだけでは値打がなく、どんな秀才でも何かスポーツをした時代でした。

私がラグビー部に入ったのは3年生の春で、たしか平山君と一緒であったと思います。

すでにその頃には、2年生の頃からレギュラーの牧君が俊秀の名をほしいままにしていたし、山田君、岩城君も大器と期待されていました。

勉強そっちのけで、夕方おそくまで皆と一緒に練習した少年の頃が忘れられませんし、輝かしい伝統のラグビー部に在籍したことを、今でも誇りに思っています。

それにつけても、その頃から25年（4分の1世紀）以上経ちました。なだれをうって敵陣に攻め込むフォワード攻撃も、丁度編隊を組んだ雷撃機が1機1機バンクしながら突っ込むようなパックスのオープン攻撃も、思い出すだけで血わき肉おどる思いですし、今でも夢に見てハッとすることがあります。

写真（巻頭写真2頁下）は昭和16年夏、2級上の伊藤剛平さん

の父上経営の大正砿業の中間グラウンド開きに招待され、伊藤邸でとったものです。

当時の嘉穂中学はラグビーを始めたばかりで、倒れても痛くないようにパンツにタイヤをはりつけたり、金具のついた革のバンドを締めたりしていて、こちら側はびっくり仰天したものです。帰りにはカッターシャツを各人もらいました。当時は襟付のシャツは学校で禁止されていましたが、余りの嬉しさに汽車の中で全員着替えて得意になって博多駅に降りました。

長い伝統のラグビー部がますます発展することを祈ってやみません。

万年補欠の想い出

今井　進（昭和18年卒）

昭和13年9月の初め、まだ2学期が始まったばかりのある放課後、私は中学1年生だったから未だ修猷館生活は1学期を終えたばかりのホヤホヤで、まだ小学生の卵の殻が尻にくっついていた頃の話。級友の津田君（現高松組）から「一寸来い」といわれて、何気なしについて行ったのがその後二十数年に亘るラグビーと私のつき合いの始まりでした。

体育館の一隅に5、6人の上級生があぐらをかいて並んでおられたが、その中の誰から勧誘されたか覚えないが、

「お前はラグビー部に入れ」

「ハイ」

と、簡単に話は決まったが、その時の上級生の人々の顔つきは山賊が屯するが如くで、恐くて、とても断れるものじゃなかった。その中に顔色あくまで黒く筋骨隆々たる、偉丈夫が今に印象に残っている。それが牧さん（現九重）で、ラグビーと共に今に至る先輩後輩のつき合いが続いている。その時牧さんは皆の中央に腕組みしておられたが、なかなかの貫禄で一番強そうで、私はこの人がラグビー部のキャプテンかなと思っていた、ところがでアル。まことにところがである。その後部室に行き、出入する上級生の一人一人を隅の方で小さくなって眺めていると、一きわ上背すぐれ、眼光鋭く、一寸猫背で、大きなラッパズボンをはいて、ぬっと入って来られた上級生がおられた。その態度がまた一流中の一流で、さっきの牧さんも、「オイ牧ッ」と呼びつけて、少々小さく見える。それで私は「さてはこの人がキャプテンに違いない」と思った。それがまた、また、ところがでアル。その後古川さんを始めとして弓崎さん、吉田さん、守田さん、中村さんなどの5年生が入って来られると、その人達が今私がキャプテンと思った人に「オイッ白井」とまた呼びつけである。それでやっとその人は4年生の白井さん（現新三浦主人）と分った。それから紹介されて、キャプテンが弓崎さんと分り、バイスが古川さん、他

に4年生に前記の人々の他に門司さん、高橋さん、西さん等がおられ、4年生が前記の白井さん、松岡さん、伊藤さん、3年生が牧さん、三隅さん、山内さん、薄さん、高松さん、大庭さん、平山さん、岩城さんの諸氏がおられた。昨年の40周年記念式典の時には、何人かのこの方々にお目に掛かることが出来て非常に懐かしかったが、皆さん私を覚えていて下さって、「今井、お前は大きくなったなあ」と仰言って下さいましたが、そりゃそうでしょう。当時私は小学生から中学生になり立ての、やせて貧弱な1年生だったので、部屋の隅で小さくなっていた。当時の私は、ライオンの檻の中にまぎれ込んだ兎ぐらいの存在だったと思います。

新入部員歓迎と称して、皆さんの前で歌を歌わされたことがありましたが、何か歌わねば、裸にして、チンチンに赤チンとヨードチンキを塗って塩もみにするぞと、ヨーチンと赤チンの瓶を持っておどかされて、べそをかいて唄を歌ったことがありました。

1級上の2年生に佐藤文治さんという方がおられて、自分より下に私という新部員が出来たので、大喜びで「ボールの手入れ」「空気入れ」「水汲み」、時には上級生のスパイクの手入れなどが全部私の上にかかって来た。

当時の練習時間はむやみに長く、暗くなってボールが見えなくなって、スクラム、タックルなどをやったので、練習後真暗な中でボールの手入れなどしていると涙の出る思いがした。そして家に帰り着くのはほとんど7時か8時で、父や母からは叱られ通しであった。

練習は前記の高松さん等と補欠ばっかり集まってやっていたが、それでもなかなか苦しくてへばってばかりいた。時にはレギュラーの相手となり、タックル、セイヴィング等をして痛い思いもした。

その年は、先輩では亡くなられた山崎久助さんがよく来られていたが、最後の大毎大会予選に福中に敗れて、春日原で暗くなるまで土をかきむしりながら泣いておられた。主将の弓崎さん、古川さん等の5年生の方々の姿が今に眼に浮ぶ。そして私は共に泣きながら報復を胸に誓ったものだった。翌年の主将は白井さん、その次は牧さんと歴代の主将を送り迎えしている中に、私の同級生に名手堀を始めとして島田、国松、藤島、赤司、杉本、柴田、久保、石橋、中津の諸兄、1級下に大塩、本城、またその下に榊、徳永等の諸君が入部して来た。そして体格も良くならず、足も速くならず、動きも機敏にならなかった私は、万年補欠といわれながら大してくさりもせず、一途に苦しい練習に耐えて来た。お蔭で4年頃からぼつぼつレギュラーとして試合に出ることが出来るようになり、5年生の時にはついに九州制覇して神宮大会に出場することが出来るようになった。詳細はこの部史の本文に記載されることと思うが。

とにかく修猷館生活の5年間、正確には浪人したので6年間、「お前は何をやった」と尋ねられれば「ラグビーをやった」とし

か答えられないような生活であった。

5年間指導に来て下さった先輩も沢山ある。前記の山崎久助さんを始めとして、時々餅菓子などを下げて振る舞って下さった田中丸さん。日曜日に軍服で（確か見習士官）やって来てすぐ鮮かな色のジャージーに着換えて、自らパント、キックと走り廻って鍛えられた溝口先生――ほんとに当時はお若うございました。今でも目を吊り上げて走られる平山さん、当時と恰好は同じです。私だけでなく後輩皆、死ぬ程鍛われたのは、戦死された安部さん、河原さんでした。その他大石さん、上田さん、伊勢さん、山部さん、三隅さん、早田さん、郡さん、山崎（辰）さん等、思い出せばきりがありません。特に古川先輩は私達が5年の時は入営前で、当時入営・出征ということは、大東亜戦争のさ中でしたので、死ということと、直ぐ結びついていましたので、自分の死というものを直視して、何か私達に遺して征こうという気が溢れておられたのではないでしょうか。真剣なものが溢れていました。それに当時の私達はよく分らないまま良くついて行ったのが、神宮大会出場という結果になったものと思います。

歳月というヴェールを通して見ると、死ぬ程、苦しかった、練習も今は楽しい思い出となり、鬼の如く恐しく蛇の如くいやだった諸先輩も今は仏様の如くなつかしく思われる。私も戦後数年間、当時の現役諸君には迷惑だったと思うが、ほんとに寝食を共にして鍛えて来て「鬼の今井」などとオリンピックのパレーの大松もどきの渾名をつけられてしまったが、それは、先輩に対する恩返しは修猷現役の面倒を見ることだと信じたからに他ならない。

そして、私は私と前記諸先輩の間に流れている、ほとんど肉親の血の流れのような情感が、同じく私と後輩諸君の間に流れ、そして同期生との間は軍隊でいう戦友愛のようなものがあり、何事につけても共に喜び共に苦しむところがあると信じている。それが修猷館ラグビーの伝統を培って行くものだと思う。

若いO・B諸君よ、鬼となって、後輩を指導して呉れ。その中から先輩、後輩の血の流れが芽生えて来るのだ。

さらに現役当時、宿敵と思い殺してやり度い程憎かった福中、福商の当時の選手諸君すらも、今は懐かしく、時たま会えば、普通の友達以上に打ちとけて話し会える。これがスポーツ、とり分けラグビーの良さだと思います。ほんとにラグビーをして良かった。一向に上達もせず、貢献もしなかった私をラグビーに引き入れて下さった、修猷館ラグビーに感謝します。

思い出すままに

榊　和彦（昭和20年卒）

昭和18年5月春日原競技場で近県中等学校7人制ラグビー大会

が挙行されましたが、残念ながら準優勝戦で福中に6―3の成績で一敗地にまみれました。この大会が実質的に終戦後のラグビー競技再開まで公式大会の最後の大会となった訳ですが、当時戦争の余波は未だ学園までには波及していなかったため、当時の部員は飯田部長、山部治邦監督（昭和12年卒）、今井進コーチ（昭和18年卒）の指導により、大塩主将のもとに、来るべき神宮大会、全国大会において雪辱を期すべく猛練習に励んでおりました。昭和18年秋、戦争はわが国に利あらず、転進玉砕相次ぎ、ついに学徒動員令が発令され、大学高専在学生はペンを銃に代えて出陣して行きました。中学生も、陸海軍の飛行兵を志願して行く者が続出しました。ラグビー部も本城瑞穂氏を先頭に昭和18年10月、同12月、昭和19年4月と多数の者が応募し部を去って行ったため、部員の絶対不足に悩みながらも残留者のみで練習は続けていたのであります。

勿論この頃はすべての公式対抗競技は一切中止されておりましたが、何時かは競技再開を希望に練習を続けていたものであります。

昭和19年に入り、在校生もすべて軍需工場へ動員されるに至り、総べての部が休部したと同様にラグビー部も練習を中断するに至りました。当時のわが国の状況から考えても、ボールを握ることは到底考えられないような時代となった次第ですが、それでもボールを離すことは非常に心淋しいことで、工場勤務の余暇をみて2、3の部員相寄り校庭で遊んでいたものであります。夢にまでみた公式戦も、昭和18年当時3年生以上に在学していた者は、昭和19年3月及び昭和20年3月に4年生、5年生が同時に卒業するに及んで、私達はついに一度も経験せず学窓を去ったのであります。しかしながら、当時の部員のラグビーに対する愛着が、戦後のラグビー復活に各上級学校の中心選手として活躍し、一役を買ったことは記憶に新しいものであります。

なお昭和18年頃より一般市民生活の物資は極端に不足し、食糧はもとよりすべてが最小限度以下の配給によりまかなわれていたため、消耗の最も激しいラグビーの練習には各部員がいろいろ工夫をこらして練習を行なったものであります。例えばジャージーにしても、対外試合用は破損した場合補充が絶対出来ないので、練習には絶対着用せず、各部員自家の父兄の毛のシャツを着用していましたが、ラグビーの練習用には余りにも弱くすぐ破損したものを自分で修理することの繰返しで、ついには使用不能となり、最後は裸体で練習しなければならなかったのであります。

パンツにしても、先輩が寄附して行った帆布の布地を失敬して作製していたが、皮膚が布地に負けて布ずれに悩まされながら練習を続けていましたが、特にFWのロックはスクラムプレーの練習の時は頭顔がすれて哀れでありました。

スパイクは部室にある先輩の捨てて行った物を再生して着用し、破損すれば裸足で練習していたため、夏季の練習では足の裏

に水泡ができ、走ることが困難になれば、布地を巻きつけて練習し、水泡がなくなればまた裸足で練習をしていたため、最後は足裏が堅くなったのか裸足で平気で練習出来るようになったものであります。

この悪条件のもとでも、練習は少しも軽くはなかったと思っております。当時は薬品も極度に不足し、一度傷を受ければ必ず化膿していたため、ほとんどの部員が体中どこかに化膿個所をもっていました。

練習スタイルはボロをまとうか、あるいは裸で、体中に化膿個所をもった若者が十数人走り廻っているのを見れば、外部の人には気狂い位に見えたことと思われます。

練習方法にしても、時代を反映し物資が消耗しない方法がよく行なわれていました。例えば、チームも二つに分け、両軍共ゴールに待機し、一人ずつ全力でダッシュして、ぶつかった地点で角力をとり、相手を地面に投げつけるまで勝負し、最後に相手方のゴールに達すれば勝負がきまる方法とか、10メートル・5メートルの中で5人ずつ紅白に分れ、ボールを相手ゴールに持ち込む練習等がよく実施されていました。この練習方法は、戦後の練習でも良く用いられていたと記憶しております。しかし部員の技術闘志は何時の時に劣らず、練習試合に福岡高商（福大の前身）と対等の成績をあげていました。

要するに、この時代は日本も最も悪い時代であり、修猷館ラグビー部40年の歴史の中でも最も暗い陽の当らない時代でありましたが、部員は他日あるを期して練習に励み、伝統の火を絶やさなかったことは、当時の部員としては輝かしい記録にも勝る誇りといえましょう。

若き日の追憶

久保房雄（昭和22年卒）

昭和20年8月15日、熾烈を極めた太平洋戦争も終りを告げ、戦時中動員により兵器工場へ、また陸海軍へ志願して行った館友もそれぞれ元気に戻って来た。9月中旬より本格的な授業も始まり、それと同時にラグビー部を復活しようとする動きが始まった。

幸いにして、それまでクラブ活動をしていたのは宮原君外極く少数でしたが、皆ラグビーの全盛時代（17年神宮大会出場）に入学したものばかりで、クラスマッチを経験した人が多く、それに柔・剣道部が廃止になったので、一応メンバーが揃い、かてて加えて諸先輩の献身的な指導により、当時としては比較的優秀なメンバーだったと思います。

もっとも終戦直後のことなので、スパイクはおろか、ユニフォームもなく、練習用のボールも満足になく、加えて極度の食糧難

時代で、先輩から猛練習をさせられると、イモ腹で走られませんと泣き出す者もいた位で、技術的にはたいしたことはなかったと思いますが。

戦後第1回の試合は、こちらの練習を見られた福中の先輩より試合の申込みがあり、11月の中旬だったと思いますが、九大のグラウンドにて福中と対戦しました。

福中のキックオフにて開始され、開始直後ボールを取って突進した野崎君に向って、福中のフォワードがよってたかって乱打し、たしか広田さんが主審だったと思いますが、非常に立腹され、両軍を集めて、こんこんと注意されるという、まあ戦後の時代を反映する試合でした。試合は一方的な勝利で23—0で勝ちました。

メンバーは次の通り

FW　西島、田中、久保、土井良、伊藤、◎野崎、大塚

H・B　渡辺、榊、宮原

T・B　吉田、森山、村本、西野

F・B　玉井

21年になり、野崎、西島、田中が卒業しましたが、下級生の入部が多く、おそらく戦前・戦後を通じて、部員の数では一番多い時代であったと思います。

戦績は、春のセブンでは福中に完敗しましたが、夏休み前の九大主催の大会では、筑中、福商、福中を連破し、9月初め福中との練習試合も完勝しました。当時はセブンフォアードで、フォアードが互格に戦えば、バックスは優秀で、九州では、福中戦で骨を折る位で後は圧倒的に勝利を得ていました。

9月中旬、久留米の九医グラウンドにて明善中学と対戦し59—0と一方的に破り、その帰り牧先輩より、希望なら東西対抗（後の国体で東西対抗で始まったが、後でこの大会が第1回の国体となった）に出場しても宜しい、との話があり、是非出場されるようにとお願いしたところ、福中がそれに異議を申して来て、9月下旬に対戦することになりました。

試合は当方の悪戦苦闘の連続で、何度もゴール前に釘づけされるという状態でしたが、ついに前後半とも両軍得点なく、協議の結果15分の延長戦を行なうことになり、延長戦に入る早々、タッチのボールを松本君が取って突進、トライをすると意気大いに上り、立て続けにトライを重ねて、名実ともに九州の王座につくことができました。なおこの時先輩よりスパイクを拝借し全員始めて完全武装にて試合を行ないました。

次に中国地区の覇者山口中学と対戦し、それに勝った方が、大阪に遠征して近畿地方の勝者と対戦し西方の出場校を決定することになったので、当時川端にあった、ミスミ靴店へスパイクを頼みに行き、早く作って貰うため米を5合ずつ持って行って試合に間に合うよう急いで作って貰うなど、今考えますと笑話のようなことをやり、山口中学との対戦では皆ニュースパイクで試合を行

ないました。

試合は10月某日、やはり九大のグラウンドにて行ないましたが、俊足バックスが縦横に走り廻り、先輩からは試合後叱言をくいましたが、楽な試合でした。

さて館友諸君の絶大なる応援と、今でいうカンパと、先輩諸氏の御援助によって、西宮に遠征することになりました。

当時は国鉄の輸送も極度に悪く、急行も博多より2車輛（2本でなく2箱）しか発車していない時代でしたので、前日より徹夜で窓口に並んで乗車券を購入するなど、苦労しましたが、習日全員学校をサボリ、平山先輩よりこてん、こてんに叱責を受ける一幕もありましたが、無事西宮の近くのお寺に宿を取り、関西の覇者、神戸2中と対戦することになりました。

試合は前・後半とも敵陣ばかりでゲームするという、押しに押していながら得点できず、逆に前半敵のうまいパント攻撃にて6－0とリードされ、後半反撃して1トライ上げ、タイムアップの前に中央にトライ、ゴールすれば逆転という場面となり、もう勝ったものと喜んだのもつかのま、敵のチャージによりゴールを失敗、その直後のセンター・スクラムを敵にとられ、あっと言う間にトライ、ゴールされ、ついに涙をのんで敗退しました。

東西対抗にて、神戸2中が秋田工業を破り優勝。正月の大会では福中が神戸2中を破って優勝したことを思いますと、誠に千載一遇のチャンスを逃したこと、今も残念に思っております。

スコア

修猷 6（0－6、6－5）11 神戸2中　部長 江崎先生　監督 三隅先輩

FW　平塚・牧瀬、久保、井上、土井良・岡崎、伊藤、松本、徳田・大塚

H・B　渡辺、榊、◎宮原・中田

T・B　三木・武藤、森山・杉、村本、西野

F・B　玉井

正月大会の予選は、1回戦で福中と対戦、先の遠征の敗退による気抜けのためか、あっけなく敗れ、ついに野望を達することは出来ませんでした。

以上昭和21～22年の概況を書いて参りましたが、なにさま約20年前のことではあり、当時はまだ戦後の混乱期で充分な資料も残しておらず、したがって充分でないと思いますが、前にも述べたようにスパイクをはいて試合したことも後半のわずかな試合であり、またサポーターなんかも全然なく、試合中に源氏の白旗ならぬフンドシをなびかせて走り、観客から哄笑が湧いたなどと、技術的には未じゅくであったと思いますが、幾多先輩の築かれた、名門修猷の名をけがさないよう、意気と熱と誇りを持って戦い抜き、後年の全国制覇の礎となれたと満足しています。

なお、戦後の部員が唱っている「二本木並木にそよ風吹いて……」の歌詩（歌詩という程のことはありませんが）は当時流行し

ておりました「ポプラ並木……」という歌をまねて口ずさんでいたものが部歌の如くなったもので、補足ですがつけ加えておきます。

当時の部員　部長　江崎先生

5年　宮原（主将）

FW　平塚、久保、井上、土井良、伊藤、徳田、牧瀬、大塚

B　吉田、森山、村本、西野

4年

FW　松本、井上、大鶴、大神、森山、石橋

B　渡辺、榊、杉、武藤、三木、三島

3年

FW　岡崎、水野、佐々倉、藤村、松本、末次(B)、中田、淵本

2年

吉原、中西

青春奮闘記

松本安造（昭和24年卒）

戦後ラグビー部がいち早く復活し、部員はそれまでの柔道部・剣道部が廃止となり転向した人が多かったようです。小生も剣道部からの転向組ですが、また先輩で復員し学窓に戻り入部する人も多かったようです。

こうして出来た部員は、知っている範囲で最も大きかった時と思います。対外試合も少々はやっていましたが、本格的な対外試合は昭和21年秋福中と第一回国民大会九州代表決定戦に行なった時が最初だったと思います。

場所は九大工学部グラウンドで、両校の応援団はほとんど全校生徒が集まり、対抗意識は非常に強いものがありました。

この頃はユニフォームも揃わずまちまちでしたが、この試合ではスパイクを始めてはいて試合したことを記憶しています。試合前福中の選手をみるとスパイクを用意していますので、こちらも試合前のわずかな時間に先輩から借り、やっと試合にまにあったものです。勿論新しいスパイクは先輩もつくれる時代でなく、今考えると変わったものです。

試合の結果は延長戦となり勝つことが出来、西宮へ遠征、神戸2中と対戦し破れましたが、今まで使用してきたグラウンドは草深く、時にはボールがわからなくなるようなこともありましたが、西宮球技場はその点立派でびっくりしたものです。試合も勝手が違い、充分力を出すことも出来ずに終りました。

遠征時のメンバー

FW　伊藤(5)、久保(5)、井上(5)、土井良(5)、平塚(5)、松本(4)、徳田(5)

H・B　渡辺(4)、榊(4)、宮原(5)
T・B　西野(5)、森山(5)、村本(5)、玉井(4)
F・B　三木(4)

続いて全国大会予選が始まり、この時は福中に破れ、シーズンも終り、また大半の選手が卒業ということで新チーム編成は大変でした。卒業生11名、その上三木君が嘉穂へ転向、玉井君は退部するし、残るは渡辺、榊、小生の3人だけ。この時に小生が主将となりましたが、翌22年はチーム強化の年となったものです。高武、佐藤、淵本君らもこの年に入部したと記憶しています。対外試合で福中には全く歯がたたず、明善校にも負けるし、とに角弱い年でした。

しかし、昭和23年は全国大会出場を目標に前年のメンバーそのままで頑張ることを約し（当時旧制5年生は新制高校3年生へ転入）、先輩の熱心な指導で練習も熱心にやり、かなりいける自信がついてきました。部員も漸次増え30名から40名程度になったと思います。いよいよシーズンも間近く、夏休みには戦後始めて今川橋のお寺で合宿することになりましたが、当時はまだ食糧事情も悪く不自由な面ばかりで、合宿前には先輩の自宅を部員全員で訪問、米その他寄附をお願いして回ったものです。

合宿は8月1日から8月14日までの2週間で、平山、大神、今井先輩を始め多数参加され、とに角鍛えられたことを今も忘れることが出来ない位です。練習は午前は少々で、午後2時からが大変でした。7時頃まで走って走ってスクラムの連続、泣きながら頑張ったものです。汗と砂で顔は真黒くなり、けがをするものも出ましたが、皆よく頑張りました。練習のない時はねることがすべてで、話をする元気もない位でした。でも全員無事に合宿を終ることが出来効果も充分あがりました。

夏休みも終りいよいよシーズンインとなり、すぐ第3回国体予選が始まり、1回戦で福高と対戦、これを破りついに九州代表となることが出来ました。第3回国体は福岡で、ラグビーは今の平和台ラグビー場でした。突貫工事のためスタンドも出来ておらず、赤土と雨あがりのためドロンコ試合となりましたが、決勝戦へ進み秋田工高と決戦しましたが、体力、技術共秋田工高が一枚上で大敗しました。

続いて全国高校予選が始まり、この時は佐賀、熊本にも遠征、九州代表となり、東京へ遠征しました。この時は一回戦に秋田工高と対戦また破れましたが、最上級生の少ないメンバーで戦後の修猷ラグビー部の一頁をつくりえたことは何よりの満足でした。シーズンも終り全国制覇をたくし佐々倉主将へバトンタッチしたわけです。

国体、全国大会出場メンバー

FW　高武(2)、藤村(2)、岡崎(2)、長(1)、川浪(2)、松本(3)、麻田(1)、佐々倉(2)
H・B　榊(3)、中田(2)

T・B　石橋(3)、淵本(2)、渡辺(3)、西野(3)
F・B　中上(1)
（末次負傷欠場）

昭和23年4月～24年3月、国体、全国大会の代表になるまでの経過

○第3回国民体育大会出場（九州代表、福岡）

1回戦　修猷 12—0 福高
2回戦　修猷 28—3 福商
福岡南部決定戦　修猷 13—12 明善　春日原
福岡県代表決定戦　修猷 18—3 常盤
北九州代表決定戦　修猷 22—21 佐一高　佐高
九州決定戦　修猷 0—0 鹿児島高四部（水前寺）
国体1回戦　修猷 3—0 高崎高校（関東代表）
同　決勝戦　修猷 0—35 秋田工（東北北海道代表）　平和台

○第1回全国高校大会出場（21年振り九州代表）

1回戦　修猷 27—0 西南
準決勝　修猷 6—0 明善　春日原
2回戦
県決勝　修猷 3—3 嘉穂

九州代表戦　修猷 6—3 熊工　平和台
全国大会1回戦　修猷 3—15 秋田工　東京

戦後昭和24年卒業の私達までは、修猷のユニフォームを着ることが出来なかったことが残念でしたが、それでも西宮遠征の時には各自冬シャツを持ちより、紫色一色、胸に星のマークをつけて出場したものです。また国体、全国大会の時には黒のユニフォームでした。スパイクは、全国大会へ出場する前始めて新品をつくりました程度で、不自由な時代でしたが、苦しくともたのしくラグビーに打ち込んだことが一生思い出となることを嬉しく思っています。

夏合宿の思い出

中田 主基（昭和25年卒）

昭和24年に入ると修猷館ラグビー部は、昨年から残っている3年生部員（佐々倉主将）を中心に約30名が猛練習を開始した。当時配炭公団で活躍中の牧・今井両先輩の熱心かつ親切？な指導により、メキメキ力をつけてきた。現役は戦争中なら、さしずめ重営倉を思わせる夏合宿を迎えたのがときに8月、修猷館校舎2階東端の教室であった。夏合宿は、短期間とはいえ、その猛練習に

は当時の部員は皆ナキベソをかいたものである。練習時間も大体次のとおりで、

6時～8時　体操、ランニング、基本練習
10時～12時　練習
15時～日没　練習

1日8時間以上はたっぷりグラウンドに出ていた。

当時のことで2、3思い出すまま書いてみたいと思う。

(1)下司(げじ)君の「お有難うございます」

夏合宿も後半に入り、酷暑の中の猛練習でみんなクタクタになっていた頃、丁度下司君（昭和25年卒、現在福岡自衛隊勤務）は身体をこわしてその日は練習に参加できず部屋で休んでいた。夏合宿で練習を休むことは、きたわれている同僚にスマナイという気持ちが一杯で、精神的には大変苦痛であったと思う。――当時はまだ物資難でセンベイ布団に腹を冷さない程度の毛布で過ごしたものである。豊富なのはアイスキャンデーぐらいであったろうか。――夕方の練習が終ってみんながドヤドヤと部屋に帰ってくる頃、下司君は毛布にくるまり、ひとり入口の窓の下にもたれていた。「どうや、少しはよかや」と気遣う同僚に「うん。みんなキツカッタろう」とすまなそう。そのとき今井監督が部屋に帰ってきて、下司君に水を与えながら「早く元気になって、頑張れよ」の声に「ハッ！」と坐ったまま最敬礼して茶碗を両手で受けながら「お有難うございます」。練習で首の皮がむけ、うすよごれていた彼が毛布にくるまっての動作がいかにもコッケイにうつったので附近に居合わせた者の爆笑を買ったが、下司君のその時は、複雑な気持であったろうし、思わず出た言葉であったと思う。

(2)藤田君と蠅

合宿も半ばすぎるとほとんどの者が足にマメができてうめき出していた。当時、最良のマメ治療薬はヨードチンキとタバコ。でも藤田君（昭和26年卒）のカカトのマメはひどかった。化のうしたマメの中にまたマメができて、よく蠅が止まっていたのを思い出す――これはどんなひどいマメができても、今井監督の命令でラグビー・シューズをはいて練習しなければならないので、よくなる暇がなく、かえってマメは悪化するばかりであった。当時は何でも走れば良くなるという半ば強制的な、半ば暗示的な先輩のおしえを忠実に守っていたからである――ハエがマメに止まって彼はそれを追うでもなくそのままの姿勢。ハエが止まった感じが、分らなかったようである。一茶の「やれ打つなハエが手をする足をする」の句の心境かと察すると、いやいや彼は手を動かすこともできないほど練習でグッタリ疲れて、まさに傷病兵を思わせる感があった。

(3)今井監督と弁当

早朝の練習が終ると今井監督は大きい弁当をさげて会社にご出勤である。もちろん部員が弁当を作るのであるが、当時の炊事当番の教育不行届きのせいか、時々監督さんを失望させたらしい。

弁当の中味はギッシリ詰めて入れるのが当然の礼儀？（当時の今井さんは食いざかり）であるのに、心ない者がフンワリと上品に弁当を作っていたのがいけなかったのである（なかにはあまりきたわれるので恩返しをしていたのかも知れない）。その日の猛練習にハネ返ってくる？　ことも知らないで……。でも弁当にフケなんか落さなかったのはさすがに監督思いの部員達ばかりであった。

この他、パンツではさまれてヒイヒイ言っていた川浪君（ロック、昭和25年卒）の顔の皮むけや、長（現姓大山、昭和26年卒）君のグラウンドで今井さんを見るとウンコをもよおすこと、あるいは、佐藤君（昭和25年卒）の「銭湯の脱衣箱」に身体が全部入るほど柔軟であったことなど、それぞれ印象の強かった当時のことは、今思い出すとみんななつかしいものばかりである。最後に日頃の猛練習の甲斐あって国体で全国優勝した当時の『西日本新聞』の記事を追記しておきたい。

第4回国体高校ラグビー

○準々決勝（10月30日）

秋田工業 32—3 保善商高

修猷館 33—3 川島高校（四国）

○準決勝（11月1日）

修猷館 25—6 秋田工業

——小粒の修猷は、猛烈な闘志によって、体量のハンディキャップを克服し、とくにバック陣は攻めては好パス、好走によって着実に得点し、守ってはよく秋田のバックラインをつぶし、得点をゆるさず。おう盛な闘志とチームワークは満場の賞賛を浴びた。——

決勝（11月3日）

修猷館 9（3—6、6—0）6 村野工業（関西）

——前半15分で両軍陣容不備のうち修猷1トライ、村野2トライを報い、村野リードのまま両軍つぶし合い得点にいたらず。後半25分修猷は村野の混戦から貴重なペナルティゴールを得て辛くも同点に持ちこみ、同30分秋吉、淵本、佐藤、中田のあざやかなパス決まって決勝のトライをあげそのまま押し切った。

今井監督談

こんなうれしいことはありません。一戦一戦ベストをつくしがん張りました。小粒の修猷の勝利は全く闘志と団結の賜物だと思います。郷土の皆さまおよび先輩各位の応援には厚く感謝します。

当時のメンバー

FW　高武(3)、藤村(3)、麻田(2)、長(2)、田中(3)、末次(3)、石橋(1)、佐々倉(3)

H・B　中上(2)、中田(3)

T・B　佐藤(3)、淵本(3)、秋吉(2)、山崎(3)
F・B　藤井(1)

鬼監督の思い出

大山浩司（旧姓長）

チームの成績如何よりも、私は修猷ラグビー部の一員であった頃の思い出話と他に少々。

私等の時は確かに他にくらべ誇れるような記録は何一つありません。否、不名誉な記録の方が多かったと思います。しかし私等は先輩、後輩に対し絶対に劣等感というような感情は一切もっていません。反対に誇れる記録さえあると思っています。それは何か？　というと、いわゆる鍛われたということです。昨今スポーツ界において〝鬼の大松〟という言葉がもてはやされていますが、私は修猷ラグビー否日本ラグビー界において、牧先輩今井先輩の御尽力、御努力は当時のラグビー界にセンセーションを巻き起こされたと思います。当時の鬼の姿を2、3話しますと、毎日1時半頃、防塁前の方より晴雨を問わず2人仲良く必ず来られるので、当時の先輩の勤務先配炭公団をうらんだものです。何故も少しいそがしい職につけてもらえないのかと。チーム全員が揃う前に今でいう特訓がはじまります。これが私には一番苦痛でした。私は足がおそかったので、特に今井先輩より目をかけていただき、練習前に泣きました。〝ラグビーとは体で習うもので、理論はある程度修得してから〟ということをこの特訓で学びました。私は修猷館で3年間ラグビーをしましたが、本当にラグビーの面白味を知ったのは、残念ながら卒業してからでした。牧先輩よりよく言われていたことですが、FWの前5人はトライすることを考えるな。ただ自分の任務を完全にはたせ、としかられていましたが、確かに自分の任務をはたした後にはトライすることが出来るということもわかりました。夏合宿の時、グラウンドに出て（本当にいやな感じがしますが）今井先輩の顔を見たらまた、必ず（グラウンドに出る前には行ったのですが）トイレに行きたくなり大目玉を毎日頂戴しました、等々語ればいくらでもあります。

根性ということが、スポーツでは、特にラグビーにおいては最も必要なことと思います。残念ながら私は少々足りなくて、毎度叱られていました。齢30を過ぎやっと少し世間のことがわかって来るにつれ、やはり私はラグビーをして良かった、私の人生においてラグビーをしたことは決して間違いでなかった、これが私の生きる上で必要なことであったのだ、と現在思っております。しかも私は牧先輩、今井先輩には、御迷惑とは思いますが、現在でもまだいろいろと御面倒をお掛けしております。後輩の方々も先輩には何も遠慮はいらない、ただ何事も相談を持ちかけるように

おすすめします。これが修猷ラグビーの発展の基礎をなすことと思考するからです。

足は太くて短かくて、苦しきことのみ多かりき

秋吉包雄（昭和26年卒）

足が遅いばかりに、合宿から始まって合宿に終った現役時代から現在まで、本当に苦痛の連続で苦しきことのみである。

思えば何の因果か？　修猷館ラグビー部にあこがれて入部させて戴き、戦後始めてお寺（今川橋金竜寺）での合宿に参加させてもらい、バックスのボール出しで、あまりのきつさに泣いて笑われ、食事毎の炊事当番では（当時は炊出しで、唐人町から今川橋のお寺まで運搬していた）、あまりの空腹で、何処か忘れたが、よその玄関先の階段に腰かけて、バケツに5本指を突き込んで食べたこともあった。

朝起きてのマラソンも、学校まで行く道ででも、占領軍の命令で隊列を作ってはならぬとのことで、皆バラバラに歩いて行ったのも、今にして思えば時代の違いを思い出させる。

スパイクをはき、マメが出来てもスパイクは脱いではならず、マメが破れても脱げず、二重マメ三重マメを知ったり、靴下に石ケンを塗って靴をはくことを知ったのもこの頃で、ダッシュの始めと終りの足の痛かったこと。ただ走っている時だけ足の痛さがわからなかった。

合宿とは面白くて楽しいと思ってよろこんでいってみたら、まったく正反対で、地獄であった。2年目の合宿は、学校の西側2階の教室であった。きつさ、苦しさは同じで、変わったことといえば、いつもグラウンドが見えることと、炊出しの運搬がなくなったことぐらいのものであった。

とにかく16～18往復のダッシュに足の遅い私は息抜くひまもなく、ただ回って来るボールを早くパスして、いかにして少しでも走らずにすむかを一生けんめい研究した。

W・T・B山崎さん（早大O・B、八幡製鉄）、C・T・B淵本さん（教大O・B、修猷ラグビー部顧問）、W・T・B佐藤さん（早大O・B、八幡製鉄）のT・Bラインは、本当の地獄でしかなかった。

今にして思えば、「トッタラパス」はこの時に教わったのである。

セービング、ボール拾い、生タックル、合宿での先輩の顔はみな鬼に見えた。泣きながら歯をくいしばってただ一生けんめいに走った。

「俺は、何んのために、こげんきたわれないかんとやろうか？」

「何んのためにこげんきつかラグビーば始めたとやろうか？」と

合宿の度に考えた。

黒板のカレンダーを1日1日ていねいに消して行く。その1日の遅いこと、長いこと、残り何日と考えると全く情けない気がしたものだ。

セービングで出来たビフテキの赤みに、毛穴だけが不気味にブツブツと浮いていたのも、思い出の一つである。

牧先輩（立教大O・B、九州電力）のもう1回、もう1回……そして、「忘れんうちにもう1回やってんやい」。パンツの紐も握られてのスタートダッシュも忘れられないものの一つである。

合宿が終ってもこのキビシイ残酷なまでの練習は続いた。

グラウンドの隅（防墨前）から今井さんの顔が見えるや、皆んなで逃げて帰ったことや、「今日はもう練習は終りました」といったりしたことも、今は懐かしい思い出である。

また、せまい15メートル四角位のライン中に、二つに分けられ、ヨーイ・ドンで、ルールなしでトライした方が勝ちということで、突込みばかりさせられたこともあった。

とにかく、今思ってもヒドイ練習であった。そうした猛練習の甲斐あって、その年（昭和24年）の11月、第4回国体東京大会において、ついに待望の〝全国制覇〟を青山の一角、東京ラグビー場で感きわまって先輩と共に、涙の中に生涯の思い出として残すことが出来たのである。この思い出は私の生涯の中での金字塔であり、誇りである。この誇りを先輩方にいただいた私は、本当に幸いだと、今にしてしみじみ感じる。

いよいよ私にとって最後の合宿が来た。金字塔のメンバーから10名が卒業で抜け、残るは5名。フロントロー浅田、ロックの長、ハーフ中上、フルバック藤井、そしてセンターの私である。卒業生の穴うめをこの合宿で育てあげて、前年度の金字塔を死守すべく、一生懸命に頑張った。

合宿中に西南大学とのマッチで、魚住君はついに帰らぬ人となってしまった。

西新病院での、先輩の方々の6時間にもわたる人工呼吸もおよばず、修猷館歌で魚住君を送ったのは、まことに悲しい思い出である。

水も飲まされずに走らされ、最後のグラウンド一周で目の前が真暗になり、ぶっ倒れたのもこの合宿だった。もう駄目だ!!もう走れない!!と思いはじめてから、ぶっ倒れるまで相当長く走れるものだと、体得したのもこの最後の合宿だった。

皆一生懸命にがんばったが、公式戦で国体は小倉高校に、全国大会は嘉穂高校の前に涙をのんだ。

今にして思えば、栄光と栄光の谷間にあったのが我々の年度であった訳だ。その証拠に、次年度は広島の第6回国体、並びに全国大会と、決勝まで進んでその実力を示してくれたのである。

30歳を過ぎた今もなお、先輩後輩と共にラグビーを楽しめるのも、修猷館ラグビー部に籍をおいたからである。

先輩、本当にありがとうございました。そして後輩よ、共に修猷館ラグビーの発展のために、しっかりがんばってくれ!!

思い出

外尾　猛（昭和26年卒）

私共の修猷館在校の時代は、大きな歴史の変遷に流転させられた時代でした。その名も懐かしい中学修猷館1年生の夏。終戦。荒廃した博多の焼跡の中でさつま芋とその葉っぱばかりのだんご汁、かぼちゃ、轟沈米、こうりゃんめしで育ちました。大人等は生きることにその日を過ごし、子供等は食べることにその日を過ごす。ただ水だけが海も川も清く青く澄んでいました。そのような中で、私がラグビーを知ったのは全くの偶然でした。その頃の私は非常に自意識が強く、とてもおとなしい少年でした。ある日校庭で数十人の同級生が変にゆがんだボールを追っかけて走っている。そのボールが突然私の前に飛んで来てポンとバウンドし、私の手の中にはいりました。見れば皆、口々にわめきながら私をめがけ走って来る。私は無意識の内にボールをかかえ必死になって逃げ出しました。そして校庭の隅に達した時、ふり返るともう誰も追っては来ず、私もポカンと突っ立っていると、佐藤次郎という前九電の社長の息子でしたが、同級生が飛んで来てポンと私のボールをはたき落し、「ドロップアウトぜ。トライちゃボールを地につけるとぜ。アハハハ……」と笑って走り去りました。私は何故か恥かしく顔を真赤にして立ちつくしていましたが、それがそもそもラグビーに興味を持った始まりでした。それからラグビーの話をいろいろ聞くにつれ、楕円のボールを追って走るにつれ面白くて仕様がなくなりましたが、度々の入部の機会を私の仕様もない引込み思案でのがすうち何時しか高校2年になっていました。折から朝鮮動乱時代で世界の風雲急をつげ、中共軍は続々と朝鮮に南下。

国内では占領軍万能時代からようやく講和条約締結、日本独立までの胎動期でした。私等はラグビー同好会を作り、放課後は7人制みたいなことをやったり、丁度ラグビー部一軍が国体に行って留守でしたので、二軍と試合をしたりしていましたが、3年生や同級生のラグビー部員が、国体で優勝して帰って来ますと、俺もあの時入部しとけば良かったなと思ったりしてました。

この頃はラグビーをやる底辺が広かったと思います。そして本当に好きなのがいました。クラスマッチでもラグビーをやる時は私等は1ヵ月も前頃から練習をしました。したがって強いのも強かったが今の現役にはとうてい見られないような見事なタックルをする者もいました。しかしそうこうするうちに私も否応なし入部させられました。かねがね聞いていた本当の練習（今井式）というものが何んであるか身につまされる時が来ました。日頃100メ

ートル競走で走ると当然勝つべき人々に追っつかない。後足で砂をかけられながら歯をむき出して走ったものです。ダッシュが5回、6回と重なると顔をあげ、小面憎い面構えで飛び出す奴等が化物に見えて来る時もありました。

誰かがボソボソとつぶやいていたものです「アリャバカバイ」。しかしそんなことも合宿にくらべると屁のようなものでした。日頃さんざん聞かされた恐るべき10日間。校門をくぐる足はすでに鉛を飲んだように重く感じました。

ニュースパイクなので、2日目にはもう豆が出来破れては又出来る。歩き出す時は何とも悲愴なもので、首に出来たうろこは、はげて赤身になるとスクラムでこすり上げられ、砂が這入ってこたえられませんでした。O・Bは入れ替わり立ち替わり、やっと終りだと思えば、西南大学の連中が相手になってまた一丁、背骨がメリメリ音を立てていたことを憶えています。真赤な血のような小便がタラタラと出てびっくりしたのもこの頃です。このようなハードトレーニングから生まれる自信とか、気力とか、意欲とかが一口でいうと根性となるのでしょう。1年も過ぎる頃は我ながら面構えが違っていたそうです。我々部員一同皆、一癖も二癖もあるたくましい男に生長していました。これは皆先輩のおかげであり、修猷ラグビーの伝統の中に生きた輝かしいものであると思っております。

現役時代を偲ぶ

中野　徹（昭和27年卒）

27年1月15日、朝日招待ラグビーの前座試合で、宿敵福高に完勝して我々の長いシーズンは終りました。最終戦であり、全国大会の福岡代表として西宮に駒を進め、再び秋田工業に敗れはしましたが、福高をして全然寄せつけず、余裕のある試合でボールを回し過ぎてミスが出るというようなことでした。

26年春、前年度のチームから6名の卒業生を出しはしましたが、さしてメンバーの編成には困らず、石橋主将のもと、26年度国体優勝の快挙をなしとげたチームに劣らないチームにすべく、全員で努力致しました。幸い旧制中学最後の年に入学した我々は、中学から高校まで6年間過したものが多く。ラグビーの経歴も長く、3年になったときは少なくなっていましたが、チーム中11人が経験のある3年生でした。

春の新人大会は、福岡で勝ち、県内では小倉、八幡に遠征して、福岡県で優勝し、まずチームの地盤を固めました。

春の試合が終り、大体満足出来る成績をあげて、今年はいけるという気がしました。当時部長は、24年優勝した時と同じ古沢慶造先生で、前任者の佐久間弘毅先生から引き継がれたのですが、

教育大の体操の選手で、畠ちがいのラグビーで、相当苦労されたことと思います。しかし我々が3年になった時は、一緒に練習ゲームをされる程、ラグビー部の中にとけこんでおられ、部長、主将、そしてチームと、非常に結束が堅かったと思います。また我我に、技術的なことでなくスポーツマンとしての正しい生き方、精神的な要素を植えつけていただきました。

当時ラグビー部といえば、各学校共そうでしたが、バンカラで、悪そうで、手がつけられない悪童が集まっているものとされていたのですが、わが修猷館も、御多分に洩れず、少なからずそのような傾向がありました。その点を部長がだんだん修正されて、館歌にもあるように、文武両道に立派になれということを強調されました。前部長から引き継いで指導されたことですが、この時代にようやく実を結び始めたように思います。そしてラグビー部自身、23年全国大会出場、24年国体優勝、25年県内2位と着実に戦果を挙げてきましたので、館内の中にもラグビー部に対する見方が変わって来まして、ラグビーブームが起こったことは、確かな事実でした。

学内対抗のゲームが盛んに行なわれ、そのための練習が、グラウンドのあちこちで行なわれるという有様でした。もっとも男女共学になり、やや校風が軟弱化したなかで、男だけしか出来ないスポーツの華というよさもあったのかもしれません。そのような雰囲気のなかで育ったチームですが、精神的には立派な部長に恵まれ、また技術的には数多くの先輩に恵まれて、辛い激しい練習でしたが、全国制覇を目標に精進を続けたわけです。

炎天下の夏合宿。諸先輩の適切でかつ地獄の責苦にもにた練習が続けられます。西南大学、九電との練習マッチ。体力も技術も異る相手でしたが、敗れれば日の暮れるまで、あらゆる練習のくりかえしで、100発以上のスクラム、果てることのないドンドン、これでもかこれでもかの毎日でした。グラウンドの横を通勤する人が「あの人達や、人間じゃなかばい」。もちろんこれは、きたえる方の先輩に与えられた言葉だと思います。

ハダカで井戸水をかぶり、人が通ろうが、通るまいがおかまいなし。テニスコートの横の芝生に寝転んで、宵の明星を眺め、板張りの教室へマメで痛む足を引きずりながら、階段を上っていました。そして秋のシーズンを迎えました。

我々は順調に勝ち進みました。そして、国体の福岡県代表となりました。春日原のグラウンドで学校あげての声援を受け、「彼の群小」を聞いた時には、これほど感激を覚えたことはありません。

国体は、広島で開催されました。原爆の跡もまだあり、銀行の誰か坐っていたと思われる尻跡もそのままでしたが、着々と復興の途上にあり、珍らしいオートバイのタクシーが走っていました。

宿舎は似ノ島で、1回戦前夜は波の音と興奮で良くねむれなか

ったようです。

1回戦は確か高崎高校と思いますが、文句なく勝ち、準決勝で北海道の北見北斗高校と戦いました。北見は、宮井（明大・八幡）寺西（明大）はじめ優秀なメンバーをバックスに持ち、フォワードも強力で一進一退を続けました。我々もゴール前まではなんども行くのですが、ゴール近くなると焦ってミスを重ねる。もぐってはつぶされる。そして、ペナルティをとられ挽回されるというような状態で、後半余すところ3分。このまま引き分ければ反則負けというときに、ゴール前のタイトスクラムから、ホィールして右ポスト直下にトライ。ゴールなって5―0で辛勝しました。

決勝は秋田工業で、秋田も吉川、出雲、早福、福田などそうそうたるメンバーで、大激戦を展開しました。我々はフォワード、バックス共展開力を持ち、ユサブリを身上とするチーム。秋田は重量フォワードで、フォワード戦が得意というチームで、随所に好プレイが見られ、試合内容としては非常に面白かったのですが、前半、ロスト・オブ・タイムの反則をとられ、右中間からペナルティゴールを決められました。結局得点上ではそのまま終ってしまったわけですが、後半はむしろ押し気味で、インゴールにノーマークになり、飛び込みながらジャッグルで、ノックオンという惜しいプレイもあり、優勢であっただけに、口惜しさもひとしおでした。その時に痛切に感じられたのは、綺麗なラグビーは出来るが、強引なプレーがない。もっと力強さがチーム全体に必要だということを痛感致しました。

帰福してからは、その点に注意して正月の全国大会に備えました。県予選を勝ち抜き、福岡代表となり、さらに鹿児島で行なわれた九州大会で、熊本工業、甲南高校を破り、九州の覇権を勝ちとり、雪辱を期して校友諸先輩の盛んな声援を後にして、全国大会に出場致しました。

1回戦は天理高校で、45―3で勝ちましたが、この時、後で日大に進学した近藤にタッチライン沿いを好走され、1トライされて、試合後「トライを多くしても、一つとられたら、なんもならん。タックルばせれ」と、凄く怒られました。

2回戦は、国体で敗れた秋田と当ったわけですが、徹底的にFW戦をいどまれ、チャンスもなく完敗しました。我々が練習した以上に敵も練習を重ね、横に展開するチームは縦に弱いというセオリー通り、タッチ、キックとFWパスで攻めてこられて、これを防ぐにはタックルしかないということがわかっていても、当ってパス、当ってパスという体力を利用した秋工の戦法に敗れ去ったわけです。その時のメンバーは、次の通りです。

FW　藤田、内藤、大野、三苫、橋詰、宮原、中川、石橋
H・B　水野、吉田
T・B　梅津、藤島、原、野中
F・B　藤井

橋詰のところに田村を入れるか入れぬかで大分もめたのです

が、田村が国体の後病気気味で練習不参加が多かったということで、橋詰が起用されました。このチームは、一人一人特徴のあるプレーヤーが多く、歴代のチームメンバーの中でも優秀なチームではないかと思います。

当時25分ハーフの試合で72―0という得点があり、高校としては記録的な得点です。このチームの中から、関東、関西、九州の大学、または地元実業団で活躍し、それぞれ一線級のプレーヤーとなり、全日本、全関東、全九州、または全関東学生のメンバーに選ばれ、外国チームと対戦した者もおります。

このようにして、我々のシーズンは終るわけですが、他方似ノ島のオト吉おいさんが、船で試合場に通ったこと、沼津商業のキャプテンがおだてられて試合前に泳いだ話、ミカンの缶詰事件、鹿児島でおかしな家に上った話。古沢先生にホレた美代という女中さんや、勇名をはせた小柴事件等々、思い出しても、バラエティに富んだ1年間でした。

このメンバーの中から、死ぬはずは絶対ない、殺しても死なないという宮原君が、幽明境を異にしていますし、また修猷館ラグビー史はじまって、はじめてという、ラグビーでの事故死が同級生の魚住君に起きています。

彼は26年の夏合宿で、西南大学の練習マッチの最中に、逆タックルに入り、丁度敵の膝が耳のうしろに当るという、千載一遇の出来事で倒れてしまったのです。一度回復したのですが、20分後には、再び倒れ、病院にかつぎ込んだ時にはすでに意識もなく、呼吸は6時半頃とまり、脈膊だけは打ち続けていました。人工呼吸を続けること6時間。ついに12時半になくなりました。全く予想も出来なかった事故ですが、今頃は天国で苦しく、楽しかった修猷館のラグビーのことを話していることと思います。

今年5月、東京に九州チームを迎え、試合をして懐古談に花を咲かせたのですが、佳き修猷館時代を憶い、感慨胸にせまり来るものがあります。種々と書きたいこともありますが、書けばきりがなく、ただただ皆の変わらぬ思いは、修猷館でラグビーをやって良かったという一語に尽きると思います。そして願うことは、福岡県代表修猷館高校という名が呼ばれんことを祈るのみです。

昭和27年という年

大塚博靖（昭和28年卒）

私たちが3年生になったとき、それは大変なときでした。石橋主将はじめ、11人の卒業生を送りだしたのです。しかも残る部員は11～12名。修猷館ラグビー部の第一次危機がおとずれたときでした。さしあたっての問題は春の新人戦です。でもこればかりはどうしようもありません。「この際、恥も外聞もない。他の部から人を借りても、新人戦はやろう」という内藤新主将の決断で、

さっそく人借りをはじめました。野球部などから馬力のある奴、からだの大きな奴を強引にくどき落し、見聞だけによる教授のうえ試合にのぞみました。結果は明白。2、3試合勝ち進んだところで香椎高に敗れました。前年が強かっただけに風当りも相当のものでした。しかし進取の精神に富む内藤主将は「すんだことばくよくよするな、新人ば集めたらよか」とたった一言。新人第1号は平島君、そして岩田、山下、福富、斎藤の附属中学出の英才が加入し、しばらくたつと立石、木村、久保、中野、それに堀内君の弟、通称〝弟プリ〟の諸兄らが入部しました。平島君がはじめて練習に参加したのは、連日愛宕山にロード・ワークをしているところでした。緊張の面もちでスタートした彼は、たいして遅れもせずグラウンドにもどって来ました。「きつかったろう」、ひやかし半分の問いに、彼は平然と答えました。「いやー、たいしたことありませんよ」。鈍足、不器用（しつれい）ながら、全日本に選ばれた彼の根性を、ラグビー生活第1日ではやくも表わしたといえましょう。

さて、「人数はそろった」。皆なの顔に喜びがあふれました。そして研鑽の日々が過ぎました。梅雨どきの豪快なセービング、せっかく持ち寄った米を、捨てたくなる夏合宿。例年通りの練習でした。チームの仕上りは、1年生を5人入れた比しては、まあまあというところ。国体の予選もはじめは快調でした。でも、まさかと思われた福商に、ものの見事に負けました。どうして負けたのか、そのときはもちろんいまだにわからないような負け方でした。

その翌日から、われわれには地獄の責苦そのままの苦しい日が始まりました。赤鬼—佐々倉千秋。青鬼—中田主基。二人の鬼の「走れ、這え、飛び込め、突っ込め」とその非情なこと。それまで各学年の10位以内に顔を並べ〝学のラグビー部〟を誇っていたわれわれの学業成績は、ここに来ていっぺんに下降線をたどりました。「このままではたまらん」——そこでわれわれは浅い知恵をしぼりました。しかし〝亀の甲より年の劫〟、ここで完敗してしまったのです。われわれがまずしたことは、当時西南大学在学中だった両先輩の授業時間を調べること。そして、まだ二人が見えぬうちに練習を始めることでした。でも、一枚も二枚も敵（？）は上手でした。授業中の窓から、そして休み時間の松の木蔭から、われわれの練習をみているのです。水増しした練習報告など、てんで聞いてはくれず、はじめからやり直し。だから西南大学が試合かなにかで、どこかに行った日、こんな楽しい日はありませんでした。ところが、そんな日でも油断できないことが、あとになってわかったのです。

「きさんたちゃー、きのうさぼっとろうが」。最初はどうしてわかったのか、さっぱりわかりません。「スパイがおるぜ」。何ともなさけない話です。実は、練習をみなかった翌日には、二人とも午前中にグラウンドに来てスパイクの跡を検査していたとのことで

す。まったくお二方の執念、熱意には頭を下げるばかりです。そんなところ、野球部で、上級生をなぐっているところをみられたばっかりに、斎藤アニマル君の強引なくどきにあって結城君が入部しました。だが、あまりの苛酷さにたまげてしまったのか、2、3日来ただけで休んでしまいました。今では早大の鬼といわれて恐れられてる彼が腰を抜かしたんです。つらかったのですね。

これだけ面倒をみてもらいながら、われわれの力はさして向上しなかったようです。でもファイトだけはつきました。ゴールからゴールまでのダッシュで、先頭に立って得意になっている内藤をタックルした三苫はじめケンカ早い来島、橋詰、おだてるとすぐ火のつく岩田、斎藤。全国大会予選では、福商に雪辱。つづいて国体で優勝して来た福高と当りました。みんな頑張りました。最後の5分で梅津が60ヤード独走して逆転したときは勝ったと思いましたが、残り1分で、忘れもしませんスタンドオフ福丸の好走により高丘というウィングに走られて涙をのみました。そして最後の試合。1月15日の福高との定期戦は引き分けでした。弱かったけれど、ここまでやれたのは佐々倉、中田両鬼先輩のおかげです。つらかっただけに、なつかしき、思い出の多い1年でした。佐々倉さん、中田さん有難うございました。

当時の最終メンバーは、つぎの通りです。

FW　三苫、山下、橋詰、堀内、斎藤、森部、大野、内藤

H・B　柴田、平島

T・B　梅津、来島、岩田、久保

F・B　大塚

苦しさのなかに

森部信二（昭和28年卒）

私達の年度の試合報告等は大塚君が書きますので、私は練習中のエピソード及び渾名を紹介したいと思います。

私達の年度の3年生は主将が内藤、三苫、堀内、大野、大塚、梅津、森部、途中で退部しましたけれども他に、光安、安河内、田中がいました。

練習中のエピソードでも、一番始めに書かなければならないことは、自分達の頃より、今井先輩があまり練習に来られないようになり、代わって佐々倉、中田両先輩の時代になりました。

国体予選で福商に敗れたのを境にして、両先輩よりますますしぼられました。

内藤を始め何んとか皆も両先輩の来られる前に、出来るだけ練習をすませようとするのですが、練習途中より二人が来られ、今までどんな練習をしたかを聞かれますので、何時も水増した練習量を言うと、「よしわかった。始めからやり直せと」言われるので不思議に思っていると、当時両先輩共西南大学在学中で、自分

達の練習状態が教室より良くわかっていて、嘘をついていることがわかっていたのです。また後日、理由は忘れましたけれども両先輩は学校に来られないということがわかっていましたので、練習を早めに終って帰っていますと、翌日、昨日は練習をお前達は少ししかやっていないので、今日はしぼるとのことですので、理由を聞きますと、佐々倉先輩が帰宅される前に、グラウンドに立ち寄って見ると、ポイントの跡が少なかったということでした。

以上のように何やかやと理由をつけては情無用にしぼられたものです。

次に各選手のエピソードですが、一番傑作なのはトップダッシュ中に三苫が内藤にタックルしたことです。その理由は内藤より三苫の方が足が遅く内藤がボールを持って走ると三苫はどうしても追いつけないので頭に来てタックルしたのだそうです。

堀内は渾名を、「ブリ」と言われていました。

――理由はこれから書くことでわかると思います――

練習中によくパンツの中に手を入れてもそもそやっているのでよく見ると「ブリッ」とむけた所についた砂をおとしているのでした。

大野は「ポッキン」、今でもそうですが、当時もやせていて試合中はもちろん、練習中でもそのやせた腕があたると非常に痛く、味方がよく怪我したものです。

森部は「モンペ」、これのいわれは本人でもわかりませんが、兄ゆずりだと思います。全国大会の予選が始まるまでは、ただのモンペでしたが、予選の福高との試合にトライをし、その時の試合評に「森部すかさずトライ」と書かれたことにより、「抜け目のないモンペ」となり、その後何をやっても抜け目がないということになりました。

梅津は「ウメ」または非常に目付が悪かったので「メッキ」でした。

大塚は名前をみじかくして「ツカ」でした。

内藤、三苫はその当時は渾名がなかったようです。

その頃

結城昭康（昭和30年卒）

まだ修猷館のグラウンドには、二本木の残骸が1本立ち枯れて残っていた。そして、ガキツラ的ハードトレーニング、部員の旺盛な向学心のすばらしき伝統も残っていた。

何時の代にも、大いに可愛がってくれる先輩はいるものだ。百道のたわんだ松林を指して、「あの松の根元のコブは、我々が松の木相手にタックルの練習をしたから出来たんだ」などと、我々純真な少年に、およそ非科学的な言葉で気合を入れ、強烈にしぼっていた先輩がいたのを時々懐かしく思い出す。

4月頃だったろうか、初夏の日ざしを浴びながら猛練習をしていた。数往復したランパスの途中、バックローをしていた山下君（九大→東芝）がいきなりアアアといいながら倒れた。山下君はテンカン持ちではない。驚いた我々がかけよってみると、口の中をどうかしたらしい。後でわかったことだが、何と口の中に口蓋垂というぶらさがった突起がある、それを蜂にさされたというのだ。それ以後、ラグビーをやるのに口をあけて走ってはいかんということがよくわかった。

さて、昭和29年度の修猷館は、追い込まれた状態だった。つまり前年の全国大会代表決定戦に宿敵福高と対し、七分三分の戦前の予想を裏切って3対0で敗れていたのだ。そして、この弱いといわれた福高は全国大会で優勝していた。

「今年は是が非でも」と、平島主将をはじめ全員一丸となって国体への出場を福高と争った。また敗れた。土壇場での福岡高校は強かった。

全国大会の予選が9月下旬頃から始まったその頃、福岡県の高校ラグビーは強かった。前記の福岡高校は、主将山田をはじめ好プレイヤーを揃え、粒ぞろいの福工、山田高校には、後に明大、八幡へ進んだ松岡が活躍していた。福商、嘉穂東、小倉工業等、俊英が目白押しであった。わが修猷館はこれらを撃破。決勝で福岡工業を17対3で破り、全国大会の代表権を獲得した。そして前年度優勝の福岡高校と対戦、一方的戦績で退けた。全国大会の組合わせが12月も押しつまって決定した。

1回戦で強豪秋田工業と一戦交える機会をえた。全員の意気は高く、鎧袖一触せんと、西宮へと乗り込んだ。しかし、ここでも無念の涙を呑んだ。8対6だった。それも、秋工の左ウィングがタッチへ出て、線審が旗をあげなかったからだ。現在でも仲間で集まる酒の席では、あれはタッチだ、残念だとくやしがっている。

後に聞いた話であるが、その当時の早大監督大西鉄之祐氏が早大ラグビー部員に言ったそうだ。「お前等、修猷館のラグビーを見ろ、高校生でもあれだけのことができる」。

今から考えると、我々は勝負に弱かった。実力的には、高校の第一のレベルにあったと思う。

最後に、在学の学生諸君に勝負に強くなって欲しいと願いつつ、勝負に弱かった人の良い時代のメンバーを記す。

FW　木村、堀川、結城、大場、西牟田、斎藤、川本、森久、山下、井坂

H・B　下司、金谷

T・B　久保、岩田、平島、立石

F・B　福富

忘れ得ぬ試合、福工戦

相生卓男（昭和33年卒）

昭和32年9月23日、薄曇。午後1時57分。我々は、本館グラウンド二本木側に陣し、国体出場の希望を胸一杯ふくらませ、午後2時丁度、キックオフのホイッスルを待った。レフェリーの新島さんは、腰をグッと落し、右手のホイッスルを口にしながら腕時計をジッと、見つめている。それまで、首や、肩を回したり、足の屈伸運動をしていた福工フィフティーンも、やがて緊張した一刻を迎えた。ピリーッとホイッスル。私は左手で合図した後、楕円球を勢いよく蹴った。西南大学側に陣した赤と黒の群の中へ白と青の点が突入する。その度に赤と黒は割れ、白と青は、グイグイと前進して行った。開始後2分、敵陣左ゴール前15ヤードのルーズから、ボールが出るとS・O古賀君は、思い切って、ブラインドサイドに廻り、スルスルと抜け、左隅にトライ!! 実に快心のトライだった。この試合、下馬評では、4分6分で、修猷館劣勢を伝えられていたが、古賀君の一発は、見事に福工フィフティーンの肝を抜いたに相違なかった。焦った福工は、その後も、二つのペナルティゴールを、我々に献上した。前半9—0とリードした我々は、後半さらにその勢いを増し、3分には、敵陣20ヤードのルーズボールを福工S・O黒瀬君がミスしたのを、又してもS・O古賀君がドリブルで一気に飛び込み、トライ！ また18分、FW真田君が、ゴール前のルーズボールを拾い、次々に当ってくる福工のタックルを強引に振り切ってトライ!! 2個共ゴール成功。計19—0にてノーサイドとなった。この間、我々FWのルーズ及びタイトスクラムは、藤井主将の好リードで、西住君を中心とした福工FWを完全に圧し、また個々のタックルもほとんど一発で福工の攻撃を阻んだ。私は3年間の試合の中で、牧監督をはじめとし、諸先輩の指導を忠実に実行したのは、この一戦だけであったように記憶している。また事実、先輩諸氏から、御誉めの言葉を頂戴したのも、この一戦だけだった。この日のため、夏合宿から後の練習は、毎日愛宕神社往復4キロのランニングをやり、日没まで、九電チームの胸を借りて、激しい練習を積んだ。愛宕神社の石段登りは息が切れてつらかった。神社に着くと、必ず何とかの神頼みよろしく鈴を鳴らして、国体出場、全国制覇の願いをこめて柏手を打ったのであるが、今考えてみると、国体決勝で東京代表の城北高校に9—3で敗れたことは、一度ではあるが、境内裏で、遙かなる玄海灘に向けての放尿が祟ったのかも知れない。ともあれ、国体出場への第一段階を遂げた後、我我は、改めて牧監督、榊先輩等と愛宕山へ参拝に行ったが、その時食った境内の焼餅の味は、福工戦の思い出と共に今でも舌先に残っているような気がしてならない。

経験的反省

原田太七郎（昭和36年卒）

部史に寄稿するため、修猷ラグビー部を思い起こすと、昨日のことのようになつかしく思い起こされる。

ラグビー部、いや修猷のラグビークラブに入部したことは、私の成長に大いに役立ったと思っています。そこで私の反省もあり、少し述べさせていただきます。

学生は単なるスポーツを行なっているのではなく、体育を行なっているのです。学生時代の体育活動の必要性は、諸々の先輩達の等しく認めるところである。にもかかわらず、多くの学生達が大学でもそうだが、何等そういう種々の活動に参加せず、毎日毎日を、我々の目で見るところ、実に無意味に過ごしている。その大きな理由は何か。受験のためか。それでは本当の意味での人間らしさを身につけることは出来ないと思う。

しかし、言いたいのは、毎年学年末の試験に話題にのぼることだが、種々のスポーツ部会の部員達が、成績不良の原因を自己の属する部会の活動に求めて、しかも、あたかもそれが当然の如くに教員が大目に勉強等をみることを要求している。正課と課外活動との意義を混乱して考えていることである。

このような混乱した考え方からは、正しい学生スポーツは生まれてこないし、正しい人格の陶冶は望むべくもないのである。そのような間違った特権意識を、学生達の頭の中から除くことをまずさきがけるべきである。

修猷のある先生がそういうことに差をつけないのを見て、私は「スポーツに理解がない」と軽々しく批判したものだが、今頃感心するありさまだ。

しかし、クラブ活動をやる以上試合に参加しなくてはならぬ。ただ参加したのでは無意味である。勝たねばならぬ。勝つために必要なのは力と和である。力とは実力、和とは人の和がともなって、はじめて勝利を得ることだろう。力をつけることは、伝統の力に多分に左右されるが、一にも二にも練習。勿論個人の努力も必要なことながら、練習の絶対量は欠かすことは出来ない。

修猷ラグビーの特徴である少数精鋭主義は、修猷らしい、研究しながら練習し、量より質、そして量の練習のもとに不断の探究心と、苦しい試練を乗りこえて諸先輩方が築き上げられたことだと思う。

ラグビーというスポーツは、苦しい忍耐を必要とする己れの心との戦いでもあり、これに勝ってこそ一流の選手になりうる。精神力の強さもさることながら、肉体的強さも当然必要であり、腕力足腰を鍛えるハードトレーニングにより、基本的力、精神力を養いうる。

ラグビーの練習における肉体的精神的苦しみはラグビーを経験しない者には、決して分るはずもないし、またそれが社会に如何に役立つかも……。この精神的肉体的苦しみをのりこえさせ、忍耐強い円満な人格を創り、各部員の人格を尊重し、お互の助けがあって和という団結が生じ、勝利への道が開くであろう。

部という一つの枠の中に生活すること自体、人間的成長は促されるが、身心両面にわたって、最高のラグビーを学ぶ者にとってこれ程いい精神修養の場はないと思う。

我々卒業後間もないO・Bは、ラグビー人として第一義的活動ではありますが、まず母校のラグビーの充実発展につとめ、発展の一助たらんことを願っています。

O・Bとなって

久保　公（昭和40年卒）

先日九州大会予選の修猷館―電波の試合を見にいって、嬉しく思った。なぜなら、これで修猷館も長い間の低迷から脱け出られるキッカケが掴まれるなと思われる試合を見せてくれたからだ。

私が修猷館のラグビー部に入ったときは、部活動はまさに最悪のときでした。慢性的部員不足からくる士気の低下はおおうべくもありませんでした。それでも私達が最上級生となり、新チームを引き継いだ時には、どうにか頭数だけは15そろいました。

春は福高との定期戦から始まった。どうにか遣り繰りして集めたフィフティーンで闘志では負けていなかったが、インスタントチームのかなしさで後半差をつけられ惨敗してしまった。定期戦ということで、学校からも、大勢の応援が来たが負けてしまい、その時の残念さはいまでも忘れない。

この年は丁度ラグビー部創立40周年の年であった。5月に記念式典が開かれ、超O・Bから現役の私達まで一堂に会した。その席でO・B側より練習着その他が現役に対し贈られた。白線が2本腕の所に入ったスマートなもので、その真新しいジャージで練習できることは嬉しいことだった。

恒例の佐高戦も5月に修猷館において行われた。相手チームの弱さもあったが、11連勝を飾ることができた。

夏の合宿もラグビー部に入った者には、忘れられないことである。合宿第1日目からそれまでとは違った激しい練習となった。慣れない早朝練習でのびた者もあった。合宿については、日時や食事の面でもう少し考慮すべきことがあったようだが、何よりも合宿ということで、朝早くから来て戴いた多くの先輩方の期待に応えられなかったことは、ほんとに申し訳ないことだった。

こうして9月の九州大会、10月の全国大会予選とシーズンに入った。運がなかったのか実力がなかったのか、言いたてるような戦績は残せなかった。

ついでに私個人のことについて書くと、生来運動神経、能力共にたいしたものを持ってない私が、ラグビー部に入ったことは、私から見れば、いろいろな面で良い経験となったが、部にとっては、果たしてプラスになったかどうか、未だに疑わしく思っている。しかし修猷館でラグビーをやったということは、私の消すことのできない一ページとなるだろう。

修猷館ラグビー史発刊に思う

大松勝明（元コーチ）

昭和の初期は九州ラグビー界勃興の初期でもあった。

その新興の熱意をリードする恰好のチームとして、福岡ラグビークラブが存在したことは、福岡地区のラガーにとっては、非常に有為な好材であった。

当時の福岡クラブのメンバーを見ると、FWに慶応、立教、H・Bに早稲田、T・Bに教育大、京大O・Bを配し、加うるに巨大な外人数名を加えた、一本太い芯の通った、ずば抜けて強いチームで、不敗を誇ったものである。

これにいち早く接触して指導を受けた、西南学院（現西南大学）、修猷館の成長は著しく、小粒の中学校選手が九大、福高（現九大教養部）等を相手として、互格の勝負が出来たのは、決して傑出していたからではなく、ラグビーの根本原理を体得した総合力の結果に外ならぬものと思われる。

当時私は、指導に当って、基本技術に徹し、結集力を強化することのみに意を用いたものであった。それがやがて実って、強力なチームとなり、丁度福岡クラブのそれの如く、各ポジションに優秀なプレイヤーが生まれ、覇業を成し遂げることが出来たものと思われる。

元気旺盛はよいが、徒らに猪突猛進型であったり、上手に器用なプレイをやろうとするようなチームは決して大成しない。

とかく急り勝ちになりやすい基本技術の修得は、現在のラグビー界においてもいえる警告である。地味ではあるが、この心掛け次第で強くもなり弱くもなるもので、体力や器用さによるものではないということを、贐（はなむけ）の言葉とします。（船橋市浜町四在住）

顧問雑感

淵本武陽（昭和25年卒、現顧問）

事を起こし、実を結ばせんと欲するとき、人はよくその年月のきざみを3年、5年というように定める。〃石の上にも三年〃何とか目鼻がつき出すのが3年目ということだろう。

母校を愛し、後輩を思う心は、幾年月過き去ろうとも変わるこ

となく流れ続ける美しき大河にも似て、よどみなきものと言える。

過ぎ去りし、空腹とたたかい、汗と血にまみれながら、やけに白っぽいグラウンドをはいずり廻され、泣き泣き走った母校の庭に、先輩として、教師として、部員の世話を始めて、今年で3年目を迎えてしまった。

〝あいつを母校に連れて行けば何とか！〟と、過ぎ去りし夢の復活を願う先輩各位の期待を一身に受けて3年目、いまだその前途に、一点の光明をさえ見出すことさえ出来ぬ自分の無能力に、歯きしりしながら過ごす今日この頃である。

教育とは、ウイスキー作りに似たもののように、あせらずたゆまず、どっしりと長い年月をかけてこそ、良質の、最も世の人々から喜ばれるものが出来上がる。俺は先輩であると共に教育者だったと心の中にさけぶ声を聞くのは、現実に目をつぶろうとする自己逃避の声だろうか？

毎日、毎日、部員の健康状態、勉学状況、彼等をとりまく環境、それにそれぞれの気質……と、部員の個々を知れば知る程、練習を見てやりながらも、つい頭がそちらに働いてしまう。こうすれば多少の危険（身体的な障害だけでなく）をともなっても、効果は上がると知りつつも、どうしても自分の口からそれをやらせる勇気が出て来ない。

〝俺も昔やらされて、肉体的には現在よりもっと悪い条件を乗り越えて、やり通した。彼等とてやってやれぬことはない。要は個々の精神力だ〟と思いながら、教師としては、同じことをマスターさせるのに、もっと有効に、効果的な方法はないものかと考え、ああでもない、こうでもないと、いたずらに夜を更けさせてしまう。そして彼等をつなぎ止め、夢中にさせるものは何を与えることなんだろう？ 何に喜びを感じさせるようにすべきなんだろう？ と、同じことの堂々めぐりで終ってしまう。

母校愛、友情、勝敗、トライの味、身体作り、精神修養、ライバル意識、等……。一言で表現出来るものは何なんだろう。現実的であり、実社会というものに、非常な不安を持っている現代の若者は、きっと何か心の支えとなって呉れるであろう何ものかを、砂漠を旅する旅人がただ一滴の水を求めるように、必死にさがし求めているに違いない。これを見出した時こそ、何にも増して強いものが出来上がると確信する。

しかし、考えてばかりいる訳には行かぬ。時は流れ、歩みを止めてはくれぬ。私に今与えられていることは、彼等と共に、その小さな泉を求めて、前進し続けることのようだ。きっと、彼方に美しく、清い泉が、心ゆくまでその渇をいやしてくれる水があることを信じつつ……。

四国遠征記

平山新一（昭和9年卒）

昭和33年4月19日～21日

〈参加者〉

団長　平山新一

FW　守田基定14　大塩勇19　久保房雄22　内藤勇策28
　　三苫憲一28　森部信二28　橋詰博29

B　牧御16　榊和彦20　榊明23　石橋静雄23　淵本武陽25
　　佐藤英彦25　中田主基25　秋吉包雄26　原鷹司27
　　梅津昇28　久保久30

33年4月19日夕刻博多駅に集合。総勢20名は夜中門司港を出港。海はおだやかで、遠くの島か陸かさだかでない燈火を眺め、快的な潮の香を満喫しながら一路四国へ。

翌早朝高浜に着港。電車で松山に向う。松山駅前に弓崎君（昭和14年卒）の出迎えを受け、道後温泉の宿に入る。松山は漱石の『坊っちゃん』の街である。一日市内見物についやしたが、この日は日蝕（皆既日蝕に近い）で、一時天地は暮色に包まれ、鶏のけたたましい時をつげる叫び声や、犬の遠吠えを聞くなど、印象深いものがありました。

翌20日、松山城を見学の後、市営グラウンドにて、新田高校ラグビーチームの指導を行なった後、親善試合を行ないましたが、我等O・Bチームは、錚々たる顔振れなので、旅の疲れも見せず、各所に好プレーを演じ、見事な模範試合でした。

終って弓崎氏宅で、歓迎会を開いて頂き、全員大変な御馳走に預り、再び四国遠征を約し、弓崎君御一家並びに有志の方々の御見送りを受け、高浜より夜中気分壮快で御機嫌の一行は、船中、往きとことなり乗客も多く、海は荒れ、小さな客船の揺れ方は相当はげしく、船酔客もあちこちにあらわれる始末でしたが、我等の仲間は、すでに酒に酔っており元気一杯、一睡の内に船は春雨けぶる門司港に全員無事上陸致しました。この間、数々のエピソード（弥次喜多的）がありますが、ここに掲載をはばかるおだやかでないものばかりなので、端折りましたが、思い出になることばかりでした。

有意義な四国遠征が、うまく成功裡に催されたことは、一重に弓崎輝明氏の心からなる御尽力によるもので、氏の御好意とお骨折りを感謝致し、この稿を終ります。

東京遠征記

今井　進（昭和18年卒）

昭和39年5月、修猷館ラグビー部創立40周年記念式典を、母校講堂及びグラウンドにて在福O・B主催で地元関係者をお招きして挙行した時、東京在住のO・Bおよそ20数名大挙して西下、地元O・Bチームと交歓ゲームなどして、記念事業を一層盛んなものにして頂いたことは、我々地元O・Bの深く感謝するところでした。

本年はそのお返しの意味からも、是非在福O・Bの東京遠征を実現したいものと思っておりました。幸いにも本年のO・B総会の席で溝口先輩始め各先輩の賛同というよりも「是非やれ」との有り難い指示により、着々プランが建てられ、中田君、外尾君等、実行力旺盛な若手O・Bの強力な推進でついに実現の運びとなった。特に外尾君は切符の手配、人員の確保にほとんど1ヵ月は家業をなげうって奔走されたことをここにあらためて感謝します。

出発

5月1日午後4時半博多駅集合、メンバー次の如し（以下敬称略）。

溝口夫妻、古川、守田、今井、中田、外尾、三苫、秋吉、中川、堀内、野中、波多江夫妻、堀川、森部、古賀、斎藤、山内、柴戸、神山、工藤、下司（順不同）

他に、

高松、島田、岩田、大山（旧姓長）、飛行機にて弓崎（四国より参加）

さて、駅頭に集まる面々、手に手にボストンバッグをぶら下げてニコニコ顔、小学生が修学旅行に行くように嬉しそうですが、いずれもアルコールに一くせも二くせもある猛者揃いですから、これから十数時間の車中が思いやられて、一行中4番目に年長（年はとりたくないもの）の小生、「修学旅行」変じて「醜悪旅行」とならぬよう、心中秘かに案じていました。

車中

座席の割振りで特に留意したのは、温厚で早寝の堀内君を何処にするかということでしたが、結局、皆様の総意で溝口御夫妻のグループにしました。小生の所は守田、古川、中田、外尾の諸氏。まず睡眠薬「ハイニッカ」角瓶二本、胃腸薬「トリス」若干揃う。薬が揃うと水がいる。そこで「おい後輩水汲んで来い」。最年少の工藤君は洗面所へ数往復、後輩は辛いもの。我々はその男をねぎらって薬を呑ませているうちに討死。しかし他の連中は未だ睡眠薬の効め現われず、仕方なしに食堂車にとどめの睡眠薬「ビール」を求めて行くと、神山君、柴戸君達新O・B連がすでに快気焔を挙げている。我々は恥しいからなるべく関係のないも

のような顔をしていたが、ついに食堂車の閉店間際、突如、神山君起ち上り、大声を発し「特急はやぶさ号御乗車の皆様、バンザアーイ」と叫びあげました。翌朝皆からさんざん冷かされたが、本人は全然覚えなしとのこと。

その他は大して特筆する程の話はなく。夜中一番おそくまで起きて車内をうろうろしていたのは堀内君で、多分余り酒でも探していたのでしょう。広島辺のホームで酒を買っているのを窓越しに見掛けました。

今一つ忘れてならないのは中田君のことで、彼は福岡軍最大のホープでしたが、出発前福岡のセブン大会で、ももの肉ばなれを起こして、駅に集合した時も、「私は東京まで、旗振りに行くようなもので、試合には出られません」と顔をしかめて、車中でも眠るまでこぼし、朝起きても悔んでいたので、我々先輩は非常に気の毒に思っていました。ところが、図らざりき、東伏見に着いてメンバー編成の結果見事に裏切られてしまおうとは。

東京

駅頭に岩城先輩始め中野君その他なつかしい顔ぶれの出迎えを受け、一行いよいよ決戦場東伏見早大グラウンドへ勇んで行く。

私事になりますが、ここは戦前、古川先輩に率いられて、名手堀博俊主将以下我々が神宮大会に臨んだ時、第1回戦保善商業を破り、第2回戦天王寺中に敗れ、恨みの涙を呑んだ所で、感慨無量の心地がしました。

第1試合　対慶応高校O・B

前半メンバー

FW　三苫、外尾、結城、柴戸、中川、波多江、斎藤、森部

H・B　下司、中田

T・B　神山、秋吉、平山、野中

F・B　古賀

御覧下さい。前日からさんざん我々の同情を集めた中田君がシャッパナから出場、大いにハッスル、昨夜の「バンザイ」の神山君も快足を飛ばし、福岡強豪FWに結城君を加えた布陣はトライに、トライを重ね、前半を終った。後半に入り、メンバーを大幅に変更（メンバーは割愛させて頂きます）、逆に敵に着々加点を許し、結局、次のスコアで敗る。

前半　16対0
後半　0対26　16対26

第2試合　福岡O・B対在京O・B

（福岡）

FW　柴戸、堀川、外尾、中川、長、今井、古川（斎藤）、守田

H・B　下司、中田

T・B　神山、秋吉、古賀、野中

F・B　溝口

（東京）

佐々倉、山下、結城（堀内）、大野、藤井、波多江森部

米倉、本城（岩城）

山内、藤井、藤島、中野

三苫

在京O・Bは集まりが悪く、福岡勢より数名貸して試合をしたが、前半より福岡勢優勢で東京軍必死の健闘も空しく、時には巨漢結城君のダイヴィングタックル（圧しつぶされた外尾君こそ迷惑）等もあったが、大敗、特にフルバックをつとめて頂いた溝口老先輩も、手持不沙汰でついに後半は自らウィングを買って出られ、縦横に走りまくって、特にタイムアップ直前、強引で球を持ち過ぎる傾向の大山君（旧姓長）が中央線より走り抜いてゴール前5ヤードで溝口先輩にパス（よくぞ離した）、先輩見事に走り抜かれてトライ、止めの一発を最長老にして頂いたことは、敵味方悦ばしい限りでした。

ミーティング（於青山ラグビー場会館）

ラグビーマンのメッカ秩父宮ラグビー場で試合するのが我々の念願でしたが、改修中で使用出来なかったので、せめてそれが見えるラグビー会館でとの在京O・Bの志からか、ここを借り切って呉れました。参会者は前記の面々の中から溝口先輩は都合にて欠席、三苫君は会社の都合で試合が終ると直ぐ帰福、まことに残念。そして試合に出場されなかった、田村、古森、藤井（鴻）、淵上、相浦、矢吹、谷井、吉田の諸氏及び特別会員小林忠郎、佐野克郎氏を加えて、賑やかに行なわれました。酒もビールも、食物もふんだんにあり、ここでも千両役者結城君の名司会（時々、結城君に顔も口も劣らぬアニマル斎藤君と交代）で、自己紹介に始まり、隠し芸、珍芸、歌合戦と、時の経つのを忘れ、年を忘れて修猷時代に戻り、応援歌を歌い、館歌を歌い、8時過ぎ散会した。

席上四国の弓崎先輩の発言により、近い中に四国松山において再び東西対抗O・B戦を催すことなどを約したことを附記しておきます。

部創立40周年記念メモ

平山新一・守田基定

1 式典

昭和39年5月3日11時、五月晴の好天に恵まれ、母校体育館において、九州ラグビー協会、福中O・B（現福岡高校）、福商O・B（現福岡商業高校）、修猷同窓会、その他各関係の方々が陸続と集まられ、修猷O・Bも始めてお会いするような大先輩の顔も見られ、現役を含めて百数十余名の参会を得て、盛大にとり行なわれた。

式は、修猷O・B葛西泰二郎先輩の挨拶に始まり、九州ラグビー協会代表として木元規矩男氏、福中O・B代表松隅保氏、福商O・B代表安武一道氏、修猷同窓会代表として大塚覚氏等の祝辞あり、学校側より重藤市ノ丞館長の挨拶並びに、日本ラグビー協会香山蕃会長をはじめ、十数通の祝電披露が行なわれ、式はO・Bより現役に対し、ユニフォーム50着、ボール、タックルマシン、

ゴールポスト等の寄贈発表に最高潮に達した。
最後にO・B現役一体となって、館歌並びに部歌を声高らかに合唱し、感激のうちに式典を終り祝賀会に移る。

2　親善試合

第1試合　現役対九大在校修猷O・B

この日、現役諸君は意義深い式に参列し、意を新たにするところあり。元気旺盛好プレーを随所に展開したが、技に一日の長があるO・Bに凱歌上がる。

両軍メンバー

	（修猷）	（九大）
FW	1溝口、2片山、3久保、4納田、5田中(新)、6小嶺、7岡田、8渋田	1石崎、2堤、3淵上、4臼杵、5三浦、6西之寺、7柳河、8堀内
H・B	9船木、10田中(良)	9越川、10西村
T・B	11左座、12里見、13柴田、14吉田	11井上、12清水、13古室、14望月
F・B	15安部	15永松

第2試合　福中O・B対修猷O・B

招待試合にふさわしく老童連和気に満ちたムードの中に、往年のライバル同士としてのファイトある好プレー、珍プレーに久々の汗を流し合った。

試合終ってお互に肩をたたきながら、昔のお互のくせがぬけないことを笑談し合った。両軍のメンバーは、30歳以上の制限つきで、次々に交代し、氏名列記するあたわず。

第3試合　修猷O・B東西対抗

東京より40周年式典に馳せ参じたO・B遠征軍と、これを迎えうつ地元O・Bの対抗試合が最後を飾った。

両軍とも若手O・Bに加えて、お互の長所欠点を知りつくしているので、その掛引きによる好プレーの続出でシーソーゲームを演じ、いずれに軍配が上がるかまったく予断をゆるさぬ激しさだったが、遠征の不利がタイムアップ直前にあらわれてゴールを与え21－16で地元に花をもたせた結果に終った。

両軍メンバー

	（東京）	（福岡）
FW	1藤田、2大塚、3結城、5大野、5藤井(章)、6真田、7森久(中野)	1三苫、2堀川、3外尾、4堀内、5中川、6斎藤(藤村)、7大山(森部)
H・B	8水野、9本城、10吉岡	8石橋、9下司、10古賀
T・B	11青木(藤井耕)、12平島、13藤島(岩城)、14岩田(小林)	11神山、12中田、13淵本、14福井(山内)
F・B	佐藤	15佐藤

3 O・B懇親会

試合が終って、O・B会員だけの祝賀会を那ノ津荘に移して開いた。これ程大勢の会員が一堂に会したことは初めてで、どの顔もどの顔も楽しさで一杯だった。

懐古談に花を咲かせ、現況を話し合い、将来をたのしみ、酒宴は佳境に入り、とどまるところをしらず。童心に帰りたる連中は応援歌を高唱し、ついには、若かりし頃の応援団長松井清孝先輩（昭和2年卒）のリードで、次々に歌われていった。最後は、戦前戦後のグループにより部歌を合唱し、一応盛会のうちに会を終った。

なごりつきないO・B諸兄は、ドンタクで賑う博多の街へ、三三五五繰り出していった。

若手O・B連は、かつての鬼コーチ今井進君の所に集まり、店の前の警固公園で、近所にちらかっているあらゆる燃える物を積み上げ、初夏の夜空を焦さんばかりのかがり火を囲み、ファイヤーストームに若さを発散させ、夜の白むのを知らなかった。

4 むすび

最後に、この催しを推進して来た若手O・B諸君の熱意と、この催しの趣旨に御賛同下さいました部外のラグビー協会、福中、福商両校O・Bの方々、西日本鉄道、九州電力、ヤナセ自動車、R・K・Bの諸会社、並びに、修猷出身の県議、市長、市議の諸先輩の御支援を心より感謝すると共に、これを機に現役諸子の奮起を念願する次第である。

Ⅲ

附録

年表

大正14年（一九二五）

わが国の中学（現高校）ラグビーは、明治40年太田中学（群馬県）に短期間ではあったが、はじめて行なわれた。つづいて明治44年京都一中、翌45年同志社中、平安中と部が生まれた。大正年間に入ると4年京都一商、11年天王寺中が、そして翌年北野中が起こり、次の13年宿敵福岡中に部が出来ている。

わが修猷館は、大正14年4月、百道原頭に呱呱の声をあげたのである。時あたかも東京放送局において試験放送が開始された年にあたる。9月西部ラグビー蹴球協会創立。

大正15年（一九二六）

2年目に入るや、長三熊部長先生が雑誌『修猷』に、簡単なラグビーのルール解説を書かれて、ラグビーの普及に力を入れられた。

館内では、これにこたえて、クラスマッチが行なわれ、ラグビー熱が高まっていった。

11月日本ラグビー蹴球協会が創立され、またこの年から全国中等大会は地方予選制となる。

昭和2年（一九二七）

リンドバークの大西洋無着陸横断飛行に成功した年である。

ラグビー部は、創立3年目をむかえて実力をつけはじめ、中学はもちろん、高等学校と試合をして、輝かしい戦績をのこしている。

昭和3年（一九二八）

第9回アムステルダムのオリンピック大会で、人見絹枝嬢が世界新記録を出している。

わが部は、初代部長長三熊先生が御家庭の事情により退職され、2代目の部長に体育の小林静夫先生を迎えた。

部員一同は打倒福中をめざして、寒風吹きすさぶ背振嵐に、また灼熱の太陽のもと、日々涙と汗にまみれながらの猛練習をした。

「打倒福中。必ず甲子園に行くぞ」

その甲斐あって、九州代表権を勝ち得た年である。

昭和4年（一九二九）

己巳元旦。甲子園初出場の輝かしい新春を迎えた（第11回大会）。

4月新メンバー編成を終り、昨年度に続いて九州の覇者たらんと練習にはげむ。

シーズンが深まると共に、大毎主催全国中等ラグビー大会九州予選がはじまった。第1戦は、春以来悩まされて来た福商（現福岡高商）と対戦、見事雪辱した。優勝戦は、宿敵福中、0—0で延長戦となり、死闘がくりかえされたが、6—3にて敗れる。延長戦が30分行なわれたことは、特筆すべきことであろう。

この年ドイツのツェッペリン飛行船が、霞ヶ浦に到着、大いに若人の血を沸かせた。

昭和5年（一九三〇）

世界的な不景気風を吹き飛ばすが如く、ラガーは良く走り、蹴り、練習に熱がこもった。

全国大会九州大会は、順当に福中と雌雄を決することになる。前半先取点をあげながら逆転され、後半、猛進の甲斐なく惜敗した。

昭和6年（一九三一）

ここ2ヵ年程、福中に名をなさしめたわが部は、猛練習をもってこれを覆さんものと、精進した甲斐あって、大毎戦を迎えるまでは、修猷の牙城に迫るものなく、佐高（現佐大教養部）主催大会ならびに福高（現九大教養部）主催、福日（現『西日本新聞』）後援第1回近県中等学校ラグビー大会に、見事優勝した。

しかし不景気のあおりをくってこの年は、九州と台湾を1ブロックとし代表校を決めることになり、まったく不覚にも台湾勢に名をなさしめてしまった。

かくて甲子園の夢は、あえなくついえ去った。

この年、関東軍は柳条溝事件を理由に満州事変を開始せり。

昭和7年（一九三二）

五・一五事件が発生した暗い世相の中で、ロスアンゼルスにおける第10回オリンピック大会で、日本は水上制覇をとげ、若人を感激させた。

わが部は、福高主催ラグビー大会で不覚をとったが、佐高主催ラグビー大会で見事その恨みを晴らした。

この年、カナダ・ラグビーチーム来日。

昭和8年（一九三三）

この年は日本が国際連盟を脱退した年である。

わがラグビー部は、佐高主催大会に輝かしい3年連続優勝をとげ、福高主催大会でも見事優勝の栄冠を得たが、全国大会九州大会で今シーズン3タテした好敵手福中に、不覚をとった。

全国中等大会で京城師範は、3連覇する。

昭和9年（一九三四）

豪州学生選抜チームが来日し、ラグビー界に刺激と自信を与える。

この年日本ラグビーの創始者、英人E・B・クラーク（慶応大教授）逝く。

「今年こそ代表を」と励んだが、打倒福中ならず。7度九州の覇者たらしめた。

政府、ワシントン条約廃棄を米国に通告し、国際緊張日増しに高くなる。

昭和10年（一九三五）

クラークの協力者であり、日本ラグビーの創始者の一人である田中銀之助（田中工業社長）、クラークを追うように逝く。

超中学級T・Bを持ちながら、勝利の女神に見はなされ、宿敵福中に大差をもって惨敗した。多くは語らず。「ただ、各人最善をつくせり」と。

美濃部達吉の天皇機関説で、議会が騒然としたのはこの年である。

昭和11年（一九三六）

二・二六事件の年である。修猷館先輩広田弘毅内閣が成立した。

ベルリンで行なわれた第11回オリンピックで、本館出身葉室鉄夫二〇〇メートル平泳に金メダルを獲得し、修猷スポーツの名をあげた。

ラグビー部は出足おそく、春の試合は思わしくなかったが、シーズンに入って次第に実力をつけ、全国大会予選では、優勝戦に福中と対戦した。この一戦、前半8—3とリードしたが、後半逆転されて敗る。

ニュージーランド学生選抜チーム来日。一方早大の満洲・朝鮮、明大の上海と遠征熱高まる。

昭和12年（一九三七）

この年朝日新聞社の「神風号」世界一周飛行を行ない、世界に万丈の気を吐く。

30名近くの部員を有し、打倒福中を叫び、甲子園を夢みたが成らず。

関東において、早大2連覇をとげる。

昭和13年（一九三八）

国家総動員法が生まれ、あらゆるものが国家の統制下に入り、綿糸が配給切符制となった。

そして、東洋で初めて行なわれるはずだった第12回東京オリンピックは、世情不安定のため正式に中止決定さる。

修猷館に、ヒットラーユーゲントが訪れた。ラグビー部では、バスケット部を入れてハンドボールの国際親善試合を行なった。

わが部は、伊勢幸人、山崎辰次郎、川島啓二など、優秀なプレーヤーが4年修了で大学に入学して部を去ったが、弓崎主将以下よく団結し、今年こそ甲子園へと精進したが、福中に名をなさしめた。

昭和14年（一九三九）

第2次世界大戦に入り、国内は物資が日ましに不足し、ヤミ値を産む結果となる。ために生活は窮乏してきた。ついにラグビーボールも配給制となる。

この年、宿敵福中には、総べて勝を納めることが出来たが、福商と3度戦って、この牙城を抜くことが出来ず、雄図むなしく、甲子園の夢破る。

昭和15年（一九四〇）

日本軍南進を開始。仏印進駐。米英との対立深刻となる。

国内では各政党解散し、大政翼賛会結成さる。労組も解体し、大日本産業報国会が誕生し、全体主義国家となる。

政府は国威高揚に力を入れ、スポーツも精神力並びに体力の増進に役立たすべく奨励し、明治神宮大会が盛大に催され、ラグビーも参加した。この大会に、九州の覇者として花園ラグビー場に進出したが、関西予選決勝で京城師範に敗れた。

7人制並びに福高大会に優勝したにもかかわらず、シーズン最後の大毎主催全国大会九州予選福中との決勝戦で、前半9—0と圧倒的優勢を示しながら、後半に0—11と逆転されて涙をのむ。

関東で明大3連覇なる。

昭和16年（一九四〇）

日本真珠湾を攻撃。ドイツも独ソ不可侵条約を破ってモスクワまで進撃。戦争は全世界的なものとなった。

米の配給は2合5勺となったが、学生の心は純真で、神州不滅を信じ、勉学に鍛錬にはげんでいた。

修猷館でも、部活動は修猷館振励報国団となり、ラグビー部は鍛錬第二蹴球部と、その名称をかえた。

7人制並びに福高主催の両大会で、宿敵福中に名をなさしめたが、臥薪嘗胆の甲斐あって、大毎全国大会九州大会では見事打倒福中なり、九州の覇者となる。

文芸部員の報国団鍛錬状況見学記（7月26日）に、次の通り記

されている。

「汗みどろになった体が走る、跳ぶ、転げる。楕円を追う肉弾の美しさ、勇ましさ。ここはラグビー部である。帰省中の先輩も後輩の現役諸君も全く一つに溶けこんでの活動をしていた。球がどおんと上った。見上げる眼に汗がはらはらと流れた。」

昭和17年（一九四二）

日本は、6月ミッドウェイ海戦で大敗し、8月にはガダルカナルでも敗退した。生活は日ましに苦しくなった。

春の7人制大会は昨年の雪辱ならず。しかしシーズンに入り、努力の稔る時がきた。10月4日、神宮大会予選の優勝戦で、宿敵福中を堂々16－6で破り九州代表となり、第13回明治神宮国民錬成大会に九州代表として出場した。第1回戦では東伏見早大錬成道場で、関東代表保善を24－5で下したが、第2回戦で天王寺中に敗れた。この一戦は事実上の優勝戦といわれていただけに、力のこもった内容であった。

大毎大会は福中と雌雄を決し、延長戦に入ったが決らず、抽籤の結果無念の涙をのんだ。

わが部の大先輩九大教授葛西奈二郎先生が指導された関門トンネルがこの年に開通している。

昭和18年（一九四三）

戦局は日増しに不利となり、学徒出陣が始まった。多くの先輩ラガーは、陸に海に空に、ペンを銃にかえていった。徴兵年齢は1年引き下げられ、女子挺身隊は軍需生産に動員と、最悪の状況に向っていった。

学校教育は戦況により大きく廻転し、戦力増強の一環として動員に明け暮れ、学生生活もこれにともなって正常を欠いた。

ラグビーのゲームも、5月に行なわれた近県中等学校7人制で幕をとじ、戦後再開まで中止となった。そして、祖国愛に燃える若きラガーのなかには、飛行兵を志願し、百道原頭を去って行った者もいる。それでも残った部員は、いつの日にかゲームがやれると、あわい期待をかけながら、ラグビーの練習に打ち込んだ。

この年、ラグビー用語が邦語に改められ、闘球となった。FW、H・B、T・B、F・Bは、それぞれ前衛、中衛、後衛、殿衛となる。

昭和19年（一九四四）

19年に入るや、米軍はついにレイテ島に来る。11月にはサイパン島からの本土空襲が始まった。

こんな状態で、学生生活も在校生のすべてが軍需工場に動員され、各部は自然休部となる。しかしラガーたちは、どんな環境におかれても、楕円のボールを手離すことは出来なかった。工場勤務の余暇を利用して、幾多先輩たちが練習に精出した母校グラウ

ンドにかけ集まり、パスをしたり、キックしたりして、お互になぐさめ、はげまし合ったものである。

昭和20年（一九四五）

終戦の年である。9月早くも部復活する。

昭和21年（一九四六）

国破れて山河あり。わが球友もやがて学校に復帰し、なつかしのボールを手にした。ユニフォーム、パンツ、シューズ、どれをとってもまともなものを持っている者はいない。みな代用品である。それで練習を始めた。

この年、神戸で行なわれた第一回国民体育大会に出場した。

昭和22年（一九四七）

六・三・三制の実施をみた年である。1月恒例の全国中等大会復活。

9月、九州中等大会決勝戦において福中に敗れ、惜しくも優勝を逸す。

昭和23年（一九四八）

戦後の混乱はなかなかおさまらず、いろいろな事件があった。東条ら7戦犯の絞首刑が執行されたのもこの年である。

暗い世相の中に、水泳の古橋、橋爪、一五〇〇メートルに世界新記録の快挙があった。

修猷ラグビー部では一昨年に引き続き、地元福岡で行われた第3回国民体育大会に九州代表として出場し、準優勝をとげる。また、昭和24年1月1日に行なわれる大毎主催第1回新制高校ラグビー大会の九州代表にも選ばれた。

特筆すべきことは、本館51期生で結成された「51クラブ」が国体に出場、平和台ラグビー場で、エキジビジョンではあったが、ラグビー協会のお歴々と試合をしたことである。後にも先にも、同期生のみによるクラブは、51クラブ以外にはない。

昭和24年（一九四九）

日本人として初めて湯川秀樹博士がノーベル物理賞の栄に輝いた年である。

わが修猷ラグビー部でも、昨年に引き続き輝かしい年であった。雑誌『修猷』の記者は次の如く言っている。

「昭和24年度、この年は本館学友会史上特筆さるべき年である。戦後着々と基礎を築きつつあった各部が、一斉に開花し、成果をおさめた年なのだから。ラグビー、バレー、ヨット、……無線、音楽、新聞、（後略）」

ラグビー部は、再び今年も第4回国民体育大会九州代表に選ばれ、東京で闘った。全国より集いし強豪を次々に下し、準決勝で

は東北の雄、宿敵秋田工業を25－6で破り、優勝戦は近畿代表村野工業と、文化の日に対戦、これを9－6で下し全国制覇成る。部の創立いらい25年にして、宿願の日本一になったのだ。

昭和25年（一九五〇）

部では、創立以来初の事故が夏の合宿に起こった。魚住功君の不慮の死である。西南との試合中、勇猛果敢なるタックルを行なったとき、頭を強打して不帰の客となった。惜しむべし、好青年ラガー魚住功君!! 彼の尊い教訓を心に刻み精進せん。

昭和26年（一九五一）

対日講和条約が結ばれた年である。

わが部では第6回国民体育大会（広島）に出場し、準決勝で強豪北見北斗高を破り、宿敵秋田工と雌雄を決し、惜しくも全国優勝をにがした。

全国大会でも、またまた秋田工と準決勝でまみえ、再度無念の涙をのむ。

朝日招待ラグビー並びに新制大学大会開始される。

昭和27年（一九五二）

占領軍司令部は廃止されたが、破防法が公布され、公安調査庁の発足を見た。

部は新年度、多数の優秀ラガーの卒業を見、新入生に期待し努力を続けたが、全国大会の県大会で、本年の国体優勝校宿敵福高とまみえ、修猷圧倒的優勢を示しながら、代表権を逸す。

この年、名門オックスフォード大学来日す。

昭和28年（一九五三）

この年NHKテレビ本放送開始され、スポーツの好ゲームを容易に見ることが出来るようになった。

ラグビー部は、第8回の松山国民体育大会の県大会優勝戦で、香椎高を破り晴の代表として参加、保善商と対戦したが、雌雄決せず。抽籤の結果敗退した。

この年、ラグビーの父、秩父宮殿下ご逝去。また3地域対抗で九州の初優勝をみた。

英国のケンブリッジ大学が来日した。

昭和29年（一九五四）

第五福竜丸ビキニで死の灰を被る。犬養法相、造船汚職に指揮権発動。

わが部は、新人戦並びに国体代表決定戦に、共に優勝戦で福高に敗る。しかし全国大会出場決定戦において、福岡工業を17－3で破り、代表権を獲得した。

この年、3地域対抗で関西初優勝。

昭和30年（一九五五）

原水爆禁止世界大会が広島で開かれた年である。

ラグビー部は、すべり出し好調で、新人戦に圧倒的強みをみせたが、国体、全国大会両予選において共に宿敵福高に敗る。

昭和31年（一九五六）

新人戦に2年連続優勝をとげる。国体、全国大会は、あと一歩のところで代表を逸す。

オーストラリア学生選抜軍来日す。

昭和32年（一九五七）

この年ソ連は人工衛星第一号打上げに成功した。

わがラグビー部でも、この年二つの衛星打上げに成功した。第12回静岡国体出場権を得て、山口水産、沼津商業を下しBブロックで準優勝。いま一つは、第37回全国高校大会の出場権も、あわせ獲得した。

八幡製鉄、ホンコン遠征。

昭和33年（一九五八）

わが部は、正月の全国大会出場とともに年が明けたのであったが、優秀ラガーが卒業したため、新チームが活躍したにもかかわらず、県大会に出場しながら特記すべきものがなかった。

この年、ニュージーランドからオールブラックス来日す。

昭和34年（一九五九）

9月13日、国体福岡県大会準決勝において福岡工業に惜敗したが、11月23日、全国大会福岡県大会優勝戦に再び福岡工業と対戦、前半0—3とリードされながら、後半5—0とコンバートの差で優勝雪辱する。一昨年に続き、第39回全国高校大会出場決定す。

この年、カナダB・Cチーム並びにオックスフォード・ケンブリッジ大学の連合チーム来日。

昭和35年（一九六〇）〜**昭和39年**（一九六四）

わがラグビー部も、昭和35年より39年の間は鳴かず飛ばずの成績で、沈滞の感がある。

昨年創部40年記念式典を挙行した目的の一つは、輝かしい部の伝統を守り、現役諸君の奮起をうながし、再び九州の雄として中央に駒を進めてもらいたいためであつた。

しかし修猷館のラグビー部にとっては輝かしい年であったが、38年の雑誌『修猷』の記者の目「生徒会・クラブの危機」には、クラブ活動の軽視の傾向を次のようになげいている。

「大学入試とクラブ活動、大学入試と生徒会活動は両立しうるかという問題は今や重大化している。年を追って試験地獄と化すにつれて学生達はこの悩みにぶつかる。毎日学校では6時間の授業の他に、希望者には朝、放課後の補習が行なわれている。この補習が終るのが4時20分である。クラブ活動、生徒会活動をしようと思うならば、それからの半時間から1時間までの間にせねばならない。しかし、それも試験の日とか、土曜日とかになると誰でも早く帰りたくなる。このような計算によると余裕ある時間は、多く見つもって5日間、計5時間しか出来ない勘定になる。このような時間の制限その他の理由によるものか、各クラブ共部員減少に頭を悩ましている。その先がけとして昨年の春、輝く伝統を誇るラグビー部が3年の大量卒業のため、部員が試合出場に必要な15名に2、3名満たず、あわてて部員獲得に各クラスを廻ってやっと試合はまに合わせたということがあった。それに気がついてか、各部共新入生入学の時は、ポスターを出したり、先生に頼んだり、もっと手廻しのよい部は試験の合格発表の時に知合の者をつかまえて説得したりして、大々的に宣伝を行なったが、結局はその甲斐なく、前年の入部者よりも少なかった。

そうして折角入った1年生も、「クラブ活動をしていると成績が悪くなる」とか「家の者から止めよと言われた」等の理由を出して退部する者が相当ある。また名前だけつらねて一向顔を出さぬ者も多い（後略）」。

昭和40年（一九六五）

今年は、新入生を迎え、淵本武陽（昭和25年卒）顧問指導のもとに努力精進に励み、九州大会予選には昨年度国体並びに全国大会出場校電波高を見事破り、4年振り県大会に出場権を得、日々猛練習を続け、将来がたのしみである。

部歌

（戦前）

一、玄洋の波　天うつ威力
百道の松の緑の栄え
これぞこれ我が修猷

二、我が雄叫びの　心の響き
如何なる敵も　おののき降る
これぞこれ我が修猷
ラグビー　ラグビー　ララララ

（戦後）

一、二本木並木にそよ風吹いて
からすさえずる日本晴
ニッコリ笑ってスクラム組んで
押して行こうよトライまで
修猷　修猷　ララララ　ラグビー

二、百道原頭修猷の庭に
今日も集えるわが選手
グットにらんでダッシュをすれば
我にはむかう敵はなし
修猷　修猷　ララララ　ラグビー

歴代部長

	(氏名)	(年度)
第1代	長三熊	大正14年 15
同	宮内源太郎	昭和2年
同	同	3
第2代	小林静夫	4
同	田中又四郎	5
同	宮内源太郎	6
同	田中又四郎	7
同	同	8
同	同	9
同	同	10
第3代	園部暢	11
同		12
同		13
同	加月秋芳	14
第4代	藤和典	15
第5代	本間治一	16
第6代	飯田昌男	17
同	本間治一	18
同	同	19
第7代	江崎忠	20
同		21
第8代	佐久間弘毅	22
同	江崎忠	23
第9代	古沢慶造	24
同		25
同		26
同		27
第10代	石橋哲郎	28
同		30
第11代	阿部謙一	29
第12代	江崎忠	31
同		32

（氏名）	（年度）
第13代	
石橋哲郎	昭和33年
同	34
同	35
同	36
同	37
同	38
第14代	
淵本武陽	39
同 石橋哲郎	40
同 山本哲也	（敬称略）

各年度部員

大正14年度

4年　梅崎忠亮、梅津一敏、浜崎越郎、安東久夫、高島弥一郎、藤野種生、川津綱友、松井清孝

3年　高橋長矩（旧姓橋爪）、鎌田昌義、田代貯蔵

2年　溝口博、植村修、河野克巳、斎藤博文

大正15年度

5年　梅崎忠亮、梅津一敏、浜崎越郎、安東久夫、高島弥一郎、藤野種生、川津綱友、松井清孝、藤野茂雄

4年　高橋長矩、鎌田昌義、田代貯蔵、長貫一、川島巌、不破正彦、田村道雄、高橋

3年　溝口博、植村修、河野克巳、斎藤博文

昭和2年度

5年　高橋長矩、不破正彦、川島巌、田村道雄、長貫一、藤田稔、黄錫勇

4年　溝口博、斎藤博文、本田弘平、田代貯蔵、植村修、河野克巳、郡司盛久、池田達郎、池田省吾

3年　原田正年、寳乾宗

2年　中川正

昭和3年度

5年　溝口博、斎藤博文、本田弘平、郡司盛久、吉岡真二、西島権一郎、安部是臣、池田省吾、池田達郎、植村修、河野克巳、山下健太郎、山崎久助

4年　広田久次郎、原田正平、松尾弘房、青柳惣三郎、山田完二、井上重臣、下川啓一、副田好美

3年　中川正、井上義雄

2年　長谷川盛一

昭和4年度

5年　広田久次郎、山本太郎（旧姓佐々倉）、青柳惣三郎、松尾弘房、石橋安平、副田好美、下川啓一、花石芳正、山田完二、池田静夫、中上重信、清水幸雄

4年　藤野勝、大坪弘、井上義雄、湯浅正
3年　長谷川盛一、大神和敏
2年　不破修平

昭和5年度

5年　藤野勝、湯浅正、山崎惣吉、平島頼助、大坪弘、井上義雄、島田八郎、南里譲児、森原俊彦
4年　長谷川盛一、高木正敏、大神和敏
3年　不破修平、高尾悟一、内堀久
2年　今泉正毅、伊勢田良克、坂井良道、権藤竜夫

昭和6年度

5年　大神和敏、榊義憲、井尾正隆、林隆吉、柴戸慎太郎、高木正敏、下郡鉄城、長谷川盛一、奥村亀太郎、田中丸清吾
4年　石井透、吉武多助、内堀久、不破修平、高尾悟一、小野弘、河野治右衛門
3年　今泉正毅、坂井良道、平山新一、伊勢田良克、権藤竜夫、小野正也

昭和7年度

5年　石井透、小野弘、蒲生幸平、今朝石清、高尾悟一、不破修平、吉武多助、内堀久、橋口勇
4年　伊勢田良克、坂井良道、平山新一、阿部守彦、今泉正毅、古森孝、権藤竜夫、小野正也
3年　笠

昭和8年度

5年　平山新一、大石秀生、伊勢田良克、坂井良道、森原幸彦、小野正也、今泉正毅、古森孝、権藤竜夫、阿部守彦
4年　古賀鉄雄、山本文男、山内正之、田村仁吾、安河内剛、松井清、井上、笠
3年　郡敏孝

昭和9年度

5年　山本文男、江守幸生、古賀鉄雄、菅原鴻太郎、松永晋一郎、松井清、田村仁吾、坂田富雄、安河内剛、鈴木正義、横山
4年　古森四郎、西川一三、郡敏孝
3年　宮崎茂美

昭和10年度

5年　古森四郎、西川一三、上田徳、安部孝志、熊谷淳、守田三義、菊地功、吉田
4年　早田昌武、山部治邦、郡敏孝、宮崎茂美、井上金吾、大神祐彦、坂井将博

3年　島田太郎

昭和11年度

5年　宮崎茂美、早田昌武、高倉良助、富永泰造、山本純一、井上金吾、山部治邦、鶴身松二郎、波多江強夫、大神祐彦、大原茂

4年　松隈勇夫、河原武彦、北定三郎、丹部栄治、阿部、原田恒雄

3年　古川博、中村政彦、弓崎輝明、山崎逢次郎、大原輝也

昭和12年度

5年　原田恒雄、大神祐彦、谷川吉人、北定三郎、河原武彦、丹部栄治、富永雄三、松尾

4年　中村政彦、門司成弘、古川博、弓崎輝明、吉田孝生、伊勢幸人

3年　白井俊次、松岡正人

昭和13年度

5年　弓崎輝明、古川博、守田基定、中村政彦、門司成弘、高橋保、吉田孝生、西秀夫、三浦一郎、万徳哲男

4年　白井俊次、松岡正人、松岡正導、三苫俊一、古賀勝俊、伊藤裕成

3年　山内正樹、牧仰、三隅哲夫、薄平八郎、岩城睦二、大庭義成、吉岡正男、平山清次郎、高松光彦、河原武一、稗田博隆、皆島万作

2年　佐藤文治

1年　今井進、井川芳夫、津田久俊

昭和14年度

5年　白井俊次、松岡正人、松岡正導、伊藤裕成、三苫俊一、進村喜志雄

4年　牧仰、山内正樹、三隅哲夫、高松光彦、吉安尚一郎、岩城睦二、大庭義成、園田春海、平山清次郎、河原武一、薄平八郎、皆島万作、稗田博隆

3年　伊勢田秀、福沢充、吉村英彦

2年　井川芳夫、今井進、島田正三、津田久俊、堀博俊

1年　篠田稔

昭和15年度

5年　園田春海、山内正樹、稗田博隆、吉安尚一郎、平山清次郎、大庭義成、岩城睦二、三隅哲夫、牧仰、河原武一、高松光彦

4年　福沢充、伊勢田秀

3年　粟盛良一、島田正三、今井進、波多江道児、上野睦治、堀博俊

2年　篠田稔、松本虎次郎、本城瑞穂、大塩勇

昭和16年度

5年　伊勢田秀、福沢充、柳英樹、石橋忠夫

4年　杉本太、藤島俊治、赤司広次、島田正三、石橋豊貴、堀博俊、国松利吉、上野睦治、今井進、柴田文雄、山部安彦
3年　大塩勇、本城瑞穂、内山田昭紀、橋本

昭和17年度

5年　今井進、杉本太、藤島俊治、赤司広次、島田正三、柴田文雄、堀博俊、国松利吉、石橋豊貴、上野睦治、久保正之
4年　大塩勇、本城瑞穂、内山田昭紀、勝野敬一、戸田録郎、後藤正彦
3年　本村武
2年　榊和彦、因幡聡淇、徳永俊彦

昭和18年度

5年　大塩勇、本城瑞穂、内山田昭紀、戸田録郎、勝野敬一、後藤正彦
4年　大原行男、飛松芳郎、箱田重之、山下昭平、徳永武美、太田義男、藤井鴻作、島田昌和、速水昭
3年　榊和彦、因幡聡淇、徳永俊彦、石橋一、中島節雄、新免昭彦
1年　副田直司

昭和19年度

5年　飛松芳郎、箱田重之、山下昭平、島田昌和、速水昭
4年　榊和彦、石橋一
3年　森山直也
2年　副田直司

昭和20年度

4年　田中豊、西島文利、野崎厚利、浜田光彦、井上和彦、伊藤輝夫、大塚正道、久保房雄、土井良信輔、徳田才之助、平塚九州男、牧瀬昭男、宮原敬典、村本昭三、森山直也、吉田隆充、大宅伊佐次、西野亨
3年　榊明、副田直司、三島三代吉、大鶴啓司、松本安造、渡辺雄二、松汐茂、杉、三木、玉井、武藤
2年　岡崎亮、中田主基、佐々倉千秋、藤村浩、秋根隆一郎

昭和21年度

5年　井上和彦、伊藤輝夫、大塚正道、久保房雄、土井良信輔、徳田才之助、平塚九州男、牧瀬昭男、宮原敬典、村本昭三、西野亨、森山直也、吉田隆充
4年　榊明、石橋静雄、副田直司、松本安造、渡辺雄二、松汐茂
3年　石橋雄彦、岡崎亮、佐々倉千秋、末次昇、中田主基、淵本武陽、藤村浩、松本義三、村山舜、水野精一、南条、堀錬士
2年　秋根隆一郎、大山浩司（旧姓長）、中上一、麻田寿巳、秋吉包雄

1年 石橋学、藤井浩一

昭和22年度

5年 石橋静雄、榊明、松本安造、松汐茂、渡辺雄二
4年 岡崎亮、佐々倉千秋、高武昭夫、佐藤英彦、末次昂、中田主基、山崎靖彦、淵本武陽、杉山武、田中正男、藤村浩、川浪義人、関屋雄偉、大中啓司
3年 大山浩司、中上一、麻田寿巳、秋吉包雄、藤田浩三
2年 石橋学、岩隈勝、富川昭、中川海、中野徹、成田陽次郎、野中孝祐、田村稔宏、原鷹司、藤井浩一、藤島勇一、松尾守、的野哲、水野能栄、吉田清明、今石琢造、宮原修郎、大野浩、大野靖彦

昭和23年度

高3年 石橋静雄、榊明、松本安造、松汐茂、渡辺雄二
高2年 岡崎亮、佐々倉千秋、高武昭夫、佐藤英彦、末次昂、中田主基、山崎靖彦、淵本武陽、杉山武、田中正男、藤村浩、川浪義人、関屋雄偉、大中啓司
高1年 大山浩司、中上一、麻田寿巳、秋吉包雄、藤田浩三
併中3年 石橋学、岩隈勝、富川昭、中川海、中野徹、成田陽二郎、野中孝祐、田村稔宏、原鷹司、藤井浩一、藤島勇一、松尾守、的野哲、水野能栄、吉田清明、今石琢造、宮原修郎、大野浩、大野靖彦

昭和24年度

高3年 佐々倉千秋、高武昭夫、佐藤英彦、末次昂、中田主基、山崎靖彦、淵本武陽、田中正男、川浪義人、藤村浩、秋吉元、下司
高2年 大山浩司、中上一、麻田寿巳、秋吉包雄、藤田浩三、小田部英雄、外尾猛
高1年 石橋学、岩隈勝、富川昭、中川海、中野徹、成田陽二郎、野中孝祐、田村稔宏、原鷹司、藤井浩一、藤島勇一、藤田義雄、松尾守、的野哲、水野能栄、吉田清明、今石琢造、宮原修郎、大野浩、大野靖彦

昭和25年度

3年 大山浩司、中上一、麻田寿巳、秋吉包雄、藤田浩三、小田部英雄、外尾猛、常岡宏、淵上貫之
2年 石橋学、中川海、中野徹、野中孝祐、田村稔宏、原鷹司、藤井浩一、藤島勇一、藤田義雄、水野能栄、吉田清明、宮原修郎、大野浩、大野靖彦、魚住功
1年 内藤勇策、安河内隆

昭和26年度

3年　石橋学、中川海、中野徹、野中孝祐、田村稔宏、原鷹司、藤井浩一、藤島勇一、藤田義雄、水野能栄、吉田清明、宮原修郎、大野浩

2年　内藤勇策、大野靖彦、梅津昇、大塚博靖、堀内秀夫、森部信二、三苫憲一、安河内隆、光安義温

1年　橋詰博、来島昌司

昭和27年度

3年　内藤勇策、大野靖彦、梅津昇、大塚博靖、堀内秀夫、森部信二、三苫憲一、伊東春夏

2年　橋詰博、柴田幸夫、来島昌司、波多江康平

1年　山下公雄、斎藤雄、平島正登、岩田至道、福富大二、久保久、結城昭康、木村繁、堀内信夫、菊地俊作、篠原昌一、中野悟

昭和28年度

3年　橋詰博、来島昌司、柴田幸夫、波多江康平、三原一倫

2年　平島正登、岩田至道、木村繁、結城昭康、福富大二、山下公雄、立石秀一、久保久、堀内信夫、菊地俊作、斎藤雄、篠原昌一、川本英夫

1年　井坂孝一、荒巻久義、金谷弘、西牟田耕治、堀川大助、松汐悟

昭和29年度

3年　平島正登、木村繁、福富大二、立石秀一、斎藤雄、岩田至道、結城昭康、山下公雄、久保久、菊地俊作、大場正二、下司正芳、川本英夫

2年　荒巻久義、金谷弘、西牟田耕治、森久脇一、堀川大助、松汐悟、伊藤征八郎、井坂孝一

1年　相浦弘二、柴田忠敏、禅院文夫、林克巳

昭和30年度

3年　井坂孝一、荒巻久義、金谷弘、西牟田耕治、森久脇一、堀川大助、松汐悟、伊藤征八郎

2年　相浦弘二、柴田忠敏、禅院文夫、林克巳

1年　青木潤、高山博光、豊福省三、藤井章三、吉田進、米倉稔人、佐々倉鉄夫

昭和31年度

3年　相浦弘二、林克巳、柴田忠敏、禅院文夫、山根暎一郎

2年　青木潤、高山博光、豊福省三、藤井章三、吉田進、米倉稔人、佐々倉鉄夫、相生卓男、古賀竜彦、明石哲也、真田能斎、高松宏、田中文夫、西島文城

1年　保本正和、村田征爾

昭和32年度

3年 青木潤、高山博光、豊福省三、藤井章三、吉田進、米倉稔人、佐々倉鉄夫、相生卓男、古賀竜彦、明石哲也、真田能斎、高松宏、田中文夫、西島文城、貝島惇、広田興宣、副島茂樹

2年 保木正和、村田征爾、田原明、田中順一

1年 堤和雄

昭和33年度

3年 保木正和、村田征爾、田原明、田中順一、池田、鎌田

2年 安西昭八郎、小野勝利、神山隆、川崎従道、栗原則夫、柴戸敬史、谷井真喜男、堤和雄、矢吹和章、吉村正博、山内忠

1年 原田太七郎、堀内靖郎、樋口嗣郎

昭和34年度

3年 柴戸敬史、堤和雄、栗原則夫、谷井真喜男、今村宏明、安西昭八郎、堺宏、吉村正博、神山隆、小野勝利、川崎従道、矢吹和章、高木信宏、古江俊樹

2年 三宅英一郎、樋口嗣郎、原田太七郎、武田儀之、堀内靖郎、滝田熙久

1年 桐山一郎、迫田勝、豊福信之、斎藤宏、石川忠彦

昭和35年度

3年 原田太七郎、堀内靖郎、永松武興、樋口嗣郎、滝田熙久、三宅英一郎

2年 桐山一郎、石川忠彦、豊福信之、村島学、高良欣士、赤司和生

1年 三宅俊樹、重松泰生、藤本成邦、田中俊古、榎本一彦、泰松銀次郎

昭和36年度

3年 桐山一郎、石川忠彦、豊福信之、村島学、高良欣士、赤司和生

2年 三宅俊樹、重松泰生、藤本成邦、田中俊古、榎本一彦

1年 平島克二、工藤泰伸、福井浩一

昭和37年度

3年 三宅俊樹、重松泰生、藤本成邦、田中俊古

2年 平島克二、工藤泰伸、福井浩一

1年 久保公、渋田民生、納田純一、村上雄二、柴田修二

昭和38年度

3年 工藤泰伸、平島克二、福井浩一

2年 久保公、渋田民生、納田純一、村上雄二、柴田修二

1年 柴田進、溝口知行、黒岩健太郎、船木志郎、浅田次郎、里見隆彦、柴戸敬生、田中良一

昭和39年度

3年　納田純一、渋田民生、村上雄二、久保公、小嶺栄

2年　溝口知行、浅田次郎、横田康夫、柴戸敬生、船木志郎、安部直行、佐座政弘、里見隆彦、田中良一、柴田進、吉田義弘

1年　星野順二、田中新一、岡田修一、片山隆

昭和40年度

3年　里見隆彦、溝口知行、吉田義弘、安部弘之、浅田次郎、柴戸敬生、横田康夫、船木志郎、安部直行、左座政弘、田中良一、柴田進

2年　星野順二、田中新一、野上正孝、岡田修一、片山隆、会津一志

1年　守田雅利、下村信剛、高畠太郎、久我秀明、林田克信、井上憲介、竹迫陽二郎、原田保孝

各年度部費

大正14年度	不　詳	昭和17年度	四〇〇円
15	三〇〇円	18	四五〇円
昭和2年度	三五〇円	19	不　詳
3	三〇〇円	20	不　詳
4	三七〇円	21	不　詳
5	三五一円	22	一万二〇〇〇円
6	四三〇円	23	四万二〇〇〇円
7	四五〇円一〇銭	24	一四万円
8	四六〇円	25	一一万六〇〇〇円
9	四六〇円	26	一二万円
10	四一六円八五銭	27	一一万円
11	四三六円八五銭	28	一二万三〇〇〇円
12	四三〇円	29	一二万円
13	四三〇円	30	一二万五〇六〇円
14	四三〇円	31	一二万五〇六〇円
15	四三〇円	32	一三万円
16	四五〇円	33	一二万五〇〇〇円

昭和34年度	一三万円
35	一〇万円
36	九万九〇〇〇円
37	一〇万七〇〇円
38	九万二〇〇〇円
39	九万一〇〇〇円
40	一二万九三〇〇円

物故者

大正14年卒　川津尚彦
昭和2年卒　高島弥一郎、藤野茂雄
昭和4年卒　池田達郎、池田省吾、安部是臣、山下健太郎、河野克巳、山崎久助
昭和5年卒　松尾弘房、副田好美、山田完二、中上重信、青柳惣三郎、清水幸雄
昭和6年卒　平島頼助、井上義雄、島田八郎、南里譲児、森原俊彦
昭和7年卒　高木正敏、下郡鉄城、奥村亀太郎、田中丸清吾、林隆吉、榊義憲
昭和8年卒　今朝石清、高尾悟一、内堀久、橋口勇
昭和9年卒　阿部守彦、今泉正毅、古森孝
昭和10年卒　菅原鴻太郎、古賀鉄雄、安河内剛、江守幸生
昭和11年卒　安部孝志、上田徳、菊地功、熊谷淳、守田三義
昭和12年卒　鶴身松二郎、宮崎茂美、井上金吾、波多江強夫
昭和13年卒　河原武彦、北定三郎、富永雄三、丹部栄治
昭和14年卒　門司成弘
昭和16年卒　稗田博隆
昭和18年卒　上野睦治、杉本太
昭和27年卒　今石琢造、宮原修郎、魚住功

編集後記

昨年の5月3日、修猷館ラグビー部創設40周年記念が、五月晴の好天に恵まれて、母校グラウンドで華々しく行なわれた。この準備期間中に、部史の編纂が話題になった。

伝統ある部の歴史を後輩に知らせ、それを受けついでますます発展してもらいたいし、O・Bは過去の思い出に耽り、若がえりたい。こんなことが、記念行事が終って開かれた懇親会の席上でも、話題になった。

私はO・Bの一員である。現在香椎高校のラグビー部をもっているが、香椎で実際に指導して、部の伝統の力をまざまざと見せつけられているので、部史の必要を痛感していた。私は修猷館の雑誌にのっている部報を、整理することにした。

終戦のどさくさで、私はもちろん、雑誌『修猷』を持っている人は、ほとんどいなかった。母校の図書館から借り出して、香椎高校の夏の合宿中にプリントした。しかしそのうちの十数年分は、館長室の書棚に借出し厳禁となっている一部しか現存していない。それで私は香椎の練習時間を午後に回し、午前の2、3時間をさいて、毎日館長室に通った。

館長室には、学生時代一度だけ、下級生に気合をかけて、訓戒を受けた時しか行ったことがない。何んとなく苦手な場所だったが、行ってみると重藤館長自から扇風機をかけて下さった。事務員にお茶を運ばせて下さったほか、いろいろと便宜を計っていただき、いたく恐縮した。かくて、夏休み明けには、一応、部報のプリントが出来あがった。

子供が宿題を仕上げた時のような気持だった。早速溝口博先輩の病院に持って行き、残りをO・Bの世話をしている今井進君の所に運んだ。

各期の方々が、その不出来なプリントを見て、むかしを偲んでくれたら、それだけで私は十分幸せだと思った。これがまた部史編纂に結びつけばと思った。

やがて年が明けた。1月24日のラグビーO・B総会の席上で、5月末日までに部史を出すことに決った。編集の責任者は私ということになった。まったくひとごとのような気がしたが、プリントを作ったのが運のつきらしい。

日数が足りぬ、これは大変だ、と、頭をかかえた。隣の席にい

た牧仰君が心配して、「大丈夫ですか」となんども念をおした。念をおされているうちに、どうしてもやらねばならぬと、ファイトがわいてきた。

まず私は、プリントしてみて、感じた点をO・Bの方々に伝え、各期の原稿をお願いした。原稿が次々に集まってきた。それにつれていそがしくなったが、私の非力は、意気だけで、何んとも出来ないことを感じた。たびたび多忙な各期の幹事に集まってもらったり、O・Bの心からなる援助と協力で一応の体裁が調った。

記録等不審な点については、平山新一先輩と二人で、各新聞社、県立図書館通いをして、出来るだけ調べた。また、九州ラグビー協会にもいって調べてはみたが、まだまだ力がおよばず、不備な点が多々あることを、お詫びするとともに、各新聞社並びに協会の方々の心からなる御援助を深く感謝している。

序文を、ヨーロッパ視察を目前にされて御多忙中にもかかわらず、葛西泰二郎先輩（大正10年卒、九大工学部教授、九州ラグビー協会理事長）が心よくお書き下さるし、題字は、最古参の梅崎忠兗先輩（市立草江小学校長）が達筆を振るわれた。装幀は、電通に務めておられる早田昌武先輩のお世話で、電通ラグビー部の桑原徹氏が、情熱をこめて描いて下さった。

また私と一緒に、私のわがままを聞いて、いそがしい仕事の相談に協力してくれた中田主基、外尾猛、古賀竜彦の各編集委員に心から感謝したい。特に東京の大塚博靖、結城昭康両君には、私達委員のしめくくりをしていただき、申し訳なく思っている。

最後に、専門的な注意、指導をしてくれた金星堂主人山本安夫氏と私の兄守田良衛に、そしてこの出版を引き受けてくれた中央公論社の営業部次長内藤博安氏、中央公論事業出版の甲田正一氏、梅醇氏に対し、紙上をもってお礼を申しあげたい。

時恰も母校180年の記念日に、われわれ修猷館ラグビー40年史が出来上がったことは、何にもかえがたい有意義なことではなかろうか。（守田記）

昭和40年9月10日

編集委員　守田基定
　　中田主基
　　外尾　猛
　　古賀竜彦
　　大塚博靖
　　結城昭康

昭和40年10月1日発行

〔非売品〕

修猷館ラグビー史

編者　守田基定

発行者　溝口博

製作　株式会社　中央公論事業出版
東京都千代田区丸ノ内二の二
丸ビル五八七区

発行所　修猷ラグビーOBクラブ
福岡市西新町六六一番地
福岡県立修猷館高校内